
魔法少女リリカルなのは～転生された被魔師～

マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生された被魔師

【Nコード】

N0541P

【作者名】

マトト

【あらすじ】

「どうしてこうなった」

これは神様の退屈しのぎに転生させられた主人公がリリカルな世界で頑張って原作介入（強制的 自主的に）していくお話です

イノセンスが出てきますが原作キャラを登場させるつもりはありません
せん 現在無印、A's編を終了してStriker'sに入りました

プロローグ

「で、どうするんですかこの人……」

「いや、他の世界に転生させようと思ってな……」

私の目の前には一人の少年が横たわっています

「何故、急に？」

「面白そうだから!!」

「はぁ……」

「で、どこに送るんですか？」

「あ……世界だ」

「はぁ最近ハマってるからって……
分かりました

で、能力とかはどうするんです？」

「はぁ？あげるわけないじゃん

まあ、その代わりあれ改造して送つといてくれる？」

「それだつたら能力あげればいいじゃないですか!!」

思わず叫んでしまいました……

でも、ほんとにそれだつたら能力あげればいいのに……

「はあ、まあ分かりました
ですがこの方が触れれば全て反応ということ
で、この方以外の人間があれを持つたらどうします?」

「うーんそうだね」

まあ、基本暴走ってことで

「分かりました

……これをこうしてそれでこれを……
改造及び転送完了しました」

「相変わらず早いね」

「じゃあ、彼もお願いね」

「分かりました

で、どの時代に?」

「うーん……まあ原作キャラと同じ年ぐらいでいいんじゃない
その方が原作介入しやすいだろうしね」

「分かりました

………転送準備完了」

「じゃあ、行ってらっしゃい

リリカルなのはの世界へ!!!」

プロローグ（後書き）

次回イノセンス登場です

1話 転生（前書き）

一応イノセンスはオリジナルも登場させる予定です

1話 転生

「(……………どうしてこうなった)」

俺、は今よく分からない状態にある

何故、声を出さないのかって？出さないんじゃない……………出せないんだよ!!

そう、俺の体は今生まれたての赤子のそれになっている

だけど、確かに俺は車に跳ねられたはず……………

まさか死んだの!?俺死んじゃったの!??てことはここって来世!?

「あ、起きたのね光宙ちゃん」

俺の前にはお母さんであるついかにも優しそうで、きれいな人が居た

「(ピカチュウっておい!!)」

「違うだろ早苗さなえ」(おお!!名前分からないけどお父さんだよね！

！ありがとう)「
フリーザー
氷鳳だろ」

おい!!てめえ、助けてくれるんじゃないかなかったのかよ!!

「いや、やっぱり創造神アルセウスの方が……………」

「(お願いします……………」

もう、止めてください……………」

「お姉ちゃん達なにやってんのよ!!」

大事な甥っ子に変な名前付けるな

「この子は真哉しんやって名前にするって話合ってたでしょ!!」

今度はちよつと気が強そうな人がいた

甥っ子ってことは俺の叔母さんかな

何でもいいけどありがとう!!これであのふざけた名前じゃなくなりそうだよ

「「ええ」」

「ええ、じゃない!!」

「(そうだそうだ)」

声にならない声で俺も反論する

「もうしょうがないわね」

その日から俺の新しい人生が始まった

- - - - -
- - - - -
- - - - -

九年後

正直この九年間は特に変わった事はありませんでした

叔母さんも厳しい人だったけど優しくしてくれたし

俺は普通に幼稚園を卒業し、普通に小学校通ってたしね

後ちなみに俺の名前は天宮真哉、父さんは天宮相馬、母さんは天宮

早苗でうちの親は驚くほどの美男美女だった

まあそんなこんなで、今日父さんの仕事の都合で引越しする
になりました」

引越し先は海鳴市ってところらしい

「（でも、海鳴市ってどっかで聞いたことある気がするんだよね）」

「

「真哉」着いたわよ」

「はい（まあ、考えるのは、後にしよう）」

.....

「「ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイディア
真哉」ハッピーバースデイトゥーユー」

「ありがとう、父さん母さん

でさ、聞きたいんだけど

明日から行く学校って何ていうところ？」

「え〜と、そう！聖祥大附属小学校だったわ確か」

「ふ〜ん、そうなんだ（なんだろうこの違和感）」

「そんなことより、早く食べましょつ」

「うん！〜」

.....

「はあ、食った食った」

俺は今ベランダで一人涼んでいるのだが

「ん？なんだあれ？」

遠くに光り輝く物体が飛んでいる

「あれ？（心なしかだんだん大きくなってようような……いやなってる！！）」

すると、それは俺の手元まで来てよく見てみると、金色の歯車状のものが交差したような物体が見えた

「あ、あははははは……」

何かの見間違いだよなあんなのがここにあるわけないし」

何かの見間違いともう一度よく見ると

「……………何でこんなものがここにあるわけ？間違いなくこれってイノセンスだよね！！」

「どうしたの、真哉？」

「べ、別に何にもない！！」

「（ふ）落ち着け俺なんでこんなものがここにあるんだ？ここは十九世紀じゃなくて二十一世紀だぞ）」

【やっぱり……………】

「……………!!誰だ!!」

【あ、声出さなくてもいいよ僕は君の心に直接しゃべりかけているだけだから】

「(心に?)」

【そつだよ】

「(……………!!分かった

でお前は何者なんだ?)」

【まあ、そうあせらない

僕はねそつだなく君たちでいう神様みたいなものかな】

「(神様?)」

【そつだよ君が交通事故で死んでこの世界に送った張本人さ】

「……………」

【へへ驚かないんだ】

「(驚いてるよ

まあ、だけどそつでもないと説明つかないしな)」

【それでその説明だけどなにかは分かってるよね?】

「（イノセンスだろ）」

【大正解】

次にこの世界のことだけどこは魔法少女リリカルなのはの世界です】

「（……………！！はあ！？それってどういう……………）」

【文字通りだよ】

ああ、あとそれと君には魔法とかの才能ないから原作介入はそれ使ってがんばってね】

「（おい！！人の話を【あと、それ以外にもイノセンスはいろんなところにあるからね〜】

ちなみにそのイノセンスとのシンクロ率は臨界点突破してるからね〜ばいばい！】」

「一体どうすればいいんだよ……………」

そんなこと言っているとイノセンスの形状が変わりだして……………」

「よりによって断罪者ジャッジメントかよ……………」

もう、寝よ」

そして俺は白銀の銃を持ちながら、夢であることを願いベッドに向かった

.....

。。。。。。

朝目覚ましが鳴り枕元を見るとそこには昨日の白銀の銃と手紙が置かれていた

「やっぱり昨日のは夢じゃないのか……………」
「それよりこの手紙なんだ？」

ちよつと昨日言い忘れてたことがあってね

もし君が原作介入しようとしなかったら

君は咎落ちになっちゃうからがんばって介入してね

神より

読み終わるとその手紙は燃えて消えてしまった

「（あのくそ神！！次ぎあったらぶち殺してやる！！
はあ、でも原作介入か〜しょうがない咎落ちになるの嫌だしいつ
ちよ介入しますか！！）」

「真哉〜ご飯よ〜」

「今行く（まずは原作キャラとしゃべらないとな）」

そう言いながらも結構乗り気な俺である

.....
「.....転校してきました天宮真哉です
これからよろしくお願いします」

「はい、それじゃあ天宮君の席は高町さんの隣でいいわね」

「はい(ラッキー)」

「私、高町なのはこれからよろしくなの」

「うん!!僕は天宮真哉あらためてよろしく!!」

.....
.....
sideなのは

今日新しく転校してくるお友達がきました名前は天宮真哉でかなりのイケメンらしいです

「はい、それじゃあ天宮君の席は高町さんの隣でいいわね」

それになんとその子は私の隣の席になりました!

「私、高町なのはこれからよろしくなの」

「うん！！僕は天宮真哉、高町さんあらためてよろしく！！」

side out

.....

あつと言つまに昼休みになりました

あと、ジャツジメントは一応かばんの中に入れて持ってきてます

「なのは〜お昼食べよ〜」

「うん分かった

じゃあ、真哉くんも一緒にたべよなの」

「え！いいの？」

「うん

まあ、そんなこんなで俺はなのは達と一緒にお昼を食べることになつたわけだが

「あんだ編入試験で全教科100点って本当？」

「まあ

「へ〜本当！？すごいね！」

今話してるのはアリサ・バニングスと月村すずか
原作では一年のときアリサ達とは一度大喧嘩してそれから親友にな
ったらしい

「次のテストであたしと勝負よ!!」

「ええ〜「ええ〜じゃない!!分かったわね!!」」

まあ、それからいろいろ話して昼休みは終了し、あとは特に何もな
く俺の登校一日目は終了した

1話 転生（後書き）

次回ユーノ君登場です

2話 初日(前書き)

今考えると主人公空中戦出来ないなーって思い始めました
どうしよう

2話 初日

俺は今夜道をひたすら走っていた

現在の時間は既に10時をまわっており、普通の小学生が外をうろついている時間では無くなっていた

何故こんなに必死に走っているかというそれは今から数時間前にまで遡ることになる

俺は今学校への初登校が終わり帰路に着いていた

「ふう〜やっと終わった

ていうか、原作初日っていつだったけ？

まあ、何とかなるか」

そのとき俺は気にも留めずに家へ帰った

「母さんただいま」

母さんの「おかえり〜ご飯にするわよ〜」という声を聞き、俺は自分の部屋に向かはずそのまま食事をとることにした

そして、9時をまわりもうすぐ10時になるころ、もう寝るために自室に入るとなんとなくいつもと違う気がしてあたりを見回すとすぐにその原因である物が見つかった

「こねってあれだよな」

俺の手には一枚の手紙があった
中を開いて見てみると……………

はあ〜い お馴染みの神です

また言い忘れたことがあったから言っとくぜ

で、早速はというと……………

実は今日は原作開始の日です

「……………はあ？」

それで急だけど後、九分ぐらいでなのはがジュエルシードの怪物と
戦うから地図の場所行って早速原作介入してね〜 前も言ったけど
やらなかったら咎落ちだからね（笑）

b y 神

追伸

その銃っていかイノセンスは全部君の意思で殺傷設定と非殺傷設定に切り替えれるように改造してるから

「本当にあのクソ神やってくれるぜ」

俺は急いで着替えてかばんからジャッジメントを取り出し、家を飛び出た

後ろから「真哉どうしたの〜」とか言う声が聞こえるがそんなの気にしてられない

「え〜とここをこう曲がって……クソ！もう時間がねえ！！」

何故かは知らないが手紙の残り時間が除除に減っていつておりもう一分になっている

そのとき曲がり角を曲がった先に異形の怪物と対峙している高町なのはが見えた

- - -
- - -
- - -
sideなのは

「暖かい」

私は今喋るフェレット？といて、なんだかよく分からないけど、スライム状の気持ち悪い怪物がいるの！

「心を澄ませて

僕の言つとおりに繰り返して」

「いい？いくよ！！」

「う、うん！！」

「我使命を受けし者なり」

「我使命を受けし者なり」

「契約の元その力を解き放て」

「えと、契約の元その力を解き放て」

ドクン

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

「「この胸に！！」」

「「この手に魔法を！！」レイジングハートセットアップ！！」」

そのときレイジングハートから声が聞こえてきて……

『Stand by ready
Set up』

「……ふえ！」

「なんて魔力だ……！！」

落ち着いてイメージして！！君の魔力を制御する魔法の杖のイメージを！！そして君の身を守る衣服のイメージを！！」

「そんな急に言われても

えと、え」と……とりあえずこれで……！！」

そして、気がつくとは私は白い服に杖を持った状態になったの

「成功だ」

「ふえ、ふえええええ嘘

なんなのこれ！？

はっ……！！」

そんな時後ろから

「……間に合え……ジャツジメント……！！」

……
……
……間に合え……ジャツジメント……！！」

俺は夢中で引き金を引いた
原作と同じく撃った銃弾は勝手に相手に吸い込まれるように撃ちだ
され命中した

「……………!!」

当たった衝撃で怪物は数メートル吹っ飛びながら言葉にならないよ
うな声で叫んでいた

「（一発でこの威力かよ
しかも非殺傷設定だぞ
さすがはクロス元帥が使っていたことだけはあるな）
高町早く封印しろ!!」

「ふえ!? 真哉……君?」早くしろ!!」「は、はい
って、封印ってどうやるの!？」

「なのは!! 封印には呪文が必要なんです」

「呪文??？」

「うん、心を澄まして心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

「うち!! 向かってきやがった!! 早くしろ高町!!」

『Protection』

盾が目の前に出現し、怪物の攻撃を防いだ

「リリカルマジカル」

「封印すべきは思まわしき器ジュエルシード!」

「ジュエルシード封印!」

『Searing Mode

Setup

するとレイジングハートの形が変わった

「(っ)っていつかよくあんなこと臆面もなく言えるよな」

「—————!」

『Stand by ready

Setup

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル???封印!」

『Searing

無数の光が怪物を貫き、封印は完了した

そして、怪物がいた場所には光る宝石があつた

「あ……………」

「これがジュエルシードです

レイジングハートで触れて」

『Receipt No.???』

「あ……………」

すると、今度は今まで着ていたバリアジャケットが消え元の私服に戻っていた

「あれ？終わったの？」

「はい、あなたのおかげで

ありがとう……………」

俺は二人を邪魔するのも悪いと思って、その場から去ろうとする

「君は何者なんだい？」

「さあな

それよりもうお前限界なんじゃねーの」

「うっ！ー！」

「ちょっと！ー！大丈夫！？」

ウウウウウー……………

「おい！ー！この状況を見られると厄介だ
ここから離れるぞ」

「は、はい」

で、俺らは近くの広場のベンチに座っている

「すみません……」

「あ、起こしちゃった？ごめんね乱暴で
怪我いたくない？」

「怪我は平気ですもうほとんど治っているから

で、そんなことより……本当に君は何者なんだい？
その銃はデバイスのようだけど………
君も魔導士なのかい」

ユーノは俺を警戒しながら聞いてきた

「さあなそんなの俺が聞きてえよ
ああ、あと俺は魔導士じゃない
俺にリンカーコアはないしな
それにこれはデバイスじゃなくイノセンスだ（まあ、どうせ言っ
てもわかんねえだろうしいいだろ）」

「イノセンス？聞いたことがないな
デバイスと似たようなものかい？」

「いやどつちかって言うとおスト・ロギア……ジュエルシードのほ
うが近いかな」

「え！？じゃあそれはロスト・ロギアなのかい？」

「（ちょっとまずかったかな？
まあ良いだろう）」

そんなことを話しているとおずおずとなのはが俺達に聞いてきた

「……………あの〜」

「ん？なんだ高町？」

「ろすとりぎあつて何なの？」

「それは僕から説明するよ」

まずジュエルシードのことだけ……………」

そこから延々とジュエルシードのことやロスト・ロギアのことを話していた

俺はというともう既に知っていることなので、ぼーっとしていた

「……………そういつわけなんだ」

「あれ？でも、ちょっと待って

話を聞く限りではジュエルシードが散らばっちゃったのって別に全然ユーノ君のせいじゃないんじゃない……………」

「だけど、あれを見つけてしまったのは僕だから全部見つけてちゃんとあるべき場所に返さないとだめだから……………」

「なんとなく、なんとなくだけどユーノ君の気持ち分かるかもしれない……………」

真面目なんだねユーノ君……………」

「で、君達さつきは巻き込んだじゃって…助けてもらって本当に申し訳なかったけど、この後は僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませてもらいたいんだ

一週間いや五日もあれば力が戻るからそれまで……………」

「……………戻ったら、どうするの？」

「また、一人でジュエルシードを探しに出るよ」

「それは駄目」

「だ、駄目って」

「私、学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから」

「だけど、さつきみたいに危ないこともあるんだよ」

「だってもう、知り合っちゃったし、話も聞いちゃったものほっとけないよ

それにさつきみたいなのがご近所でたびたびあつたら迷惑になっちゃうしね

ユーノ君一人ぼっちで助けってくれる人居ないんでしょ

一人ぼっちは寂しいもん私にもお手伝いさせて」

いや〜なんかさつきから俺完全に空気ですよ〜

「（もう神からの命令も済ませたし今なら気づかれずに帰れるか）」
そっとその場を去ろうとするとまたもやユーノに止められた

「待って！！君はなんで僕を助けてくれたの？」

まだ完全には信じられていないのだろうユーノがそう聞いてきた

「別にただ俺まだ、たった九歳で死にたくなんかねーし
それに人生楽しんだほうが得だろ？まあ俺も暇だったら手伝って
やるよ」

「ちよっとそれはどういう……………」

「さあなじやあな、ユーノ、高町」

「あ、あのー！！」

「ん？なんだ高町？」

「真哉君…だよね」

「ああ」

「さっきは助けてくれてありがとうー！！」

「ああ、じゃあな高町」

そして俺もさすがに疲れたので、帰ろうとするとまたもやなのはが

……………

「ま、待って!!」

「なんだよ、まだあんのか？」

「うん!! 私のことなのはって呼んで!! 私も真哉君って呼ぶから!!」

「ああはいはい分かった

じゃあな、なのは」

「うんばいばい真哉君」

そしてやっと家に帰ることが出来たのは良かったのだが……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

そんな音が背後から出てそんな表情をした母さんが立っていた

「こんな時間までどこに行ったのかしら

ちよつとO H A N A S Iしましょうか」

「は、はい………」

その日はなんとか乗り切ったものの

その日以来次から夜遅くに出るときは絶対に気づかれないようにしようとして誓った

2話 初日（後書き）

次回か次々回あたり新しいイノセンスを出そうかと

3話 暴走（前書き）

今回新イノセンス登場です

3話 暴走

ドゥンッ

「—————!!!」

「なのは封印を!!!」

なのはは既に詠唱なしでレイジングハートの起動に成功させており、今は俺が前衛で攻撃をして、なのはが後ろでサポートという形である。あいにく俺はまだジャツジメントしか持ってはいないし、身体能力も小学生のそれなので、どうしても防御はなのはに任せるしかない。まあ、大概の怪物はジャツジメントで一発だと思いが、今の犬を取り込んだ奴も一発だったし

「う、うんレイジングハートお願いね」

『All right』

Sealing mode

『Set up』

無数の魔力の紐のようなものが絡みつき

『Stand by ready』

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル??封印!!!」

『Sealing in progress』

すると、怪物が輝きだして青い宝石になった

『Receipt number??』

「ふ〜これでいいのかな」

「うん、これ以上ないくらいに……」

「じゃあなまた明日」

そういうと、なのは達の制止の声を振り切って家路についた

「（畜生……何で俺が）」

そう、別に俺が何もせずともジュエルシールドはなのはが勝手に集まるのにあのクソ神はまた面倒なことを押し付けてきた
そのことは今からほんの数分前である

「ふ〜ただいま〜」

「おかえり真哉、おやつ食べる？」

「うん

先にかばん置いてくるよ」

とまあいつもどおりに過ごしていたんだが……

「……………またか」

俺の机の上には神からの手紙指令書が置かれていた

これからののはと一緒にジュエルシード取りに言ってね、後五分くらいだよ

一緒にまた地図添えとくから

ああ、あとこれからいちいち手紙出すの面倒だから言っけど、原作でなのはが取りに行く奴は全部君も同行してね

出来なかったら……まあ分かってるだろうからもつ言わないけど

じゃあ、バイバイ

神より

「あの野郎……………」

ダッ

「真哉おやつは？」

「帰ったら貰うよー!!」

俺は急いで家を飛び出て、なのはが居るであろう神社へ向かった

「母さんただいま」

「おかえり〜はいこれおやつ」

「……………ありがとう」

俺は初めてときこそ結構やる気だったが、行ってもやることはジャ
ッジメントの引き金を一回引くだけという誰でも出来そうなことな
ので、モチベーションが下がるのである

「（食ったら寝るか）」

まあ、学校の宿題も小学生レベルなのですぐ終わるし、と思い俺は
昼寝をすることにした

「……………また、これが
次はなんだ？」

もうお分かりだと思っが、またあのクソ神からの手紙である

はい

君も結構頑張ってるみたいだから、ご褒美あげたいと思います

この手紙を額に当ててみて身体能力が多分ディーグレの神田くらい
になると思っから

あ、あと明日ぐらいに面白いこと起こるかもよ

b y 神

「ん？こっか？」

俺は手紙を額に当ててみた

「す、すげえ」

急に体が軽くなっった気がした

「でも、面白いことって何だ？まあ、考えてもわかんねえし、明日
になりゃ分かるか」

.....
.....
「（こつこついうことかよ）」

俺は今授業を受けている

だが、その授業の内容を俺は知っていた

そう、前世での経験とかではなく、昨日受けた授業と全く同じなのだ
この事象を俺は知っている

「（これってあれだよなミランダのイノセンスの刻盤タイムレコードが発動したと
きの奴だよな

じゃあ、この町のどこかにあるってことか？広すぎだろ！！でも
この町が範囲って保障はないし……

ちよつと待てあの時はミランダが明日なんか来なければ良いと思
ったからイノセンスがそれを叶えようとしてやったんだよな

俺は別にそんなことは特に思っていないしじゃあ誰が？

それにイノセンスは俺にしか反応しないはずじゃあ……

まずは神に確認を取ろう」

それから心で神に何度も呼びかけると

【なんだよつるさいな〜】

「（おい、イノセンスは俺にしか反応しないんじゃないのか）」

【お、もう気づいてたのか】

「（当たり前だろ

それより早く答える！！）」

【分かった分かった】

基本は君以外が触れたりすると暴走するようしてある【】

「（てめえそれ早く言えよ！！）」

【だって聞かなかったじゃん】

「（まったくそれじゃあ誰が暴走させたか探るか
あーめんどくさい

あ、そういえばもう一つ聞きたいんだけどそいつって巻き戻されてること分かってんの？）」「

【多分分かってると思うよ】

「（それならいつもと様子が違う奴を探せば分かるか
あー寝てなきゃ良かった）」

俺は授業が終わるとなのは達のところに行った

「……………のは信じてよ！！」

そこではバニングスがなにやら怒鳴っていた

「どうしたんだ、バニングス？」

あ、ちなみに余談だがもう今はみんなに敬称をつけるのを辞めている

「アンタもなんでみんな昨日とおんなじことしてんのに気づいてないの……」

「（……………！！ということはバニングスが暴走させたのか！！）」
「うーんでも信じてって言われても
私達なにをすれば……………」

「なにか昨日変わったことはなかったか？」

「昨日……………あ！「なにかあったのか？」昨日私買い物行ったのそれ
でね「違ーう」なによ」

「別に買い物の話じゃなくて「それでね」話を聞け！！」

「いいじゃんちよっとだけ

それでね良い感じの時計があったのよ

「それだ！！」

「なによいきなり」

「すまん

それってどこにあったんだ？」

「確か……………」

「……………ここか」

今日のジュエルシールドはなのはに一任してある（一応、神の了解もとってある）

俺は今ある時計屋に来ているわけだが

「（どうしよう）」

今日の前にはイノセンスであろう時計がある

「（このまま取ったら俺ただの窃盗犯だよな）」

「おお、真哉じゃないか

どうしたんだこんなところで」

「（げ、父さん）い、いや別に何でも」

「もしかしてその時計が欲しいのか」

「え！…いや……………」

「買ってやるうか？」

「え……………」

「なーにいつもテストで満点取ってるからな
そのご褒美だ」

「あ、ありがとう（なんだこの妙な違和感は……）」

それからは簡単だ

父さんに買ってもらった時計に触って暴走を止めた

「（これで大丈夫か

しかし、なんだったんだろうあの違和感

まあ、今はいいか

次は木のやつか

めんどくせーから発動前に回収するか）」

俺は次のジュエルシードに対する方法を考えながら父さんと一緒に
帰路に着いた

3話 暴走（後書き）

本当に空中戦どっしょよっしょ……

4話 怠情（前書き）

今回はやてとご対面です

4話 怠情

「あくだるい果てしなくだるい」

俺は今サッカーの試合場所へ向かっている

何故そんなところに行っているかという話は簡単なのはに誘われたからだ

「（まあそのチームの中にジュエルシード持つてる奴が居るから好都合っちゃあ好都合なんだけど）」

かれこれ原作が始まって一週間その間も神の命令どおりジュエルシードの回収には俺が全部同行している。じゃなきゃ咎落ちにされるからな！

「（まあ今回は原作でも描かれているから持つてる奴も分かるし発動する前に取っちまおう）」

「おはよう真哉くん」

「ああ、なのはかおはよう」

「天宮も来てたの」「おはよう天宮くん」

「ああ、おはようバニングス、月村」

「そろそろ応援席も埋まってきたことですし、試合始めますか」

「そうですね」

士郎さんがメンバーに号令を掛け、試合が始まった

「頑張れ頑張れみんな頑張つてー」

「（あゝ早く終わらね〜かな）」

そんなことを考えているとキーパーがファインプレーでボールを止めていた

「」「」「おおー！」「」「」

「キーパーすごい！！」

「ほんとー！！」

「（あいつだな）」

そしてそのまま試合は終わった結果は2・0で翠屋JFCの勝利だった

んで、俺らは翠屋で飯を食べることになった

そういうことで俺らは今店内ではなく屋外でケーキを食べているわ

けだが

「でも改めて見るとこの子フェレットとは違うかい？」

「こんな感じでユーノがピンチに立たされていた

そうこうしていると

「「「「「「ご馳走様でした」「「「「「「

「みんな今日はすっげーいい出来だったぞ

来週からもしっかり練習して次の大会でも勝とうな」

「「「「「「はい!」「「「「「「

「(さて俺もそろそろ)」

俺はチームではゴールキーパーをしていた彼がジュエルシードを出し、女の子と帰ろうとしているのを見て彼に近寄ろうとしたそのとき

「おお真哉サッカーの試合はどうなったんだ？」

「と、父さん(っち、こんな時に)2・0で勝ったよ」

「そうかそれとそこのお嬢さんがたは……」

「高町なのはです」「月村すずかです」「アリサ・バニングスです」

「これから息子をよろしく頼むよ」

「あなたが天宮くんのお父さんですか
私は高町士郎と言います
いつも娘がお世話になってます」

「(つと、そんなことをしている場合じゃ)」

咄嗟に歩いていったほうを見たもののもうそこに二人の姿はなかった

「……………ではこれからは共々よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

「じゃあ真哉帰るか」

「……………」

「来たか」

今町に光の柱が現れた

「(多分というか間違いなくジュエルシードだろ)俺も行くか」

俺は引き出しの中にあるジャッジメントを取り出し家を出た

「こいつはすげーな」

俺の目の前には町中を覆いつくす大きな木がある

「これがジュエルシードか

これは俺じゃ無理か」

「ひどい……………」

「おい、なのはやっと来たか」

「真哉くん……………」

どうせ気づいていながら見過ごした自分が許せないんだろう
それからユーノがこれは人間が起こしたと説明した

「ユーノ君こついつときはどうしたらいいの？」

「えーあ……………」

「ユーノ君！！」

「えーああ封印するには接近しなきゃだめだまずは元となってる部
分を見つけないと」

でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうと、どろちゃって探しているか……………」

「元を見つければ良いんだね」

「え……………」

するとなのははレイジングハートをかまえて

『Area search』

「リリカルマジカル探して！災厄の根源を！！」

すると魔方陣が輝き

「見つけた！！」

「なのは無理だよ

もっと近づかなきゃ」

「できるよ！！」

ね？そつでしょレイジングハート」

『Shooting mode

Set up』

「了解

で、どこだ？」

「え……………」

「俺が周りの木を蹴散らしてやる
だからどこだ」

「あそこ!」

「よしジャツジメント!」

俺が放った銃弾は木に当たって表面が砕けた

「見えた

行つて捕まえて!」

そしてなのはが放った砲撃はちょうどさっき破壊した部分にあたった

『Stand by ready』

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル? 封印!」

『Sealing』

そして光が町を包み込み込み事件は終わった

「ありがとうレイジングハート」

『Good bye』

「いろんな人に迷惑かけちゃったね……………」

「な、なに言ってるんだ

なのはちゃんとやってくれてるよ」

「私気づいてたのにあの子が持つてるのでも気のせいだって思っちゃった」

「なのは……………」

俺はユーノがなのはを励ましているのを一瞥するとそこを去るつもりだった

「真哉！君もなのはに言ってやってくれよ」

「それはなのはが決めることだ

俺からは特に何も無い

ただお前はユーノに言われたからジュエルシード集めをするのか？」

「……………！！」

「……………じゃあな」

そういつと俺はその場を去った

.....
.....
.....

sideなのは

私はさつき真哉くんに言われたことを考えていました

お前はユーノに言われたからジュエルシード集めをするのか？

「（自分の精一杯じゃなく自分の全力で
ユーノ君に言われたからじゃなく自分の意思で）」

私はジュエルシード集めをしようと思いました
もう絶対こんなことにならないように

.....
.....
.....

side真哉

「はあくだるい

てかなんであんなこと言ったんだろ

ま、いいか早く帰ろ（それより次はフェイトかそれにはやての間の書覚醒のことも一応考えとかなきゃな）一応明日ぐらい図書館行ってみるか」

ということで、翌日俺は図書館に出かけた

「……だよな？」

早速中に入ると以外に早く本棚に必死に手を伸ばす目的の人物を見つけた

多分本を取りたいのだろうが車椅子のせいで届かないみたいだ

「この本かい？」

「あ……ありがとう！！私車椅子やから困ってたんよ」

「君、両親は？」

「……うち両親は居てないんよ」

「あ…………ごめん」

「あ、別にいいんよ気にせんでも
そうや！私、八神はやて。君は？」

「俺は天宮真哉よろしく（ふ）良し。まあこれでなんとかなるだろ」

「真哉くんか（こ）ちらこそよろしくな」

それから握手をしてはやてを家に送った後
次のフェイトのことを考えながら俺は家に帰った

4話 怠情（後書き）

次回はフェイトとご対面です

5話 遭遇（前書き）

今回はフェイトが登場しますが主人公戦いません

5話 遭遇

ようやく週末

最近というか、前に図書館に行ってから俺は図書館に行つてはやてと喋るのが日課になっていた

「（それより今日はさすがの家に集合だったな）さすがにジャッジメントは持っていけないな

しょうがない、今日はタイムレコードだけにしとくか」

俺は腕時計型のイノセンス、タイムレコードを身につけて、一路月村邸へと向かった

バス停にて

「おはようなのは

っと、おはようございます恭也さん」

「おはよう真哉くん」「ああ、おはよう」

こうして高町兄妹と一共に月村家へと向かった

で道中適当に喋ったりしながら、月村家へと着いたわけだが

「……………でっけえ（アニメで見てたことはあつたけど本物はまじで
すげーな）」

ピンポン

「恭也様、なのはお嬢様と…真哉様ですね、いらっしやいませ」

「ああ、お招きに預かったよ」「こんちは」「おじゃまします」

「どうぞ、こちらです」

とまあメイド長のノエルさんと軽く挨拶した後、俺達は月村とお姉
さんの忍さん、それとバニングスの居るテラスに案内された

「（まじで猫ばっかだな）」

俺は断然ネコ派なので、特に嫌な気はしないが。これはもうある意
味壯観だ

「なのはちゃん、恭也さん、天宮くんいらっしやい」

「すずかちゃん」「よお」

とまあその後、忍さんと恭也さんは部屋に行つて、俺達はまあ適当
に談笑しているわけだが

「（んなことより、この後どうすっかな〜）」

「……今日は元気そうね」

「最近なのはちゃん元気なかつたから

もし、心配事があつたら話してくれないかなって話してたんだけど」

「すずかちゃん…アリサちゃん…」

「そんなことより良いのか？ユーノがピンチだぞ」

「ユーノ君！？」「コラ、アイ止めなさい！」

そんなとき確かすずかの専属メイド（ドジッ子）だったか？のファリンさんがやってきて危うくお菓子とかを全部ぶちまけかけた俺？なんもしてねーよ原作知ってるからね

「なのはちゃんすずかちゃんごめんなさーい！！！」

でその後外でお茶をしているわけだが

急になのが立ち上がって、ユーノを追いかけようとした

「ユーノどうかしたの？」

「何か見つけたみたい探してくるね」

「俺も行こう」

「……！！うん
じゃあ、ちょっと待っててね」

そして俺となのは（ユーノもだけど）はジュエルシードが発動して
と思しき場所へと向かった

「なのは
ジュエルシードはどこだ？」

「……え！気づいてたの！？」

「お前のあの反応を見れば分かる（まあ本当は原作知ってたからだ
けどね）」

「……！！発動した！！」

「ここだと人目が…結界を作らなきゃ！！」

「なら俺が作ろう」

「え、でも真哉くん魔法は使えないんじゃないか……」

「魔法じゃない。これは前も言ったイノセンスだ
そんなに広くは張れないが、十分だと思う」

あれ？でもこれってフェイトってどつやっではいるんだろう
まあいいか

「イノセンス発動！！タイムアウト時間停止！！」

一応ここら一带に張つといたけどそう長くは持たないから早くして
てくれ！！」

すると目の前に巨大化した生物つていうか猫がいた

それを見たなのはとユーノは啞然としていた

まあいきなり目の前にでかい猫が現れたら驚くよな普通。俺は原作
知ってるから驚かないけど、いや、一応驚いてるフリくらいはする
よ？

ああ、あと俺が結界張つたのはこれからあるフェイトとなのはの戦
いに不用意に関わらない為だよ

これでなのはがジュエルシード取って原作変わったりしたら洒落に
なんないからね！！

「「……………」」

「なのはさっさとしろ！！」

「う、うん！！さすがにあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃう
だろうしね」

「（いや、そんな問題じゃないだろ）」

と、心の中で突っ込んだいた

「じゃあ、レイジングハート!!」

ドドンッ

「(フェイトが来たか)」

「バルディッシュフォトンランサー電撃」

『Photon Lancer・Full auto fire』

そういつとフェイトが放った無数の魔力弾が巨大化した猫を襲った

「んなっ!!魔法の光!!そんな……」

「……!!レイジングハートお願い!!」

『Stand by・Ready・Setup』

そういえば、俺って空中戦全く出来ないよな……どうしよう

『Flyer Finn』

ああ、俺も魔法が使えたらな……

その後原作通りなのはは撃墜され、気絶。んで、フェイトがジューエルシードを回収

俺はユーノと一緒に横でずっと考え事をしてた。で思いついたんだけど、メーカーオブエデン楽園ノ彫刻で翼とか作れないかな
まあ、それは手に入れてから考えるけど

「で、あなたは何者？魔導師ではないみたいだけど」

「人に聞くときはまず自分から名乗るもんだろ」

「……………フェイト・テストロッサ」

「ふ〜ん、フェイトか
俺は天宮真哉、エクソシスト被魔師だ」

「えくそしすと？」

「本当の意味は魔を祓う者とかっていう意味なんだけど
今のところあるロスト・ロギアを探してるんだ」

「あるロスト・ロギア？」

「イノセンスって言うんだけど
知ってるか？」

「知らない」

「……………そうか（まあ、そうだろうな）」

じゃあな」

「……………うん」

- - -
- - -
- - -
s i d e フェイト

ここは高級マンションの一室そこに一人の少女と一匹の犬？がいた

「ジェルシードシリアル？
いくつかはあの子が持つてるのかな

それにあのロスト・ロギアを探してるって言ってたけどエクソシ
スト？だったかな。本当に何者なんだろう」

犬がクウ〜と鳴いている

「大丈夫だよ。まずは……………
もつすぐ持つて行きます母さん」

- - -
- - -
- - -
s i d e 真哉

なのはがフェイトにやられて気絶した後俺は恭也さんになのはがユ
ーノを探してる途中に転んで怪我をしたと報告し、その後なのはが
起きるとその日はお開きとなった

その帰り道

「（これで遂にフェイトも登場したし、今度のは確か温泉だったっけ
どうするかな）」

でも、そついやこついう場合ジャッジメントって持って行きずらいんだよね。それにジャッジメント以外だと俺タイムレコードしかないし

新しいイノセンスでも探すか（ん？なんだ？）

俺が考えながら歩いていると上から何か降ってきた

「なんだ？手紙……ってまさか」

俺が恐る恐る開けてみると

は。い。神。だ。よ。

今日はイノセンスのことだけど、その地球だけじゃなくて他の管理外世界とかにもあるからね。

後この地球だけはイノセンスがあるのは海鳴市だけにしといた頑張って明日中に最低後二個見つけてね。

出来なかつたら………

神より

追伸

君が欲しがってた楽園メイカーオブエデンノ彫刻もこっちにあるからじゃあね〜

「ていうか範囲狭いなおい！！こんな一般人に見つかるんじゃないのか！？」

ハア：「明日はまた図書館行こうかなって思ってたのにな〜」

俺は明日の予定を考えながら帰路の着いた

5話 遭遇（後書き）

次回でイノセンス結構出せると思います

6話 収集(前書き)

今回でイノセンスス三つ登場です！

6話 収集

「……………意外と見つかる……つかこんなに簡単に見つかって良いのか？」

時刻は現在午後四時過ぎ

俺の手には数個の金色の歯車状の物が交差したような物体……イノセンスが握られている

こうなったのもいつもどおりあの神の手紙のせいなわけで

「こんなに簡単に見つかるんなら

また誰かにすぐ発見されちまうんじゃないのか」

そう俺は一枚の手紙を見ながら呟いた

その手紙には……………

はっい 神だよ

今日はイノセンスのことだけど、その地球だけじゃなくて他の管理外世界とかにもあるからね

後この地球だけはイノセンスがあるのは海鳴市だけだから頑張っ
て明日中に最低後二個見つけてね

出来なかつたら……………

神より

追伸

君が欲しがってた楽園メーカカーオプエデンノ彫刻もそっちに送つといたからじゃあね

この手紙を読んで町を探索していたのだが、もう既に三個発見した

「（まあノルマはクリアしたし、家帰ってこのイノセンスが何なのか発動させてみるか）」

「ふうじゃあ早速……………イノセンス!!」

するとイノセンスが輝きだし

【はいマスター】

「……………」

【どうしたんやマスター？】

「(なんでよりによってこいつなんだ………!!)」
俺の前に現れたのは原作ではティモシーのイノセンスである憑神つきかみである

手元を見てみるとそこには原作よりも小さな宝玉がつけられていた

「ハア………で他のは、これって楽園マイカーオプエテンノ彫刻か今日出来るかどうか試してみるか

確か俺が持ってきたのは三つだったよな

じゃあ後もう一つは………あれ?どこだ?」

部屋をもう一度見回してみる

勉強机、ベッド、本棚、猿、クローゼット、憑神

「(あれ?今変なのが混じってたような………))ってそうだよ!!
なんで猿がここに居るんだよ!!」

あれ?………猿?まさか…な、ま、まあ一回試してみるか
イノセンス発動」

すると部屋の奥にいた猿が一気にでかくなった

「まじかよ!!」

俺の目の前には原作ではクラウドニナインが使っていた寄生型対ア
クマ獣武器であるラウ・シーミン(発動中)が居た

「(こんなのなんて言えば良いんだよ………)」

俺はその後一旦ラウ・シーミンを元の猿に戻し、これからのことを考えた

「（いきなり元帥クラスのイノセンスが二つか
まあ戦力がある分は別にいいんだけどラウ・シーミンどうしよう）
ってさつきから一々周りをつろつろするな!!」

【だってマスター構ってくれへんのやもん
それとマスター大丈夫?】

「……………ああ」

俺の体や顔には無数の引つかき傷がある
まあ、言わずと知れたラウ・シーミンのせいなのだが

「なんで俺こんなに嫌われてんだ?」

【さあ?】

「（先が思いやられるな
そういえば今シンク口率ってどうなってるんだろ
神に聞きゃ分かるか）」

ってことで早速神に聞くことにした

『今日はなんだい？』

「（今の俺とイノセンスのシンクロ率を教えてください）」

『それじゃあ言っていくぞ』

ジャツジメントは100%

タイムレコードは74%

ラウ・シーミンは100%

メーカーオブエデンも100%

憑神は73%でLEVEL1に憑けるぐらいだな

まあ、今この世界にAKUMAはいないから魔導師で魔力量ぐぐらいの奴が限界じゃね』

「（なんでそんなに高いんだ！？）」

『お前原作読んでるからな』

原作キャラの気持ちとかある程度理解してるだろそのせいじゃね？まあ憑神は別だろうけど』

「（ハア…ん？じゃあ憑神はどうなってるんだ？原作では始めて発動した直後でもLEVEL2には憑けただろ）」

『ああ、それは元々寄生型だったイノセンスを装備型にしたからだお前だつて頭から宝玉生えてるなんて嫌だろ？』

まあ気負いせず頑張ってるね』

「（確かに…でもシンクロ率はこれからも上がるんだよな）」

『そりゃあ上がるだろ』

「（じゃあ良いか

また用があつたら言つわ）」

さすがに

【でマスター次は何するんや？】

何するかな？まあ他のイノセンス試してみるか

「ちよつと今日手に入れたイノセンスを試してみようかな

さすがに家では無理だから…公園でも行くか」

【誰か居てるんちゃうん？】

「まあそんな時はそんな時だ」

というわけで公園に来たが
後、ラウ・シーミンは家で留守番ださすがに猿は連れて行けないか
らな

しかし、ラウ・シーミンをさっき思い切って親に見せた結果二つ返
事で飼うことをOKしてくれた
いつもながら俺の親の心の広さには感服するよ

「やっぱりまだ人が居るな」

【どうすんのやマスター？】

「試しに憑神使ってみるか（メーカーオブエデンは次の機会にでも
試すか）」

【ええ〜】

そんなことは無視して

「そうだった俺の体頼んだぞ〜【そんな勝手な】憑神発動！！」

んで俺は近くにいた子供の体に移った

「へ〜これ中々面白いな」

「でマスターどうすんのや？」

すると俺の体の中に入っている憑神が来た

「それじゃあもう」「あれ真哉くんどうしたんや?」「はやて!?!」

そこには買い物帰りなのかスーパーの袋を持ったはやてがいた

「???君どつかで会ったか?ていうかなんでうちの名前知ってんのや?」

はやては俺を怪しい人を見るような目で見てきた

「(そういえば俺今違う人だったんだ)あ、ごめん人違いだった」

するとはやては俺(憑神)に向かって喋りかけはじめた

「真哉くんどうしたんやこんなところで?」

「(頼む!頼むからいらんこと言わんといってくれ!!)」

「???アンタ誰や?」

「.....」

「.....」

「(あんの野郎やりやがった!いや、やばいはやてがなきそうになつてる)」

俺はまずいと思い俺の中から憑神を(強制的に)追い出した

「し、ごめんはやて冗談だつて(あとで憑神ぶつとばす)」

【もうマスターなにすんねん
ていうかその子誰や?】

「つぐす……ほんまか?」

「ほんとほんと」

危ねーあれ?そういえば何か忘れてるような……

「真哉くんその横の子誰や?」

そつと横の子(全くの他人)の方を見るとすごいおろおろしてる

「(しまったー……………!!)あ、うん。さっき知り合っ
たんだ

そ、そんなことよりもう遅いし家に送っていくよ

じゃ、じゃあ君もまたね!!」

俺達が公園を出て行く間、その子は終始おろおろしたままだった

そんなことではやての家までの道の途中

「もう真哉くん嫌いや……ふんっ」

「ごめんごめん、もうしないよ」

「そうや！じゃあ今日夜、ご飯食べてってーな
食べてってくれたら許してあげるわ」

「分かったよ」

でも一回家に電話していいかな？」

「うん！ええよ」

まあそんなこんなではやての家で「ご飯を食べることになったわけだが
親？二つ返事でOKしてくれたよ

「やっぱり一人で食べるのと違って楽しいなあ」

「そうだね」

でもはやってってほんとに料理上手いね

将来良い奥さんになるよ」

「良い奥さんやなんて」／／／／

「（ん？どうしたんだ？急に顔が赤くなって、熱でもあるのか？）」

俺はそう思ったのでおでこをくつつつけて熱を測ってみた

「……………！！」／／／／

「大丈夫。熱はないみたいだね

ご馳走様。おいしかったよ

じゃあそろそろ帰らせてもらおうよ」

「ふえ…う、うん

ま、また今度な」

「うん次までのイベントにはまだ時間があるし、今週は図書館と他のイノセンス探して良いか

「そういやメーカーオブエデンまだ試してなかったな」

「そうして俺は明日行くイノセンス探しの場所を考えながら、帰路に着いた

- - -
- - -
- - -
sideはやて

真哉くんが出て行ったのを見送った後
私は一人ただ玄関に佇んでいた

「（急に顔が目の前にあってびっくりしたわ）
でも……………」
「／／／／

密かにまたご飯を食べに来てもらう算段を立てつつ、はやては床に就いた

6話 収集（後書き）

一応はやてとフラグ立ててみました

7話 温泉(前書き)

今回はアニメ5話の話です

7話 温泉

遂に明日からは連休

そして……………

「どうすればいいんだ……………!」

そう、明日は温泉でのフェイトとの一件がある

だが、運悪くこれは俺の転校前から決まっていたことらしく、俺は参加出来なかった

「（介入できなかったら咎落ち……………くそっ!!どうやって介入すればいいんだ!!」

それにさっきから神に連絡とろうと思ってても、つながらねーし」

「真哉〜ご飯よ〜」

「は〜い（覚悟しなきゃならんのか?いや…俺はまだ諦めねーぞ!）」

「へ？」

そんなこと言いつつ、明日は誰にも被害が出ないところに居ようと思っ

「だ・か・らお父さんが抽選で海鳴温泉の招待状を当てたの！！それで、明日からは連休だし、久々に家族で旅行行こうかと思って」

「へ〜そうなんだ（ありがとう！！（アイツ以外の）神様！！）」

というわけで、今旅行の準備中ですが
まあ準備と言っても、基本的な持っていくものは、イノセンスぐら
いですが

ちなみに今回はイノセンスは全部持って行きます
試したいこともあるからな！
だけど……

【なあマスターおんせんってどんなところなん？なあマスター】

「（やっぱりこいつ置いていこうかな）あんまりうるさいと置いていくぞ」

【……………】

なんだ！？急に黙ってそんなに行きたいのか？それに憑神じゃあ温泉には入れないだろ！

俺達、天宮家一向は海鳴温泉に来ていた

「じゃあ、俺は早速温泉入ってくるよ。父さん達は？」

「まあ外を少し散歩してくる」

「じゃあまた後で」

【おんせん楽しみやな〜】

そして俺達？が温泉に行こうとしていると、前に15、6歳ぐらいの女の子となのは達が居るのが見えた

「（あれがアルフか）お〜い、なのは〜何してんだ？」

そう言うと、なのはとその女の子…フェイトの使い魔アルフが驚いた顔でこちらを見てきた

「（まあ今日俺も来るって言ってないからな）」

「真哉くんなんでここに!？」

「なんでって温泉入りに来たに決まってるだろ」

「でも、昨日はそんなこと一言も……」

「昨日の夜決まったからな」

……で、そちらのあなたは俺達に何か用でも？」

「いや、ちょっと知り合いに似てたもんでね」

じゃあ、私はもうひとつ風呂行ってくるから

「そうですね。では」

そうして俺達はアルフと別れた

.....
.....
.....

sideなのは

今のところは挨拶だけね

「.....!」

忠告しとくよ。子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね。お痛
をすることがぶつといくよ

「お〜い、なのは〜何してんだ?」

え!?!なんで真哉くんが…昨日は何も言っていなかったのに

「真哉くんなんでここに!?!」

「なんでって温泉入りに来たに決まってるだろ」

「でも、昨日はそんなこと一言も……」

「昨日の夜決まったからな

……で、そちらのあなたは俺達に何か用でも?」

「いや、ちょっと知り合いに似てたもんでね
じゃあ、私はもうひとつ風呂行ってくるから」

「そうですか。では」

でも、あの人一体何者なの？念話使ってたから魔術師なのかな？

……なのは

……うん

「なのはちゃん」

「あ、う、うん」

「何よあれ！！昼間っからよっぱらってんじゃないの！！気分悪！」

「ま、まあまあ。くつろぎ空間だしいろんな人が居るよ」

「だからって節度つてもんがあるでしょ！！節度つてもんが

……で、アンタ昨日の夜決まったってどういうこと？」

そつえば、どういふことだろう？

「ああ、うちの父さんが抽選で当てたらしい」

あれ？でもそんな抽選やってたっけ？

「で、なのは達はどうするんだ？」

「私達はこれから旅館を見て回るつもりだけど、アンタはどうする？」

「俺は今から温泉入りに行くよ」

「ふうんじゃあまたね」

.....
.....
.....

sideアルフ

まさか、フェイトの言ってたえくそしすとやらまで出てくるとはね
まずフェイトに連絡しないと

あーもしもしフェイト。こちらアルフ

うん

ちょっと見てきたよ例の白い子

そう...:どうだった？

あんなガキンチョ、フェイトなら大丈夫でしょ

うん...:まあ、どってこと無いね。フェイトの敵じゃない

そう。こっちも少し進展。次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できてるよ

今夜にも捕獲できると思うよ

さすがフェイト！仕事が早いね〜

う〜んナイスだよフェイト！さすがは私のご主人様！！

うん。ありがとうアルフ

夜にまた落ち合おう

はあ〜い

あ、そうだ忘れてたフェイトが前言ってたえくそしすととかいう
子も居たよ

真哉が？

うん。それだけ

じゃあ夜ね

それにしても温泉って気持ちいい〜

」
「くつろぎくつろぎね」

あ！しまった耳出てきちゃったじゃないか

」
「おっと」

.....
.....
.....

side 真哉

そして夜

父さんと母さんは散歩の途中で会ったらしい、高町夫妻らの部屋へ行ってしまっている

そして俺は数分前来た手紙を見ていた

はあゝい

まあ用件は分かっているとと思うけど、あと十五分後だよ

ちやくんと時間通り行ってね

じゃ

b y 神

「（なんでコイツはいつもぎりぎりで手紙を寄越すんだ！？嫌がらせか？嫌がらせなのか！？）

まあ昼間のうちに戦つてある場所は特定してるがな」

俺が着いたとき、そこではなのはとフェイトが既に対峙していた

「（アルフももう狼になってるな

あ、ユーノが魔法でアルフを強制転移させた

確かこの後なのはとフェイトが戦うんだよな

さて、俺はどうするか……よし、ユーノのところへ行こう
ってユーノってどこだ？」

あれから探したらすぐ見つかった

「よつと、ユーノ大丈夫か？」

「天宮くん!？」

「アンタは!！」

驚きすぎだろ

「ユーノ。なのはのところに行ってやれ」

「……!!分かった」

すると、ユーノはなのはの元へ駆けていき、アルフもそれを追おうとするが……

「行かせないよ」

「つく！邪魔するならアンタを倒してから行くまでだ」

そう言っつて、俺に襲い掛かろうとするが俺は神田並の身体能力でそれをかわす

「お前の相手は俺じゃない」

「どついう意味さ……！」

「どついうことさ……！」

「さあ初陣だ……！イノセンス発動……！」

俺は肩に乗っていた猿……ラウ・シーミンにそう叫ぶと、一瞬にして慎重はゆづに2m以上はあるつかという大猿に変わった

「……………！！そいつがアンタの言うイノセンスって奴かい」

「ああ。じゃあいくぞ……！」

まあ行くつて言っつたつて俺がすることつて特に無いんだけどな

基本ラウ・シーミンに命令するだけだし

そんなこと考えている間もアルフとラウ・シーミンは激戦を繰り広げていた

今のところは両者互角といったところだ

「（おいおい、今現在のラウは出力的に3割いかないぐらいだぞ。それでこれかよ。まあさすがに元帥のイノセンスといったところか）もういい。戻れラウ」

俺はラウ・シーミンの発動を停止する

「ハア…ハア…なんだい…もう終わりかい？」

「今日のところは、な」

十分コイツの実力も測れた…ってひっかくな！！分かった。後でなんか餌やるから！！」

そんな漫才じみたことをしているのを、アルフは驚いた表情で見つめていた

「後…って痛いって言うてるだろ！分かった。後でお前の分のお土産買ってやるから！！」

後もしイノセンス見つけたら、俺に言ってくれ。どうせお前達じゃ扱えないからな」

「ちょっとアンタまだ終わって……………」

俺はそんな制止の声を無視しつつ……

「イノセンス発動」

俺は十字架と鑿で出来たようなイノセンス…メイカーオブエデン楽園ノ彫刻を発動させる

「アート」

俺は巨大化した光の十字架を地面に打ち込む
すると俺の背中から六枚の光の翼が現れた

「じゃあな」

俺は光の翼を羽ばたかせ、そこを後にした
ちなみにさつきアルフとかを探したのも、これを使つてのことだ

「そんなことより、これで空中戦も大丈夫だな

じゃあ、さつさとなのはのところに戻りますか。さつき桃色の魔力光が見えたし、どうせディバインバスターでも撃つたんだろ。」

俺は一路なのはが戦っているであろう。橋に向かった

- - -
- - -
- - -
sideフェイト

私は白い魔導師の子からジュエルシールドを貰い立ち去ろうと思ったが

どこに居るのアルフ？帰ろう

「めんフェイト。ちょっとしくじっちゃった

……………！？どういふこと？

そんなやり取りを念話でしている最中六枚の光の羽を持った天使が
舞い降りた

「……………!!」

「ふっやっぱり終わってたか」

「……………!! 貴方は!!」

そこには前にその白い魔導師の子と初めて出会ったときに居た少年…天宮真哉が立っていた

「行くぞなのは。じゃあなフェイト」

そして彼はあつという間に白い魔導師の子を抱えて飛んでいった
まった

「フェイト」

「……………!! アルフ!! 大丈夫!？」

声がしたほうを向くと、そこにはふらついているアルフが立っていた

「うん。でもあのえくそしすととかいう奴すごく強い

あいつの肩に乗ってた猿みたいなのは、あたしと互角いや、あたしよりもずつと強かった」

「イノセンス……………」

彼が言っていた俺はイノセンスを探してるって、もしかしたら母さんの役に立つかも

「まさかフェイト。そのいのせんすとやらを探すきかい!？アイツ

は自分にしか扱えないって言ってたよ!!」

「でも、母さんの役に立つかも……」

「……分かったよ。フェイトがそう言うんなら私も手伝うよ
さあこれからはジュエルシードとイノセンス両方だね!!」

「ありがとうアルフ……」

本当に……

「いいんだよ。なんたって私はフェイトの使い魔なんだから!!」

7話 温泉（後書き）

次回は特に主人公何もしないと思います…多分

8話 正体

「なのは！！フェイト！！」

二人は体のあちこちに傷を負い、バリアジャケットは血で汚れている

そして、その二人の中央に立つのは、白き道化

「……………つくー！！これも俺のせいだっというのかよ……………！！」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

いや～すっかり忘れてました

そういえば、今回でなのはがフェイトの名前知るのはしょうがないので俺から教えておきました

んで、その後は特に何も無く俺達は普通に温泉を楽しんで帰りました
それから数日後今日はなのはとフェイトのデバイス…レイジングハ
ートとバルディッシュが壊れかけるイベントがあるのですが、別に
なのはフェイトが怪我するわけでもないし、俺は近くで見たいよう
と、計画をたてて、あれが起きるまでの時間はイノセンス探しをし
ようと思ひ、まあ今現在探しているのですが………

「見つからね」

そう前は一気に三つも出てきたのに、現在はもう五時半あと1時間
30分ぐらいで、始まるのに収穫はいまだ0
ということ、この町にはあと何個のイノセンスがあるのか聞きに
ある人物のところに来た。

「ん？どうした真哉

父さんに何かよつか？」

今日は休みらしく珍しく父さんは家に居ました

「この町にイノセンスは後何個ある？」

「父さんは知らないぞ」

「とぼけんじゃねえよ

なあ神様」

「……………へえ〜気づいたんだ

結構早かったね。いつから気づいてた？」

「結構前から疑ってはいた。確信したのはついさっきだけどな」

「で、何で気づいたんだ？」

「アンタはいつもタイミングが良すぎるんだよ。まるで見てるみたいに」

原作が始まるのを見計らったように、引越して、んでイノセンスの回収に手間取ってた俺にイノセンスの時計を買ったり、それに原作どおり進めるために、事前にジュエルシードを回収しようとした。俺を止めたり、原作キャラと全く同じ日に温泉旅行のチケットが当たったりどう考えても不自然すぎる」

そう父さん神様いつも異常なくらいタイミングが良かった

「でも、それだけじゃないんだろ？」

「ああ、さっきアンタは俺がイノセンスはこの町に残り何個あるって聞いたとき「知らない」と言った
おかしいだろ

「どこが？」

「普通はイノセンスってなんだ？って聞く。でもアンタはまるで元からイノセンスを知ってたみたいに応対だった。だから確信した。」

「でも、それは俺が操ってただけかもしれないぜ」

確かに、その可能性も考えた。だけど………

「手紙だ」

「手紙？」

「ああ、もしアンタが人の運命を操れるなら、そもそもこんな手紙俺に送る必要さえないはずだ

俺の運命操って、原作介入させれば良いからな」

そう、この手紙があるってことはこの手紙が無けりゃ俺を原作介入させなかったってことだ

「ふゝ宜しい

なかなかやるね」

「だったらさっさと咎落ちの件解けよ！！」

「解いたら、どうするきだい？」

「そんなの決まってる

もう俺は原作には関わらない」

「どうして？」

「決まってるだろ

なんで誰かがどうせやることを俺が代わりにしなきゃなんないんだよ！！」

そつだ。どうせ俺が関わらずとも事件は勝手に解決する

「君は何か勘違いしてるみたいだね」

「は？勘違い？」

「そう。この世界は既に元の魔法少女リリカルなのはの世界ではないんだよ

この先何が起こるかなんて、誰にも分からないし、知ることは絶対に出来ない

もちろん神である俺でさえね

君がもう原作とは関わらないというならそれも良いだろう

だけど、一つ覚えておくといい、君が平穩に暮らしている間、誰かが君の代わりに事件に巻き込まれていることを

さあ、そろそろ時間だよ。もう原作に関わらなくても咎落ちになつたりはしない

関わるなら急ぐことだね。

ああ、後この町のイノセンスは後一つだよ」

すると、神は意味有りげに笑い立ち去った

俺は考えていた。

「（もう俺は関わらなくても良い。でも何だ？さっきから嫌な予感がする）」

それから俺は悩みながらも、嫌な予感の原因を探るべく、現場へと向かった

.....
.....
.....

side 神

「厳しいんですね」

「ああ、早苗か」

「もうその名前は良いでしょう」

「まあ、そうだね。それにしても良く九年間も付き合ってくれたね」

本当に九年もよく付き合ってくれたよ

「まあ、秘書ですから。それに.....」

「それに.....」

「それに？」

「少し私も楽しかったので」

「僕との結婚生活が？」

「違います」

即答……………

「子供を育てるってこんなのかなって」

「じゃあ作る？」

「結構です」

また、即答……………

「しかし未だに信じられないのですが、本当なのですか？」

「本当だよ。正真正銘彼は僕の息子だよ」

「ですが、その息子によくあんな酷なことが出来ますね」

「まあ、ずっとほったらかしだったから、僕としては親としての責任を払ったつもりだけど？」

「そうですか……………」

「だけど、ここからは僕でも分からない。まあどうする？、真哉！」

「何気に楽しんでますよね？」

「黙秘します」

- - -
- - -
- - -
s i d e 真哉

俺は街中を走っている。さっきからずっと悪い予感が止まらないのだ

「くそっ！！なんなんだよ！！」

そうして、やっと曲がり角を曲がったらようやく結界が張ってある
だろう地帯が見えてきた

「は、なんだ大丈夫じゃないか

やっぱり俺の勘…違……」

すると、俺の前に居た

フェイトと戦っていたであろう。なのはの体が崩れ落ちた

奥を見てみると、フェイトも何とか立っていると言った所だ

もちろん原作にはこんな出来事は無い

そして、その中央には原因であろう白き道化がこちらを見据えていた

「なのは！！フェイト！！

……………つく！！これも俺のせいだっというのかよ！！！！！！」

俺はなのはの前に立ち、白い道化…イノセンス“クラウン・クラウン 神ノ道化”を睨み
つける

それに反応したのかクラウン・クラウンは元の金色の歯車状のもの

が交差したような物体に戻っていった

「おい！！なのは！！ユーノ治療を頼む！！」

俺がそんなことを言っていると、アルフが落ちているイノセンスに近づいていった

「ばか！！それに触るな！！」

アルフは一瞬こちらを一瞥すると、イノセンスに触れ……何も起こらなかった

「……………んなっ！！（何でだ！？もしかしてアルフが使い魔だからか！？）」

そして、アルフはそのままどこかへ飛んで行ってしまった

その後、ユーノの治療のかいもあり、なのはの怪我はたいしたこと

は無かった

そして、意識を取り戻したなのはに聞くと、原作どおりフェイトが素手で、ジユエルシードを抑えたが、それに反応してか急にクラウン・クラウンが現れたらしい。奇襲により頭を打って何とか立ち上がろうとしたが、そのまま意識を失ったらしい

「（俺のせいだ。俺がすぐに駆けつけていれば……………）」

その後なのはは家に帰って、転んだと言い訳していた

俺はその風景を見て、また自分の行動を後悔するのだった

8話 正体（後書き）

すごい急展開になった気が……
そんなことはさておき次回は伯爵を登場させる予定です……多分

9話 戦う理由(前書き)

今回微シリアスです

9話 戦う理由

side???

いや、来たときはどうなるかと思いましたが、この世界の人間もおろかな奴らが多いようですねぇ

まあ兄弟達が居ないと分かったときは、泣きそうになりましたが…

……

気を取り直して、この世界にももつと闇を広げていきましょう

お、手ごろなところに一人居ましたね

「アリシア……………」

「はぁい、こんばんワ」

すると、目の前にいた女性はいきなり身構えた

「何者!?!?どうやってここに入ってきたの!?!?」

「そんなことより彼女……アリシアちゃんを甦らせたくありませんか？」

「……………！！本当に！？出来るの！？」

「はぁーい、この我輩の作った魔導式ボディに魂を取り込み、復活させます」

「本当！？本当なの！？アリシアを甦らせることが出来るの！？」

くくっ、これは上手くいきそうですね

「それにはあなたの協力が必要なのですがネ
アリシアと絆のあるあなたの“呼び声”が……………魂をあのかから呼び戻すことが出来る」

「アリシア……………」

ヴァン

そして、魔導式ボディに“Allicia”の文字が刻まれる
くくっ掛かりましたね。

「マ、ママ」

「アリシア！？アリシアなの！？」

「なんで、こんなことを……………」

「え？」

「なんで私をアクマにしたの？もう逃げられない！！」

「ウフフフ〜お前はもう我輩のもです。アリシアちゃん
さあ命令です。この女を殺して被りなさい

ヴヴヴ

「アリシ……」

「うわああああアアああああアアアあああああああああ」

ブシュッゴキッボリッバキッゴキ

「Happy birthday to you

Happy birthday to you

Happy birthday dear……

アリシア

出来上がり
」

ククク、さあ闇を広げましょう！！

- - -
- - -
s i d e 真哉

俺が家に帰ると、やっぱりというか何とか、家はもぬけの殻だ

った

正体がばれた神が出て行ったからだろう

「……………俺に、俺にどうしろっていうんだよ!!」

その夜、俺は一睡も出来なかった

朝になると、俺は学校へは行かず町を彷徨っていた
そうすることで、何か答えが見つかるかと思っていたのかもしれない
だが、運命のいたずらかそれは本当のこととなった

「あれ？真哉くんどうしたんや？元気なさそうやし、学校はどうしたん？」

「ああ、はやてか
なんでもない」

「なんでもないことあらへんやろ
そんなつらい顔して、なんかあったんか？」

「俺は……………」

俺は今までのことを話した

自分のせいで傷つく必要の無かった、人を傷つけてしまったこと。
もしこのままいったらもっと多くの人が傷つく可能性があること。
もちろん今のはやてには魔法のことや転生したことなどは話せない
のでそこははぐらかしてだったが

「うん

それはもう元通りにすることは出来へんの？」

「……………うん」

「それやったら簡単や。もう元通りに出きやんのやったら、今度は
それ以上に幸せな方に真哉くん導いてあげればいいんとちゃうの？
今回間違つて傷つけてしまったんやったら、それ以上に幸せやつた
つて思えるようにしてあげれば良いと私は思うよ？」

俺はずっと思っていた俺はこの世界から消えなければ、ならないん
じゃないのかつて。でも俺が消えてもこの世界はずっと続いていく。
これからもイレギュラーを抱えたまま。俺はどうすることも出来な
いって逃げてただけだ。

はやてのを聞いてて分かった俺がみんなをこんなことに巻き込んだ
なら、俺がみんなを原作を超えるくらい幸せにしてやるっ……………！！

「……………！！！」

ぼろぼろぼろぼろ

「えー!どうしたん真哉くん!?急に泣き出して、おなかでも痛いんか?」

そして、俺はよく分からないままはやてに抱きついた

「ふえ!?!?!?!」

ほ、ほんまにど、どうしたんや!?!」

「ごめんはやて。少しで良いからこの状態でいさせてくれないか?」

「……………うん、ええよ」

それから俺は子供みたいに(子供だけど)小一時間泣き続けた

恥ずかしいいいいいー——————！！！！

ああ、良く考えたら俺道路の上だったんだよな。忘れてたけど絶対周りの人たちにも見られていたよな！ああ、考えただけで恥ずかしい……………
なんかはやても顔赤くなってもじもじしてるし

「じゃ、じゃあなはやて」

「……………う、うん／＼／＼それじゃあな」

「それと……………」

「それと？」

「ありがとう！…！」

「へ？う、うん」

そう言っただけ俺ははやてと分かれて家へと帰った

「答えが見つかったみたいだね」

「ああ、俺はなのはやフェイトやはやてやバニングスやすずか……みんなをもっと幸せにしてみせる！！！！」

「それは間接的に彼女達と結婚するって言うてるのかい？一夫多妻は世間の目が厳しいだろうけど頑張れよ！」

そういうと、コイツは俺に親指をつき立ててきた

「そんなんじゃないよ！！」

「だったら某碧陽学園生徒会副会長みたいなこと言わないでくれよ紛らわしい」

「それ某の役割果たしてねーし。それに俺はアイツみたく俺は美少女ハーレムを作る！！なんて一言も言ってるつもりはねーよ！！」

「まあ、杉 健の話は置いて「そっちが言い始めたんだろっが！！」で、こっからが本題だ」

「……………??何かあったのか？」

「ああ、恐ろしく厄介なことが起こった」

「何だよ。もったいぶらずに早く言えよ」

「この世界に千年伯爵が来た」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「はあ？ソレツテドワイウコトデスカ？」

「そのまんまだ。他のノアは来てはいないし、この世界の人間はノアの遺伝子を受け継いでいないから大丈夫だがな」

それでも十分やばいよ！！こっちのエクソシスト俺だけだぞ！！それにイノセンスもまだ四つしか持ってないんだぞ！！ん？ちよつと待てよ……………」

「アクマは？」

「それも分からない。もしかしたらもう動いているのかもな」

だとしても……………

「俺は決めたんだ。みんなを絶対に幸せにするって、どれだけ不幸なことが起こってもそれに負けないやそれ以上の幸せを与えてやるって」

「(うう)どうしよう。僕の息子が某ハーレム王(自称)みたいになっちゃってるよ。ま、良いか)」

「じゃあ、こっちからは何か分かったりしたら念話するから
そっちも何か用があったら念話してきてね

ああ、後この世界では君の両親は事故で亡くなったってことにするから遺産は一生困らない分用意してあるから

「じゃあまたね」

そついうと、体が透けていき遂には完全に見えなくなった

「(やってやるさどんな奴が来ても俺がぶっ倒してやる!!……………多分、いやだつて千年伯爵だぜ。勝てるかどうかなんて……………まず負けるな

まあ、そつは言っても一度決めたことだしな)」

ちよつと自信を失くす俺でした

9話 戦う理由（後書き）

ちよつと生徒会ネタ使ってみました
それと、ちよつと3000字！！

10話 時空管理局(前書き)

今回クロノ君登場です

10話 時空管理局

俺は今お葬式会場にいる

まあ簡単に言くと、神がアイツこの世界から帰る際、俺の両親は事故で他界ということにしてしまったからである。

というか、こんなことしてる場合じゃない！！今はもう午後三時過ぎ、今日の事件までは、まだあと二時間もあるが、この調子だときりぎり間に合うか間に合わないかというところである。みんな暗そうにしているが、ほんとには死んでもいないし、むしろぴんぴんしている。

「まあ、間に合わないときは、途中で抜け出すか」

俺は逃げ出す算段を立てつつ、来る日と来る人に挨拶をしていると

……

「こんにちは真哉くん……」

目の前にはなのはの両親……土郎さんと桃子さんがきていた
そこでは、軽く挨拶をして、終わった

葬式がやっと終わり今は五時になるつかというところだ

「（これならぎりぎり間に合うか）」

「真哉くん!!」

そう、思って俺は葬式会場から抜け出そうとおもっていると、後ろから呼び止められた

振り向くと、予想通りというか、高町夫妻がいた

「ご両親のことは、残念だったね……………」

「い、いえ…俺ちょっとこれから行くところあるんで、先行きま」
ちよつと良いかな?」なんですか」

時間的にはかなりきつかったので、早く行きたいのだがまだ話があるようで、中々行かせてくれない。

「……………君が良ければいいんだけど……………」

「（なんなんだ?）」

「私達と一緒に住まないか?」

「へ?」

- - -
- - -
- - -
sideフェイト

私は今母さんに集めたジュエルシードを見せに来ています
アルフは大丈夫って言ったけど、やっぱり少し不安です

「母さんジュエルシードを届けにきました」

「そう」

「ここに置いておきますね」

「そう」

どうしたんだろう。まるでジュエルシードに興味が無いみたいなの
いつもみたいに怒りもしない

「そ、そうだお菓子も買ってきたから」

「ここに置いておくね」

「そう」

「フェイト!!大丈夫だったかい!？」

「うん。大丈夫だよアルフ」

「(でも、どうしたんだろう?今日の母さんどこがおかしかったよ
うな

気のせいかな?）」

「行こうアルフ」

- - -
- - -
Side伯爵
- - -

「いい子ですね 私の可愛い可愛いアクマちゃん
それにしても、彼女の届けてくれたジュエルシードでしたか?
中々面白いですね」

やはり彼女を生かしておいたのは正解だったみたいですネ」

しかしこの辺りにも、エクソシストがいるようですね
全く目障りナ

しかし、アクマもこちらに来たばかりで、あまりいませんし、今のところは放っておきましょうカ

しかし、この世界魔法とはまた面白いですね」

高らかに笑いながらも、他のノアの事を考え、また泣きそうになる伯爵だった

.....
.....
.....
.....

side 真哉

俺は悩んでいた。何に悩んでいるかといえば、もちろんさつき高町夫妻が持ちかけていた提案についてである

「（確かにそうすれば、色々と便利だが.....」

でも俺、恭也シスコと一緒に嫌だな〜アイツ事あることに勝負吹っかけてきそうだからな〜

それにA・sのこと考えたらなのはよりもはやと一緒にの方が良いしな）」

と、いうわけで

「今回は遠慮しておきます」

「そうか.....また気が変わったら、いつでも言いなさい」

「ありがとうございます」

そういうと、今度こそ俺は葬式会場を飛び出し、メーカーオブエデンを使いなのは達がいるであろう海辺の公園へと向かった

「ストップだ!!」

そんな声が聞こえてきた

「（あゝ間に合わなかったか）」

俺の前には、なのはとフェイトのデバイスを受け止めている
時空管理局執務官クロノ・ハラウンが立っていた

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ
詳しい事情を聞かせてもらおうか
その君も」

「はあ、面倒くせ〜」

そのとき上から魔力弾が降ってきた
ああ、アルフか

「逃げるよ!!! フェイト!!!」

逃げ際にジュエルシードの回収を試みようとするが、それをクロノ
が砲撃しようとする

「っち!!! 憑神!!!」

【了解やマスター】

俺は憑神を発動させ、クロノの体へ入り込み、魔力弾の軌道を曲げる
その際にフェイトはジュエルシードを回収し、逃げていった

「ふー良かった〜」

「あ、あの〜」

「おう、なのはお前も大丈夫か？」

「もしかして、真哉くん？」

「は？俺はいかにも天宮真哉だが
もしかしてって、どういふことだよ」

「マスター戻るの忘れてるで」

「……………!!」

「あ、そうだった」

俺は発動を解除し、元の体に戻った

クロノは何がなんだか分かっていない様子である

まあ、いきなり目の前にいた奴が消えたんだから、そうなると思うけど

『クロノ！さっきのはどういうこと！？』

「僕にも何がなんだか」

『まあ良いわ』

ちよつと話を聞きたいから、そっちの子達をアースラに案内してくれるかしら』

「了解です。すぐに戻ります」

その後俺達はアースラに行つて、なのはがユーノの正体を知つたりしたのだが、それは良いそれはいいさ！！なんで俺だけ管理局の魔導師に囲まれてんの！？

「君は何者だ？」

「いや、俺は健全な小学三年生ですが」

「とぼけるな！！君の体からオーバースランク以上のロスト・ロギア反応が多数検出されている

さっきのも君がやったことだろう」

ワオなんかすっかりばれてるし

ていうか、イノセンスってそんなに強力なの！？

最終的にイノセンスは全部没収されてしまった

もう、俺が適合させているせいか、暴走はしなかった

そして、俺達は今アースラ艦長であり、クロノの母親でもあるリンデイ・ハラオウンの元に来ている

んで、なのは達が事情を説明し終え、リンデイが今ロスト・ロギア

の説明もし終わった
そろそろ、俺も言わせてもらいますか

「……………まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう
今夜一晩ゆっくり考えて二人で話し合って、それから改めて決め
ましょう」

「じゃあ、帰るぞなのは
もう、ここに来る必要はない」

「君！！何を言ってるんだ
それに君にもまだ話を聞いていない」

「何か問題があるのか
俺からロスト・ロギアは回収してるし、どうせ俺に魔力が無いこ
とも調べ済みなんだろ
なのはにはもう関わるなって言ってるし、ここにいる必要性を感
じない

それとも何か
なのはには一日待ってもらわなきゃならない理由でもあるのか？」

「……………！…！」

「はつきり言えよ。優秀な魔導師が必要だから
時空管理局に入って、ジュエルシード事件に協力してくださいっ
て」

「真哉くん
それってどついでのこと！？」

「そのまんまだ

なのはとユーノの性格からして、まずジュエルシードの回収を諦めるとは思えない

それに時空管理局は一人でも優秀な魔導師が欲しい

だけど、子供を時空管理局が無理矢理入れたとなると、色々まずいだろう

けどもし、なのはが自分から入りたいたいって言ったなら、入りたいてって言ったから入れてやったという風にできるからな」

「思惑通りには行かないものね

では、改めてこちらからお願いします

ジュエルシード事件に協力してください」

その後なのは達は帰り、俺はどうせ家に帰っても、何も無いのでアースラの部屋を貸してもらったことになった

「で、君は何者だ

あのロスト・ロギアはなんだ？」

「俺は何者かは置いといて

あれはイノセンス。別名神の結晶

合計109個あり、イノセンスは適合者と呼ばれるものにしか扱えない

もし、適合者でもない人間が無理矢理適合させようとすると、咎落ちと呼ばれる存在になってしまう」

「その咎落ちというのは？」

「イノセンスと適合者でもない人間がシンクロしようとしたり、適合者がイノセンスの意志を裏切った場合に発生する。体がイノセンスに取り込まれて、強大なエネルギーを放出して破壊行為を繰り返して、24時間以内に命を消費し尽くされて死ぬ。」

「イノセンスの意味？イノセンスには意思があるの」

「ああ

もしイノセンスが思う敵に屈服したりすれば、さっき言ったように咎落ちになる」

「敵というのは？」

「それはまだ話せない」

「そうですか……………」

そして、その日は一旦解散となり、俺は与えられた部屋に行き特にすることもなかったのだ

寝ることにした

- - -
- - -
- - -
sideフェイト

私は母さんへの報告を済ませ、元のマンションへと戻ってきていました

「ねえ、フェイト

そういえば、あのイノセンスは渡したの？」

「あ……………」

忘れてた。まあ次にあった時にでも渡せば良いか

「次に会ったときにでも渡しておくよ」

「ふ〜ん」

この時はまだこれが運命を変えることをまだ私は知らなかった……………

10話 時空管理局（後書き）

ちよつと書き換えました

主人公設定（前書き）

今回は真哉の設定です

主人公設定

Name：天宮真哉

容姿：ディーグレのアレンと顔はそっくりで髪の毛は黒、呪いに掛かっているためペンタクルスも無い

イノセンス（10話終了時点）：ジャッジメントタイムレコーダーカーオブエデン断罪者、刻盤、楽園ノ彫刻、ラウ・

シーミン、憑神

シンクロー率は100、74、100、100、73（LEVEL1に憑ける程度）

クラウン・クラウン他にも神ノ道化が見つかつてはいるが、現在フェイトが所持中

その他：前世で事故で死に神の気分で転生（したと思っている）
実際は真哉は神の実の息子で、今まで育てられなかったので転生をきっかけに息子として育てることに（まだ息子と言ってはいない）
ちなみに、はやては真哉に密かに好意を抱いている模様

と、まあ簡単ですが、こんな感じです

イノセンスについては無印ではこのままになると思います

A・Sではまたいくつか出します。

主人公設定（後書き）

もうすぐやっとな無印終わりです

11話 違い

俺は現在神と念話で話している

実は念話といってもなのは達のは全く別物らしく盗聴の心配はない

それで俺は例の件について話している

「（なあ、お前って神なんだよな？）」

『ずっと前から言ってるだろ』

「（じゃあさ、伯爵どうにか出来ないわけ？）」

俺は一応確認ついでに聞いてみた

『それについては今から言う』

まあ結果的に言つと無理だ』

やっぱりな

『原作で言っていたように伯爵達の信じている神とエクソシストが信じている神は違う』

「（要するに管轄が違つってわけ？）」

『そういつごと』

「（じゃあさ俺に伯爵を一瞬で倒せるくらいの力の付加って出来る）」

「

『それも同じく不可能だ（イノセンスも元々こいつの中にあつた神の力を結晶化しただけだしな）
だから、お前は出来るだけ多くのイノセンスを集めて対抗するしかない』

「（了解。まあ予想はしてたしな
で、後一つ頼みたいことがあるんだが……………」

実のところ今日の本題はこれだった

『ん？なんだ？』

「（俺にアレンと同じ呪い掛けてくれないか？）」

そう。伯爵が来るなら間違いないくアクマが出てくるのは避けられない
それだったらみんなを守るためにも、アレンのように周囲のアクマを
探知する“眼”がどうしても必要だ

『まあ出来なくはないが、そうするとお前伯爵に会ったときアレン
と間違われるんじゃないのか？』

「（それくらい別に良いだろ？）」

『まあどうでも良いけど
気をつけるよ』

「（へ〜やけに優しいな）」

『ふん。じゃあ早速始めるぞ』

「ちょっと痛むが我慢しろ」

「（よし来い）」

そうすると、俺の左目に焼けるような痛みがはしった

「うっ…ぐっ眼が眼があああああああああ」

『大丈夫そうだな』

軽くジブリネタをやつみた。そして次の瞬間まるでさっきのが嘘のように痛みは消えていた

『一応鏡見とけよ』

そう言われたので、一応鏡を見ると鏡には

「ア、アレンだ」

『だから言っただろ！元々お前はアレンと同じ顔になるようにしたからな』

それから、アレンと同じように呪われて白髪になったんだ。同じになるのは当然だろ』

「（って言うか」

なんでアレンと一緒になんだ？）」

『気分』

「（はあ〜ま良いか。もう特に用無いし切るな）」

そうして俺は念話を切り、アースラの中の食堂に行くことにした

「（なんかめっちゃ見られてるな

やっぱりこの髪の毛か？いやそれ以外あり得ないな

そりゃあ白髪の小学生がいたら驚くよな）」

俺は周りからの視線を浴びながら、食堂に入ろうとしたとき

「……………君、その髪の毛どうしたんだい？」

振り向くと、そこには俺に昨日操られていたクロノが立っていた

「ああ、クロノか

これは起きたらこうなってた」

「そんなことあるわけ無いだろ！！」

それに一応僕は君より年上だぞ。敬語を使え、敬語を」

「は？年上？お前何歳？」

「14だが」

「……………なんか色々すいませんでした」

さすがに14でこの身長は同情するな

「哀れみの視線を向けるな！！もう敬語は使わなくていい！！」

「いえいえ、クロノさん（笑）」

「笑うな————！！！！！！」

「君は学校どうする気だい？」

「まあ今は一応忍びきってことだ……ってああああ……！」
すっかり忘れてたよ……！」

「い、いきなりどうしたんだい？」

「そういえば俺葬式の途中で抜け出したんだった」

確か今日は火葬する日じゃなかったっけ

「抜け出したって何をしているんだ君は……！」

「ま、まあまあもう間に合わないし」

その後なのはが来て、髪の色にかなり驚いていて、その後にお葬式のことを聞かれてさぼったって言ったなら O H A N A S I された
さすがは魔王……」

そしてなのはがアースラに来て十日目
その間俺は……

「俺のイノセンスを返せ――――！！！」

「さっさと返しやがれ――！！！」

「返せって言うてんだろぅが――！！！」

「お願いですから返してください……」

毎日毎日必死にイノセンスを返せと迫るも一向に返してくれる気はないらしい

そして、遂にこの日がやってきてしまった

「（どうしよう。結局取り返せずこの日が来てしまった。イノセンスが無きゃ俺何にも出来ないし）」

目の前に広がるモニターには今フェイトが六つのジュエルシードを強制発動させているのが見える

リンディやクロノは「無謀だ」とか「無茶だ」とか言っている。それでなのははさっきからすぐく行きたそうにしている。どうせ俺は行けないだったら……

「なのは行ってこい」

「え！でも……」

「リンディヤクロノとか他の管理局員は俺が抑えておく
ユーノ！！なのはを転送してやれ」

「だけど私がフェイトちゃんと友達になりたいのは……………」

「確かに俺には関係ない

でもな、俺は決めたんだ。俺が変えてしまったせいで誰かが傷つくのはもう見たくないから」

「??？」

「さあ行け。ユーノ転送頼んだ」

「うん」

なのはは転送装置へと駆けて行く
そこで管理局員達は気づいたみたいで止めようと近寄ってくるが、俺が前に立ちふさがる

「ごめんなさい。高町なのは指示を無視して勝手な行動を取ります」

「あの子の結界内へ転送！」

「ユーノお前も早く行け！！」

「うん！！」

そして、ユーノも転送を終え、俺は管理局員に取り押さえられた
すると、リンディヤが歩み寄ってきて

「何故、こんなことを？」

「変えてしまった物はもう元には戻らない。だからそれを嘆くのではなく出来るだけいい方向へと持っていかうと思っただけさ」

「??？」

リンディは首を傾げた

「あなた等には分からないだろうさ」

さあ行けなのは友達を助けに」

その後一応拘束は解かれたが後でなのは、ユーノ共々お説教を言い渡された
で、なのは達は今ジュエルシードを封印し終え、二人で向き合っている

「（もうすぐか）」

そのときアースラに警戒音が鳴り響いた

「（来た!）」

そして、フェイトのところに紫の雷が落ちる

はずだった

「っな!!」

フェイトに落ちると思っていた雷はフェイトとなのはの間ちようど
ジュエルシードの所、それとアースラに落ちる
そして、ジュエルシードは何か引かれるようにその場から消えた
それに……………

「（それになんだあの雷の色は!!プレシアの魔力光は紫じゃなかったのか!?あれは確かに黒だった。まさかこれも俺の影響なのか）」

「

そのときはまだ俺の影響でプレシアの魔力光が変わったと思っていた

現在俺はアースラ内でリンディのお説教を聴いている

俺達は一応不問となり、そして、話題はある魔導師の話に変わる
そして、途中までは原作どおり解説だったが

「……………しかし、さっきの魔力波動が一致しないんです。というよ
り登録データにさっきの魔力波動を持つ人がいないんです」

「なに!?!」

「どうしたの?」

「いや、なんでも(どういうことだ!?!あれはプレシアの物ではな
かった!?!じゃあ一体誰の……………くそっ!?!分からねえ!?!)」

その後の話は全く頭に入っており、俺はひたすらそのことについて
考えていた

殴りかかろうとはとんだ駄犬ですねエ」

「……………！！アンタは一体……………」

すると、頭上から大量の黒い雷が押し寄せてきた

「グハツ……………フェイトは…アンタの娘はアンタに笑って欲しくて、アンタに笑って欲しくて、あんなに……………」

『そんなの私は知りませんねえ』

邪魔です消えちやいなさい」

私は咄嗟に転移魔法で逃げようとする

「(どこでも良い転移しなきゃ……………ごめんフェイト少しだけ待ってて)」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

side伯爵

「逃げましたカ

まあ、あのような駄犬放っておいても大丈夫でしょうウ

それよりも少しジュエルシードが欲しいところですねエ

もう少しあの子に働いてもらうとしますカ」

ふっ面白くなりそうですネ

…唯一つの気がかりはエクソシスト共ですが、まあ大丈夫でしょうウ

- - -
- - -
- - -
side 真哉

なのは達は今一旦家に帰っているが、俺は家に帰っても誰もいないので久々に図書館へ来ていた

「そういえば、この髪の毛どうやって説明しようか」

アースラの人たちにも呪いとは言えないので、徹底的に起きたらこうなっただで押し通した

「あれ？真哉…くん？」

声に反応して、振り向くと予想通りはやてがいた

「お、おうはやて久しぶり」

「うん久しぶり

…ってそんなことよりその髪の毛と眼の辺りの傷どうしたんや！
「？」

「い、いや起きたらこうなってた」

「嘘だ！！」

これでいけると思ってた。俺はやはりバカだな〜と思った
それからの幾度とない質問も全て同じようにはぐらかしてどうにか

凌ぎきった

で、ちゃんと説明しなかったお詫びにというかはやての家で夕御飯をこ馳走になることになった

「相変わらずはやては料理が上手いな」

「そ、そんなことあらへんよ」／＼／

若干はやての顔が赤いのは気のせいかな？

『君も罪な男やねえ』

「（……………！！こんなときに話しかけてくるなで、俺の何が罪な男なんだ？）」

『ふ〜これは重症やな』

「（だから何が!?!）」

『じゃあバイバイ』

「（おい！！）」

なんなんだアイツ突然話しかけてきやがって、何のつもりだ

「…哉…ん」

大体俺が何したって言うんだ。唯飯食ってるだけじゃないか
そのどこが罪なんだ？

「真哉くん！！」

「お、おおなんだ？」

「もう人の話聞いてんの？」

「ごめん。で、何だっけ？」

「いや、真哉くんの家族ってどんな人なんかなくて」

「ああ、二人とも一週間くらい前に事故で死んじゃった」

あれ？まずかったかな

「……………！！ご、ごめん私そんなこと知らなくて、だから……………」

しまったああああああああアアああアアああ

なんか気まずい雰囲気になっちゃったああアアアアアアアアああ

「い、いや別に気にしてないから、だからそんなに落ち込まなくても良いって」

「ごめんな。ん？でもそれやったら今どうしてるん？」

「両親は親族とかももうみんな亡くなっていているらしくて、まあ遺産はあるからそれで今は一人暮らししてるんだ」

そう、子供の頃優しくしてくれたあの叔母さんも一年位前に病気で亡くなった。あの時はさすがに泣きそうになった

すると、はやての眼が光った気がした

「なあー!!」

すごい勢いではやての顔が近づいてきた

「な、何？」

「一緒に住まへんか？」

「へ？」

「私も子供の頃に両親失くしてもうて、今は一人暮らしやから、どうかな〜と思って」

そういったはやての顔は酷く寂しそうに見えて、何故か守ってやりたいと思えてきてしまって、思わず……

「……………良いよ」

「……………へ?」

「はやてと一緒に住んでも良いよ」

「ほんまか!?!」

「うん」

「じゃあ、改めてこれからよろしくな!?!」

「こちらこそよろしく!?!」

こうして、俺ははやての家に住むことになってたが、俺の服などは全て家があるので後日はやての家に送ってもらうことにして、他の必要ないものや、家は全て売り払うことになった

「~~~~ 今日のお飯はいつもよりおいしいわ」

「ふふ、そうだね」

そうして、俺達は一旦その日は分かれることになり、引越しなどの手続きははやての叔父さんというかグラムだが、に任せることになり、さすがにこの髪の毛で学校に行くとえらいことになりそうなので、俺はまたアースラに戻ることにした

.....
.....
.....

sideはやて

真哉くんは一旦家に帰っていった

「ふ」

さつきは真哉くんがあんなこと言うから思わず言ってしまったけど

「今度から一緒に住むんか／＼／＼」

あかんあかん何意識してんねん。これからは一緒に住むんやからこれぐらいで動揺してたら、あかんー！」

「そつや！はよグレアム叔父さんに言っとかな」

それからグレアム叔父さんに引越しのことを話すと、快く引き受けてくれた

明日には引越し業者の人が来てくれるらしい

「楽しみやな」／＼／＼

そついつてまた顔を赤くするはやてであった

- - - - -
- - - - -
- - - - -
side はやて

「（今日は確かアルフが逃げてくるんだつたな）」

俺はそんなことを思いながら、アースラで朝食を取っていた

そして、今日もリンディにイノセンスを返してもらおうように言っ
て玉砕した後

アースラの中でトレーニングしていると

「君も良く飽きないね」

「ん？なんだクロノか。で、何がだ？」

「君の言うイノセンスのことだよ」

当たり前じゃないか

そうじゃなきゃ……

「そうじゃなきゃ俺は何も守れないから。俺にはリンカーコアが無いから魔法は使えない。だからこそイノセンスが必要なんだ。もう自分のせいで傷つく人は見たくないから……」

「………すまない」

「良いよ。それがお前達の仕事なんだろう？」

「………ああ」

「だったら俺は俺の出来ることをするさ」

俺はしばらくそこで運動した後アルフが見つかったという報告を聞き、俺は急いでブリッジに向かった

「フェイトの使い魔が見つかったって本当か？」

「ああ、かなり重症だが、生きてはいるらしい」

アースラの画面には、檻に入って体中に包帯を巻かれている犬の姿が映し出されていた

「……………？（原作ではあんなに傷って酷くは無かったような……………気のせいかな？）」「

「見たとおり、かなりの重症だからアースラに運んで手当てをすることになった」

「なんだって!?!」

「どうかしたのか？」

「い、いやなんでもない（どういうことだ。原作が変わったといってもまだそこまで変わってははいないはず何故アルフがアースラで治療を受けなきゃならないくらい重症なんだ!?!）」「

そのとき俺は失念していたこの世界のもう一ついる異物イレギュラーの存在を…

……………

12話 引越し(後書き)

あと3話くらいで無印終われると思います。

13話 突入（前書き）

最近なんか不調です……

13話 突入

今現在アルフはアースラで治療中

そして、その合間に原作どおりフェイトのジュエルシード集めの原因についてアルフが話し終えたところだ

唯一つ……………

「……………唯一つ気がかりなのはこの前の時に襲ってきた謎の魔力光」

そうそれだ。あれは一体何なんだ？

そして、その後アルフの話聞いたなのはが決意を新たにして、明日の決戦に向け意気込んでいると

P r r r P r r r P r r r

「ん？携帯？」

「すまん俺のだ

ハイもしもし」

一体誰からだ？

『もしもし、真哉くん』

「???はやてか？」

『そつちや』

「何かあったのか？」

『いや、荷物が届いたんやけど、一人やったらきついから手伝って欲しくてな』

「荷物？何の？」

『引越しに決まってるやないか!!』

「おい!!早すぎるだろ!!その話したの昨日だぞ!!」

いくらなんでも早すぎる

昨日引越しする話して次の日引越してどんだけ早いんだよ!!
て言うか待てよ…引越し業者俺の家はどうやって入ったんだ!?

『いや、昨日グレアム叔父さん電話したら明日にでも届くようにするからって言うから』

アイツか—————!!!!

て言うかグレアム張り切りすぎだろ!!

まあ良いか。今日はどうせも何も無いし、さっさと片付けるか

「分かった。今から行くよ」

『うん。じゃあ後でな』

「どっかしたのかい？」

「ああ、クロノ悪い。海鳴市まで転送してくれないか？」

「別に良いが、何かあったのか？」

「ああ、少しな」

そうして、俺は転送してもらった後急いではやて宅へと向かった

「お邪魔します」

「た・だ・い・まやろ

今日からここがお家になるんやから」

「それもそうだな。じゃあただいま」

「おかえり！」

そういつやり取りをした後俺達は早速荷物の整理取り掛かった

結果的に言つとそこまで時間は掛からなかった
まあ俺の荷物しかないし、それにベッドやたんす等重いものは既に
業者の人が、持っていてくれるからである

「ふゝ結構早く終わったなゝ」

そついうと、はやてがお茶を運んできてくれた

「そつやねゝ。はいお茶」

「ありがとう」

「で、今日はどうするん？まだ家とかは売ってはいないらしいけど」

「うゝん。折角引越したんだし、今日からここに住むよ」

別にあの家に未練なんて無いし

あゝ〜だけどそれだとアースラには行きにくくなるな今のはやては
魔法とか知らないわけだし

早いとこイノセンス返してもらわないとな

「（まあ誰かが勝手に持ち出そうとしても、暴走するようになってあるからいいけど）」

そんなこと考えていると、いきなり……………

『そのことだけど、今はもう原作と同じようになってるから別に触っても暴走しないよ。』

もちろん無理矢理適合させようとすると、暴走するけどね』

「何イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！
」！

「い、いきなりどうしたん!？」

「す、すまん。別になんでもない（一体どういうことだ!?!）」

『いや……………その方が君もイノセンス見つけやすいだろうし。これで怪奇現象が起きてるところを探せばいいわけだし』

「（そのせいで、折角手に入れた元帥のイノセンス取られるかもしれないんだぞ!?!）」

『すいません……………（実の子供に怒鳴られるって悲しいな……………）」

「（はあ……………まあ良い分かった。じゃあな）」

また面倒事が増えたな。でもまずいな管理局で保管されることになったら、何の力も無い俺じゃあ取り返すのはまず不可能か……………ま、良いか何とかなるだろう

その後は特に何も無く、御飯食べてお風呂入って、寝てしまった

翌日

ひたすらアースラに向けて本気で走ってます
理由？まあ簡単に言うと………寝坊しました
だって昨日引越しの手伝いしてたんだよ！！まあ少なかったけど。
でもここまで遅れた一番の原因ははやくに「学校サボって何処行く
ん？」って感じで説教されたことです。そういうわけで、一応ラン
ドセル背負ってきてます。

「はあ…はあ…やっと…着いた」

おそらくもうなのはとフェイトの決闘は終わってる時間でしょう

「お〜い聞こえてるかリンディ？転送してくれ〜」

「……………分かったわ」

「お邪魔し」……………お願い!!もうやめて!!」「あつれ」?

俺が転送された時間いたのはそんな言葉だった

あつれ?もしかして今フェイトのこと言われてました?

まずい。そんなことを考えていると、フェイトが倒れちまった

『ヨホホホホホホ。フェイトちゃんでしたか?苦しみに歪む顔が想像出来ませぬ』

見れないのが惜しいです』

は?誰コイツ。なんか聞いたことあるような声だけど、まあ良いコイツハ潰ス

「二十一個のジュエルシード全て発動しました!!」

「はあ？二十一個！？お前ら全部取られたの！？
それよりさっきの声誰だ！！」

「分からないわ」

「まあ良い

そんなことよりイノセ……………（あれ？イノセンス？それにさっき
の声）

あ…あ…ああああああああアアアああああああああ
ああ

「い、いきなりどっしたの！？」

マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ
マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ
マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ
マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ
マズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイマズイ

「早く！！早く。なのは達を呼び戻せ！！」

「中の暴走してるジュエルシードはどっするのよ…！」

「つく！！だったら良い

イノセンスを早く返せ！！俺も行く！！」

「それは出来ないわ」

「なんで!?!」

「ロスト・ロギアは管理局が管理するって決まりよ」

俺は思わずリンディの胸倉を掴む

「そんな決まり関係ない!!お前クロノが死んでもいいのか!!」

さすがのリンディも少し動揺したが、すぐに持ち直して

「あなたにイノセンスを渡さないのといノセンスが何の関係がある
って言うの!?!」

「この……(このままじゃアイツにみんなが殺される!!今からイ
ノセンスを探すのは………)

あつた!?!」

俺はアースラ内を探し回り、やっと目的の人物を探しあてた

「おい！！フェイト！！」

目の前には生気が感じられない死んだような眼をしているフェイトが寝ている

「さっさと起きろ！！」

ああ、まどろっこしい！！イノセンス取りに来ただけだったけど、なんか見るとイライラするな

「だって私は……………」

「はあ？お前もしかして母さんに捨てられたから生きてる意味ありませんとか言っくんじゃねえだろうな！？」

「……………」

「それはお前が逃げてるだけだ！！母親のせいにして全部から逃げるな！！お前にはもう友達がいるだろうが！！」

「友…達？」

「そうだ。俺やなのは、ユーノ、アルフそれにクロノ……………はまあアイツは別にどっちでも良いや

もうお前は前みたいに一人じゃあないだろ！！お前はまだ始まってもない

だから…片、つけに行こうぜ」

その瞬間フェイトの眼に光が戻った気がした

「ふふっ…クロノだけ仲間はずれてひどいね」

「当たり前だあいつら管理局は俺のイノセンス取ったままだからな」

「じゃあ行こうか」

そう言っつてフェイトは起き上がって、置いてあったデバイス…バルディッシュをセットアップする

「これからの自分をはじめのために…過去の自分を終わらせよう
手伝ってくれる？真哉？もちろんバルディッシュも」

「ああ、もちろん」

『Yes・sir』

そして、フェイトは自分の魔力をこめると、傷ついていたバルディッシュが元に戻る

まあ言っちゃあ悪いけど、本当の所目的は別なんだけどね

「それと、意気込んでるとこ大変申し訳ないんですけど…前持って行っただイノセンス貸してくんない？」

「良いよ」

「ありがとう！！（出来ればフェイトはここに残って欲しかったけ

どしようがない。じゃあ今からマンタのとこ行けぞ

千年伯爵！……！！

「いきなり叫んでどうしたの？」

「……なんでもありません」

14話 邂逅（前書き）

今回やっと伯爵とご対面です

14話 邂逅

sideユーノ

「なのはー!!」

僕のバインドが壊れて、抑えていた人形達がなのはに向かって行ってしまった

『Thunder Rage』

「クロスグレイヴ十字架ノ墓!!」

人形は十字架が刻まれ、爆散した

『Get Set』

「サンダーレイジ!!」

「クラウン・ベルト道化ノ帯!!」

中にいた人形兵達はその攻撃で次々と爆散していく
片方はフェイトさん、もう片方は顔の上半分が仮面に隠れて誰だか分からない

「フェイト!?それに……………アンタ誰?」

「っな!!俺だ真哉だよ!!」

え…でもイノセンス取られてたんじゃ

「アンタイノセンス取られてたんじゃないのかい!？」

「フェイトが前に回収したのを使ってる」

ああ、そういえば確かそんなことがあったような

ドカンッ

- - -
- - -
- - -
sideなのは

一際大きな人形兵が出てきました。その背中には大きな砲台が付いているの
でも……

「大型だ。バリアが強い」

「それにあの背中……」

「でも、二人なら……」

そう、フェイトちゃんと二人なら

「うん…うんうん!」

「バルディッシュ!」

『Get Set』

私も!!

「こつちもだよ。レイジングハート!」

「サンダー……バスター!!」

「デイバイーン……バスター!!」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

side 真哉

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!フェイト!!フェイト!!」

「心配掛けてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるから本当の私を」

はあ。何これ?

さつきから俺の空気感半端ないんですけど!!

まあ二人が別に大丈夫だから良いんだけど

でも、さすがに助けに来たのに、ここまで邪険な扱いだとさすがにへこむな

ってそんなことしてる場合じゃねえ!!なのは達が伯爵やアクマと

「おや？誰か来たみたいですね」

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ
お前は一体何者だ!!」

すると、少し遅れて…………

「クロノ今すぐそいつから離れる!!」

「まさかここまで来て邪魔をするとは。

ねえ…………アレン!!ウォーカー!!」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

Side 真哉

「まさかここまで来て邪魔をするとは。

ねえアレン!!ウォーカー!!」

確かにアレンとそっくりじゃあ間違えるよな

「残念だが。伯爵

俺はアレンじゃない

俺は天宮真哉だ」

「??確かに雰囲気や口調がいつもと違いますネ」

ですが、では君のその呪われた左目は何なんですか?」

「呪われたってどういこと!?!」

「企業秘密だ」

「くくつ まあ良いでしょう。ですが、その左目ならこの女の魂が良く見えるでしょう」

「ねえ真哉くん」

「ん？プレシア？」

「ま、まさか……………」

そうかそういうことだったのか。プレシアが一度も魔法を使ってこなかったのも、モニターのプレシアの違和感もそれで説明が着くだったら、魂は……………そうかアリシア！！なんで気づかなかったんだ！！

「貴様あ……………」

「真哉……………母さんがどうかしたの？」

フェイトが不安そうに聞いてくる

「どういうことだ！？君はアイツを知っているのか！？」

「ああ、後で全部話す……………（でもこうして見てみると、アレンの気持ちがおか分かる気がするな）」

「お話は終わりましたか？」

「ああ」

それと……………ごめんなフェイト」

「え……………」

俺はゆっくり左手に右手を添え、引き抜く

「臨界点突破

イノセンス発動!!

哀れなアクマに魂の救済を!!」

「つな!!左腕が……………」

「刀になった!?!」

「来ましたネ

行きなさい。私の可愛いアクマちゃん
ですが、アレンの真似事とはネ」

「今の俺は道化なもんで、ね!」

俺は出てきたアクマ達を切り伏せていく

そして、最奥にいたプレシア（アリシア）のアクマに歩み寄った

「本当にごめんなフェイト」

「真哉一体何を……………」

俺は軽くフェイトを一瞥すると、すぐプレシアに向き直る

「（皮を着たままか。でも……………」

俺は持っている退魔の剣を深くプレシアの腹に突き刺して…………

「安らかに眠れ。ミス・アリシア」

「ありがとう」

そう聞こえた気がして。そして、プレシアの体は消えてなくなってしまう

「母……………さん？」

うわああああああああああああああああ

フェイトの叫び声が聞こえると同時に、フェイトがすごい速さで迫

つてきて俺の胸倉を掴んだ

「どうして…どうして殺したの！？まだ言いたいことがあったのに……」

「なら生き返らせてあげましょつか力？」

「え………」

「私の元に来れば、彼女をプレシア・テストロッサを生き返らせてあげますヨ」

「……る…な」

「え？」

「ふざけるな！！伯爵！！」

俺は思わず、退魔の剣で切りかかるが、伯爵も退魔の剣と色が真逆の剣で受け止める

「てめえふざけるのもいい加減にしろよ
どこまでお前は人の命を弄べば気が済むんだ！！」

「いつもいつも下らない道化が、我輩の邪魔をするんじゃないやありません!!」

「グハッ」

俺は押し返されて、壁に体を打ち付ける

「で、どうします？フェイトちゃん？今なら貴女のお母さんを「もっとうい」ン？」

「まだ殺した真哉は許せないけど、死んでしまった人やもの、絶対に帰ってはこない

どれだけ頑張っても……」

「うん。ま、良いでしょう今日のところは帰りましょウ」

「待て!!」

そして、気づいたときには伯爵の姿はもう何処にもいなかった

「クソッ!!」

逃げられたか。はぁ帰ったら今度はみんなに説明か

その後、なのはは無事全てを封印し終えた。フェイトからは終始睨まれたままだった。
そして俺はまたリンディの尋問を受けることになった

15話 選択(前書き)

やっと無印終了です

何か長かったような、短かったようになって感じます

15話 選択

「話して頂けますね？」

「分かってるよ……はあ」

今現在俺はリンディの部屋で、なのは、ユーノ、クロノ、フェイト、アルフに囲まれて座っている
内一人は俺のことをさつきから睨んできているが……

「で、何から話せば良い？」

「では、あの丸い兵器とそれを操っているように思われる男について、確か…伯爵でしたか？」

「分かった。まずあの兵器の名称はAKUMA^{アクマ}」

「悪魔ってあの悪魔？」

「そっちの悪魔じゃない

ただそう呼ばれているだけだ

そして、人類を標的^{ターゲット}に作られた悪性兵器。それがAKUMA
まあ好き好んで狙ってるわけじゃあないがな」

「好き好んでって、あれは単なる兵器なんでしょう？」

「違う。あれは人間を殺して進化するようにプログラムされた生き
た兵器」

「生きたってどういこと？」

「それはプレシアの件にも関係して来るんだが……ていうか、そろそろ睨むの止めてくれないか？フェイト」

「……………」

「はあ……アクマって言うのは中に人間の魂を内臓してるんだ

その魂は<製造者>によって支配される。そしてその魂は罪に苦悩し、己の姿に絶望し、現実に憎悪する。そんな魂のフラストレーションがアクマを進化させる。アクマに内臓された魂に自由はない。永遠に拘束され伯爵の兵器おもちゃになる

そういう風に、アクマって言うのは機械と悲劇を元に作られるんだよ」

それを話したとき急にフェイトが立ち上がった

「それじゃああの時既に母さんは死んでいたって言うの!？」

「落ち着いて。フェイトさん」

「ああ。そうだ」

「だったら魂は……………」

「アリシア・テストロッサの物だった」

「そんな……………」

「嘘!!だって母さんはあの時人間の体だったじゃない!!」

「ああ。確かにその可能性もある」

「だったら……………」

「眼だよ」

「眼？」

「そういえばあの男、眼がなんとかって言ってたわね。どういうこと？」

「俺の左目はアクマの中に内包されている魂を見ることが出来る」

「つな！！で、でも、そんなの私たちには見えないから、分からないじゃない！！」

「はあ。あんまりしたくはなかったけど。しょうがない
イノセンス発動」

ちなみに、今回もイノセンスは寄生型ではなく装備型（十字架のペ
ンダント）の形になっている
言い忘れていたが、憑神は指輪型になっている

それは置いといて、俺は退魔の剣を抜くとそのままフェイトを突き
刺した

「つな！！君は何をしてるんだ！！」

「大丈夫だよ。ほれ見てみる」

「大丈夫なわけ……！？大丈夫なのか？」

「う、うん」

「どういうことですか？」

「はあ。これはな退魔の剣なんだよ。だからこれは伯爵とかアクマにしか効かない

人間には切ったところで、なんの影響もない。もしプレシアが人間ならこれに刺されて消えるなんてことは有り得ないんだよ」

「そん…な」

「これでもう良いか？」

「いえ。まだその伯爵という人物について聞いていません」

「ああ。そうだったな

ちゃんとした名前は千年伯爵

伯爵っていうのは、さっき言ったアクマの〈製造者〉の名前だ
奴は今人類終焉のシナリオを描いている」

「は？人類終焉？」

「そう。そして、それを止めるのがアクマ専門の聖職者クラーヂマンで対アクマ武器…イノセンスと適合した俺、エクソシストの役目だ」

ふっやっと終わった

でも最終的にフェイトはまだ納得してないみたいだっただな
で、だ……………

「どっという心境の変化だ？」

俺の目の前には俺が今まで集めてきたイノセンスが置かれていた

「いえ、ただこれはあなたしか使えないようだし、保管して
前のように暴走しても困りますしね」

「暴走ってお前らあの時見てたのか？」

「ええ」

「はあ、もう良い」

俺はイノセンスを受け取ると、もう疲れたので家に帰ることにした

「言い訳はあるか？」

「いえ。ありません……………」

俺は帰って即行正座させられている
誰に？もちろん子だぬk……………」

バシッ

「痛っ！何すんだよ！」

「今失礼なこと考えたやろ」

ワオ。読心術使えるんですか？

「はあ〜学校サボって何処行ってたんや？それに指輪とかペンダン

トとかこんなちゃらちゃらした物小学生にはまだ早いわ!」

【マスター助けて〜】

すまん。無理だ

ちなみにジャツジメントはさすがに玄関に隠して入ったのでセーフ
だけどさおかしくない? だってさ………

「まあこのお猿さんに免じて許してあげるわ」

そう。なんではやてに懐いてるんだ! ? お前のご主人は俺だろ! !

「さてこの子なんて名前にしよう?」

「ああ、それは決まってるぜ」

「何や?」

「ラウ・シーミンだ」

「らう・しーみん? 何か変わった名前やな

まあ良いわ。じゃあ今日からこの子もうち等の家族や! !」

「じゃあ早速御飯にしようぜ」

「何言うとんの? 学校サボった罰として、今日は夕御飯抜きや!」

「何ですと! !?」

それから俺は空腹に苦しみながら、目の前でおいしそうに御飯を食

べるはやて(+ラウ・シーミン)を恨めしそうに見ていた
こうして、夜は更けていった

ていうか、A・Sで俺どつちに付けばいいの？

こうして俺はまた一つ不安要素を抱えながら、眠っていった

ぐ

「(あゝ腹減ったな)」

「真哉くん、大丈夫？」

「返事がない。唯の屍のようだ」

「もうそんなこと言わずにちゃんと授業受けようなの!」

はやての制裁はなんと朝まで続いており、なんと夕飯に続き、朝飯まで食べさせてもらえなかったのだ

その上今日登校したら、髪の毛と眼の傷のことをさんざん質問されたので、前日伯爵と対峙していた俺の体力は既に限界を超えており、あの表現は、あながち間違っていないかったりする

「(くそっ! もうアイツの味方に就かないでやろうかな?)」

「久々に来たと思ったら、本当にどうしたの? アンタ?」

「バニングスか? オラに元気を分けてくれ」

「……………これはかなり重症ね」

「実は……………」

真哉説明中

……………ということなんだ」

「アンタが悪い」

後ろのなのはは事情を知っているため苦笑いである

「いや……………サボったのは悪かったけど

さすがに二食抜かれると……………」

「しょ、しょうがないわね。私のお昼ちょっと分けてあげる」

「マジか!？」

「ちょっとだけだからね!!」 / / / /

ああ〜なんかバニングスが女神に見えてきた

その後俺は自分の分+バニングスに貰った分の昼食を食べ何とかぎりぎり体力を回復し、学校を乗り切った。

「ただいま」

あれ?返事がないどうしたんだ?

リビングに行くと、ラウ・シーミンと寝てしまっているはやてそし

て、いつも俺が座ってる席には料理が置かれていた

「ムニヤムニヤ真…哉……く…ん」

「ふっ（すまないなのは。俺はやっぱりこちら側につくことになりそうだ）」

俺は置かれていた料理を完食した後、はやてが起きるまで、ずっとその寝顔を眺めながら、この後起こる事件のことを考え改めて決心した。

この穏やかな日々を必ず守り抜いて見せると………

15話 選択(後書き)

A・Sでははやて側に就きます

16話 ヴォルケンリッター(前書き)

A・Sにやっと入りました

16話 ヴォルケンリッター

やっと来ました六月三日！

その間にもフェイトの初公判とか色々あったが、それは無視！

え？フェイト？あれからずっと睨まれ続けたままでしたよ！！分かれる時もずっと！！やっぱり皮着けたまま切ったのは拙かったかな？

ま、まあそれは置いて、ということ、今日（実際は明日の午前0時だが）は原作通りだと、ヴォルケンスが出てくる回だ

「それより明日ははやての誕生日だな」

「うん！！今年の誕生日はいつもと違って、真哉くんがいるから寂しくないわ〜後もちろんラウ・シーミンも」

「そうだな」

「じゃあそろそろ寝るか」

「その前に本読んでくれやん？」

「別にいいけど」

「ありがとうー！」

そして、俺ははやての枕元で本を読んでいたわけだが、12時が近づいてくるにつれて何だか緊張してきた

「どうしたんや真哉くん？何か変やで？」

「え？い、いや何でもない

それより、もう12時だし終わりにしよう」

「えー？ほんまや！ごめんな。こんな夜遅くまで付き合わせてもうて」

「別に良いよ。俺たちは家族だろ？」

「うん！ーじゃあお休み」

そのときちょうど12時…六月四日午前0時になった

「お休み〜それと誕生日おめで……」

すると、急に辺りが地震のように揺れだして、本棚に立てかけてあった本の一冊が不気味な光を放ちだした

「は、はやて！！大丈夫か！？」

「な、何や！？」

「分からない！」

すると、その本を縛っていた鎖がちぎれた

『封印を解除します』

そして、ゆっくりとはやての所に下りてきて……

『起動』

そして、本が強い光を放ち、それが収まると……
四人の男女が膝をついて座っていた

「（ワオ。これがヴォルケンスか）」

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にごぞいます」

「夜天の主に集いし者」

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

横のはやて……うん！気絶してるね！

「あゝその四人。ちょっと悪いんだけど……」

「貴様！！何者だ！？」

「いや。それは置いといて、はやてに用があるみたいだけど、肝心のはやて気絶しちゃってるんだよね」

「「「え、！？」「」」 (ザフィーラ以外)

「しょうがない。病院に連れて行くか
お前らについて来るなよ」

「さつきから貴様は何者だ！？」

「いや、何者って言われても。唯の小学生としか「シグナム彼の体から強い力を感じるんだけど」(え、イノセンスばれてる！？)」

「貴様…まさか主を……………」

「分かった分かった話すから、俺に刀を突きつけないで！！」

「だったら早く「まずはやてを病院に連れて行く」だったら我らも
「駄目だ」何故だ！？」

いや、当たり前だろ

「そんな服で行ったら確実に怪しまれるだろうが！！」

その後何度説明しても、ついて行くの一点張りなので、結局連れて行くことになった

んで……………

「お前ら飛べるよな？」

「当たり前だ！ベルカの騎士を嘗めるな！」

「はあ。じゃあ行くぞ

イノセンス発動」

俺はメーカーオブエデンで背中から光の翼が生える

「！？やはり貴様も魔導師か！まさか管理局の……………」

「違う違う。俺は別に管理局に入ってないし、そもそも魔導師でもない」

「じゃあ貴様は……………」

「後で話すつて。じゃあ行くぞ」

「誰なの？あの人たち」

俺ははやてを運んできた後、石田先生に質問を受けていた
もちろん、ヴォルケンスについてである
ちなみに、先生とは既に何回か面識はあったりする

「え」。あ、ああ（確か本編は遠くから来たはやての親戚だったよな）彼らは…そのはやての親戚の人たちで、ちよつと遠くからはやての誕生日のお祝いに来てくれたんですよ。な、なあ（お願いだから話を合わせてくれ）

「いえ私たちは「そうなんですよ」シャルル!？」

シグナムが言い出しそうだったが、シャルルが何とかフォローしてくれたみたいだ

「う、うん」

「お、眼が覚めたか？はやて？」

「あれ？私なんで……ああ!!」

「はやて…ゴニョゴニョ」

「!？わ、分かった

「ごめん、折角誕生日お祝いに来てくれたのに、気絶してもうて」

「いえ」

まだ、石田先生はあまり納得していなさそうだが、これではれる事はないだろう…多分

そして、はやては異状はなかったので、家に帰った
そして、現在ヴォルケンスが闇の書について説明を終えたところだ

「そっか、これが闇の書って物なんやね？」

「はい」

「物心ついたときには棚にあったよ
綺麗な本やから大事にはしてたんやけど」

「覚醒のときと眠っているときに闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「うーん私魔法使いとちゃうから漠然とやったけどあ！あつた

でも分かったことはある。闇の書の主として、守護騎士の衣食住きっちり面倒見んとあかんというこっちゃ

幸い住むところあるし、料理も得意やみんなのお洋服買ってくるからサイズ測らせてな。」

「で、お前は何者だ？」

「どづいづいとや？真哉くん
ひょっとして、真哉くんも魔導師なん！？」

「はあ〜（これは話すしかないな）
俺は……………」

真哉説明中

……………という感じだ」

「そんな話信じられねーな」

「確かに信じるには情報がたりないな
まずそのイノセンスとこのを見せてもらいたいのだが」

「さっき見ただろ?」

「あの羽か?」

「でもお前の話では109個あるんだろ?」

「ああ、俺は今のところ六つのイノセンスを所持している」

「で、それは何処にあるんだ?」

「ちょっと待ってる」

俺は家に隠しているものを含めて、イノセンスを出してきた

「この銃が断罪者、この時計が刻盤、この鑿が楽園ノ彫刻、この指輪が憑神、このペンダントが神ノ道化、んでこの猿がラウ・シーミ

ジャックシメント

タイムレコード

メーカーオフエデン

ツキカミ

クラウン・クラウン

んだ」

「ラウ・シーミンってイノセンスやったん!？」

「ああ」

「へえ〜でもこんな小っちゃい猿やのに戦えんの？」

「ん?ああ、大丈夫だ。イノセンス発動」

「うわ〜」

「これは……………」

「でっけえ……………」

「これが対アクマ獣武器ラウ・シーミンの本当の姿だ」

「すげえこれカッコイイな!！」

すると、ヴィータはラウ・シーミンが気に入ったらしく、飛びついていた。ラウ・シーミンもヴィータと一緒にじゃれあっていた

「(だから、なんで俺に懐かないのに他の奴には懐くんだよ!!)」

俺はイノセンスの発動を終わらせると、ラウ・シーミンは元の小さな猿に戻る

ヴィータはもうちょっと遊びたかったのか、名残惜しそうにしていた

「はあ、また今度発動させてやるから」

「本当か!？」

「ああ」

「他のはどんな物なんだ？」

「ああ。それは……」

再度説明中

って感じだ

これで良いだろ？」

「ああ。大方把握した

しかし、イノセンスとはすごいな。それが109個もあるのか」

「ええ。でも、それは私たちには扱えないの？」

「ああ。イノセンスは今のところ俺以外扱えない」

「その条件は何なのだ？」

ぐっ。痛いところ突いてくるな

「イノセンスが扱う人間を選ぶんだ（俺の場合選ぶとか関係ないけどな）」

「そうなのか（何か引つかかるが、まあ良いか）」

17話 限られた平穩（前書き）

今回新設定追加です

17話 限られた平穩

今俺達はヴォルケنزの騎士甲冑のデザインを決めるために、おもちゃ売り場に来ていた

そんな時、ヴィータが一つのウサギのぬいぐるみを見つめていることに気づいた

「(うーん。こんなイベントあったようななかったような)ヴィータ早く行くぞ」

「え……お、おう」

ヴィータがはやて達の下に駆けて行くのを見た後、俺は店員さんを呼んで

「すみません。このぬいぐるみ包んでもらって良いですか？」

「はい。すぐに致します」

それから、はやてが原作と同じ騎士甲冑を考えた後
みんなで帰りの道を歩いている。心なしかヴィータは元気がないよ
うに見える

「ヴィータ」

「ん？なんだ？」

「ほい、これ」

「……………！！これって……………」

「欲しかったんだろ？」

一瞬うれしそうな顔をした後、元の表情に戻って

「しょ、しょうがねーな

貰っというてるよ」

「ふふっ」

「何笑ってんだよ！！」

「いや。何でも」

「この野郎……!!」

それから、家に着くまで俺はヴィータ追いかけて回される羽目になった

そして、ヴォルケンズが現れてから約二ヶ月後。俺は夏休みに入っていた

今のところ蒐集は行われていない
まあもちろん原作通りはやてが止めているからであるが

「真…哉あ」「天…宮あ」

「さあ真哉くん!!」

「(くそっ!!現実逃避しても駄目なのか!?)」

俺の足元にはゾンビもといシグナムとヴィータと気絶しているザフイーラがそして、そうした張本人であるシャルルが青紫色のような物体シャルル曰くカレーを持って、近づいてくる

「「さあお前も食べー!!」」

「俺も道連れにしようとするなー!!」

「さあ真哉くん口を開けて」

「シヤマル!!お前はそれ以上先に近づく…むぐっ」

俺の口にシヤマルが強引にカレー?を突っ込む

口の中には食べ物とは思えない味が広がっていき……

「ああ、向こうに川が見える

あれを渡れば良いのか?」

「「渡っちゃ駄目だ!!」」

「っは。俺は何を」

「あの〜……」

「「「お前は黙ってる!!!」」」

「はい……」

それから俺達はシヤマルに料理を作らないことを約束させ、はやて
がないため代わりに俺が作る事になった

「真哉って料理できるのか?」

「ふっ嘗めるなよ。俺は昔クラスメイトに必殺料理人と呼ばれて
たぐらいだぞ」

俺の料理を食べた奴は旨さのあまりぶっ倒れてたな。うんうん」

「（それってやばいんじゃないのか？）」「」

シグナムとヴィータは一抹の不安を抱えながらそこまで深刻には考
えていなかった

この真哉がシャマル以上の曲者とも知らずに……

「出来たぞ」

「「「おお！」「」」

真哉が運んできた料理はとてもおいしそうだった

実際見た目だけで見れば、はやてのものと並ぶほどにその前にシャ
マルのものを食べていたシグナムとヴィータは思わずその料理に食

らいつく

「どうだ？」

「「うん！うま……………」」

ドタンツ×2

「あれ？」

「真哉くん！！本当にまずいですよ！！シグナムとヴィータちゃん
口から泡が「うん何が悪かったのかな？」ちゃんと聞いてくださ
い！！」

その後シャマルがクリアルヴィントで治療したおかげで、二人とも
特になんともなかったが、俺はシャマルとともに正座させられ説教
を食らうことになった

うん結構自信あったんだけどな

だって昔、友達にお前は姫 瑞貴かよ！って言われたからな

でも、姫路 貴って誰だろう？

「ふうん。真哉くんって料理苦手やったんや」

「いや。俺は別に苦手では……………」

ドガッ

「痛っ!!」

「あれの何所が料理だ!!」

「確かに…それに見た目は主並みに綺麗だったからシャマルよりも数段性質が悪い」

「ていうか真哉くん料理に何入れたん？」

「へ？ああ…酸味を加えるために塩酸と後硝酸を入れたな
そういえば何か鍋の底溶けてたなあ」

「……………」

注意！！濃硫酸と濃硝酸を1：3の割合で混ぜると、王水と呼ばれる金属をも溶かす物質が出来ます！！

「ちょっと真哉くん。あつちでO H A N A S I I しょか」

「それなら良いところがあるぞ」

「『『』』立ち直り早!!』』』』」

うるさい!! さっきのことをもう話題に出すな!! やばい。また思
い出したら…ガクガクガクガクガクガク

「ふうん。それって何所なん?」

「あ、ああそれは言ってお楽しみだ」

「ふうんそれは楽しみやな!」

だけど、天気が心配だな晴れるかな?

「本日は快晴なり」

「もう夜じゃねえか！！しかもなんでこんな時間に森に来てんだよ！！」

そう。時刻は既に八時。辺りはもう既に真っ暗だ

「まあまあ、もうすぐだから」

「本当にこんな場所に何があるのだ？」

「何やろうね」

そこから俺達はしばらく歩くと、少し開けた場所に出た

「よし。着いたぞ」

バシンッ

「痛っ！なんだよ」

「何も無いじゃねーかよ！！」

「ちょっと待ってる」

そして、俺は背中に背負っていた。リュックサックから大き目のシートを出して、開けた場所に広げた

「よし。準備完了。みんな準備できたぞ」

「「「「「？」「」「」」

「良いから座れ座れ」

そして、全員をシートに座らせ、俺もシートの上に座った後
俺は高らかに言う

「さあみんな！！寝転がれーーーー！！」

みんな訳が分からないみたいだが、渋々言つとおり寝転がる
すると……

「うわ〜綺麗やな〜」

「すげえ……………」

「綺麗……………」

「なんと……………」

「これは……………」

空には幾万もの星々が散りばめられていて、真ん中には天の川が流
れていて、その風景はとても幻想的だった

「（来て良かったな〜）」

「真哉くん。ほんまににありがとな」

「別に。だって俺達は家族だろ？」

「ふふっそうやな」

「すげえな真哉！どうやってここ見つけたんだ？」

「ひみつ」

「ケチ」

「な、てめえな……………」

「そう言っお前だって……………」

平和な日常は流れるように過ぎ去って行く

しかし、真哉は知っているこの平和な日常がそう長くは続かないことを

たった一冊の本によって生み出された日常はそのたった一冊の本によつて崩されていく

日常の終わりは近い

だが、真哉は諦めない。だから彼は闘う。唯の破壊者としてではなく、誰かを救えるような、幸せに出来るような破壊者になるために必ず幸せにすると誓ったから……………

17話 限られた平穩（後書き）

最後までよこつとシリマスです

18話 終わる平穩（前書き）

今回から蒐集開始です

18話 終わる平穩

俺、シグナム、シャマルは今、石田先生にはやての病状についての説明を受けている

予想通りはやての神経麻痺は除々に上がってきており、このまま行くと内臓器官の麻痺にまで発展する可能性があると言われた

「（くそっ！！何で退魔の剣じゃ闇の書の闇は消せないんだよ！！）

そう。少し前、俺はもしかしたらと思っただけで闇の書を退魔の剣で刺してみたのだが、闇は消えなかった

やはり、退魔の剣の効果はノア及びアクマにしか効かないらしい

「助けなきゃ……はやてを助けなきゃ！！

シャマル！！シャマルは治療系得意なんだろ！？そんな病気がらい治してよ！！」

「ごめんなさい。私の力じゃどうにも……」

「真哉！！真哉のイノセンスじゃどうにかできないのか！？」

「タイムレコードを使えば一時的に病状を回復することは可能だ

だけど、それも持って一週間。それが過ぎると、すぐに元の状態に戻ってしまうし、あれは俺のスタミナを使うからな。使ってから丸一週間は能力の発動はまず出来ないだろう」

「何でだ？…何で何だよ！！うううううううううううう」

「シグナム……………」

「我らに出来ることはあまりに少ない
だが……………」

俺、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは相談して闇の書のページを蒐集することを決めた
但し、事情がないとき以外は人からの蒐集はしないことも

「主を蝕んでいるのは闇の書の呪い」

「はやてちゃんが闇の書の主として真の覚醒を得れば」

「我らが主の病は消える。少なくとも進みは止まる」

「はやての未来を血で汚したくないから人殺しはしない
だけど、それ以外だったら何だってする！！」

「俺には壊すことしか出来ない。だけど破壊から生み出すことも出来るはずだ！

だから…失われた日常を、壊れた平穏を取り戻す！！」

そして、その日を境に俺とヴォルケンリッターの蒐集生活が始まる
こととなった

「あ、でもさ俺、転移魔法とか念話使えねーんだけど」

「……………」

蒐集生活が始まることとなった！！

俺とシグナムは今、一つ目の蛇のような全長十数メートルの怪物に
囲まれていた

「つく…どうするきりがなぞ真哉！！」

「さっき手に入れた奴を使う

抜刀…イノセンス発動！！」

俺は腰に挿していた真っ黒の日本刀の刀身をなぞると刃が黒から銀
へと変わった

「行くぞ！！まずは災厄招来“界蟲”一幻」

すると、刀から蟲が飛び出て、怪物達に向かっていく
だが、まだ囲んでいた怪物達のほんの一部を倒しただけで、まだ方

位を解くには至っていないかった

「やっぱ一幻じゃあ全部とは行かないか
だったら…災厄招来“二幻刀”それから二幻“八花螭螂”」

八本の斬撃が怪物達を襲い、囲んでいた一角が崩れた

「よし！崩れたぞシグナム！！」

「うむ」

俺とシグナムは怪物達の包围を抜けると、俺は日本刀のイノセンス
…六幻の発動を解き、ジャッジメントを取り出した

「さあ一掃するぜ！

ジャッジメント装填……原罪の矢！！」

ジャッジメントから出た光が弓の形を象り、光の矢が放たれた

ヒュンツドッカーン

「やべっ…やりすぎた」

かなり遠くで原爆が落ちたみたいな煙が上がっていた

「なあ天宮……辺り一帯の地形がさつきと全く違う気がする…って
言うかさつきまで荒野だったのには今は砂漠になっているのだが……
……」

「き、気のせいだ…それよりさつきと蒐集しろ！」

「これだけいればかなりのページ数が稼げるだ……おい、一気に100ページぐらい埋まったんだが……」

「さつさと帰るぞ！（でも、やっぱ六幻は使えるな。どうせなのは達の前ではジャッジメントとか使えないしな。でも原罪の矢はあまり使わないようにしよう。ていうかこれ管理局にはれないか心配だな〜）」

「ただいま〜」

「主ただいま帰りました」

「お〜今日は早かったな」

「真哉くん新しいイノセンスは見つかったんか？」

「ああ。これとこれだな」

俺はさっき使った六幻と手のひらサイズのハンマー…鉄槌を出した

「ふくんこれは何なん？」

「こっちが六幻、こっちが鉄槌だ」

「お！あたしと同じハンマーだ！！なあ真哉ここで使ってくれよ！
「！」

「いや、それは……………」

「別に良いじゃんか」

「まあこの家が半壊しても良いならやっても良いけど……………」

「ちょっとこっちで O H A N A S I I じゃか」

「え…………俺まだやるって言ったわけじゃ「真哉くん」はい……………」

俺はそのまま引きずられるように、はやての部屋に連行された

「なあシグナム」

「どうした？ヴィータ」

「今度からははやてを怒らせないようにしないな……………」

「……………！！これからはやてちゃんを怒らせないようにはしないと……………」

「真哉、お前の犠牲は無駄にはしないぜ……………」

「はやての恐ろしさを改めて実感したヴォルケンリッター一行であった
った

「今日こそ見せてもらっぜよ真哉！」

「あゝはいはい

イノセンス発動。大槌小槌満満満！！」

「うおっでっけえっ」

俺が持っていた手のひらサイズのハンマーは今はヴィータのデバイス、グラーフアイゼンの数十倍まで大きくなった

「行くぞヴィータ!!」

「おう!!」

「イノセンス第二開放“劫火灰燼 火判”!!」

鉄槌を中心に円状に文字が描かれていき、俺はその中の一つの“火”を叩くと、鉄槌の面に同じく火の文字が写り、地面に叩きつけると、巨大な大蛇を模した火柱が群がってきた怪物達を蹴散らした

「アイゼン!!」

『シュワルベフリーゲン』

ヴィータの前には四つの鉄球が出てきて、俺が取りこぼした怪物を倒していった

「ふゝ終わったな」

「お前と行くと早く終わるよな」

「ちゃんと蒐集しとけよ」

「へいへい」

その後、倒した怪物からほとんどページが稼げなかったことで、不機嫌になってしまった

「や、帰るぞ」

「……………分かった」

「なあ、ヴィータ」

「何だよ」

「帰りにアイス買っていくか？」

すると、急にうれしそうな顔をして……………

「うんー!!」

「じゃあ行くか」

「あたしハーゲンダッツな」

「はいはい」

余談だが、シグナムとの蒐集を終えた時間、アースラにて

「……………！！クロノくん。管理外世界で巨大な魔力反応を観測！！
ランクは……………！！け、計測不能！！」

「どういうことだ。それは！？」

「今その映像を写すね！」

そしえ、画面に映し出されたのは途中までは荒野が広がっているが、途中から急に砂漠に変わってしまった

「一体誰が……………」

「クロノくん！！あそこ！！」

「ん？なんだあれは？」

画面に映し出されたのは真哉達……………ではなく全長十数メートルつ
目の蛇だった

まあ要するに真哉たちが狩っていた怪物の取りこぼしだった

「まさかあれが……………」

「多分……………」

こうして管理局第一級接触禁忌生物ウロボロスが誕生した

19話 新たな絆？

「管理局が動き出した。もう時間がねえ！！なあ真哉！！」

この間から蒐集は続けてはいるが、最近は思うように蒐集出来ていない

今のページ数は250ページだ。しかももう十一月に入ろうとしている

時間がないのは事実だ。このままいつても、はやての病気が内蔵機能までに届くのに間に合うかは微妙な感じだ。というかこのままだと、間に合わない可能性が大きい

そのことについて俺はヴィータと話していた

「そうだ！！探りに来た管理局員から蒐集しようぜ！！」

「駄目だ」

「何でだよ！！」

「前から言ってるだろ。人からの蒐集はよっぽどのことがない限りはしないって」

「はやての命の危機なんだぞ！！これがよっぽどのことじゃないのかよ！！」

「もし管理局員から蒐集なんかしたら、管理局が本腰入れて動き出す今のところは管理局はそこまで気にしてはいない。このまま行けばばれずにやり過ごすことが出来る」

「その前にはやてが死んじまったらどうするんだよ！お前ははやてが大事じゃねえのかよ！？」

「大事だよ……………」

「だったら「だけど！！」」

「俺はお前達のことだって大事なんだよ！！もしこれ以上目立った動きをして、管理局が本腰入れて、動き出したら圧倒的にこちらが不利だ」

「俺達は管理局の奴になんか、負けねー！！！」

「それだけじゃない！！俺達はこっちの何十倍もの戦力を相手にはやての守りながら闘わなきゃならないんだぞ！！俺が本気を出しても、分散されてちゃ倒せる自身なんてない

だから、お願いだ……………無茶だけはしないでくれ……………もう俺に家族を失わせるような真似はしないでくれ……………」

「……………」

side ヴィータ

「（ごめん真哉、だけど……………シグナム！シグナム！！）」

『どうした？ヴィータ？』

「（このままじゃ間に合わない
だから…同員を狙う！）」

『……………！！だが、それは真哉に……………』

「（だから隠れてやる。幸い真哉は魔法は使えない。きっちり境界張れば、ばれない）」

『……………分かった。だが、良いのか？』

「（???)」

『お前は天宮のことを好いていただろ』

「……………！！#\$%& #」

『凶星か』

「（ななな何言ってるんだよ！！あ、あたしは別に……………）」
／
／

『前に寝言で、真哉あつて呟いていたぞ
それに、気付いていないのは多分天宮ぐらいのものだぞ』

「（だから最近はやてからの視線が刺々しかったのかな？）」

『まあ主も天宮のことをずいぶん気に入っているようだからな
で、どうするっ…』

「（決まってる。出来るだけ真哉のいないときに狙っていく）」

『決まりだな。シャマルやザフィーラにも伝えておく』

はやて、絶対助けてやるからな

side 真哉

何か最近ヴォルケンス特にヴィータの様子がおかしいような気がするんだよね

なんか俺見るとびっくりするし、余所余所しいし、話してるとき微妙に顔赤いし、一体何なんだ？

「おゝい、ヴィータ」

「へ？な、何だ真哉？」

「いや最近ヴィータ、何かちょっと変だから」

そのとき、はやての眼が光った気がした

「ヴィータ。ちょっと来てくれへんか？」

「へ？はやて？」

そのまま、前の俺みたいにヴィータは引きずられていった

【本当に君は相変わらずだね】

「（お前は黙ってるよ。つうか何のことだ？）」

【いや、何にも】

くそっ！一体何なんだ！？

sideはやて

最近になって私は気付いた

「（ヴィータも真哉くんのこと好きになってしまったんか）」

「お〜い、ヴィータ」

「へ？な、何だ真哉？」

「いや最近ヴィータ、何かちょっと変だから」

よっしゃ！この機会にはつきりさせとかなとな！！

「ヴィータ。ちょっと来てくれへんか？」

「へ？はやて？」

私はそのままヴィータを自分の部屋まで連れて行った

「ヴィータ。単刀直入に聞くで。ヴィータは真哉くんのこと好きなんやろ？」

「ななななな、何いってんだはやても！」

「もってどういふことや？」

「いや、この前シグナムがそんなことを言ってきたから」

「そうか………でや、話っているのは、知ってるかもしれやんけど私も真哉くんが好きや！」

「だから、ヴィータ。正々堂々勝負や！」

「だ、だから、あたしは別に真哉のことが好きなわけじゃあ………」

「ほんまか。それやったら、私が真哉くんにアタックしても、ええよな？」

「そ、それは………」

「それは？」

「ぐぐぐぐ、認めるよ！！あたしは真哉のことが好きだ！！だから、はやて！！正々堂々勝負だ！！」

「よう言つた！！今日から私たちはライバルや！！」

私が手を前に出すと、力強くヴィータも握り返してきてくれた
こうなったからには負けられへんで〜

「うんー！」

『もうヴィータちゃん、はやてちゃん、大声出しすぎですよ
そんな大声じゃあ、真哉くんに聞こえちゃいますよ！一応私がク
ラールヴィントで境界張つといたので大丈夫ですけど』

「（ごめん……………）」

その日を境にヴィータとはやての間に新たな絆が出来たような、出
来なかったような……………

side 真哉

はやて達が降りてきた。何かさつきと違って、顔が妙に清々しい

「なあ、はやて一体何を」「何にもないよ」「そ、そうか」

【リア充死ね】

「（それ神が言うことじゃないだろ！それに俺は前世から彼女いな
い暦〓年齢、継続中だぞー！）」

【ああ、ごめんごめん（さすがに息子にリア充死ねはなかったかな
？）】

そして、止めたと思っていたことが、真哉の知らぬ間に動き出そう
としていた

物語は原作通りの戦いを描こうとしている。異物破壊者は原作を破壊する
ことが出来るのか？

【つつか、やっぱりア充死ね

注意！ここからは真哉に対する唯の愚痴です。読みたい方は読んでください

だつてさだつてさ、俺だつてまあ子供いるわけだし、それなりに楽しんできたよ。でもさ何これ？俺は必死に努力したのにこの野郎注意！自分の息子です！は？何が、何のことだ？だよ。このフラグメーカーが。お前は何所の上条さんですかつつうの注意！自分の息子です！あれだろ？これからなのはとかフェイトとかアリサとかすずかとかシャマルとかシグナムとかまた落としていくんだろ？注意！そんな予定は一切ありませんハーレム構築しちゃうんでしょ？そんでS r i k e r ' sに入ったら、今度はまた、スバルとかティアナとかキャラとか落とすんでしょ？ああだから嫌なんだよああ言う奴注意！自分の息子です！ああ、そういう俺の嫁さんはね「ピー」なんですよ。まあ「ピー」だから当然親の反対とかあったんですけどね！それでね……………】（ここから数時間以上、嫁自慢と息子への妬みを喋っていました）

19話 新たな絆？（後書き）

ちなみに、「ピー」の部分はこれからの話に関係があったりなかったり……

20話 LEVEL 2

俺、シグナム、シャマル、はやては今、図書館に着ていた。まあシヤマルとシグナムは外で待っているが、そして、ヴィータとザフィーラが今日の蒐集担当だった

俺が前に言ってから、特に言っておかなくなったし、もう人を襲うようなことはしないかな？

「真哉くん。その本取ってくれる？」

「はい」

「ありがとう「あれ？天宮くん？」な。ん？真哉くん。知り合い？」

そこには、俺のクラスメイトの月村すずかが立っていた

「おお、月村か。はやて、紹介するよ。俺のクラスメイトの月村すずか。月村こつちは俺の家族の八神はやて」

「よろしくな。すずかちゃん」

「こつちこそ。はやてちゃん」

そこから、少し月村と話した後、俺達は図書館を後にすることになった

「お話してくれて、おおきに。ありがとうな」

「うん。またね、はやてちゃん。真哉くん」

そして、帰り道……………

「晩御飯、シグナムとシャマルと真哉くんは何食べたい？」

「ああ、そうですね。悩みます」

「スーパーで材料を見ながら、考えましょうか」

「うん、そやね」

そういえば、ヴィータは今日も何処かへお出かけ？」

「え、え〜と。そうですね……………」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラが付いていますから、あまり心配は要らないですよ」

「そっか」

「でも、少し距離が離れても、私はずっとあなたの傍にいますよ」

「はい。我らはいつでもあなたの傍に」

「俺も忘れんなよ〜」

「……………ありがとう」

「（ん？なんか違和感を感じるけど、まあ気のせいかな）」

原作
物語はゆっくりと動き出す

- - -
- - -
- - -
side ヴィータ

あたしとザフィーラはこの間からこの町に時々出てくる妙に巨大な
魔力反応を追っていた

「どうだヴィータ、見つかりそうか？」

「いるような、いないような……この間っから時々出てくる妙に巨
大な魔力反応。あれが捕まれば一気に20ページぐらいは埋まりそ
うなんだけどな」

「分かれて探そう。闇の書は預ける」

「OK。ザフィーラ
封鎖領域展開」

『Gef? ngnis der Magie』

「魔力反応！獲物見つけ！行くよグラーファイゼン」

『了解』

- - -
- - -
- - -
sideなのは

『警告。緊急事態です』

家で勉強していると、レイジングハートが急に緊急事態を知らせてきました
その時……………

「結界!?!」

『対象高速で接近中』

えみると

「近づいてきてる!?!」つちに!?!」

私は一体どうしたら……………ううん。まずは話しないと!

……………
……………
……………
……………

side真哉

「ん?」

俺は今家に帰ってきてきてはやては夕飯を作っている。シャマルは夕飯の買い物で足りなかったものを買いに行つて、シグナムも何処かに出かけていった

「どうしたんや?」

「いや、今左目が反応したような気がするな。今は反応してないし、多分気のせいだ」

「ふうん。？」

P r r r r r P r r r r r

『はやてちゃん？シャマルです』

「あ、どうしたん？」

『すいません。いつものオリブオイルが無くって、ちょっと遠くのスーパーまで行って探してきますから』

「うん。別に良いよ。無理せんでも」

『出たついでにみんなを拾って帰りますから。すみません』

「ふふつ。平気やって」

『なるべく急いで帰りますから』

「急がんで良いから」

『はい。それじゃあ』

「どうしたんだ？はやて？」

「いや、シャマルがオリブオイル無いから、隣のスーパーまで買に行つて、帰りにみんな拾って帰って来るんやって。別にそんなに無理しやんでもいいのになあ。??真哉くん？」

「左目が……………」

黒い魔導師やそいつの守護獣らしき奴が、襲ってきたがなんとか白い魔導師からの蒐集は完了して、帰ろうと思っていた矢先にこいつらだ

「でも、聞いてたのとちょっと違うくねーか？」

「ああ、球体型と聞いていたが、こいつは……………」

「ああ、人の形してやがる」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤお前が伯爵様の言ってたまごじってやつか？」

「そうだったら、何なんだ？」

「殺す」

ガキンッ

「お前の相手は俺、だろ？」

side 真哉
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

俺は目的地へ向かう最中に、ビルの上にいるシャマルを発見した

「おい、シャマル」

「え、あなた誰？」

「俺だよ」

「しししし、真哉くん！？どうしてここに！？」

「アクマの反応があったから来たんだ。それより後で覚悟しとけよ」

「でも、あれ？真哉くん、何でいつものとは違うの？」

「何となく」

そうして、俺はアクマがいるであろう地点に飛んでいった。ちなみに今の俺は一護の死神装束と虚化したときの仮面＋黒い翼的な感じになっている

そして、その地点に着くと、今にも攻撃しようとしているLEVE L2に進化したアクマがいた

「イノセンス発動」

俺はヴィータ達の前に行き、六幻で攻撃を受け止める

「お前の相手は俺、だろ？」

「……………！！その刀…まさか真哉か！？」

「ああ、お前らは後でたっぷり説教だ」

「……………はい」

「この刀…お前えくそしすとか？」

「ああ」

「だったら殺す」

「お前じゃ俺には勝てない」

「ヒヤヒヤッさっきその女の姿を写し取らせてもらった」

すると、前にいるアクマの姿が変わっていき、シグナムの姿を真逆にした者になった

「私!？」

「違う。あのアクマの能力は他人の力を写し取るものだ。良く見る左右が逆だろ」

「あ、ほんとだ」

「ヒヤヒヤッこれでどうだ？」

「そんなことをしたところで、お前は俺には勝てない」

「何!？」

「たとえ同じ武器でも使い手が違う。それはお前の武器じゃない、シグナムのものだ。そんな奴がに俺万に一つも勝てるわけ無いだろ？」

「うゝゝゝうゝゝ殺すゝ!!」

「“二幻刀”」

俺の手にはもう一本刀が握られていた

「ヒヤヒヤヒヤッ」

「だから……勝てないって言ってるだろ。二幻“八花螭螂”」

「ヒヤッ………」

そして、俺は一瞬で後ろに回りこみ、八本の斬撃をアクマに放った

「すげえ………」

「さすがだな」

「そんなこと言っても。お説教は無しにはならないからな」

「はい………」

「はやてが待ってるぞとちと帰るぞ」

20話 LEVEL2(後書き)

戦闘シーン短くてすみません

21話 転校（前書き）

ちよつと大幅に修正しました

21話 転校

「何か言い訳はあるか？」

「……いいえ。ありません」「……」

まあ分かると思うが、俺の前にはヴォルケンズが全員で土下座している。正直かなりシユールだ
既に、はやては眠ってしまったので、問題は無い

「はあ~~~~」。背に腹は返られないか」

「え……………真哉それって、どういう……………」

「だ・か・ら、次からは俺も参加するってことだ。もうどうせ管理局には完全に目を付けられただろうしな。それにもしも危なくなったら、俺が何とかするよ」

なでなで

「……………」 / / / /

「じゃあ、もう遅いし寝るとするか」

「うん！」

エイトに睨まれるだけだろうしね
ちなみに、現在の闇の書のページ数は400ページで原作よりも蒐集は進んでいるようだ

「さて、皆さん。先週、急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フエイトさんどうぞ」

「失礼、します」

すると、ガラガラと音をたてて、転校生…ていうかフエイトが入ってきた

「……………おおー！！」「……………」

クラス中から歓声上がる。まあ普通に見れば、フエイトは美少女だからな

「あの…フエイト・テストロッサと言います。宜しくお願ひします」

パチパチ

クラスから拍手が沸き起こる。俺はまあ適当にやってた

そして、朝のホームルームが終わって休憩時間になった

フエイトはクラスの連中に囲まれて、質問攻めにあっている

俺は近寄っても、睨まれるだけかと思って、屋上で午前中の授業をサボろうと思った

「あの…真哉くん」

「なのはか。どうした?」

「あのフェイトちゃんのこと……………」

「ああ…俺は別に気にしてないよ」

「だけど……………」

「大丈夫だよ」

(ボソツ) 後で屋上に来てくれ、一昨日の件で話がある」

そう言った後、なのはは少し驚いた表情を見せたが、すぐいつもの表情に戻って頷いた

そうして、俺はクラスを出て、屋上へ向かった

ちょうど、一時間目と二時間目の休憩時間になのは…とフェイトが屋上に来た

「（予想はしてたが、まさか本当に連れてくるとはな。まあ一人で来いとは言ってないから別にいいんだけど）おう、来たか」

「うん」

「で、話って何？」

「そんな焦るなって、まあ簡単に言つと…お前から一昨日のアクマ見たか？」

「うん…でも前に見たのと全然違つたんだけど………」

「少し言い忘れてたな。あれはLEVEL2に進化したアクマだ」

「LEVEL2？」

「ああ、アクマは人間を殺すほど進化していく、そしてある一点まで達すると、レベルが上がるんだ」

「レベルが上がるとどうなるの？」

「LEVEL1と違って全能力値が大幅に上がっている。それに加えて、LEVEL2以降は自我お持ち、さらに能力に目覚める
この前のは遠目からだったが、相手の能力を写し取るものだったみたいだな」

「能力って一つ一つ違うの？」

「ああ」

「そういえば、前のときは他のエクソシストさんが助けてくれたんだけど何か知らない？」

「知らないな」

「そう………」

「もう話は終わりだ」

「早くしないと授業に遅れるぞ」

「真哉くんは？」

「俺、今日はサボるわ」

「それは駄目なの！」

「え〜」

「え〜じゃないの！」

俺は仕方なく授業を受けることになった
フェイトはましにはなったが未だにこちらを睨んでいる。これはまだ時間が掛かりそうだ

今日も今日とて蒐集生活

「真哉！ぼろつとすんなよ！！」

「はいはい」

今日の相手は背中が棘々の岩みたいになっている竜だ

「闇の書蒐集」

『蒐集』

「今ので3ページか」

「くっそ……でつけえ図体して、リンカーコアの質は低いんだよな
まあ魔導師相手には気楽だし。じゃあ次行くよ。真哉、ザフィー
ラ」

さっきのやり取りから分かるように、局員からの蒐集は大分抑えた
まあ俺がいれば、局員を狙った方が効率的には上がるのだが、局員
の大半は地球にいたので、偶にいる局員から蒐集するぐらいにして
いる。そのため最近では虚化の仮面が必須になりつつあったりする
当然今もその格好なのだが、これはメーカーオブエデンの能力で
出しているので、如何せんかなり疲れる

「ヴィータ。休まなくても良いのか？」

「平気だよ」

「良いから一応休んどけて、俺がやっつくから。じゃあ行くぞザ
ファイラ」

「ああ」

「ちょっと待っ……………」

俺はヴィータを無理矢理座らせ、ザファイラとともに次なる標的に
向かっていく

22話 限界(前書き)

ちよ
い
修
正

22話 限界

「つく（っち！忘れてたぜ。確か、この後なのは達がカートリッジシステム積んでくるんだっけ？」

俺達はちょうど蒐集してきた帰り、十数人の管理局員に囲まれていた

「管理局か！」

「でもこいつら、ちよろいよ。返り討ちだ！！」

すると、いきなり囲んでいた管理局員が全員引いていった

「ヴィータ！！上だ！！」

上には杖を構えているクロノがいた。そして、周りには幾多の魔力で出来た刀が浮かんでいた

「ステインガーブレイド エクスキュージョンシフト！！」

「俺が行く！！」

満満満満！！雷霆回天 天判！！」

発生した電撃によって、次々と撃ち落していく。打ち洩らした分は鉄槌で直接叩き落していく

「どうやら、あっちにも助っ人が来たみたいだぞ」

「……………！！アイツら！！」

「レイジングハート!!」

「バルディッシュ!!」

「セットアップ!!」

「レイジングハート エクセリオン!!」

「バルディッシュ アサルト!!」

どうやら、原作通りカートリッジシステムを積んできたようだ
何かデバイス達が早口で何か言っているが、全然聞こえない
そんな時……

「……!!どうやらもう一人お客さんが来たようだな」

「……!!アクマ……」

まだ、少しここから離れているが、アクマの軍勢が迫ってきていた
「俺はあつちの相手をしてくる。ちょうどシグナムが来たみたいだ
しな

「まだ、結界の外だが。ああ、後この状態のときは、」って呼んで
くれ」

「ちょっと待て、真」「」!!」

俺は制止の声を振り切って、アクマの軍勢に向かっていく。幸い今
回はLEVEL1しかいないようだ

「（でも、どうやって入ってきたんだ？ま、良いか）六幻・鉄槌！
！発動！！」

俺は火判で遠くの敵を薙ぎ払いながら、撃ち洩らしを六幻で切っ
ていく

もう少しでアクマを掃討し終えようという時……

「ゴフッ（血？どういつことだ！？被弾なんてしていないのに……
…）クソッ！！火判！！」

ようやくこちらに来ていたアクマの軍勢を掃討し終えたとき

「（一体どうなってるんだ！？まあ良い。今は……）ヴィータの援護に「待つんだ！」「っち！！クロノ・ハラオウンか」

「……………！！何故、僕の名前を知っている！？」

「企業秘密だ」

「つく……………一つ聞くが君が闇の書の主か？」

「そうだ」

これは一応前々から決めていたことだ。こうした方が、主の搜索が緩くなり、はやてが主とばれる心配は少ないと考えたからだ

「……………！！闇の書は何所にある！？」

「もう一人の守護騎士に持たせてある」

「最後に聞く。投降する気は？」

「無い」

すると、クロノはデバイスを構え、攻撃態勢に入ろうとしたとき俺は、まだ左目が反応しているのに気がついた

「……………！！（まだ、左目が反応している！？一体何所に！？）」

俺はキョロキョロと辺りを見渡すと、ちょうどヴィータの後ろに一体のLEVEL2が攻撃を仕掛けようとしていた。ヴィータはなのはの相手に手一杯で気づいていないようだ

「（まずい！！）イノセ……ゴフッ。こんなときに！！」

俺は直接叩くために、ヴィータとアクマの間に体を割り込ませようと
とする

後ろで、クロノが騒いでいるが、そんな声は無視して突っ込んでいく

「っく！（間に合うか！？）」

そう思っていたとき、アクマはくるっと回転して、こちらを向いて
突っ込んできた

「（狙いは始めからこっちか！！）しまっ……………」

咄嗟のことに体が反応せず、その間にアクマは容赦なく攻撃を加え
て来た

辛うじて、敵の手を掴むもその手の動きは止まらず、俺の左目を抉
り取った

まあ、頭を貫かれなかっただけかもしれませんが、そんなこと考
える余裕も無く、アクマが攻撃を加えようとする

「ぐああああああああああああああああああああああああああああ
アアアああああ！！」

イ……ノ……センス発動！！二幻……昇華！！俺の命を……吸い高まれ！！

これより刀は命を代価に主に力を与えよう “禁忌 三幻式”
！！！！

残った右目の瞳孔に名称を示すような三点の文様が浮かび、眼の周
りにヒビが入る

そして、次の瞬間あっという間にアクマの体は切り裂かれた

「伯爵様…言われたとおり左目は破壊してやったよ」

そついい残した後、アクマは爆散した

「……………！！真……………」

そして、結界の上部に巨大な雷が落ち、結界が崩れ、俺はそのまま
ヴィータに支えられつつ、その場を後にした

「……………！！これは酷い……………完全に左目が潰れちゃってるわ」

そのまま、帰るわけにはいかなかったので、俺はあそこからかなり
離れた場所でシャルルの治療を受けていた

「なあシャルル！！真哉は治るんだよな！？」

「心配はいらない……と思う。何故かは知らないけど、もう左目の再生が始まっているわ。このスピードだったら二、三日で回復すると思う」

「良かった」

「でも、眼が再生していない間は どうする？左目が潰されたことは相手も見ているだろう。それ以前に主にどう報告する？」

「それについては…大丈夫だ。イノセンスで義眼を作って誤魔化すイノセンス発動……」

俺はメーカーオブエデンで義眼を作って、左目に入れた

「……………大丈夫なのか？」

「ああ、問題ない。それより、早く帰るぞ。はやてが心配する」

「ゴフツゴフツ…くそっ！！一体何なんだ!？」

『限界みたいだね』

「（ああ、お前か…で、何が限界なんだ?）」

『君の体だよ。簡単に言うと、原作と同じようにイノセンスって言うのは強力で人間では上手く抑えることが出来ない』

「（だから、対アクマ武器に改良するんだろ?）」

『まあ、そうなんだけど……………』

「（なんだよ）」

『そこって対アクマ武器に改良するところなんて無いだろ?』

「（当たり前だろ！良いから簡単に言えよ!!）」

『だから、僕はそっちに送るのに原石自体を原作と同じ形の対アクマ武器にして送ったの!!』

「（は?それってどういうこと?）」

『だから、簡単に言うと君が使ってるイノセンスはまだ原石のままなの

いや、言い方を変えたほうがいいな。今の君は武器が外に出てるだけで寄生型とほぼ同じ状態なの!!』

だから、まだ器である体が子供の君には強力すぎるんだ。それに、持ってるだけで、負担が掛かるのに、君は同時に三つモイノセンスを発動させたりするから、体がぼろぼろになるんだよ（まあ本当に体が完全に人間だったら、今頃死んでるかもしれないけどね）』

「はあ！？ゴフツゴフツ（そんな話聞いて無いぞー！）」

『言っていないからね。というか、僕が見てない間にそんな無茶するからだよー！』

「（だったら、そういうことは早く……………」
「真哉？どうした……………
ってその血どうしたんだ！？」

大声を出したせいかヴィータが様子を見に来て、俺が吐血しているのを見られてしまった

「（やばっ）『じゃあバイバイ。体には気をつけてね』」（おい！）

「一体どうしたんだ！？やっぱり怪我が…シヤマ…むぐっ」

危ない。これ以上知られることは避けなきゃならない

「おい！！何すんだよ」「忘れる」「へ？」

「俺は大丈夫だ。だから今日ここで見たことは全部忘れる」

「は！？そんなこと言っていないで早く」「お願いだ」「」

「お願いだから、みんなには黙っていてくれ今度の事件が終わった

ら、全部話すから………」

ヴィータは完全には納得していない様子だが、渋々頷いてくれた

「（なあ、聞こえてるか？）」

何とか、ヴィータを説得した後、俺は夕飯を食べ、今は部屋で横になっ
ていた。当然今はイノセンスの発動を止めている

『聞こえてるよ。で、今度は何の用だい？』

「（今日のこと、思い知った。それに、伯爵は俺の左目が潰れて
るこの時期に、一気にアクマを放ってくるだろう。そうすると、エ
クソリストが俺だけだと全て対処しきるのは不可能だ

だから、俺以外にエクソリストを作る方法はあるか？）」

『あると言えばある』

「(その方法は?)」

『いや…でも、あんまりおすすめは出来ないな…なんて』

「(良いから。ちょっと言え)」

『本当に?』

「(ああ)」

『はあ…。その方法は簡単に言つと……………』

「(……………)」

『あんまり驚かないんだね』

「(予想はしてたしな。で、思ったんだけど……………って出

来るか？」

『……………！！あんまり考えてなかったけど、でも君には……………』

「（分かってる。そのことも考えにいれてある

だから……………って作れるか？）」

『うん。多分出来るよ。少し時間が掛かるけど出来たら、君のところへ送るよ

だから、眼が再生するぐらいにちょうど送れると思う。だから、眼が使えない間は、君にはがんばって貰わないとね』

「（了解）」

22話 限界（後書き）

今更ながら変だったので修正

23話 呪い（前書き）

ユニークアクセス一萬突破！！

本当にありがとうございます

出来たら次ぐらい番外編書きたいです

23話 呪い

「劫火灰燼 火判！！」

俺は今山の頂上から町を見渡している

俺の左目が潰れた日から、予想はしていたがアクマの襲撃が活発化してきた。今のところ早々に発見して、出来るだけ破壊している。まだ、アクマの数も原作ほど出来上がってはいないのだから。それにこことは別の世界で作って持ってきていて、それにその転送先が海鳴市というのもあったのか、この町にしか、アクマがいない。まあ俺がいるのでこの町に対する被害は今のところ起こってはいないので世間でアクマについて、騒がれるようなことは未だ起こってはいないが、これ以上アクマを野放しには出来ない、あの計画を早めに実行しなければならぬそれに、どうも義眼のせい、左目の回復が遅くなってしまっている。アクマはそれに伴い、俺の死角である左側に回りこむので、闘いにくくて仕方が無いそれに……

「毎日毎日、左目の回復状況に対応して、義眼作るのが大変なんだよ！！」

まあ、当たり前といっちゃあ当たり前だが、毎日少しずつ再生に従い、義眼もちよつとづつ削らなければならない。削りすぎると、凹むし、大きすぎると眼が飛び出る。Striker'sのティアナみたいに、幻影を使えないかと考えたが、一応シャマルは出来ないことは無いらしいが、あまり得意ではなく、長時間は無理らしいので断念せざる終えなくなった。他のヴォルケンスはヴィータ曰く「

そついうちよこまかしたのは苦手なんだよ!!」らしい。一応学校は登校した次の日から体調不良で休んでいるが。ちなみになのは達にはアクマの攻撃が激化してきたからということにしている

「(そついえば、確か回復した後つて呪いが強くなるんだよな? そのところはどつなつてゐるんだ?)」

おゝい神〜)」

『はいはい』

「(聞きたいことは分かつてゐるよな?)」

『呪いの事?』

「(そ。そのところどつなつてゐるんだ?)」

『普通に強くなるよ。今までの君のは周囲500メートル内のアクマの居場所の把握ぐらいだったから

今回ので強くなつたら、アクマ視認化と周囲一キロくらい内ならアクマの居場所が分かるよつになると思つよ』

「(アレンより何気にハイスペックだな……………」

『直接力を上げれない分そついうところを上げといたんだよ
それと、くれぐれもイノセンスの同時使用は二個までにしてね』

「(分かつてゐるよ。転生して9年でまた死にたくないしな

まあこの時間帯ならなのは達も学校、はやては病院だから義眼着けなくても良いしな)」

『絶対だよ』

そうすると、上の方から新たなアクマの軍勢がやってきた

「（分かってるって。じゃあなちようどお客さんが来たみたいだ）
本当に多いな。はあ……………」

「イノセンス発動」

そろそろ、夕方、はやてには一応アクマのことで数日間は学校に行けないとは言っている。もちろん、左目のことは伏せて目茶苦茶怒られたが……………」

「はあ〜疲れた〜今日のところはこれくらいかな？」

「……………」

「ん？」

- - -
- - -
- - -
side 恭弥

「逃げる。恭弥
こいつは……やばい」

俺はいつものように父さんと一緒に山へ練習に来ていた
いつもと同じように練習していたのに、今、目の前には人間……いや、
同じ人型だが、分かる

コイツは人間じゃない

父さんは小太刀を二本構え、相手をにらめつけている

「^{タイトル}題名……」「逃がさない」

「何者だ!?!」

「^{タイトル}題名……」「エシは日本人絵師の魂から造られた」

「魂から?!?!どういうことだ!?!」

れていた。気絶しているだけで、まだ、一応息はあるようだ

「タイトル題名…「次はお前」」

そして、今度は恭弥さんに向き直った。俺はいつもの仮面と死神装束に着替えちようど恭弥さんとアクマの真ん中に降り立つ

「そうは、させない」

「アンタは誰だ？」

「エクソシスト被魔師だ」

「何処かで会ったことあるような気がするんだが？」

「気のせいだ。それよりお前はさっさと逃げろ」

「はあ！？父さんを置いて行けって言っのか！？」

「大丈夫だ。彼は俺が助けておく」

「……………信じてもいいのか？」

「ああ」

「頼んだぞ」

「ああ」

そして、そのまま恭弥さんは山のふもとまで降りていった

「さあこつちも始めようか
イノセンス発動」

とは言ったものの最近のはとの遭遇の危険があるので、六幻は持っていない。だが、この姿のときのために鉄槌は持ってきているが、それにジャッジメントも持ってきていない。あれは周りに被害が出る。クラウン・クラウンは持つてくることも出来たが、仮面が邪魔で戦いずらいので、持つてきていなかった。ラウ・シーミンは一応持つてきているが、さつき士郎さんを治療するためにシャマルを呼びに行かせてしまった。鉄槌は事情があるので仕方ないが。で、最終的に持つているのはメーカーオブエデン、鉄槌、タイムレコード、憑神。メーカーオブエデンは仮面などに使っているため使えない。タイムレコードは戦闘向きじゃないし、憑神は未だにLEVEL1にしかなれない。なので、今は鉄槌以外戦闘では使えない

「行くぞ！！劫火灰燼 直火判！！」

俺は火判を直接ぶつけるが、アクマはびくともしない

「^{タイトル}題名…「頭部粉碎」」

「つく！！…天地盤回 木判！！」

俺は仰け反るように避けて、鉄槌を地面に振るって、木判で風を操り、砂埃を起こす
そして、砂埃が俵っている隙に、俺は士郎さんを抱えて逃げようとする

「^{タイトル}題名…「逃がさない」」

「ぐがつ……」

アクマの拳が腹に入り、俺は抱えていた土郎さんを思わす落としてしまう

「（しょうがないこうなったら）メーカーオブエ……っぐ！！（左目が……）」

タダイマシンヤ闇ガ戻ッテキタヨ

オカエリ

より深く

より黒白の世界へ

堕ちてゆけ

「まさか、こんなときに……」

次の瞬間左目に2つのスコープの様なものがつき、左目が再生された

「し、真哉くん……そ、それ……」

「な、なのは!?!」

おそらく、真哉が慌てて帰ってきたので見に来たのだろう

「その……体から出ている……ものって……もしかして……」

「ああ………アクマの魂だ」

23話 呪い（後書き）

左目復活！！

24話 110番目のイノセンス

sideなのは

「うっ……………（気持ち悪い……………」

私は思わず手で口を塞ぎ、目の前の存在から眼を背ける
真哉くんも若干だが顔色が悪い

アクマの体から出ている人の魂。いや、もうほとんど原型さえ保つておらず、見られるようなものじゃないけれど

真哉くんの話によると、アクマの魂はLEVELが上がることに魂の状態も悪くなっていくらしいけど、まさかこれよりも更に上のLEVELのアクマがいるのかな？

そんな時アクマと対峙していた真哉くんが小声で

「おい、なのは

士郎さんを連れてここから離れる」

「え……………でも、それじゃあ真哉くんはどうするの!？」

「大丈夫だ。まだあの程度なら俺一人で倒せる
だから、早く行け」

「……………分かったの」

私は急いで気絶しているお父さんの元に歩み寄り、軽くトラウマ物になりつつあるアクマのことは真哉くんに一旦任せて、お父さんを

運んで帰ろうとするが……

- - - - -
- - - - -
- - - - -
side 真哉

「真哉くん!!お父さん重くて動かせないんだけど………」

「はあ!?(どういうことだ!?!いくら運動が苦手でも動かせないってのはおかしいだろ!!)」

「エシのダークマターは「重力操作」

絵師の攻撃を受けたものは傷と共にダークマターの影響を受けて重力が加算される」

「っち!!!(そっぴや居たなそんな奴!!メーカーオブエデンの本当の力はあんまり見せたくないんだが、そもも言ってられないな)イノセンス発動!!アート!!!」

ティエドル元帥のようにあんなでかいのは作れないので、俺はメーカーオブエデンで地面から人間サイズほどのものを、10体作り出し、アクマに突っ込ませる

「行け!!!」

さすがのアクマも10体には手に負えないようだ。徐々に押しつつある。それにあの人形はイノセンスなのでダークマターの影響も受けるが、攻撃の威力が上がるだけであまり関係ない。だが、さすがに小さいせいか攻撃力が低く決定打がなかなか無い

「（だけど、これで終わりだ！！）アート！！」

俺は一瞬だけ、人形を崩し大きいものをつくる。そして、アクマの
ダークマターの影響を受け威力が増大した拳がアクマを叩き潰した

「ふ〜（今度からはもう少し持つてくるようにしよう）」

なのは、大丈夫か？」

「う、うん」

「（顔色が悪いな。まあ当然かいきなりアクマの魂を見たんだから
な。しかもLEVEL3）」

士郎さんは俺が運んでいくから、お前は帰ってろ」

俺はなのはを家に帰し、ちょうど来たシャマルに士郎さんを治療し
てもらい、家に連れて帰った

桃子さんと恭弥さんには変な人に絡まれたということでごり押しし
た。恭弥さんは実物を見ているので、反論していたが、結局それで
納得した。まあどうせA'sが終わったら説明するしな

「久々に見たなこれ」

今俺の手には一枚の手紙と、大き目の茶封筒がある
大体、用件は想像出来るが……

はあ〜い。久々に手紙にしてみたよ〜

それで、君に頼まれてたものだけど、もう一つの茶封筒の中に入
てるから

b y 神

俺は言われたとおり、茶封筒を開けると、そこには一冊の真っ白な
本が入ってあった

その本の表紙には同じく何も書かれておらず真っ白で、ページも同
じく何一つ書かれておらず真っ白なままだった

「（はあ。別に、手紙じゃなくても良いだろ

お〜い聞こえてるよな？）」

『聞こえてるよ〜』

「（手紙の件は置いて…きちんと、言ったことはやってくれた

「んだよな？」

『ちゃんとやったよ！！だけど、体のことも考えて言われたこと以外の装備はつけてないよ』

「（それで十分だ。つつか思ったんだけど、そんなこと出来るなら、イノセンス合体させるとかできるんじゃないの？）」

『出来ないことは無いけど。そうしたら君の体一分と持たずに死んじゃうよ？』

「（マジ？）」

『マジ。それに適合率も大幅に下がる。多分50%位になるね』

「（はあ。分かった。一応機能の方は？）」

『君単体じゃあ、それは動かせないよ。あくまでそれは魔力で動くから』

『まあもう一つの機能を使えば君も使えるけど』

「（アイツ専用ってことか。体のほうは？）」

『そのなかに入れといたから。後、一応君をマスター登録してるから』

「（え……でも俺魔法使えないから意味無いんじゃない……）」

『でも、しなきゃもう一個の方も使えないよ。それに二人登録できるようにしてあるから別に大丈夫だよ』

「（そうなのか。で、もう一つの方は？どっちかっていうとそっちの方が重要だぞ）」

『大丈夫抜かりは無いよ。でも、それは普通のデバイスではないからな。分類的にはデバイス型イノセンスと叫ぶところかな』

「（てことは、これもイノセンスの一つってことか？）」

『まあ微妙に違うけど大体そうだね。でも、負担を減らすために他のイノセンスほど強くは無いよ』

『というか、そもそもそれ自体にたいした機能はついてないしね』

「（何所が違うんだ？）」

『簡単に言うと、そのマスターは適合者になる。適合率は人によって違うけど、それと二人目の登録には一人目に登録されているものの許可が必要になってくる。それにそのイノセンス自体に意思は無いから他のみたいに適合者を自分で決めたりはしない』

『あと、それで魔法を使うと、適合率によって威力とかが変わってくるよ』

『誰でも適合できるイノセンスとでも考えてくれれば良いよ』

「（了解。ちなみに俺の適合率は？）」

『うーん。63%ぐらいかな』

「（低くないか？）」

『低いね』

「はあ」

軽く適合率の低さに落ち込みつつも、俺は新たなイノセンスデバイスである
エンゲージメント
“誓約ノ書”を手に取る

「(だけど、これで『デイバイド』に必要な駒はそろった。後は…
……)」

？分断？計画は静かにだが着実に最終段階に進みつつある
デイバイド

24話 110番目のイノセンス(後書き)

ちよつと修正

25話 入院

今ヴィータはシャマルと念話で会話している

どうやら、シグナムがフェイトと、ザフィーラがアルフと闘っているようだ

ああ、後俺が浮いていられるのは、イノセンス服を操って、浮かしているからなのだが、これは服が脇に食い込んで痛いんだよ!!
まあ、いつもみたいに翼出すわけにはいかないからしょうがないけどさ

やっぱり魔法って良いな

「あ……………」

「ん?」

どうやら、なのはが現れたみたいだ

え〜とここってヴィータは闘わないんだよね?

「高町なんとか!」

「(名前くらい憶えてやれよ……………)」

「なのはだつてば!!な・の・は!!はあ〜ヴィータちゃんも」さ
んもお話聞かせてもらうわけにはいかない?もしかしたらただど
手伝えることとかあるかもしれないよ」

「うるせえ!!管理局の人間の言うことなんざ信用できるか!!」

「私管理局の人じゃないもの…民間協力者……………」

「（どっちも大して変わらないと思うんだが……………」

「……………」

「分かってる。ここは……………」

「ヴィータちゃん……………」

「倒すのはまた今度だ！！吼えるグラーフアイゼン！！」

『アイゼンゲホイル』

ヴィータが魔力弾を叩きつける。それを利用してここからの撤退を開始する

「脱出」

俺もヴィータに着いて行く

「よし……………ここまで来れば」

「（うゝん確かこの後なのはが、あの位置からディバインバスター撃ってきてそれをリーゼロッテかアリアのどっちかが防ぐんだよな？じゃあ今日俺来なくても良かったんじゃないのか？ヴィータがしきりに一緒に行こうって言うから一緒にきたが……………」

「ここまで離せば攻撃もこねえ……………次元転送」

しかし、ヴィータの考えとは裏腹になのはは長距離砲撃の準備を始

めた

「まさか撃つのか！？あんな遠くから!？」

「ん？（あれ？魔力の集まり方がディバインバスターと違うような……まさか）」

最悪の考えを頭から拭い去ろうとするが、それを裏付けるようになるのが高らかに言い放った

「スターライト……ブレイカー!!！」

「（マジかよー……）

え、これってどうなるの？リーゼ姉妹は？ていうか、そもそもあの二人でこの砲撃止められんの？ああ……もう!!！）大槌小槌 満満満!!！」

俺は向かってくる桃色の砲撃を巨大化した鉄槌の側面で受けるが……

「つく（このまま押し切られる訳にはいかない!!！）イノセンス発動 最大限!!！コンボ判 剛雷天!!！」

龍を模した雷がなのはスターライトブレイカーとぶつかり合う

「うおおおおおおおおおおおおおおおおオオオオオオオ
!……!」

ドカンッ!!！」

空中で激しい爆発が起き、何とか相殺することには成功したのだが
……

「し、真哉くん!？」

強制発動の影響でメーカーオブエデンが解けてしまった
一応ヴィータに支えられてるので落ちはしていないのだが

「おい!! どういうことだ真哉!! なんでアイツが…管理局の人間
がお前のこと知ってるんだよ!？」

「それは……」

「答えるよ!! 真! 今はそれぐらいにしておけ! ……!! あ、ア
ンタは……」

そして、仮面の男もといリーゼ姉妹のどっちかが来た
ていうか、遅いよ!!

「今は逃げる。闇の書を完成させるんだろ?」

「………分かったよ! 後で絶対話してもらっからな!」

「分かった」

そして、なのはが仮面の男にバインドを掛けられている隙に俺達は
その場を脱出した

「天宮…話してくれるな？」

「……………ああ、分かった」

今日の一件…仮面の男と…話し終えた後、俺の番が回ってきた

「まず、お前と管理局はどういう関係だ？もし、嘘をついたら……………」

「分かってるよ。管理局とは半年くらい前かな？今日シグナムと闘ったフェイトの母親のプレシア・テストロッサ…いや、千年伯爵が起こした事件のときに偶々協力関係になっただけだ」

「テストロッサが？どういうことだ？」

「まあ大まかに説明するとだな……………」

って感じた」

「つまり、そのプレシア・テスタロッサに化けていたアクマを操っていた

千年伯爵によって起きた事件で天宮はイノセンスの所持から管理局で保護され、事件終了後にイノセンス暴走の危険性から管理局に敵対しないことを条件にイノセンスを返されたと。そういうことか？」

「まあそんなところだ。だから正体を隠すためにわざわざ仮面つけたり新しく手に入れた奴だけしか使わなかったんだけどな（俺のことがばれたのは痛い）。そこら辺はグレアムがどうにかするだろう。アイツにとってもここで俺やヴォルケンズが捕まるのは避けたいだろうしな）」

- - -
- - -
- - -
side シグナム

今、天宮から大体の事情を聞いたところだ

『シグナム。今の話だけど本当かしら？』

「（おそろく。まあ気づいているだろうがロストロギアを不法所持している時点で管理局と手を結んではいけないだろう。それにヴィータの話だと相手の方もかなり驚いていたようだからな）」

『そうね』

「事情は分かった。疑ってすまなかったな」

「いや。こっちこそいつか話そうとしていたとはいえ黙っていて悪かった」

私は未だに俯いたまま黙っているヴィータを小突くすると、ヴィータはビクツと体を震わせ、ゆっくりと顔を上げ

「真哉……さっきは怒鳴ってごめん」

「いいよ。元は俺が悪かったんだから」

なでなで

天宮が優しく頭を撫でてやる。すると、ヴィータは恥ずかしそうに再び顔を下に戻した

だが、さっきと違い今度は若干嬉しそうに頬染めながら、じっと黙って天宮に撫でられていた

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

side 真哉

ガタッ

ヴィータの頭を撫でてやっている、2階で何かが倒れたような音がした
急いで、駆けつけると胸を押さえて苦しそうに呻いているはやてが倒れていた

「はやて!?!」「はやてちゃん!?!」

「はやて!?!はやて!?!病院!?!救急車!?!」

「ああ」

「動かすな!?!そっとしておけ」

「うん………」

はやてが検査入院といって入院が決まり、ヴィータとシグナムとシヤマルが帰った後
俺は一人病室に残っていた

「真哉くん、帰らへんの？」

「はやて、あんまり無理するな」

「無理してへんよ。胸がつつただけやって言ったやんか」

「たった半年だけとはいえ、ずっと一緒に生活してたんだぞ？お前の嘘くらい分かるよ」

嘘だ。唯単に俺は知^って^いただ^けだ

だけど、そう言った途端まるで、胸のつかえが取れたようにぼろぼろと涙を流しはじめた

「別に遠慮しなくてもいいんだぞ？泣きたいとき泣けばいいんだ」

「う……うわああああああアアああアアああああアアあああああ
ああああん

死にたくない……死にたくない……！！！！

まだ、真哉くんやヴィータやシグナム、シヤマル、ザフィーラ……
みんなと一緒に生きてたい……！！！！」

「大丈夫だ！！俺が死なせやしない！！ずっと一緒に居てやる……！！！！」

嘘だ。原作通り進めば、このままはやては助かるだろう

「ただ、俺は完全に管理局にたてついた。一度はイノセンスの暴走もあるんで、許してもらえたが今回はそうは行かない。少なくとも、イノセンスは没収される。運が悪ければ、そのまま次元犯罪者として、投獄される可能性もありうる」

「（それ以前にあの計画が成就されれば、俺は……………）」

「ぐすつ……………ほんまか？約束やで？」

「ああ、約束だ……………」

嘘だ……………

「生きるはやて……………俺を」

殺すために」

25話 入院（後書き）

A・Sはもうすぐ簡潔!!

その後は一応オ리지ナルの話の予定です
多分そんなに長くはならないと思います

26話 お見舞い

sideクロノ

「これで、Jが闇の書の主って線は消えたね」

「今回おこった事件でJ＝真哉ということが判明したからな」

「そうだね、真哉くん魔法使えないし

じゃあ一体誰が……………」

「その件でさつきから真哉の周辺を調べてみたんだが……………妙なんだ」

「え……………何が？」

「これだ」

「これって住所？」

「そう。前、確か真哉は引越したって言ってたのに住所が前の家のままになっている」

「ほんとだ……………実は引越してなかったりして」

「その可能性もあったから調べてみたんだが……………これを見てくれ」

ディスプレイに映し出されたのはちょうど家から出てくる家族の姿……………当然そこに真哉の姿はない

sideなのは

「入院？はやてちゃんか？」

「うん……………。昨日の夕方に連絡があったの

そんなに具合は悪くないんだけど、検査とか色々あってしばらくかかるって」

そうなんだ。私はまだはやてちゃんには会ったことは無いけど、心配なの

「そっか……………じゃあ放課後みんなでお見舞いとか行く？」

「え……………良いの!？」

でも、あんまり大勢で押しかけるのははやてちゃんにも悪いんじゃない

……………

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ

お見舞いもどうせなら賑やかな方が良いんじゃない？」

「うん…それはちょっとどうかと思うけど」

「でも、良いと思うよ…ね」

「ありがとう!」

「じゃあ最近来てないけどどうせなら真哉も誘わない？」

真哉くん……

「……………」

「どうしたの？なのは、フェイト？」

「うん。何でも無いよ！」「そうそう」

「ふん。じゃあかけてみるわね」

P r r r P r r r

『お掛けになった電話は電波の届かないところにあるか。電源が入っていないため掛かりません』

「何なのよ！！アイツ！！携帯の電源くらいちゃんと入れときなさいよ！！」

「もしかしたら、はやてちゃんのお見舞いに行ってるんじゃないのかな？」

え！？それってどういっ……

「え？それってどういっこと！？はやてって真哉とも友達なの！？」

私が聞こうとする前にフェイトちゃんがすずかちゃんに聞きました

「うん。というより家族かな？一緒に住んでるって言ってたし」

「……………」

それじゃあまさか闇の書の主って……

『なのは、もしかすると闇の書の主って……』

「うん。とりあえず今日はとりあえずお見舞いに行ってみよう」

.....
.....
.....
.....

side 真哉

「……………!!おい真哉!!」

「ん?なんだ?(もしかしてなのは達のお見舞いの件か?)」

「何か今日あの高町なんと「なのは」なの…なの…ええい!!その高町と他の友達がはやてのお見舞いに来るってシャルが!!」

「(やっぱり、そうか)シャルにこう言ってくれ、もし石田先生とはやてに俺たちのことを黙ってもらおうとき。俺は今遠い親戚の家に住んでるって言っといてくれ

それと、俺もこれからは出来るだけ外出を控える」

「何で?」

「その中の一人に居るだろう月村すずかって女の子は俺とはやてと一緒に住んでることを知ってる

もし、今も住んでることがばれればすぐはやてが主だということもばれる」

「……………ばれた？」

「ちよつとこつち来い」

俺は無理矢理シャマルを引っ張ってエントランスへ戻る

「ちよつ…真哉くん中確認しなくて良いの？」

「その程度の事、俺が対策を立てていないと思ってるのか？」

そして、俺はシャマルの耳に無理矢理イヤホンを付けさせ、自分にも付ける
すると……………

『あのくはやてちゃん少し聞きたいんだけど……………』

イヤホンから聞こえてきたのは紛れも無いのはの声だった

「真哉くん。まさかこれって……………」

「ああ。盗聴器だ」

「盗ちよ…むぐっ」

俺は慌ててシャマルの口を塞ぎ、慌てて周りを見渡す
どうやら、聞かれてはいないようだ

「静かにしろ！分かったか！？」

シャマルは親指と人差し指で丸を作ってOKと言って来た

「それより、ヴィータからの念話の件はちゃんと伝えてくれたんだよな？」

「ええ。その点は大丈夫。石田先生は事情があるんだろって了解してくれたし。はやてちゃんはやっと渋ってたけど、必ず説明するって言ったなら、了承してくれたわ。」

「そうか」

運命のクリスマスまで後11日

27話 アクマ戦は海の中でなの b y 真哉 (前書き)

今回はほんのほんの少し短いです

27話 アクマ戦は海の中でなの by 真哉

sideなのは

『なのは』

「うん（はやてちゃん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

私たちは今まで話していた世間話を一旦打ち切って、例のことを聴くことにしました

「うん？別にええよ。何なん？」

「あの…真哉くんのことなんだけど……」

すると、はやてちゃんは一瞬難しい顔したかと思うと、すぐもとの顔に戻って

「ああ。真哉くん。二ヶ月くらい前からかな？名前は忘れたけど、遠い親戚のところに引っともうたんよ」

え……

「じゃ、じゃあ真哉くんは今はやてちゃんの家にはいないの!？」

「そっちゃん」

「（フエイトちゃんにねって……）」

『この話が本当ならその親戚って言うのが怪しいね』

「（そうだね。クロノくんに言って調べてもらおうよ）」

『そうだね』

.....
.....
.....

side 真哉

「ふうちゃんと言ってはくれていたようだな」

そうやら、ちゃんとはやては約束を守ってくれたようだ
俺たちは今まで付けていたイヤホンを外した

「言ったわよ！私を何だと思ってるの！？」

「料理下手」

「っな！そつちだって、そうじゃない！！」

「ふざけるな！俺の料理とお前のゴミを一緒にするな！！」

この前のだって、どうせこいつが要らん物を入れたせいだろ！！

「人が作ったものをゴミなんて失礼よ！！」

「何故料理にウコンを直接入れようなんて考えが出るんだ！？お前は漢方でも作りたいのか？」

「そ、そっちだって、なんでお鍋に直接水銀なんて入れようとするの！？さすがに止めるわよ！！」

「だって綺麗じゃん」

「っな！！そんな理由で……………」

「そんな理由だと！？料理に見栄えは大事だろ！！お前なんて、この前虹色の味噌汁作ってたじゃねーか！！しかもあれ、発光してたぞ！！」

「き、綺麗じゃない」

「不気味だよ！！自分で発光する味噌汁なんて食べたくないわ！！それが許されるのはト コの中だけだ！！大体お前は……………」

「そっちだって……………」

「ハア…ハア…ハア」

「ハア…この不毛な争いは一旦止めにしよう。疲れた」

「そ、そうね。もうそろそろあの子達も病室から出てくるだろうし」

「そのことだけど、今日は俺行くとこあるからはやてには明日にでも行ってくつて言つといてくれ」

「分かったわ」

「はぁ…全然見つからねー」

俺は今アクマの転送ポイントを探そうとしているのだが、アクマが全く居ないので今まで遭遇してきたところを回っているが、全く見当たらない

「(でも、本当に一体何所なんだ？まあ、でも街中じゃあ目立つし、やっぱり山の中か？でもさつきも探したけど怪しいものなんて何所にも無かったし)

はあ……なんかこう誰も来なくて、そして、見つかりにくくて人を襲いやすいところって何所かに無いかな？」

そんなことを考えていると

ポツポツ

「ん？雨が………(今日はそろそろ帰るか。あれ？ちょっと待て雨………水)

………まさか

「はは…あるじゃないかこんなに近くに見つかりにくくて、誰も近づかない場所が」

俺は眼下を見る。そこにあるのは

「海の中ってか？そりゃそうだよ。誰が好き好んで12月に海入るんだよ。それにここには砂浜なんてものもないしな

（それに、原作にはあんまり深すぎると、水圧で潰れるらしいからそんなに深くは無いだろうしな）」

俺がどうやって破壊するかの算段を立てていると、左目に反応があった

「ご丁寧に水中で待ってやがる。水中戦でやるうってか（相手は大体水深50mって所か。かなりきついな。だけど……）止まるわけには行かないよな！！イノセンス発動！！」

俺は出来るだけ無駄な動きを控えるため。メーカーオブエデンで翼を形成して、海中に突っ込む

水深10…20…30…40…50

たどり着いた場所にはアクマ…目測で20体前後ちらほらLEVE L3の姿も見える

そして、そのアクマの群れの奥にアースラのものよりも大きな転送装置

「（見つけた。一気に行く！！）」

俺は腰のホルスターにある。ジャッジメントを取り出す。ちなみにジャッジメントはあの後一旦取りに帰った

「（原罪の……）つくー！」

その瞬間目の前のアクマに気を取られていた俺は下から来るアクマに気づかなかった

アクマは俺の足首を持つと、どンドン下へ引きづりおろそうとする

「（マズイ。水圧で体が………つくー！ジャツジメントー！）」

ジャツジメントの弾丸が俺の足首を引つ張っていたアクマを打ち抜き、俺が顔を上げると、俺の周りには………

「（つちー！これじゃあ原罪の矢での殲滅は不可能かというか、撃つたら、その隙に確実に殺られるさつきみたいに一体なら大丈夫だろうが）」

俺は鉄槌を取り出し、右手に鉄槌を構える

「（まあでも、こんなところで死ぬつもりはこれっぽっちも無いけどなー！）」

俺は近くにいたアクマに鉄槌を叩きつける

「天地盤回 木判！！水よ退いてくれ！！」

すると、俺の周りの水が退き、その隙をつきにアクマ達が一齐に攻撃を仕掛けてくる

「げほっ…げほっ…面倒くさい！！コンボ判 剛雷天！！」

剛雷天によって発生した雷が海水と接触し、辺りのアクマに感電し

て、次々破壊されていく
が、さすがと言うべきか、LEVEL3は動けずにいるようだが、
まだ破壊されてはいないようだ

「これで終いだ。ジャツジメント！」

パンッ

放たれた六発の銃弾が次々アクマの元へと飛んで行き、残っていた
全てのアクマが破壊された

「後はあれだけだな

ジャツジメント装填……原罪の矢」

ドカンッ

爆発の影響で、俺も一緒に吹き飛ばされる
俺は一旦海上に上がり息を整えた

「ちよつとやり過ぎたかな？」

元あった場所に行き、破壊されたことを確認すると、海水で冷えた
体に鞭打って、帰路に着いた

「はつくしゅん！（風邪引いたかな？）」

おまけ

次の日の朝のニュース

『昨日夕方 県海鳴市付近の海上で大量の魚の死骸が浮いているのが、見つかりました』

地元住民の話によると、そのすぐ後水上で大きな爆発があったと言うことで、現在その魚と爆発の因果関係を調べています
今朝のニュースをお伝えしました』

「はつくしゅん!! (……………俺は悪くない……………はず)」

その日から真哉は見事に風邪を引いたらしい

28話 秘めたる思い

「はつくしゅん!」

「38.5 …完全に風邪だな

今日の蒐集は私が代わりにやっておく。それに今日シヤマルがお見舞いに行ったときについてに薬を貰ってきてくれるそうだ」

「すまない。シグナム……」

「大丈夫だ。だから早く寝ておけ」

昨日の水中戦の影響で、今、俺は風邪で寝込んでいる

「はあ。でも今日ははやてのお見舞いに行く予定だったのにな」

「それは、しょうがないだろ。風邪を引いてるんだ

今日は諦める」

「はあ」

俺が落ち込んでいるというのに、その気持ちとは裏腹に、空には昨日とは打って変わった雲ひとつ無い青空が広がっている
そのせいで、余計に沈んでいると

バンッ

「真哉!!!大丈夫か!?!」

「あ、ああ唯の風邪だからそんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「良かった〜」

ヴィータは嬉しそうに笑いながら、俺が寝ているベッドの傍によつて来る

風邪のせいでテンションが上がらない俺には若干つらい

まあ、でもこういうところが、ヴィータの良い所なんだろうし、こんなにも心配してくれるのは単純に嬉しい
しかし、唯の風邪に大袈裟だとは思う

「ヴィータ、雨宮は風邪を引いてるんだ。今日はゆっくり寝かせてやれ」

「分かったよ……でも！何かあったらすぐに言ってくれよな！！
すぐに行くから！！」

「ああ、ありがとう。ヴィータ」

「うん！！」

「（俺も一眠りするか）」

.....
.....
.....

side シャマル

私は今はやてちゃんのお見舞いと真哉くんのお薬を貰いに海鳴大学病院まで来ています

「いんにちは」

「あ、シャマル。ほんまありがとうな

あれ？今日は真哉くんは？」

「そのことなんです、真哉くん風邪引いちゃって……………」

「それ、ほんまか！？」

真哉くんの件を話した瞬間はやてちゃんは私の方に身を乗り出して、聞いてきた

「え、ええ

だから、今日はお見舞いのついでに真哉くんのお薬も貰おうと思
って」

「そうなんか……………」

じゃあ真哉くんにはちゃんとご飯食べて、薬飲んで、きちんと寝
とくように言っというてな？」

「分かりました！」

「そうですか……あの真哉くんが…分かりました

一応お薬出しておきますが、それで熱が下がらないようなら、来てください

それと、お薬は食後で出来れば消化の良い物を食べさせてあげてください」

「分かりました」

私は石田先生からお薬の入った包みを受け取り、久々にスーパーに行くことにした

ちなみに、スーパーに行くのが久々なのは、みんな（シグナム、ヴィータ、ザフィーラ）が、シャマルや真哉の料理を恐れて、コンビニ弁当などを最近では食べているからである

「（私だって、お粥くらいならちゃんと……）」

そうして、思い出すのは数々の失敗。真哉の場合、調理そのものは普通いや、かなり上手いくらいなのだが、要らん物（塩酸とか硫酸とか）を入れるので、それさえしなければ、普通に食べれる料理が作れると判明した（本人が入れるのを止めないので、未だに料理は作らせてもらえないが）

だが、シャマルの場合根本的に調理法そのものがおかしい。よって料理に関して言えば今現在は八神家においては、真哉よりも立場的

に最も低い立ち位置に居る。そして、こんな感じに自分の料理を認めさせようとしては失敗し、さらに地位が落ちていくという悪循環に陥っている

しかし、未だにこの悪循環に気づかないシャマルは意気揚々とスパーへと向かっていくのだった

- - -
- - -
- - -
side ヴイータ

「暇だ……………」

今日はザフィーラと真哉で蒐集の予定だったが、真哉が風邪で寝込んでいたためシグナムが代わりに行っている。それにシャマルはやてのお見舞いで病院。

すなわち、今は家で真哉と二人なのだが、さっきも言ったように、真哉は風邪で寝込んでいる
そのため、全くといっていいほどすることがない

「はあ〜シャマルも居ないし、居るのは風邪で寝ている真哉だけか……………ん？二人だけ？」

ここで、ヴィータは気づいた。今、家には真哉と自分の二人だけだということに

いつもは二人になっても特に意識するようなことはまず無い。というかヴィータは基本恥ずかしがりやなところが、あるので、万に一つもそんなことは起こらないのだが、今真哉は寝ているのであるが、ここで一つの問題が生じた

前にはやてと交わした、あの約束である

『はやて!!! 正々堂々勝負だ!!!』

そう忘れているかもしれないが、今現在はやてとヴィータは真哉を巡って火花を散らしている真つ最中である。それ自体はたいした問題ではない。だがそれはあくまで、正々堂々の話なのだ。今このとき無防備に寝ている真哉に手を出すのは、約束破りも良い所なのである

しかも、正々堂々というのは自分から言い出したことだ。それを自分から破ることはさすがに気が引ける

「(でも、ばれなきゃ……………)」

「真哉……………」

「ZZZZZZZZZZ……………」

真哉の部屋には当たり前のことだが、未だに寝ている真哉が横たわっている

その寝顔は熱のせいで、頬が若干赤くなっている部分を除けばまるで、死んでいるかのようにだった

そんな時、ふと、ある情景が頭に浮かんできた

「（真哉…あの時なんで血なんか吐いてたんだろ？
あの時は本当にびっくりした。真哉が…死んじゃうんじゃないか
って）」

「ZZZZZZZZZZ……………」

そんなことを思っていると、未だに死んだように寝ているこの寝顔
が今にも消えてしまいそうに儚く思えてきた

「真哉あ……………」

徐々に顔と顔との距離が縮まっていく

そして、あと1cmでくっつくといったとき

「真哉くん、お薬……………」

「じゃ、シヤマル!？」

すると、シヤマルは怪しげな笑みを浮かべて

「あら〜ヴィータちゃん真哉くんにそんなに顔をくっつけて何して
るの?」

「な、何もしてねーよ!」

「はやてちゃんには内緒にしといてあげるわ」

「だから、何もしてないって!」

「つたく、一体どうしたんだ？」

- - -
- - -
- - -
- - -

side 真哉

気持ちよく寝ていたと思ったら、急に辺りが騒がしくなり目を開けてみる

「つたく、一体どうしたんだ？」

「し、真哉!？」

「うふふ。ヴィータちゃん今やって貰えば？」

すると、顔を真っ赤にしたヴィータが驚いたようにこっちを見てきた

「う、うるせえ!！」

そういうと、ヴィータは真っ赤な顔のまま部屋から飛び出していった

「なあシャマル。俺が寝てる間に何があったんだ？」

すると、シャマルは意味ありげな表情をしながら、一言「さあ？」
と言った

「それで、シャマルは何しに来たんだ？」

「あーそうそう忘れるところだった。石田先生が消化に良い物食べ

させてあげて、って言ってたからお粥作ったの」

え、……………」

「作ったってお前が？」

「大丈夫よ。お粥くらいさすがの私でも作れるわよ」

「お粥ってお前の持つてるそれか？」

「そっよ」

「風邪のせいか？お前の持つてる鍋の中は緑色に見えるんだが…

……………」

「き、気のせい。気のせい　はい、あ〜ん」

やばい。あれを食べたら、風邪とか以前の問題で永遠の眠りにつき
そうな気がする

「ちよ、ちよっと待っ……………むぐっ」

そして、俺の意識は闇へと堕ちていった

次の日

「まさか…な」

「ああ」

「「シヤマルの料理を食べて、風邪が治るなんて……………」」

「そこまで言わなくても……………」

「あれじゃねえか？気絶したおかげで、ゆっくり休めたんじゃないのか？」

「「ああ、そういうことか」

そういう見方もあるな

「もう、みんなったら」

「それで、雨宮に少し提案があるのだが……………」

ん？シグナムが？珍しいな

「どうしたんだ？」

「私と勝負しろ」

「……………は？(は？)」

28話 秘めたる思い（後書き）

次回は真哉VSシグナムをする予定です

29話 真哉VSシグナム(前書き)

デバイス発言が日本語になったり、英語とかになったりしてすみません。今度からは出来るだけ日本語で統一したいと思います

29話 真哉VSシグナム

「私と勝負しろ」

「……………は？（は？）」

ちよ、まじこの人何言ってるの？

「お前今の状況ちゃんと理解してる？」

「ああ。いや前からお前とは一度手合わせをしたいと思っていたのだ」

つく……………この戦闘狂がバトルマニア

「でも、今は一刻も早く蒐集を急がないと……………
それに、こんなところで戦ったら、確実に管理局にばれるんじゃない……………」

「その点は心配ない。今日の蒐集の後にその管理外世界すればいいし、今日はザフィーラも一緒に来る予定だし、
結果を張れば、早々見つかることも無いだろう」

「で、でも俺まだ病み上がりだから……………」

すると、シグナムが歩み寄ってきたかと思うと、自分のおでこを俺

に付けてきた

「っっな！」／／／

「シグナム！な、何してんだよ！！」

「む、いや病み上がりというから熱を測ってみただけだが、熱は無
いようだな

で、それがどうかしたのか？」

「っぐ……………（なんで、シグナムはこんなに自然に出来るんだ？私
なんか……………）」

A・唯単に真哉のことを強い子供程度にしか思っていないからです

「ん？天宮、顔が赤いがどうかしたのか？」

「なんでもない（でも、改めて考えれば、俺、剣の扱いなんて全然
分からないし、これも良い機会……………なのか？）」

こうして、寝起き早々今日の予定が決まってしまった

「ああ、空が青いな」

「お前は何を言っているんだ？」

「何でも……はあ」

「諦めが悪いぞ」

「分かってるけど……はあ」

現在地球では午後三時くらいといったところだろう

午前中にはやてのお見舞いに行って、午後からは今朝言ったとおり、
今俺はシグナム、ザフィーラとともに蒐集に来ている

「これで、一通り終わったな

では、早速……」

「家へ帰ろうー！」

ガシッ

「へ？」

「まだ、勝負をしていない」

「はあ……はいはい、分かったよ
じゃあ、ザフィーラ結界頼んだ」

「分かった」

「（はあ……マジでやるのかよ

ま、良いか。でもやるならこっちも本気で行かなきゃな）」

シグナムが剣だけということもあって、俺が使うのは基本的に六幻以外使わない。それに俺は魔法が使えないので、シグナムも飛行魔法は使わないということになっている

「じゃあさっさと……終わらせてもらおうぞ!!」

今の俺は今のところ体が幼いせいなのか完全に身体能力を出し切ることが出来ないので、原作の神田ほどの速さはないが、普通の人間からしたら異常なほどの速さが出ているだろう

俺は剣の扱いは素人なのでその速さを生かして、高速で上段から刀を振り下ろす
もちろん非殺傷設定で

しかし、相手はヴォルケンリッターの将唯速だけの素人の攻撃が早々通るはずも無く
もう片方の手に持っていた。鞘によって防がれる
そして……

「レヴァンティン！！」

『シユランゲフォルム』

「っげ（早速それかよ！！）」

その時、レヴァンティンの根元からカートリッジが一つ消費され、レヴァンティンはもう一つの蛇腹剣の形態である、シユランゲフォルムへと形を変え、俺の背後から攻撃を加えようとする

「（このまま。終わるか！！）」『二幻刀』！！」

が、やはり、神様にもらった身体能力のおかげで攻撃をいち早く察知できた俺は二幻刀で出来たもう一つの刀で、迫り来るレヴァンティンの刃をそらす
そこで、俺たちはお互い一旦距離をとる

「さすが、シグナムあの攻撃を見切られるとはな」

「それを言うならそっちこそ、魔法が使えない身でよくあんな速さが出せるものだ」

速さだけで言えば、テスタロッツサよりも速いぞ。お前人間か？」

「H A H A H A H A（マジで!?!）」

俺自身まだ完全に扱いきれてるわけじゃないし、実感もそんなに無
いけどそんなに速いの!?!

これで、身体強化魔法とか使ったらどうなるんだろう？

「まあ良い。続きをはじめろぞ」

「おお!」

.....
.....
.....
S i d e ザ フ ィ ー ラ

「.....（これはすごいな）」

シグナムは鞘で防いではレヴァンティンを振るい、真哉は片方の剣
で防いでもう片方で攻撃する

良く見ればいたって簡単な動きの応酬だが、二人とも如何せん早
すぎる。注意してみても、ほとんど残像しか見えないほどに

その時

「はあ!」

「っぐ.....」

その時、シグナムの振るった刀を真哉が思わず両手の刀をクロスさ

せて防ぐ

が、その隙に空いた脇腹にシグナムが鞘で殴る
咄嗟に後ろに跳んで交わしたが微妙に脇腹にかすったようで顔を
かめている

しかし、それでも一応構えを崩さないのはさすがといったところか

「(さつきからこういのが多くなってきたな)」

当然のことと言えば確かにそうだ。シグナムは何年もの間、刀を使
つてきたのだ。それに比べて真哉は刀を手にしたのは大体二ヶ月前
どれだけ速くても何十回も同じことをされれば嫌でも目が慣れてく
る。そうなったら、剣の腕が上のシグナムが押してくるのは当然と
いえるだろう

「(どつちにしろ。次で決まるか)」

それにしても、シグナム楽しそうだな」

- - -
- - -
- - -

sideシグナム・真哉

「(速いな。私でもぎりぎりだ。剣の腕がもう少し上手ければ間違
いなく今頃やられていたのは私だろう。だが、ようやく目が追いつ
いてきた

こんなに強い者と戦って楽しかったのは何時ぶりだろう。故に、
これで終わるのは心苦しい。だが………」

「(強い。さすがに、剣の腕じゃ比べ物にならない。動きもそろそ

る見切られてきた

さすがは剣の騎士といったところか。だから……………」

「（次で決める！！）」

「レヴァンティン、カートリッジロード……」

『エクスプロージョン』

レヴァンティンの刀身に炎がまとわりつく

「紫電 「二幻 「

「一閃！！」 『八花螭螂』！！」

そして、斬撃同士がぶつかろうとした、その時……………

「真哉、シグナム！！管理局だ！！」

「何！？」

驚いた俺たちは技を解き、ザフィーラの方に向き直る

「いや、結構楽しかったよ」

「まさか……真哉もバトルマニア戦闘狂に!？」

「そうかもね」

「では真哉。明日また模擬戦するか？」

「いや…マジで遠慮しときます」

即行で土下座……

「冗談だ」

「て言うか、何時からシグナムも真哉のこと名前で呼ぶようになったんだ?……まさか!シグナムも……」

ヴィータが何かぶつぶつ言っていたけど。今日の模擬戦は中々楽しかったのは事実だ

「(この家でみんなと過ごせるのもあと少しか)」

運命のクリスマス・イブまで後9日

終わりのときはすぐ近くまで迫ってきている

30話 イブ

来た。いや、来てしまった

12月24日……

世間で言うクリスマス・イブ。しかし、残念ながら俺にはクリスマスと一緒に過ごすような恋人なんて居るはずもないし、というか、今は正直言っただけどころじゃないのが現状だ

「（ようやく来た。このときが。今まで、さんざん練ってきた計画だ絶対に上手くやってみせる。だから……）」

足のホルスターに白銀の銃を入れ、胸に十字架のペンダントを付け、腕に時計を巻き、指に指輪をはめ、懐に鑿を入れ、腰に小槌と、日本刀を差し、そして、上からコートを着る

「行こう。海鳴病院へ」

「キキッ」

「ごめんごめん。最近出番無かったから忘れて……って引っ掻くなよ！
じゃあ改めて行こうか」

そう言っつて。俺は歩き出した

終わりを、始めるために

「はやて、ごめんね
あんまり会いに来れなくて……」

「ううん。元気やったか？」

「うん！めっちゃめっちゃ元気！！」

「真哉くんもラウも来てくれてありがとうな」

「いや、こつちこそ中々来れる機会を作れなくて悪いな」

「別に気にせんでもええんよ。今日はみんな来てくれたんやし」

コンコン

「（来たか）」

「こんにちは」

「あれ？ずずかちゃんや。はい、どうぞ」

「「「「こんにちは」」」」

さすがにここで、イレギュラーなことは起きず、きちんと、なのは達も付いて来ている。そのことに一旦、俺は胸を撫で下ろす

「今日は皆さんお揃いですか？」

「こんにちは。初めまし…ってアンタ！親戚の人の家に行ったんじやなかったの！？ていうかその猿何？」

「ああ、あつちの方は大分片付いたからな。もうすぐしたら、学校にもまた通い始めるよ

長いこと休みすぎちゃったしな

それと、この猿はラウ・シーミンっていう俺のペットだ」

「ふん」

「アリサちゃん！それより今日は！！」

「あ！そうだ！」

「で、今日は何で来てくれたん？」

「「セーの！」」

アリサとすずかの二人は隠していたプレゼントを出した。未だになのはとフェイトは後ろでおろおろしている

「「サプライズプレゼント！」」

「今日はイブだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「ほんまか？ありがとうな」

「みんなで選んできたんだよ」「後で開けてみてね」

「うん！」

「（ここまでは一応計画通り）」

なのは達は家に帰り（本当は帰っていないが）ザフィーラ以外のヴォルケンリッターも帰ってしまった
（こっちも半島に帰ってはいないが）

「真哉くんは帰らんで良いの？」

「まあ今日ぐらいはここで、もうちょっとゆっくりして行くよ」

実のところ、俺がいるのはシグナム達に頼まれたからなのだが

「（俺にとっては都合がいいけどな）」

そして、俺とはやてが世間話で盛り上がっているとき
急にはやてが苦しみだした

「っぐー!ー!」

「はやて!?!（来たか）」

そして、次の瞬間はやての周りが輝きだし

「「……………!!」」

すると、闇の書さんの手に出来た球体が一気に直径10mほどに膨れ上がる

「主の願いそのままに……………!!」

side 真哉

もうすぐ着こうかというところで辺りの雰囲気之急に変わった
というか、眼下に見えていた人が全員消えた

「（結界か）お！見えてきた
なのは！！フェイト！！」

ビルの陰に隠れていたなのは達の元へ向かう

「アンタ！！」

いきなりアルフが拳を構えて殴りかかってくるが、クラウン・クラウンを発動させ、退魔ノ剣で受け止める

「いきなりなんだよ」

「はあ！？アンタ自分が何したか「やめて！アルフ！！」うっ分かったよフェイト」

アルフは仕方なさそうに引いていく

「なのは！！はやては！？」

我ながら結構良い演技だと思う

「それが……………」

申し訳なさそうに、未だにビルの上に立っている後のリインフォー
スを指差す

「まさか……………」

「闇の書は完成させちゃ駄目だったの！！元々闇の…夜天の書は改
悪されていて、もうすぐ暴走が始まっちゃうの！！」

「だったら俺たちは今まで何のためにやってきたんだよ……………！！」

本当に我ながらたいした演技力だと思う

「真哉く「俺も行く！」え！？」

「はやてを助ける！！」

俺、将来、俳優にでもなろうかな？

「（っち！どのタイミングなんだ！？）」

俺がタイミングを計りかねていると、ちょうどアルフとユーノがリ
インフォースにバインドを掛けていた

「碎け」

『ブレイカー』

『プラズマスマッシュャー』 『デイバインバスターエクステンション』

「ファイヤー！」 「シュート！」

「盾」

『タンクシールド』

リインフォースはなのはとフェイトの両サイドからの攻撃にも何食
わぬ顔で防ぐ

- - -
sideなのは

「真哉くん！！フェイトちゃん、真哉くんが！！」

「刃をもって血に染めよ」

『ブラッディーダガー』

「穿てブラッディーダガー」

「つく！！」

真哉くんまで……………

でも、そういえば真哉くん吸い込まれるとき笑ってたような……………
気のせいだよね？

31話 始動(前書き)

後、1、2話でA・Sが終わって、オリジナルの話が入ります！オリジナルはそんなに長くはならないと思います

31話 始動

「うっ……………ここは？」

辺りを見回す。そこはいつもと家具の配置も何も変わっていない俺の部屋が広がっていた

「あれ？俺、何してたんだっけ？」

必死に思い出そうとするが頭に霧が掛かったように、全く思い出せない

「うっん。なんだっけかなり重要なことだった気が「真哉」。朝ごはんだぞ」今行く（ご飯食べてからでいいか）

ヴィータの声を聞き、俺は頭の霧を振り払うように、リビングへと続く階段を足早に下りていった

「……………いただきます」

「やっぱり、はやての料理はギガうまだな!!」

「ありがとうな。ヴィータ

でも、真哉くんが寝坊なんて珍しいな」

「ああ……………」

その通り、俺がしたへ着いたときには既に全員が席についていた。朝が弱いヴィータもだ

「何かあったんか？」

はやてが心配そうに俺に聞いてくる。隠すようなことではないので、俺ははやて達に何か忘れてしているような気がするかと告げた

「うん、そんな重要なことあったかな？シグナムは何か知ってる？」

「いえ。私は」

「そうやんな。それ勘違いちゃうん？」

「そうなのかな？」

「もう、そんなこと良いじゃん。なあ真哉、一緒にゲームしようぜ
!はやても!」

「何時から歩けるようになったんだ？」

そのとき、みんなの顔に影が差した気がした

「え？」

「な、何言ってるんだ？真哉？まるで、はやてが歩けないみたいない方して」

「（これは、夢だ。俺自身が作り出した幻に過ぎない
何故忘れていたんだ？こんな大事なことを。それに早くしなければ、はやてが管理者権限を取り戻してしまう。そうならば、俺の計画がばれる可能性が出てくる）」

「冗談だよ。それより、すまない。確か今日やることあったからゲームはまた今度な」

俺は立ち上がって部屋へ向かおうとしたとき、ヴィータが俺の服のすそを引っ張った

「ええ〜。そんなの別に今度で良いじゃんか〜
それとも、そんなに重要なことなのか？」

るんだぞ！！はやてだつて病氣なんかにならなくて済むのに！！何でだよ！！真哉はアタシ達のことを嫌いになつたのか！？」

そういうわけじゃない。確かにここでははやては普通の女の子として過ごすことが出来るだけ……

「そういうんじゃない………だつたら聞くけど、ヴィータは現実のはやてが死んでもいいのか？」

「……………！！それは……………」

「ここは幻の世界だ。俺が自分で作り出した

確かにここは理想だ。そりゃあ当然だ。ここは俺にとっての夢の世界なんだから

だけど、夢つて言うのは、いずれ覚めるものだ。遅かれ早かれなだつたらそんな夢なんて曖昧なものなんかに縋るより夢みたいな現実を追い求める方がよっぽど良いと思わないか？それにさ、夢はこれで完結して、そこから先への進歩なんてものは無いけど。現実の可能性は無限に広がってるんだぜ？もしかしたら、俺が夢にも思わないようなもつと幸福な未来が待ってるかもしれないんだぞ？それを見す見す見逃して夢を見続けるなんてことは、俺には出来ない」

「……………じゃあ約束してくれるんか？」

今まで、口を閉じていた。はやてが顔を上げて聞いてきた

「ああ！！俺がこんな夢なんかよりももつと素晴らしい現実をプレゼントしてやるよ！！」

「ほんまか？」

「はやて………今日は12月24日、クリスマス・イブだぜ？それぐらいのこと起きなくてどうするんだよ」

「ふふっ…そういえば、そうやな

でも、約束破ったら許さへんで？」

若干黒い笑みを浮かべながら、顔を近づけてくる

「あ、ああ（こついつときの雰囲気は現実リアルのはやてと変わらないな。さすが子狸！！）」

「何か言ったか？」

ビシッ「いえ、何でもありません！！」

軍人でも通用するような完璧な敬礼をして、俺は作業をするために二階の自分の部屋へと上がった

「さつさとしなきゃ。始まる前に計画が破綻しちゃあ元も子もないしな

じゃあ早速……………イノセンス発動!!」

俺は真っ白な本のイノセンス…エンゲージメントを手に取り発動させる

すると、何も描かれていなかった表紙に黒い十字架が刻まれていく

「へ〜発動すると、こうなるのか。ま、良いか）エンゲージメント、結合

時間がない。さつさと、パスを繋いでくれ」

俺の呼びかけに呼応するかのようにエンゲージメントの光が強まっていく

「（後はイノセンスの発動に集中して、待ってれば終わりだ）」

真っ暗な部屋の中、あるのはイノセンスが放つ光のみ
そして、俺はベッドの上で静かに目を閉じた

一体どれくらいの間がたったのだろうか

徐々にエンゲージメントから光が弱くなっていく

俺は、それを確認した後、エンゲージメントを開いてみる

1ページ目の上部には「夜天ノ魔導書」と刻まれている

同じく次のページを開くと先ほどと同じ場所に今度は「祝福ノ風」
Reinforce
と刻まれている

俺はゆっくりと発動を解き、エンゲージメントを閉じる

「ふん、リインフォースは融合機扱って所か

これで、ファーストフェイズ第一段階はクリア。セカンドフェイズ第二段階はおそらく大丈夫だろう。

となると、やっぱり一番の難所は最終段階か
ファイナルフェイズ

あれ、結構運頼りなんだよな。ま、良いか。用事も終わったし、

そろそろ外も片付く頃だろう

えっと、クラウン・クラウン発動！はあ……………面倒くさい。さ

っさと出るぞ！！」

俺は右手に持っている大剣を一気に振り下ろす

そして、次に目に映ったのは大好きな家族の姿だった

32話 素朴な疑問

sideはやて

「私こんな望んでない。それは貴女も同じはずや。違うか?」

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています。だから私も騎士達と同じように貴女を愛しく思います。だから、あなたを殺してしまっ自分自身が許せない」

「……………」

「自分ではどうにも出来ない力の暴走。貴女を侵食することも、暴走して貴女を喰らい尽くすことも、止められない」

そんなんは分かってる。でも……………」

「覚醒のとき少しは分かったんよ。望むように生きられない悲しさ、私にも少しは分かる。シグナム達も同じや、ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた

せやけど、忘れたらあかん。貴女のマスターは今は私や。マスターの言うことはちゃんと聞かなあかん」

そうや、今は他の誰でもない、私がマスターや!そんなこと絶対させへん!!

「名前をあげる。もう闇の書とか呪いの魔導書なんて言わせへん。私が言わせへん

s i d e はやて

「夜天の主の名において、汝に新たな名前を送る。強く支えるもの。幸運を呼ぶ風。祝福のエアール……………」

リインフォース

「

「新名称リインフォース認識。管理者権限の使用が可能になります。少し待ってください。妙な反応が……………消えました」

「なんともないんやろ？」

「はい。でも防御プログラムの暴走が止まります。管理から離された膨大な力が直暴れだします」

「ん~~~~まあ何とかしよう。ほな行こかりインフォース」

「はい。我が主」

でも、なんやろさっきの妙な反応って何か嫌な予感がするけど……
…まあその時はその時や!!

「管理者権限発動」

「防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。数分ですが、暴走開始の遅延が出来ます」

「うん。それだけあったら十分や。リンカーコア送還。守護騎士システム破損修復

おいで、私の騎士達」

「あのマスター……………」

「ん？また変な反応でもあったんか？」

「いえ、その……………真哉さんがまだ中にいるようなのですが……
あ、ちょうど今出られたようです」

「ふふっ真哉くん。珍しくのろまさんやったな。じゃありインフォース私の杖と甲冑を」

「はい」

- - -
- - -
- - -
side 真哉

「（は？何で俺こんな微妙な時間帯に？ものすごく居ずらいんだけど……）」

今の状況は簡単に言つと後ろには真つ白な球体 おそらくはやてがいるところ

それを囲むようにヴォルケンスのみんな目を閉じながら立っていて、俺も何故かその四人と一緒に白い球体を囲むように立っている

「ヴィータちゃん！」「シグナム！」

俺の心配は！？良し！とりあえず……

「我ら夜天の主の下に集いし騎士」「俺は違っけどな！」

「主ある限り我らの魂尽きることなし」「俺は尽きるだろうけどな！」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」「自由時間無しですか！？」

「我が主…夜天の王…主はやての名の下に！！」「王ではなく女王だけだな！！！」

ドガッ

「ぐはっ……………」

バキッ

「じふっ……………」

バシッ

「痛ッ！」

「……………」
「タ口出しすんじゃないねえ……………」

「……………」

バキヤッ

「ぐはっ……………」
「……………」
「……………」

四人の拳が俺の顔に突き刺さる

ふっあまりの居ずらさに思わず全員の言葉に突っ込んでしまった……………」

……………」
orz

その結果がこのヴォルケンス全員にリンチという現状だよ……………」

パリーン

その時、後ろの白い球体が砕けた

そして、その中から大切な最後の家族が顔を出した

「おかえり!!はやて!!」

「うん!!ただいま!!」

「はやてちゃん!!」

「夜天の主の元に集え。祝福の風リインフォースセーラーズ
アップ!!」

はやての周りにバリアジャケットが装備される

「はやて……………」

「うん」

「すみません」

「はやてちゃん私達……………」

「みんな分かってる。リインフォースが教えてくれた。せやけど、
今は……………お帰りみんな」

「う……………うああああああああああああああああああああ
ああああ

「はやて!!はやて!!はやて!!」

ううん。なんか感動的なシーンになってるな。俺こいつの得意な
方じゃないんだよな
よし!それじゃあ……………

「なあ、はやて………」

「ん？どうしたんや？」

はやては未だに泣いているヴィータを抱きしめながら、こちらに向いた

そして、この世界でまあ絶対に言ったら、いけないのであるつことを口にしてしまった

「今更だけどみんなのその服恥ずかしくねーの？」

その時、空気が凍った気がした

32話 素朴な疑問（後書き）

ちなみに真哉くんは普通の服で来ています。まあバリアジャケットとかないので

33話 魔法少女が怒ると仕事が早く終わる？

ガシッ

次に聞いたのはそんな音だった。恐る恐る後ろを……………見れなかったあまりに頭を強く掴まれすぎていて、頭を回転させることさえ出来なかった。だけど。長い桃色の髪の毛が見えた

「H A H A H A H A H A

そんな強く頭掴まないでくださいよ。シグナムさん」

「……………」

何か喋れよ——————!!!!!!

そして、今まで後ろに向いていた注意を目の前に向けてみる。その時手足が急に動かなくなった

「（これは、もしかして……………）不可視のバインドか……………って落ち着いてる場合じゃねえよ!!!!!!」

これをするって、ことは……………（あの悪魔は一体どこから狙ってるんだ!?!）

「エクセリオンバスター ブレイクシュート」

「上か! って分かったからってどうすりゃ良いの!?!」

そんなバカなことしてる間にも、桃色の光は俺に向かって突き進んでくる。さらにいつの間にかは知らないが、他のみんなも俺の傍か

ら退避している

「（つく！防御しないと……………！！ん？防御？ああ、あれがあった）
『抱擁ノ庭』！」

俺の周りにイノセンスで出来た蔭が絡まりあい、俺の周りをドーム
状に囲んだ

さすがに、イノセンスで最強の防御力を誇るメーカーオブエデンを
貫くことは、なのはでも無理だったみたいだ。まあ、まさか、初め
の抱擁ノ庭をこんなことに使うとは思わなかったが……………

「……………つち！！……………」（ユーノ、ザフ
イーラ以外）

「ま、まあまあみんな落ち着い……………ひっ」

「ユーノ（君）は黙ってて」

何かユーノがフェイトとなのはにデバイス突きつけられてる。よし
！俺はこの間に……………

ちよんちよん

くそっ！一体誰だ？俺がこのカオスな場所（にしてしまったのは俺
だが）から退散しようとしているときに！

振り向くと、今までで一番良い笑顔をしたはやてが立っていた
このとき俺はこの世界に来て、初めて思った

あ……………死んだ

「全く真哉くんはデリカシー無さすぎやで。あんなこと言われたら私だって傷つくんよ？」

俺は今はやての足元でくたばっている。正直こんなことしてて良いのか？と言う疑問は未だにあるが、今は弁明の方が先だ

「いや、あれは……………みんなちょっとシリアスな雰囲気になってたから和ませよう……………」

「唯単に感動的な場面をぶち壊しただけやないか！」

はい、全くその通りです。ていうか、傷つく？この子だぬ……………

ジャキッ（ はやてが笑いながら俺にシュベルトククロイツを向ける音）

アニメのキャラは全員読心術を使えるのか!?

俺の存在が魔法少女達によって消去デリートされそうになっているとき、クロノに一本の念話が入った

「おい！君達そんなことしてる場合じゃないぞ！もう暴走臨界点まで五分しかない！」

「……………ええ……………!!」「……………」
(クロノ、ザフィーラ以外)

それは、どっちの意味で言ってるんだ？

「じゃあしゃーない一人のバカの始末は一旦後にして、さっさとあれ倒そか」

「……………おお……………!!」「……………」
(ザフィーラ以外)

ってザフィーラなんか喋れよ!!

「で、はやてちゃん具体的にどうするの?」

「こちらには、極めて強力な氷結魔法と、数百キロの範囲を反応消滅させるアルカンシエルの用意があるんだが?」

「それやったら、ええプランがあるよ。簡単や。みんなであの中心コア出して、その、あるかんしえるとかいう奴で、ぶっ飛ばすんや」

「じゃあ真哉くん頑張ってたな」

「分かったよ」

俺はそろそろ暴走の臨界点に入るので、準備を始めていた
そして、俺の後ろでは……………

「あの、はやてちゃん……………」

「ん？どうしたんや？シヤマル？」

「今度私にも料理教えてくれませんか？」

「ええよ」

「ありがとうございます！」

「ねえ、はやてちゃん。私にもなの」「私も」

「うん。今度、みんなで料理作るか！」

みんなで口々に談笑している。俺だけ端でこそこそと準備をしているというのに

ポンツ

「ん？」

肩を叩かれたことに反応して、後ろを向くと、そこには盾の守護獣ザフィーラがいた

「頑張れよ」

「あ、ああ」

まさかのザフィーラ！？ていうか、良い奴だな！！一瞬涙腺がやばかったよ！！

ザフィーラのまさかの応援に驚きつつ、俺は準備を再開した。ま、準備って言っても特に何にもないんだけどね

そして、そんなこんなで暴走が始まるうと言ったところ。球体の周りに黒っぽい柱が立ち上り、そして、中から頭の部分に女神の像のようなものを出した怪物が現れた

ちなみに、この最中もはやて達は世間話をしている

「はあ……………まずはあのバリケードか」

「俺も手伝おう」

俺がバリケードの破壊をしようとしていると、横からまたしてもザ

俺はメーカーオブエデンの力で怪物の二倍はあるつかと言う巨人を作り出し、そのまま怪物に向かって拳を振り下ろさせる

これで、二枚目も破壊

「三枚目はこれかな？イノセンス発動！ジャッジメント装填！」

ジャッジメントを中心に光の矢が出来上がる

「原罪の矢！！」

光の矢は真つ直ぐ飛んで行き、三枚目と四枚目の両方を貫いた

「（相変わらず威力すごいな）はやて〜終わったぞ〜」

「ん〜ダウト！！」

「はやてちゃん中々やるなの」

「ふっふっふトランプやったらつて、真哉くん終わったん？「あ、ああ（それ、何所から出したんだよ）」

「内緒や」

やはり、アニメキャラには読心術のスキルを持つ人がいるようだ。そこからは、原作同様はやてのミストルティン、クロノのエターナルコフィン、その後、なのはのスターライトブレイカー、フェイトのプラズマザンバー、はやてのラグナロク、そして最後のアルカンスィエルにより闇の書の闇は完全に消滅した

そして、アースラにて

「なあ、はやてえ〜」

「ふんっ」

「はあ〜」

そして、運命の日が訪れる

おまけ

「主、この服は変ですか？」

「そんなことないよ〜」

シグナムも気にせんで良いって」

「はあ
」

想像以上に気にしていた人物がいたとかいなかったとか

33話 魔法少女が怒ると仕事が早く終わる？(後書き)

次回で一応A・Sは終わりになると思います

34話 新たな幕開け（前書き）

遅くなつてすいません。今回はいつもよりも長かったなので、大目に見てください！！

34話 新たな幕開け

ヤベエ、マジでヤベエ」

え？何故かって？そりゃあ……………

「よほほほほホ。お久しぶりですネ。真哉くん」

伯爵が目の前にいるからだよ

やっこのことで（まあバリア破つたのは全部俺だが）闇の書の防衛プログラムを倒したって言うのに、次は伯爵かよ。それに、ここで殺されたり、思惑がばれるのは勘弁してもらいたいし、どうしよう？いつそイノセンス一個あげるから見逃して 作戦で行くか？いや、多分普通に殺されるな。ま、それで行くなら安いもんなんだけどな

てか、何で来たの？アクマも居なさそうだし

俺は警戒の姿勢を崩さずに伯爵に聞いた

「何しに来たんだ？ゲートを破壊しに行ったせいで、風邪引いたことのお詫びにでも来たの？」

「ああ、その件ですカ。風邪引いちゃったんですカ？よほほほほほほほホ。どうもすいませんネ」

「黙れ。で、本当に何しに来たんだ？」

「うん？ああ、今日はちょっとした質問ですヨ」

「は？」

それだけのために来たのか？

「で、何だよ？」

「貴方にちよつとした興味が湧きましてネ」

「興味？」

「そうです。イノセンスは適合者一人につき一つ、例外は今まで無かった筈、それに君の容姿、特に貴方の左目は我輩の目の上のたんこぶ、アレン・ウォーカーの物に酷似、いや、そのものです
どうやっただんですか？」

「自分で考えろ」

「ふ〜ん。そう言われましてもネ。その目は確か自分の大切な人を確かアレン・ウォーカーなら、父親でしたか？をアクマにした際に付けられた物のはず」

「……………ええ！！！！」「……………」
（同じくザフ
イーラ以外）

「うち！要らんこと言いやがって」

「貴方も誰かをアクマにしたのですか？」

「……………どついついことや（なの！？真哉くん！！）」「……………」

「その答えは伯爵、お前が一番良く分かってるだろう？」

「確かに。アクマを作れるのは我輩だけ、しかし、残念ながら貴方のアクマを作るようなことは一度もありませんでしたネ」

「ふゝ良かった」

安心したように、はやては溜息を吐いている

「だからこそです。それに、貴方が持つてるイノセンスは全てもう適合者は居るはず

まあクロスは既に適合者ではないらしいですが」

俺は一応スクエアまで見てるから一応知ってるが、アボクリフォス隠された者だったか？にやられたんだったよな？

「企業秘密だ。で、他になんか用？」

「えエ。実は先ほどのこととも関係があるんですが、実は我輩この世界について全くといって良いほど知識が無いのですヨ。それに私がおきたのは十九世紀なのにここは二十一世紀。最初は時間移動でもおきたのかと思いましたが」

「……………ええー！！」「……………」
（ザフィーラ以外）

ザフィーラって本当に何事にも動じないんだな

「伯爵って十九世紀の人なんか！？」

人ではないと思うがな

「ええ。ですが、他にも気になることがありますネ」
先ほど言ったように我輩も最初は時間移動だと思いましたが、気になる点が幾つかあるんですヨ」

「何がだよ」

「まず、この世界はアクマと争われている形跡も過去にそれがあったという情報も無いんですヨ」

「もう終わったんだろ。それにあの戦いは公には隠されてただろ」

「確かに、この世界の状況からして、我輩たちは負けたのだと最初は思いました」

まあそうだろうな、伯爵が勝ってるならこんな世界にはまずならない

「ですが、最近知りましてネ」

「何を」

「イノセンスですよ」

「は？」

「君なら知っているでしょう。もうこの地球にはイノセンスは無い」
「ト」

「ああ」

「私が知る限り、イノセンスはきちんとこの世界の中に全てそろっていました」

しかし、もうこの地球にはイノセンスは無イ。おかしいですね。我輩が始めてあのハートに敗れてから千年間は何も無かったというのに。それに、我輩たちがいないのに、イノセンスは適合者を作る必要性が無イ

そこで、我輩は一つの結論に達しました。ここは我輩の知る世界とは全く違う世界であるという結論二。ですが、貴方は我輩の存在やアクマのこと全てを知っていた

そこで、改めて質問です。真哉くんあなた一体何者ですか？」

伯爵も含めてこの場にいる全員の視線が一気に俺に向かってくる

はあゝそんなに見られてもこの場で、実は転生者です！何て言えるわけ無いし

「俺は唯お前らを破壊する破壊者だ」

これが、一番ベストだろう

「そうですか……ところで、真哉くん。今日は何の日か知ってますか？」

「クリスマス・イブだろ？それがどうかしたのかよ」

「いえ、我輩からささやかな贈り物ですよ」

皆さんメリークリスマスマーーーーース」

.....

- - - - -
sideなのは

「そこで、改めて質問です。真哉くんあなた一体何者ですか？」

確かに、真哉くんはおかしい。何処がおかしい。何処かと聞かれると、言いづらいけど、ただ真哉くんは何か私達に隠していることがある。それだけは分かる。はやてちゃんなら知ってるかも、と思ったけど、どうやらはやてちゃんも知らないみたい

私達はエクソシストは真哉くんしか知らないから、わからないけど伯爵が言つとおりなら、あの目のことといい、まるで、真哉くんは唯アクマと戦うために生きてるみたい。それにアクマのことは私達は真哉くん聞いたから知ってるけど、真哉くんはどうやって知ったんだろう？

「……………ねえ、真哉くん本当に貴方は一体何者なの？」

小さく呟く。聞こえないことは分かっていたでも、私はそう問わずにはいられなかった

- - - - -
side真哉

「本当に面倒なことしてくれるな。アイツ」

まあ、これで引いてくれたんなら、安いもんだ

「この後は質問タイムかな？」

はあ〜面倒くさい。鬱になりそう
イノセンス発動」

目の前には伯爵の置き土産であるアクマの軍勢が20体ほど、全員
LEVEL3のようだ

一体何人の犠牲の下で、これだけのアクマを造り出したのだろう

「哀れなアクマに魂の救済を」

“みんなを幸せにする”半年前に立てた誓い。今でもそれは変わら
ない

俺の介入のせいで、壊されることのなかった日常を壊された人達が
いる。アクマがいることがその証拠だ。だから、救うんだ。壊すこ
としか出来ない俺だけど、壊すことで、救ってみせる。その先に何
が待っているようにも

「ふう〜今回は案外楽だったな〜」

まあ、前はまともに使えるの鉄槌だけだったし」

「これが真哉くんの……………」

「ん？どうしたんだ、はやて？」

「真哉くんは今までもずっとこんな風に戦ってきたんか？」

「ああ」

「はあ…なんか自信失くすわ〜」

「その必要は無いよ、はやて。アクマとまともに戦えるのは今のところ俺しかないんだから」

「そういうもんなんかな〜」

「そんなもんだよ」

バタッ

音がしたほうを振り向いてみると、青ざめた顔で、倒れたはやてが目に入った

「……………！！はやて！！（っち！そういえば、この事件終わつてすぐあとに倒れてたな。何にもなさそうだから、起きないのかと思つてたのにな。原作より力の消耗が少なかったからか？）」

倒れたはやてを抱え俺達は一旦アースラに帰還した

原作は今のところ順調に進んでいっている。もう、リインフォースからはやて以外のなのは、フェイト達には闇の書の破壊の件は伝わっている。もちろん俺のところにも

俺ははやての枕元で座っている。なのは達はリインフォースを消すために既に出ている。俺も行くつもりだったが、リインフォースに「貴方は主はやてと共にいてあげてください」と言われたので、病室に残っている。途中ヴィータが来て、はやてに何か囁きかけていた。俺は寝ていた（ふりをしていた）ので、詳しくは聞いていないが「褒めてあげてね」っていうのは聞こえた

そんな時、はやてが急に目を覚ました

「（時間か）」

「……………リインフォース？」

そのまま、車椅子に乗って出て行くはやての後ろに付き添いながら、俺はもう一度、心の中で呟いた“みんなを幸せにする”と

そんな中、ようやく目的地が見えてきた。守護騎士も全員勢ぞろいだ

「リインフォース！！みんな！！」

「はやてちゃん……………！！」

「はやて！！」

「動くな！！動かないで、儀式が止まる」

「あかん！！やめて！！リインフォース止めて！！破壊なんかせんでええ！！私がちゃんと抑える！！大丈夫や、こんなんでええ！！！！」

「主はやて……………良いのですよ」

「良いこと無い。良いことなんて、なんもあらへん！！ずいぶんと長い間生きてきましたが、最後の最後に、貴女に綺麗な名前と心を提供しました」

騎士達も貴女の傍にいます。何も心配はありません」

「心配とかそんなん……………」

「ですから、私は笑って逝けます」

「話し聞かん子は嫌いや!!マスターは私や話し聞いて!!私がきつと何とかする。暴走なんかさせへんって約束したやんか!!」

「その約束はもう立派に守っていただきました」

「リインフォース!!」

「主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の勤め。貴女を守るための最も優れたやり方を私に選ばせてください」

「……………そやけど、ずっと悲しい思いしてきて…やっと…やっと、救われたんやないか」

はやての眼から涙がとめどなく流れ出していく

「私の意思は貴女の魔導と騎士達に残ります。私はいつも貴女の傍にいます」

「そんなんちやう。そんなんちやうやろ!リインフォース!!」

「駄々っ子はご友人に嫌われます。聞きわけを我が主」

「リインフォース!!」

はやてが車椅子で走り出すが、途中で躓いて、転んでしまう

「何で?これから私は……………これからずっと幸せにしなあかんに!!」

リインフォースがはやての元に歩み寄り、頬にそつと手を添える

「大丈夫。私はもう既に世界で一番幸福な魔導書ですから」

「リインフォース……………」

「主はやて、一つお願いが。私が消えて、私は無力で小さな欠片へと変わります。もし良ければ私の名は、その欠片ではなく、貴女が手にするであろう魔導の器に送っていただけますか？祝福の風リインフォース、私の魂はきつとその子に宿ります」

「リインフォース……………」

「はい。我が主」

そして、リインフォースはまた立ち上がり、魔方陣の中央に歩いていく

やっと終わったか。これ、マジで長い

「やっと終わったか

なあリインフォース」

「なんですか？」

「消えなくて済むとしたらどうする？」

「……………！！」「……………」

お！珍しくザフィーラも驚いてるな

「ほんまか！？真哉くん！？」

「そんな方法があるのですか！？」

「ああ、ある。一つだけ」

「教えてください！！」

「分かったよ。但し……………」

「……………但し？」

「一生俺の道具決定だけだな！！」

イノセンス発動！！

見せてやるよ！！110個目のイノセンス『エンゲージメント誓約ノ書』の力を！！

アブソーブ
『吸収』」

俺とリインフォースの間に一本の線が出き、リインフォースの姿が
どンドン薄れていく

「つぐ！…我が…主」

「……………！！真哉くん何してんのや！！それに道具って……………」

「そのままの意味だよ」

「この反応はまさかあのときの妙な反応は貴方が……………！！」

「よく気づいたな。あれは俺だよ。これの機能は『デバイス吸収』なんだよ」

初めにパスを繋げなきゃならないんだけどな。お前が俺の中に入れてくれたおかげで楽に出来たよ」

「つぐ…あ……………」

「リインフォース!!!!!!」

真っ白な雪の中にはやての声だけが木霊する

その中で、俺は一人不敵な笑いを浮かべるのだった

34話 新たな幕開け（後書き）

最後のリインフォースとはやての会話は本当に長かった……

35話 昨日の友は今日の仇（前書き）

この話はすぐに終わると思います

35話 昨日の友は今日の仇

side はやて

「リインフォース!!!!!!」

守護騎士のみんなもなのはちゃんやフェイトちゃんも呆然とさつきまでリインフォースがいた雪の上を見つめている。唯一人、真哉くんだけが狂ったような笑みを浮かべていた

「いや〜長かったよ〜。はやてが夜天の書の主と分かって半年。ようやく夜天の書を手に入れられたよ。ありがとう、はやて」

どういうこと？真哉くんは始めから知ってたん？こうなることも全部。その上で夜天の書を手に入れるために？じゃあ今までみんな寝転がって星見たこともみんなゲームして、笑いあったことも全部、全部嘘やったん？

「ねえ、真哉くん……………」

「ん？どうしたの？はやて」

いつもの真哉くんとは明らかに違う。今の笑顔は何ていうか、作られた機械的な笑顔みたいや。明確な判断基準があったわけじゃないけど、でもいつもと違うことだけは間違いない
ねえ、真哉くん、どっちが本物の真哉くんなん……………？

「今まで一緒に住んできて、一緒にゲームしたり、テレビ見て笑いあったり、みんなで星見に行ったりしたりしたやんか。あのときの真哉く

んは全部嘘なんか？唯私を利用するためだけに近づいたんか？ねえ、真哉くん教えて、どっちが本物の真哉くんなん？」

聞いたとき、一瞬真哉くんの顔から表情が消えた、でもその後すぐまたさつきと同じような笑顔を私達に向けてきた

「うん！楽しかったよ。みんなで一緒にゲームしたり、テレビ見て笑いあったり、みんなで星見に行ったり、楽しかったよ。俺、はやてのこと好きだったしね」

「……………！！」／／／／

まさかの衝撃告白！？でも、やっぱり真哉くんは私の知ってる真哉くん「まあ……………」ん？

「まあ……………全部嘘だけだね」

／……………

「アハハはハハはハハは、良いね、はやて！その顔だよ！その希望から一気に絶望へ落とされたみたいなお表情！！最っ高だねっ！！」
星見た？笑いあった？バカじゃねえの？だから簡単に騙されるんだよ！！まあ、そのおかげで俺がやりやすくなったんだけど……………
…おっと、危ないじゃないか。シグナム！」

「真哉……………いや、天宮、貴様あ！！！」

シグナムがバリアジャケットに身を包み、真哉くんに切りかかる

「はあシグナム、模擬戦で引き分けだからって、調子に乗るなよ。」

で、こっちに一つ提案がある」

今更!?

「リインを……………」

「ん？」

「リインを返せ——————!!!!!!」

「ヴィータちゃん!!」

ヴィータちゃんがデバイスを起動させて、殴りかかるが、それも手前で真哉くんのイノセンス『鉄槌』によって止められてしまう

「だ・か・ら、話し聞けって言ってるんだろ」

「聞く必要なんかねえ!!!!!!」

「はあくていうか、さっきから何で泣いてんの？」

「……………!!う、うるせえ!!!!」

ヴィータちゃん……………

「まあいい、ここからは提案だけど、一週間後、ちょうど1月1日、第44管理外世界で今ここにいるみんなとユーノ、アルフ、クロノを含めた10人で来い」

そんなところに行って、一体何の意味が……………?

「それで、何をするの？」

「ん？簡単だよ。唯のK O R O S I A I

ああ、別にお前等で戦うわけじゃないから、そんなの見ててもつまらないし、お前等10人VS俺一人だから 勝つたら、リインは返すよ」

「……………！！」「……………（はやて以外）」

「何でそんなことしなきゃならないの!？」

「お前達に知る必要はない

で、やるの?やらないの?あ!それと、来なかったり、誰か欠けてたりしたら、リインの命やその他諸々の保障はしないから」

「その他…って何？」

「さあ〜何だろうね〜

さ、やるの?やらないの?どt t t『ちよつと待って!!』ん？」

アースラのエイミーさんから急に通信が来た。一体何だろう?

『その管理外世界だけど、原因は不明だけど最近の調査で崩壊しかかってることが分かったの!!』

「……………!!」「……………」

「で、どうする?」

「そんなの関係あらへん!!」

「お!はやてもう立ち直ったの?」

「ヴィータ……ちょっとこっち来てくれるか?」

「って、無視かい!!」

「う、うん」

未だに真哉くんと睨み合っていたヴィータちゃんは一旦離れ、はやてちゃんの下に歩み寄って、はやてちゃんを支えてあげている

「その提案受けたるわ!!」

はやてちゃん……

「ふふつ。じゃあ一週間後、第44管理外世界でね」

「ちょっと待つて!!」

すると、後ろを向いて、帰ろうとしていた真哉くんが如何にも嫌そうな顔をして、こちらを振り向いた

「まだ何かあるの?正直俺、寒いんだけど」

「今までの真哉くんはほんまに唯の演技やったん?」

「何度も言わせるな俺はお前達のことなんか唯の道具としか思っちゃいなかったよ」

「そうか……………」

「じゃあな」

真哉くんはいつものような綺麗な光り輝く翼ではなく、真っ黒な翼で空の彼方へと飛んで行った

『みんな色々思うところはあると思うが、一旦アースラに戻ってきてくれ』

「うん。分かったなの。クロノくん」

「みんな勝手に決めてもって、ごめんな」

「気にしないで、はやて」

「うん！多分、私達もそう言ってたと思うし」

「みんな…ありがとうな」

「さ、早く帰ろう。はやてちゃん！」

「うん！」

35話 昨日の友は今日の仇（後書き）

誤字修正

36話 裏切りのその先に

sideはやて

「みんな集まったな」

今、私達となのはちゃん、フェイトちゃんを含めて、あの場にいた全員+クロノくん、ユーノくん、リンデイさん、エイミイさんがアースラ内の会議室に集合している。唯一人、傷を負ったシグナムだけは傷はそこまで深くなかったものの、今は部屋で安静にしている。でも、まあ話すことといったらあの事ぐらいしかないわけなのだが

「今回の件みんなも混乱しているとは思いますが、まず一つ確認しておく
天宮真哉……………彼が僕達を…管理局を裏切ったと受け取って間違いないな？」

いや、さっきの言動から推測するに元から裏切るつもりだったよ
うだが、まあ今はどっちでも良い

それで、間違いは無いな？」

「……………」

「……………」

「……………」

みんな、一応理解はしているが、完全に納得するまでは至っていないようだ。思ったとおりそういう風に直接聞かれると、言葉に詰まってしまう。それは、私や他のみんなも同じのようだ。と言うより、この場で「はい、間違いありません」なんていう奴は十中八九KY

だと思っが

「はい、間違いありません」

一体誰が？という疑問が一瞬頭の中を過ぎつたが、その考えはすぐ消し去られた。簡単なことだ。言ったのは私自身だった。それだけのことだ。何故言ったのか。その理由は分かっている………はずなのだが、どうも自分も頭が混乱して、言葉にするのが出来なかった

「そ、そうか」

まさか、クロノくんも答えてくれるとは思ってもしなかったらしく、若干答えるのに言いよどんでいたが、そこから仕切りなおして

「で、次に聞きたいんだが

彼が何の目的でこんなことをしたのか思い当たる節があるなら言ってくれ」

「え〜と、真哉くんは伯爵を倒すためって言ってなかったっけ？」

「それはそうだが、具体的にどうやって？という部分を聞きたいんだはつきり言って、闇の書の力を手に入れただけで勝てる相手ではないだろうしな

それに、何故一々僕達をわざわざ崩壊しかけの次元世界に呼ぶ必要があるんだ？」

その時、今まで発言していなかったフェイトが話し始めた

「私、思うんだけど、本当に真哉は最初からはやてを騙すつもりだったのかな？」

「ん？どういうことだ？フェイト？」

「いや、はやて達は知らないかもしれないけど、半年前のジュエルシードの事件のことから考えても真哉がそんなことするような人物とは到底思えなくて」

それに、シグナムも見た目だけで傷は深くなくて後二、三日もすれば大丈夫だろうって言ってたから」

「確かに、もしかしたら、今回の彼の行動にはどうしようもない事情か何かがある！違う！絶対違う！真哉くんはもう私たちの知っている真哉くんじゃないんや！今までなのはちゃんやフェイトちゃんが見てきたんも全部、嘘やったんや！考える余地なんてあらへん！！」

「はやてちゃん……………」

「はやて……………」

「少し落ち着くんだ。もう一度聞くんが、心当たりは無いんだな？」

「そんなもんあらへんわ！！」

「……………分かった。今日のところはみんな疲れているだろうから休んでいってくれ」

「クロノくんはどうするの？」

「僕は今から管理局にこのことを伝えなければならぬ」

大丈夫だ。明日の夕方までには戻ってくる。それにははやてのデバ

「（ここまで来たんだ。もう元には戻れない）
俺は………」

前に進まなければならぬ………！！」

先ほどとは違い確かな意思を瞳に宿し、唯一言、言葉を紡ぐ

「イノセンス発動」

一瞬だけ本が光り輝き、次に俺は『祝福ノ風』と書かれたページをめくり、一気にそのページを破いた
次に、現れたのは長い銀髪と深紅の瞳を宿した女性。だが、その瞳はまるで死んでいるかのように光が宿っていなかった

「AI凍結解除」

唱えた次の瞬間、彼女…リインフォースの瞳に光が戻った。が、すぐに警戒の姿勢をとり、俺から距離を取った

「……………それ六幻への対策のつもり？はつきり言って意味無いよ
それに君は主人である俺の指示には逆らえないし」

「一体何をするつもりだ？」

未だに警戒の姿勢を取ったまま、リインフォースは俺に尋ねる

「だから、意味ないって言ってるのに
っていつか意識あつたんだ」

「……………」

「無視ですか。で、それを知ってどうする？」

「貴様を殺す！！」

「ふ〜ん、でも、それはつきり言っただけの計画聴く必要ないよね
まあ、良いや。じゃあどうぞ。殺しなよ」

「……………！！！！」

そして、次に滑り台に持っているイノセンスを置く。滑り台の上なので、イノセンスは重力に従って、下に滑り落ちていく

「どうしたの？殺すんじゃないの？イノセンスも全部置いておくよ」

これで俺は君を抑えることも出来ない。さあどうする？」

チャンスだと思ったのか、一步だけリインフォースは前に進み出た
だが、まだ警戒したままでそれ以上は前に出ようとしない
まあ、予想はしてただけ

「まだ、警戒したままか」

「じゃあ俺の計画聞いてよ」

「その後判断すれば良い。俺を殺すかどうか」

ここで、しくじれば全てが終わる。いや、終わらないかもしれないが、絶望的な状況に追いこまれるのは確実だ。もう一度目の前の銀髪の女性に目を向ける。何故だろう。俺は絶望的な状況になる予感が全くしなかった

「……………以上だ」

「本気…なのか？」

「ああ」

「それはもし、失敗すれば……………」

「まあ死ぬだろうな」

「信じられない」

「じゃあ保険として、君に俺のイノセンス全て預ける
だから、頼む！！俺に協力してくれ……！！！」

俺は滑り台の上から降りて、雪の上で土下座した
不思議と冷たさは感じなかった

「どうしたら良い？」

「……………へ？」

「何をすれば良いんだ？」

「あ、ああまずは第一管理世界ミッドチルダに俺を転送してくれ」

「分かりました、我が主^{マイマスター}」

それが、ここに着てから始めてみた笑顔だった

「そのマスターって言うの止めてくんない？後、敬語と。明らかに
リンの方が年上だし」

「分かりました。真哉^{マコ}」

「敬語の方を直す気は無いんだね

ま、良いか

じゃあ行こうー！！」

- - -
- - -
- - -
sideレジアス

「レジアス様

面会したいという人物がいるのですが、どうなされますか？」

全く。つい先ほど闇の書事件のことを聞いたばかりなのに、次は何だ？

いや、それにしてもイノセンスか。本局もアクマにはかなり手を焼いている、というか存在をひた隠しにするぐらいしか出来る事が無い状況だ。当たり前前だ。魔法が絶対だと思っている連中だ。魔法が全く効かないアクマには手を焼くだろう。今のところアクマに対して有効な対処法はイノセンスのみ、そして、そのイノセンスは闇の書事件の黒幕だという天宮真哉しか扱えない。それに、奴は魔法が使えないときている。是非地上本部に入れたいものだ

つと、面会者だったな

「で、誰だ？」

「その『で』の意味は良く分かりませんが、レジアス様に『今、貴方が一番欲しがっている物を持っていると伝えてくれ』と」

……………！！まさか……………！！

「髪の色は！？」

「は、はい白でした

それと、左目に奇妙な模様のある少年でしたが」

「（間違いない！！だが、一体何故？まあ良い）通せ」

「分かりました」

「どうもレジアスさん」

「次元犯罪者がここに何をしに来た？」

「え、！俺、もう次元犯罪者なんですか！？」

「当たり前だ。まあついさっきだがな
で、何のようだ」

「いえ。唯、上層部との関わりがあるレジアスさんにちょっとした
交渉を、と思ひまして」

「……………!! 貴様……………!!」

「うわ!! 怒らないでくださいよ」

別に脅しに来たわけではありませんから」

「まあ良い。さっさと用件を言え」

「はい。闇の書事件のことは知っていますね」

「ああ。一応な」

「じゃあ話は早い。八神はやてって子がいたでしょ?」

「ああ。確か闇の書の主だったか?」

「そう。報告で聞いている通り。闇の書自体は俺のところにあります
で、ここで頼みがあります。八神はやては俺が闇の書を取ったこ
とで今デバイスがありません
それで……………」

「我々に彼女のデバイスを作れと?」

「話が早くて助かります。二、三日後にははやてに渡せるようにし
てください」

「こちらの見返りは?」

「貴方が今、欲する物が」

「一々、含みのある言い方をする奴だ」

「太っ腹だな。だが、あれはお前にしか扱えんのだろうか？」

「はい。一週間後までは」

「一週間後？一体何があるんだ？」

「それは、後々のお楽しみです」

「まあ管理局でも扱える者が現れるだろう。って話です。早い者勝ちなので、頑張ってくださいね」

「せいぜい、伯爵には気をつけて
それでは、さようなら」

そして、席を立ち、扉から出て行くとしたとき、もう一度こちらを振り向いて

「あ！これは、個人的なお願ひなんですが、良いですか？」

「何だ？」

「今度の事件、俺一人の犯行ってことにしてくれませんか？はやて達は俺に操られていただけで、何の罪もないと」

「良いだろう。出来るだけ、根回しをしておいてやる」

「それより、お前管理局に入らないか？」

「そうですね」

「では、一週間後に」

「ふん！デバイスの件と闇の書の主の件は了解した。デバイスは二日後には渡せるようにしてやる」

「今度こそ、本当にさようなら」

扉が閉められ、部屋にはまた私ひとりとなった

「オーリス。居るか？」

「何でしょう？レジアス様」

「至急、アースラと連絡をして、どんなデバイスが欲しいかリクエストを聞いて、一つ作り上げてやれ。高性能な物をな」

「分かりました」

36話 裏切りのその先に（後書き）

レジアスのこの時点での階級が分からね〜

37話 疑念

sideエイミー

「ん？これって……クロノくんから？」

何だろう？もしかして、あっちで何かあったのかな？

『エイミーか？』

「そうだけど…どうしたの？」

「今すぐはやてを呼んでくれ」

「はやてちゃん？何で？」

「良いから！」

「分かった」

一体ミッドチルダで何があったんだろう？まあ良い。まずははやてちゃんのところに行ってみよう

そして、私ははやてちゃんの居る部屋へと向かった

.....
.....
.....
side1はやて

今、私はヴィータや他の守護騎士達と一緒にトランプをしている
みんな、昨日のことを引き摺っているのだろう。雰囲気は何所と無
く暗い
そんな時

「はやてちゃん居る？って何でこんなに空気が死んでるの？」

エイミーさん……………それは言ったらあかんで

「で、どうしたんですか？」

「ああ、そうだ！何かは知らないけど、クロノくんがすぐに来て欲
しいって」

「分かりました。じゃあみんなちょっと待っててな」

でも、一体何のこと何やる？

- - - - -
- - - - -
- - - - -
sideクロノ

まさか……………それもよりによって本局と仲の悪い、地上本部からこん
な提案がされるなんて……………何か裏が？でも、今は時間がない。練
習用の杖でも借りるつもりだったが、専用のデバイスを作ってくれ
るといふなら、これからことを視野に入れても、有難い。はやての
魔力じゃ普通のデバイスだと、どうしても限界があるからな

っと、やっと来たか

「いきなり呼びつけてしまって、すまない。はやて」

『別にええよ。で、今度はどないしたん？』

「ああ、実は……………」

『ええー！ー！ー！ー！ー！管理局のそれも地上本部がはやてちゃん専用のデバイスを作ってくれるの！！？』

『それは有難いことやけど、それがどうかしたんですか？』

「ああ、元々僕達、本局と地上本部は仲が悪くてね」

『同じ時空管理局やのに？』

「ああ。まあしょうがないところもあるんだけどね」

『何で?』

「簡単に言えば、有能な魔導師ていうのは基本ほとんどが本局勤めになる」

『だから、地上本部はいつも戦力が不足してるって訳なんだよ』

僕の説明を引き継いでエイミイが簡単にはやてに教えている

『ふ〜ん。地上本部の人も大変なんやな』

でも、クロノくん、今何気に自分は有能って言ったよな』

「そういう意味で言ったんじゃない! って今はそんなことを言いに来たんじゃな」『逃げたな』っな!」

『うん。逃げたね』

つく! !この………そ、そつだ。今はこんなことをしてる場合じゃない

「そ、それよりも今日ははやて…君に聞かなきゃならないことがある」

『何?』

「それが、地上本部は君の言うとおりのデバイスを作ってくれらしいんだ

だから、どんなデバイスが欲しい?」

『うーん。でも、そんな言われても私デバイスのこと良く分からんし』

「それは、こっちで考えておこう。だから、形状だけでも考えてくれ」

『それやったら、夜天の書と同じ形って出来る？』

「ああ。じゃあ、そう伝えておこう」

『でも、ほんと信じられないね、何か裏があるんじゃないの？』

「ああ。しかもそれを指示したのはレジアス准将だ」

『ええ！！それ本当！？』

「ああ。僕のところ副官から連絡が来たから間違いないと思うでも、まさかレジアス准将が事件の重要な関係者のデバイス作成を命じたなんて僕も驚いたよ」

『クロノくん……………』

「あー！」「ごめん。はやて！！そういう意味で言ったんじゃない……」

『別にええんよ。私が犯罪者なんは事実やし……………』

「それは違つぞ」

『え？』

「今回の事件ではやては関係者ではあるけど、容疑者という扱いではないんだ

いや、むしろ被害者という扱いになっている」

『それはおかしいやろ！私なのはちゃんやフェイトちゃん、それにもっとたくさんの人にも迷惑いっぱいかけたのに……………』

「管理局側では、今回の事件にとって、真犯人は天宮真哉であつて、はやてや守護騎士達は操られていただけに過ぎず、むしろ被害者という見解になつた

そして、それを進言した人物も……………」

『まさか……………』

「そう、レジアス准将だ」

『これは、間違いないね』

「ああ。今日、今から地上本部へ行つてこようと思つてる。今日の夕方までには戻れないかもしれない」

『あんまり無茶して変なことに巻き込まれないでよ？』

「ああ。分かつてるよ」

僕はそれで通信を切つて、首都クラナガンにある管理局地上本部へと向かつた

「ふ〜」

僕は首都クラナガンの中央にそびえ立つ巨大な超高層タワーの前に立っている。周りを大小さまざまなタワー（と言っても普通のビルとは比べ物にならないくらい大きい）が立っているが、伝わってくる存在感が他の物とは明らかに違う

管理局地上本部……この建物の名称であり、今、現在進行形で管理局本局との仲が非常に悪い組織だ。各タワーの基幹部に広がる形で緑地が整備され、また中央議事センター・指揮管制室などの施設を内包しており、防御システムは魔力障壁と物理隔壁の二重のシステムが用意されている。

その中でも、今回会うことになるであろうレジアス准将はかなり上の人物であり、武闘派として名高い人物であるが、黒い噂が絶えない。それに大の本局嫌いで、地上のことに干渉されることを嫌っている。だから普通に考えて、そんな彼が本局の事件に手を貸すなん

てことは、裏を感じずにはいられないのだ

「（と言っても、優秀な人物に変わりは無い。そうそう隙を見せるようにも思えないが

行くだけ行ってみるか）」

「すみません。レジアス准将お願いできますか？」

「失礼ですが、お名前は？」

「管理局本局の執務官、クロノ・ハラオウンです」

すると、受付の人やそれを聞いていた。他の地上本部の局員達は露骨に嫌そうな顔をした

どこまで嫌われてるんだ？僕達は……

「はい、管理局の優秀な執務官殿が来られましたよ」

そんなわざとらしい、嫌味言わなくても……

「はい、ちび…クロノ・ハラオウンという方です」

今、絶対『ちび』って言おうとしたら……！確かにちよつと自覚してはいるけど、あからさまに言わないで欲しい……

「レジア様がお会いになるそうです
では、こちらへ」

「どうもレジアス准将。今回はデバイスの件本当にありがとうございました」

「いや、困っていると聞いたから。少し口添えしたに過ぎん」

「それでも、ありがとうございます」

「で、今回地上本部に来たのは、それだけが理由かね？」

「（さすがに、鋭い。この人に下手なこと言っても無駄だろうなら……）実は、貴方も知つての通り本局と地上本部の仲はあまり芳しくない。そんな中で地上本部ではかなり上の立場である貴方が積極的に本局の事件に助力するとはどうも考えにくい」

「裏があると？」

「はい」

「今のこの本局との関係を改善したいと思つてのことでは駄目なかね？」

「それはありません。貴方は知つているでしょうが、今回の件はあの事情により、管理局でも立ち会つた者もしくは上層部のみにしか伝えられていません。よつて、そんなことをしたとしても関係の改善にはならないでしょう」

「さすがと言つたところか」

「では、一体……？」

「機嫌が良かったからだ」

.....

ドンッ

考え事をしていたせいか、前から歩いてくる人にぶつかってしまった

「あの、すいませ………!!」

反射的に謝ろうとしたとき、ふと、目の前に真っ白な髪の毛が映った

「大丈夫ですか？」

改めて見てみると、そこに立っていたのは管理局の普通の局員だった。しかも茶髪

「え、ええ（気のせいか？）」

「気をつけてくださいね。クロノ執務官」

そういうと、また元の方向に歩き出した
僕もまた次の行動について考え始めていたとき

「（あれ？何であの人僕の名前知ってたんだらう？）」

管理局に執務官は自分だけじゃない。確かにこの年（と言うか見た目）の執務官はあまり居ないかもしれないが、それでもおかしい

「（それに、さっきの対応、地上本部の人間なら本局の執務官は嫌いだらうに）あの…すいません！」

もう一度振り向いた先に先ほどの彼の姿は無かった

その時だ

「後六日だ。何所までやれるか楽しみに待っている、クロノ執務官

」

すぐ隣から聞こえてきた。咄嗟に横を振り向くもうそこには彼の影も形も無かった

「（あり得ない。彼は魔法を手にして一日しか経っていないんだぞ！？そんな彼が次元転移なんてことを出来るわけが無い！！そんなことは、たとえなのはやフェイトでも無理だ！！やっぱり空耳？いや、今のは間違いなく……………」

天宮真哉…君は一体……………」

37話 疑念（後書き）

レジアスの階級適当に決めさせてもらいました

38話 唯、君のために

side 真哉

「真哉。あんなことしても良かったんですか？」

「ん？別に良いんじゃない？こっちの計画にこれと言った支障はないし」

なんか『真哉』は呼び捨てなのに、他は敬語って落ち着かないな

ちなみに、あんなことと言うのはもちろんククロノにちよっかい出したことだ。俺の計画にとって管理局との関係がばれては困る。今回の件で関係がばれる可能性が無いわけではないが、あいつらはイノセンスのことを俺から聞いた情報でしか知らない

「あいつらが俺と管理局の関係に気づくこと無いと思うよ」

「何故ですか？」

「あいつらにはイノセンスが適合者にしか扱えないとしか言っていない」

「そうなんですか」

「それより、あれの準備は出来てるのか？あれが計画の要だぞ」

「はい。理論的には真哉が言っていたので十分なので、術式の構築にはあまり時間はかからないと思います」

sideレジラス

「これで言われたことは全てやった。本当にイノセンスは手に入るんだろうな？」

目の前に開かれた画面には真っ白な髪を持つ少年…天宮真哉の姿が映っている

『ええ。だけど、前も言った通り早い者勝ちです。今もイノセンスは各地に散らばっています』

出来るだけ早く動かれれば、その分多くのイノセンスを手に入れますよ。まあそれと平行してそのイノセンスの適合者も探さなければなりません

本局がそれに気づくのはもっと先になるでしょう。その前にあなた方地上本部が多くを回収すれば良いだけと話です。それとイノセンスがある場所は何かしらの妙な現象が起きますから。すぐ分かると思いますよ』

「分かった」

『はい。ではまた会う機会があれば』

“また会う機会”か。何をするつもりかは知らんが、相当先になることは間違いないだろうな

「ああ」

.....

s i d e 真哉

「はい。ではまた会う機会があれば」

『ああ』

これで、全ての準備は整った。リインの方も既に出来上がっている。後は俺がうまくやるだけだ。ここまでやってもらって『失敗しちゃいました』では済まされない。それに失敗は文字通り『死』を意味する。俺には魔法についての知識もなのはみたいに天才的な才能なんてこれっぽちも無いだけど……

「じゃあ、リイン」

「はい、真哉」

「「ユニゾン・イン!!!」」

はやて………君の幸せのために俺は君との約束を破ろう。どれだけ罵られようと、どれだけ蔑まれようと、俺は君の……いや、みんなの幸せを願っている

- - - - -
- - - - -
- - - - -
s i d e はやて

私はある知らせを聞き、急いでアースラのブリッジへと向かった

「エイミィさん！！私のデバイスが届いたってほんまか！？」

「うん。ちょうど今さっきクロノくんが持って帰ってきてくれたよ
あーちょうど良いところに、クロノくん！」

「エイミィ？一体どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもあらへん
クロノくん！私のデバイスは？」

「あ、ああ。これだ」

そこには、夜天の書にも付いていた剣十字のペンダントがある

「クロノくん！」

「何だ？」

「早速、訓練して欲しいんやけど」

「はあ…まあ、予想はしていたけど、それじゃあなのは達も呼ぶと
するか！」

「うん！」

こうして私たちの修行は始まった

.....
.....
.....

s i d e 真哉

修行開始四時間後……………

くそっ！何でなんだ！！

『真哉……………』

「も、もう一度だ！！」

『スレイプニール、羽搏いて』

俺の背中に漆黒の翼が現れる

「次こそ……………！！」

俺のイメージでは華麗に空を滑空するはずなのだが……………

ズシヤッ

『だから、右の方を強くしすぎです！真哉。私はあっちの方に専念するので、翼のコントロールはマスター一人でするんですよ！？？！
んなんじゃ戦う以前の問題ですよ！？？』

「分かってるけど。どうも感覚が分かんないだよな
ん〜翼以外で空を飛ぶ方法とか無いの？」

『そんな方法……………あ！』

「何かあるのか！？」

『飛ぶとはまた違うんですが、簡単に言うと、空中に魔力で足場を作るんですよ』

「ああ、そういうえばそんなことしてたな」

『今考えれば、そっちの方が真哉の身体能力も十分に使えるので、良いのでは？』

「ん〜まあ良いや。スレイプニールは俺には無理だと思っし……………」

『では、早速……………』

ああ、俺もみんなみたいに飛びたかったな〜

「よし。魔力で足場を作るのは、ほぼ完璧だな」

『はい、次はそれを高速戦闘下でも使えるようにしないと』

「はあく気が遠くなりそうだな」

一方その頃

「はやてちゃん。凄い!!」

魔法使うのほとんど初めてなのに、もう誘導弾をここまで使いこなせるなんて!!」

「嫌やわ。なのはちゃん達に比べたらまだまだやで?」

「それでも。凄いよ!!」

修行開始一時間後のはやて達でした

38話 唯、君のために（後書き）

改めて自分で最初の頃を読み直してみると、描写とか色々本当に酷かった

39話 才能ってずるいよね

修行二日目〜真哉の場合

「真哉。昨日で、魔力の足場を使つての空中戦闘はある程度出来るようになりました」

普通ならもつと色々な訓練をしなければならぬんですが、時間がないので、いきなりですが、実戦練習に入ります。まずはなのはさん達も使つていらした、誘導弾です

一応なのはさんとフェイトさんのリンカーコアを蒐集していますので、誘導弾の種類としては、デイバインシューター、ブラッディダガー、直射型だとフォトンランサーそして、その強化版であるプラズマランサーぐらいですね」

「あれ？アクセルシューターって無かつたっけ？」

「なのはさんを蒐集したときは、なのはさんはその魔法を覚えていなかったなので、使えないんですよ」

確か、アクセルシューターを使えるようになったのは、カートリッジシステムを積んでからだつたかなのはのの蒐集はそれよりも前だつたな

「そついや、そつだな」

「で、どうします？」

「どつする？…って何が？」

「決まっています。はつきり言ってマスターに魔法の才能はありません」

「ばっさり切られたな。おい
まあ事実だからしょうがないけど」

「ですから、戦闘中にこの四つ、いえフォトンランサーを外したとして、三つ

これを使い分けるなんてことは不可能です！

なので、まずどれを使いたいか。先に決めちゃってください
今日から出来るまで、それ一本に絞って練習したいと思います」

「え、！^{ブレイカー}集束砲とか、砲撃魔法とかは！？」

「まさか……………そんなもの出来ると思っていたんですか！？」

「少し……………」

「一つ聞きますが、貴方が思っている砲撃魔法と言うのはなのは皆さんのようなものですか？」

コクッ

はあく呆れたようにリインフォースは溜息を洩らす

「良いですか？真哉？」

砲撃魔法と言うのは魔力を照射するだけのシンプルな魔法です。
照射だけならマスターでも出来るかもしれませんが。ですが、熟練度の高い魔導師、例えばなのはさんのような方だとそこに色々な能力を付加するのです。ただ真っ直ぐ飛んでくる魔力の砲撃なんて普通

の敵なら簡単に避けられますし」

「確かに……………じゃあブレイカーは？」

「ブレイカー……………つまり集束砲というのは通常の砲撃魔法とは違いほとんど魔力を消費しません」

「え！そうだったの!？」

全然知らなかった……………

一応Forceの途中までは読んでいたんだが、そんな深いところまでは調べてもないし、集束砲も唯のでかい砲撃魔法っていうくらいにしか考えていなかったからな」

「はい。集束砲というのは文字通り、周りの大気にある魔力をかき集めて、それを相手に放つ魔法です

集めるくらいなら、少し熟練度の高い魔導師なら誰でも出来ます。そして、これよりも高度な、『使用を終えて空中に拡散した魔力をもう一度実使用レベルで集める』という管理局で言うなら、Sランク以上の技術をなのはさんは、意識的に魔力を集束しやすい形にしてばら撒き、戦闘中に魔力をあらかじめ限定された空間に効率よく圧縮しておく事で回収・再圧縮を容易にすることにより、集束砲を放っているのです。これの意味が分かりますか？」

「全然……………いや、違うな。一つだけ分かったことがある」

「何です？」

「……………みんな凄えな」

「…………ええ。ああいうのを天才って言うんでしょうね」

「そついや、はやても集束砲撃ってなかったっけ？」

「マスターは元々天才だったのもありますが、マスターには置き土産として、私が見える魔法全て残していますから」

ん？

「なあ、リイン」

「何ですか？」

「いきなりで、すまないが、俺って何？」

「真哉は真哉じゃないですか」

「じゃあ、はやては？」

「マスターはマスターですが？そんなことより修行です！！」

「（デバイスに主人だと思われない俺って……………）」

結局流れで、一旦全て射撃型の魔法を一通りやってみて、一番出る物を練習すると言う結論に至った

.....
.....
.....

sideはやて

「はつくしゅん！」

「大丈夫？はやてちゃん？」

「うん。大丈夫

それより、修行の続きや！」

「一旦、休憩を入れよう

もう朝からぶっ通しだ」

「でも……………」

「大丈夫だ。デバイスの性能を差し引いても、君は良く頑張っている
もう、そこらの普通の魔導師には負けることはないだろう」

「でも、まだ真哉くんには勝てやん……………」

「はやて。急ぐことは無い

まだ時間はあるんだ。それに……………」

「それに？」

「戦うのは君一人ではないんだ。君はもっと周りを頼ることを憶え
ろ」

「うん！ありがとうな〜クロノくん」

そうや。別に私一人で戦うんじゃないんや！なのはちゃんもフェイトちゃんもヴィータやシグナムもみんないてるんや！！

「昼から少し模擬戦をしたいと思ってる。はやてもそれまできつちり休んで置くように」

「分かってるって。クロノくん」

.....

side 真哉

「ぜえ…ぜえ…で、どうだ？どれが、一番良いと思う？」

「うん。強いて言うなら………全てアウトですね」

「………だろうな」

俺の結果は散々な物だった。デイバインシューターとブラッディーダガーは撃つのは良いが、何故か目標物ではなく、誘導弾自身がぶつかり合って消えると言う、目晦ましくらいにしか使えないような状況にある。プラズマランサーにおいては『ターン』のキーワードで方向転換すると、相手ではなく、俺に向かって飛んでくるようになった

「まあプラズマランサーはターンさえしなければ使えないことはないんですが………」

「それじゃあ別に他のでも良いだろ。真っ直ぐ飛ばすだけなんだから」

「……………そうですね」

「自分の魔導師としての才能の無さに泣けてきそつだよ……………」

「ま、まあ時間はまだあります。諦めるには早すぎですよ！真哉！
！」

「ありがとう。リイン……………はあ」

その頃はやては

「バルムンク！！」

八つの魔力刃が飛んでくるフェイトに向かっていく

「つく！バルディッシュュ！！」

「ソニックフォーム」

フェイトの装甲が更に薄くなり、ほとんどレオタードにスパッツのみという状態になる

そして、そのまま一気に加速し、はやてのバルムンクをかわし、サイズフォームのバルディッシュュをはやてに突きつける

『そこまで…！』

「ふっやっぱり、フェイトちゃん強いわ〜」

「そんなことないよ。はやても昨日デバイスを持ったばかりなんて
思えないくらいだよ」

「ありがとうな」

『二人とも今日はねぐらいにして、もう休もう』

「うん」

39話 才能ってずるいよね (後書き)

はやてがどんどんチートに……。ちなみにバルムンクはゲーム専用技です

40話 1VS10の死闘(前書き)

ようやく真哉VS他のみんなです

40話 1VS10の死闘

「……いよいよですね」

「……ああ」

「結局、まともに誘導弾使えませんでしたね」

「……ああ」

「今日は仕方ありませんから、イノセンス主体で魔法は牽制程度にしましょう。魔法の才能なんて人それぞれですから。それに、私も出来る限り手伝いますし」

「……ああ」

『ああ』としか言っていないのに、俺のモチベーションがかなり下がった気がした
しんやくん
ちなみに……

「今日の戦い…私勝てるやろうか？」

「絶対大丈夫なの！はやてちゃんかなり強くなったから！！」

「でも、クロノくんにも模擬戦で勝てやんかったし……」

「ちょっと待て！その言い方だと僕がこの中で一番弱いみたいじゃないか！！」

「違うの?」

「いや、でも、ユーノくらいなら……」

「ユーノ君はサポート専門なの!」

「……………」

こちらではクロノのモチベーションが下がっていた

「で、来たわけだが」

「まだ来てませんね」

「そつだな」

「まあ良い。行くぞ！」

「はい！」

「「ユニゾン・イン！！」」

「それから…イノセンス発動！」

前とは違い夜天の書と書かれたページを破る

次の瞬間には真哉の手には一冊の魔導書が握られていた

「セットアップ！」

原作で着られているエクソシストの制服である、右胸の部分にロースクロスの紋様が刻まれた真っ黒の^{コート}団服を着た状態へと変わる

「あー！」

『どうしたんですか？』

「時間指定するの忘れてた」

『はあ…。じゃあどうするんですか？』

「来るまで待つしかないでしょ」

『それまで、ずっとこのままですか』

「当たり前だろ」

『ハーゲンダッツ』

「了解」

『バナラとストロベリーで』

「二つも食べる気が!?!」

『各二つずつ』

「四つ!?!せめて一つずつにしてくれ!遺産があるとはいえこれから十年間ほぼそれだけで生活するんだぞ!?!計画的に使わないと」

『……………三つ』『二つ』『二つ』『三つ』『二つ』『二つ』『三つ』『二つ』『三つ』『二つ』『二つ』『三つ』『二つ』『三つ』『二つ』『二つ』『三つ』

『決定ですね』

「……………やっぱり考え直してk」ユニゾン解きますよ『りよ、了解」

ああ、不適に笑うリインの顔が浮かんでくる

「(それよりも!ちゃんと悪役っぽく振舞わないとな)

「さあ、はやて!俺を殺してみよ!?!?!」

『いきなりどうしたんですか?気持ち悪いですよ』

「いじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさいいじめんなさい」

『(クスッ)嘘ですよ。真哉は安心して闘ってあげて下さい。サポートは私に任せてください』

「ありがとうなリイン」

『まあ、ハーゲンダッツは買ってもらいますが。あ！後ストロベリーの方が二つで』

「分かってるよ」

俺たちの会話からはこれからの壮絶な戦いが嘘であるかのような雰囲気さえ感じさせられた

だけど、現実是不変ならない。これから起こる闘い。それは未来へと続く闘い

その先にあるものは誰にも分からない。たとえ、神でさえも……

.....

sideはやて

「さあ、行く」

「みんな、気をつけてね

もし、崩壊が始まったら逃げるんだよ？」

「はい！(ああ!)」

こうして、私たちは崩壊寸前の第44管理外世界へと向かった

「みんな大丈夫か？」

「そういえば、真哉くんって何所にいるの？」

「それは探すしか……と、その必要はなくなったみたいだぞ」

クロノくんの視線の先、みんなの視線が一気に集まる

地上から20mというところに胸の部分に銀色の十字架が入っている黒いコートを着た白髪の少年……天宮真哉がいかにも疲れたと言いたげな表情で立っていた

「……………遅いよ」

「君が時間を指定しなかったからだろ」

「くそっ！……………バイトでもするか？」

「???何を言ってるんだ?」

「お前らには関係ねえ」

「それより、お前ら覚悟はしてきたんだろうな?」

「そんなもん関係あらへん!!今日私らは真哉くん捕まえて帰るだけや!!」

私の声を聞き、他のみんなもそれに同意すると、明らかに真哉くんは不機嫌そうな顔をした

「その程度の覚悟だとは本当にかっかりしたよ
まあ良い。どうせ後で後悔することになる。封鎖領域展開」

辺りが一面真哉くんの展開した封鎖領域に包まれる

「これで、外に転移は出来ない
改めて、俺の目的教えてやるよ」

「まず、一つはエンゲージメントを使ってのお前たちのデバイスの吸収及びお前達のリンカーコアの蒐集、二つ目は最初の二つを終えた後、お前達にイノセンスを強制的に適合させる」

イノセンスの強制適合?そんなことしたら……

「ちょっと待て!そんなことしたら……」

「そうだ。俺の第二の目的はお前達を咎落ち化させた後、お前達をアクマの軍団に放り込むんだよ」

「そうすりゃ。俺のほうも大分楽になるからな」

「そんなことのために……………」

「ああ？」

「そんなことのためにリインを使う気なんか!!」

「そうだ。所詮アイツはデバイス唯の道具だ。道具なら使うのは当然だろ？」

「もう議論の余地はあらへんよつやな」

「最初からそう言ってるだろ？」

掛かって来い!! 決戦だ!!!!」

- - -
- - -
- - -

Side 真哉

「掛かって来い!! 決戦だ!!!!」

その言葉を放った瞬間、全員が一気にデバイスを起動させ、戦闘態勢に移る

「すまないな、リイン。酷いこと言って」

『真哉。そんなこと言わないって約束でしょ？私は気にしてません。私やマスターのために言ってることですから』

「ありがとな」

『さあ、私は魔法の方に専念します。真哉はマスター達のお相手を』

「分かってるさ」

「イノセンス発動!!」

「テートリヒシユラーク!!」

「大槌小槌 満満満!!」

ヴィータのグラーファイゼンは鉄槌で安々と防がれる

「ヴィータ!!出すぎだ!!」

「うるせえ!!コイツだけは……コイツだけは!!!!」

ヴィータが必死の攻撃を続けていく

泪で歪んだ顔で……

「何で泣いているかは置いといて、そんなんじゃ俺には勝てないよ」

「うるさいって言うてんだろ!!グラーファイゼン!!」

「ギガントフォーム」

「轟天爆碎!!!ギガントクラー………ッシュ!!!!」

41話 終わり無き闘い(前書き)

今回は全て戦いです。描写はまだまだなので、感想の方に色々書いていただけると嬉しいです

私は空中で顔色一つ変えない男に向かって、攻撃を加えようとするが、その腕をシグナムに掴まれる

「離して！離して！！シグナム！！！」

「駄目です！！」

このまま突っ込んでいけば、ヴィータの二の舞になってしまますー！！」

「じゃあ、このまま黙って見てろって言うんか！！」

「そうは言いません

ですが、冷静になってください！！」

「はやてちゃん……………」

「私が治療を……………！！！」

「行くな！！シヤマル！！！」

「え……………」

「よー

シヤマル」

咄嗟に防御の姿勢を取ろうとするが、あっさりと首を掴まれる

「俺がこんなこと許すと思ってたのか？」

お前もヴィータと一緒に寝てな
『蒐集』」

「蒐集」

夜天の書の蒐集機能によって、シャマルのリンカーコアが蒐集される

「ありゃ？

ああ、そっか

もう、夜天の書とは切り離されてるから、蒐集されても大丈夫な
のか」

てつきり、消えてなくなると思ったのに

残念……………」

「真哉あああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「我が主、落ち着いてください！！

これでは、天宮の思う壺です！！」

「でも…でも……………！！」

「私に考えがあります

それに協力してください！！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

side 真哉

「（そろそろ、シグナム辺りが動いてくるかな？）」

「散!!」

その掛け声とともに、今まで俺の前に集中していた全員が俺の周りに散開した

そして、前に残っているのはシグナム一人

「お前ら何企んでんの?」

「言っわけが無いだろ」

「そりゃそうだ

(でも、どうするつもりだ? 周りから一斉攻撃? それなら正面がシグナム一人の理由が付かないし、それにそもそもそんな安直な考えが通るとも思っていないだろうし)

ま、良いか」

「行くぞ!」

そう言うとともに、シグナムが俺に向かって突っ込んでくる

「はぁ? それが作戦か? がっかりだよ」

俺は向かってくるシグナムに斬撃を放つ
その時

「レヴァンティン!!」

「パンツァーガイスト」

シグナムの体の周りがシグナムの魔力光と同色のオーラに包まれる
そして、俺の放った斬撃はシグナムに当たるが、向かってくる勢い
を止めるほどの傷は与えられない

ガキッ

「フィールドタイプの防御魔法が
意外と考えてたってことか」

「お前相手にシールドタイプやバリアタイプではお前に死角を突か
れる可能性もあるからな」

「でも、この程度じゃ俺は倒せないぞ？」

「そんなことは分かっている
今だ!!!」

「チエーンバインド!!!」

「「ストラグルバインド!!!」」

バインドにより手足の自由が奪われ、加えて保険に教えてもらった
いた身体強化魔法もストラグルバインドにより解けてしまった

「行くよ!フェイトちゃん!はやてちゃん!」

「「うん!!!」」

「「スターライトブレイカー」」

「全力全快！！スターライト」

「雷光一閃！！プラズマザンバー」

「響け終焉の笛 ラグナロク」

あ……………これは真剣に不味いかも

「コッブレイカー――――――」
「――！！！！」

――
――
――
sideはやて
――
――
――

「（これで、本当に終わりやー！！）
響け終焉の笛 ラグナロク」

「コッブレイカー――――――」
「――！！！！」

三方向から放たれた魔力の奔流が一直線にその中心に佇んでいる真
哉くんに向かっていく
決着が着いた
その場に居た誰もがそう思った

甘いんだよ！！非殺傷設定の攻撃なんかで俺を殺れるわけないだろっg」うわああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

真哉くんが言い終わる前に、アルフさんが真哉くんに向かって突っ込んでいった

「アルフ！！駄目だ！！」

「いや、彼のイノセンスを見る！」

「え？何も無いやん

それがどうかしたんか？」

「さすがの彼も、非殺傷設定とはいえ、ブレイカーを三発一気に喰らって、無事なわけが無い」

「じゃあ、何で？」

「もう一度きちんと見てみる」

真哉くんのイノセンスをもう一度見てみる
すると……

「あれって、罅？」

「そうだ、彼は咄嗟にバインドを破壊して、イノセンスを盾にしたんだ

それで、何とか直撃を避けた

でも、彼も大分满身創痕なはずだ

「（これは……………使えるな）
満満満！！コンボ判 剛雷天！！」

龍を模した雷がクロノの魔法を次々と破壊していく
そして、ちょうど中間地点の辺りで魔法が爆散し、お互いに姿を確
認することが出来なくなる

「よし！今のうちに……………
イノセンス発動『リカバリ時間回復』」

体から時間が回復し、全くの無傷の体に戻る

そして、煙の合間からはやての顔が見えてくる

「行くぞ、イノセンス発動……………！！」

41話 終わり無き闘い(後書き)

すいません……。またまた修正です

42話 星に願いを(前書き)

今回で戦闘終了!!

42話 星に願いを

sideはやて

「ちよつ！クロノくん何してんの！？

これやったら真哉くん見えやんやんか！」

「す、すまない」

「イノセンス発動……………！」

「……………！！来るぞ！」

一瞬、隣のクロノくんの方を振り向く

その時、瞳に映ったのは正面を振り向いて身構えているクロノくん
とその後ろから罅の入った刀を振り上げている真哉くんの姿だった

「クロノくん……！」

「っが……………」

「俺が傷を負っているからって気を抜きすぎだ
傷ぐらいどつってこと無い」

「エクセリオンバスター バレル展開 中距離砲撃モード……！」

「バレルショット」

なのはちゃんのレイジングハートから放たれた衝撃波が真哉くんに

「……………!!」

フォースバーストの四つの砲撃を相殺しつつ、残りの斬撃がなのはを襲う

「（ここらで使うか）憑神、俺の体任せたぞ

それと、お前ははやてとヴォルケンスの足止めな」

【久々の出番やな……………】

「返事は？」

【了解や！】

そして、なのはが俺の放った斬撃に気を取られている隙に、俺は背後に回りこむ

「イノセンス発動」

「っな……………」

そのまま、俺はなのはの体を奪う

「憑神そっちは任せた」

「了解や」

「よーユーノ」

「君は…真哉か」

「そうだぜ」

お前の大好きな、なのはの体でぶっ飛ばしてやるよ」

「っな！」／／／／

「隙あり」

「しまっ……………」

「デイバイ——————ンバスター——————」
「！！！」

そのままユーノの体地面に落下していった

妙に嬉しそうな顔だったのは秘密にしておこう

ユーノの威厳のために

「アルフの方も…ちょうど終わったみたいだな」

その時、ちょうど地面に犬の姿で落下していくアルフの姿が映った

「さて、この体には……………とりあえずバインド掛けとくか」

「マスター」

終わったんか？」

「ああ。そっちは？」

「紫電一閃！！！」

ヒュッ

「大丈夫や

何発か。喰らってもうたけど

タイムレコードのおかげですぐ直ったし」

「ブリューナクー!!」

ヒュッ

「後でそのダメージが全て俺に来るってこと分かってるんだろっな
?」

「縛れ!鋼の軛くびき!!」

ヒュッ

「当たり前や」

「(こいつ……)」

まあいい。体返せ」

ついでに言つと、こうしてる間も俺達はやて達の猛攻を全力で避けてます

俺はほとんど避けてない

一応、俺は今なのは体だからな

てか、このままじつとしとけば、絶対勝てるじゃん!

いや、そんなことしないけど……

俺はその後適当になのはの体にバインドを掛けてもらい、元の体に

戻った

「ふうようやく戻った

あーそうだ

穿て、ブラッディダガー」

「きゃっ……………」

バインドを掛けられているのは何の抵抗も出来ず、もろにブラッディダガーを受け撃墜

「さ、もうこれでお前達三人だけだ

どうするっ？」

「主、このままでは……………」

「そんなの分かってる！

でも、もうどうしたらいいんか……………」

「非殺傷設定を外しましょう」

「え……………」

やっと、そこまでたどり着いたか
そりゃそうだ。非殺傷設定で倒せないなら、殺傷設定にするしかないよな

「でも、そんなことしたら真哉くんが……………」

「そんなこと言っている場合ではありません!!」

ここで奴を…天宮を倒さねば、私も含め、主も、全員が死んでしまふんですよ!!」

「でも……………」

「あれは、私や貴女の知っている天宮ではありません!!」

主早くご決d「会議中申し訳ないけど…お前ら隙ありすぎ」……………

…!!」

シグナムの体が肩から脇腹に掛けて切り裂かれる

元々、負っていた傷も重なって、そのままシグナムも撃墜

「我が主!!」

咄嗟にザフィーラがはやての前に立ち、後ろに居るはやてを庇おうとする

もし、お前達がいやお前一人でも俺のもしくはいまさっきのシグナムのでも良い

忠告を…非殺傷設定を解けと言う忠告を聞いてたら、もしかしたら、俺はもつと早くに少なくともザフィーラやシグナムが犠牲になることはなかっただろうな

「わたしの……せい？」

「さあ、どう取っていただけでも結構

最後に決めるのはお前だ

だが、唯一ついえるのは、本当の戦場でそんな迷ってる時間はねえ」

「……………!!」

「さあ、はやて最終決戦だ」
ラストバトル

「……………そうやな

もうそろそろ、覚悟決めやんとあかんかもしれへんのやな
じゃあ一個だけ言わして」

「ん？何だ？」

「真哉くん

貴方が……………

好きでした

「

「……………行くぞ！！イノセンス発動」

現れたのは真っ白な道化
だが、ところどころが血で赤く染まっている

「非殺傷設定解除！！
クラウ・ソラス！！」

「（これは、やべえな）
六幻！！鉄槌！！」

六幻と鉄槌を交差させ防ごうとするが

バキッ

絶望した

「つぐ………！」

咄嗟に体を逸らして、直撃を避けたが、右肩の方から血がにじみ出ている

「それに、もう六幻と鉄槌は使い物にならないな

（ラインそっちの用意は？）」

『とつくに』

不意に空中を仰ぎ見る

もう星が瞬き始めていた

「（もう、そんな時間か

準備は完璧。これで作戦は上手くいくだろう

だから、最後に………）」

みんなに幸せが訪れんことを」

一つの思いを夜空に煌く星に願いを込めて

『真哉

主の方も準備は万端のようですよ』

「響け終焉の笛……ラグナロク……！」

「分かつてる

臨界点突破

イノセンス発動！！

(ボソツ) みんなに幸せを……………」

「ブレイカー……………」
「……………」

「クラウン・クラウン！！！！！」

ラグナロクと退魔ノ剣から出たエネルギー波がぶつかり合う
そして、空中で大爆発が起きる

「はああああああああああああああああああああああああ
ああ……………」

爆風の中を掻き分け、はやてが俺にシュベルトクロイツを突き出し
た体制で突っ込んでくる

「(あれは、確かマニユーバA・C・Sって言う突撃技か。なら…
……………」

これで、終わりだああああああああああああああああああ

あああああああ！……！」

二人の影が重なり合い

辺りに張られていた結界が音を立てて、崩れ落ちていく

まるで、この戦いの終焉を告げる笛のごとく

42話 星に願いを(後書き)

次回が一応A・Sのラストです。意外とA・Sが続いていたことに驚きです。いや、マジで

43話 明日へ

sideはやて

胸に突き立つ刀

真哉くんの体からは次々と血があふれ出ている

が、自分の体には血が一滴も出ていないどころか、何の痛みすら感じなかった

それは、ある意味当然だ、自分の腹に刺さっているのは退魔ノ剣
魔だけを破壊する刀。人間である自分には何の効果も持たない
だからこそ分からなかった。最後の最後に何故真哉くんがこんな初
歩的なミスを犯したのか

今まで、自分が知らない時からずっと戦ってきた真哉くんが、しかもこの生死が掛かっていると言う場面でミスするとは考えられなかった

「え…真…哉く…ん」

「じほっ…甘い…ぞ、はやて

敵に…きち…んと止めを…指さないなんて………」

「どっ…いっ…ことっ」

自分の声が震えていることに今になって気づいた

「でも……合格だ（ニコッ）」

そこで私の意識は途絶えた

画面には今の今まではやてを受け止めるような体制でいた真哉がそのままの体制で地面に落下していた
地面に横たわっている真哉の瞳は何の光も宿していなかった

「ちよっ！！艦長！！これ、もしかして真哉くん……………」

死んでません？」

「まさか……………」

「いえ、本当ですよ！

こっちの生体反応にはもう真哉くんの姿は……………」

「……………分かりました

今すぐみんなの回収を！！！」

「真哉くんの遺体は！？」

「置いていきます」

「何故ですか！？」

「この状況からして、真哉くんに止めを刺したのは、おそらくはやてちゃんでしょう

もし、真哉くんの遺体を連れてきて、はやてちゃんが自分が殺したと知れば、どうなるかは容易に想像がつきます」

「だから、真哉くんの死は次元世界の崩壊によるものにするか?」

「何と言われても構いません」

ですが「みんなの転送の準備を! ! 真哉くんの遺体はこの次元世界に置いていきます」エイミー! ?」

「毒を喰らえば皿だけっていうじゃないですか! 艦長が一人でそんなこと背負うことないですよ! !」

アースラクルーが同様に頷く

「ありがとう、みんな」

それと、エイミー。それを言うなら『毒を喰らえば皿まで』よそれより、転送の準備の方は?」

「……………今、完了しました」

「急いで転送を! !」

気絶したみんなが続々とアースラ内に転送されてくる

その中に、真哉くんの姿は無い

「全員を医務室へ! !」

「結局この戦いは何のために……………?」

「その本当の理由はもう二度と聞くことは出来ないでしょう」

「……………ですね」

コッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコッコ

「次元世界の崩壊が……………」

「ここに居ればこちらにも巻き込まれます！

ここから、周辺より急ぎ退避します」

こうして、後に首謀者天宮真哉のイニシヤルと後の管理局のエースたちの初めての協力した事件としてA・S^{キース}事件と呼ばれることとなる事件は第44管理外世界の崩壊に伴う容疑者死亡と言う形で幕を閉じた

はずだった

「でも、次元世界の崩壊で真哉くんと一緒にリインフォースさんまで……………」

「それは、止む終えないことよ」

「はやてちゃん、きつとk「私がどうかしましたか?」!!」

そこには、綺麗な白銀の髪を持った一人の女性が現れた

「り、リインフォースさん!?!」

「何故ここに!?!」

「最後の1撃で真哉はイノセンスの適合者ではなくなりました
その影響で、私も自力で外に出れたんです」

「それで、戻ってきてくれたの？」

良かった。これではやてちゃんもきつと喜ぶよ！」

「いえ……………今ここへ来たのは

お別れを言うためです」

「え？」

「ごめんなさい！」

今まで散々お世話になったのに、でももう私ははやて達の下へは戻れません」

「な、何で!？」

「すいませんが、それは言えません」

「それは、あなた自身で決めたことなんですね？」

「か、艦長!？」

「はい」

「分かりました

はやてちゃん達には『真哉くんと一緒に消えてしまった』と伝えておきます」

「ありがとうございます
それと、はやて達にこれを……………」

渡されたのは、金色の歯車状のものが交差したような物体が七つ

「……………！！これは……………」

「先ほども言ったとおり、真哉の死亡によりイノセンスの適合者は他の誰かへと移りました」

「その誰かがはやてちゃん達の中に居ると？」

「イノセンスが反応しているので、おそらくは」

「分かりました

これは我々が責任を持って、彼女達に渡しておきます」

「ありがとうございます

では、私は……………」

「もう行くのですか？」

「はい……………」

はやて達と会ってしまつと別れが辛くなつてしまつので」

「では、また会う機会があれば」

「はい」

「さいですか

……でも、本当に不思議だよな」

「何がです？」

「いや、適合者じゃなくなったのに、こいつだけは俺のところに残るなんて

それにまさかりインも適合者になるとはな」

私が適合したイノセンス『グレイブオブマリア聖母ノ枢』と言っらしい

「真哉の人望じゃないんですか？」

「思っても居ないくせに」

「そんなことないですよ」

「でも、本当にありがとうな

お前が居なかったら、俺、今頃確実に死んでたぜ？」

「それは、お互い様ですよ

私も真哉が居なかったら、今頃は………」

「そうだな」

横で微笑む彼の表情はまだ10歳とは思えないほど大人びていて、一瞬見ほれてしまった

「ん？どうしたんだ？こつち見て」

「いえ、何でもありませんよ」

（もし、これからも10年、20年、いや死ぬまでこの人の横で一緒に居れるなら………）「」

自分は夜天の書の官制人格で作られた物だということは知っている
謂わば機械だ
でも、それでも

『もう、何もいらぬ』確かにそう思えた
この人と共にこの先も歩めるなら、たとえ向かう先がどんなに暗い
闇でも

「じゃあ行くか！」

「何所にですか？」

「何所つてハーゲンダッツ買いに行くんだろ？」

「はい！」

風で草木が揺れる草原の中

白銀の銃を片手に、白き断罪者と黒き淑女は歩き始める

明日に向かって

43話 明日へ(後書き)

すいません!! A・S 終了は次回になる……かも? このまま S r
iker・s に行くかも知れません。後1話書くとしてもそんなに
長くはないと思います

44話 時を越えて(前書き)

遂にStriker's!!もう1話は書きませんでしたwww。
原作キャラのイノセンスも徐々に登場させます

44話 時を越えて

そこはとても暗い闇の中
いや光の差す明るい場所だったかもしれない
ただ声が聞こえてきて

『君の望みってなんだい？』

酷く無機質な声だった

-. -. -. -. -. 俺の望み？ -. -. -. -. -.

『そう』

-. -. -. -. -. 俺はみんなが幸せになつてくれればそれで良いよ
-. -. -. -. -.

『それは無理だよ』

-. -. -. -. -. やる前からそう決め付けるのは嫌いなんだ
-. -. -. -. -.

『君は本当のところ理解しているはずだ』

-. -. -. -. -. 何を？ -. -. -. -. -.

『全てを幸せにするのは無理だつてことをだよ』

-. -. -. -. -. お前に何が分かる！ -. -. -. -. -.

『分かるよ。だって……………』

そういうと、妙に悪かった視界がはつきりしてきた

『君はボクだもの』

そこには黒髪の少年、いや昔の俺が立っていた

俺がこの呪われた目を持つまでの俺

大した信念も無く、唯日常を過ごしてきたときの俺

『君の相棒である彼女よりももしかしたら君自身よりもボクは君を
理解してる』

……………黙れ……………

『認めたくないかい？でも事実だよ。この世の全ての人間を幸せに
など出来ない』

……………黙れ！……………

言うな！それを言うな！！

『だって……………』

言うな！

『この世のアクマはまだ消えていないじゃないか』

……………くっ……………！！……………

『^{悲劇}アクマがある限り人は幸せになどなれない。それにそもそもアクマがいるということは誰かが哀しんでいるということじゃないか』

- - - - - だけど…………… - - - - -

『それにこの十年間君の救おうとした人間は君に何をした？』

- - - - - …………… - - - - -

『救ってやったと言うのに人間は君の力を恐れ、君に攻撃を仕掛けてきた』

- - - - - そんなこと俺には関係ない。俺は…………… - - - - -

『自分を傷ける人間だろうと救う？君は何故人間が他の人間を救おうとするか分かるかい』

- - - - - …………… - - - - -

『それはね、その人間にとって他の人間を救うことが自分の<幸福>に繋がるからだよ。人間は生まれながら<幸福>を追う生き物だ。それが人それぞれ違うだけ。君はいわゆる自己犠牲野郎という分類かな？』

- - - - - それが何の関係がある - - - - -

『さつきも言っただろ？君の存在はあるだけで人を不幸にする。最終的に全員を幸せにするには君自身が消えなければならぬ。よく言

うだろ？大きすぎる力は災いを及ぼす。そして、災いは人々に悲しみをもたらす』

- - - - -もし、そうなら大人しく消えるだけだ - - - - -

すると、今まで落ち着いた口調で話していたコイツは急に焦ったよ
うな声色で

『馬鹿だ！君は今でもはやてやリインやヴィータやシグナム、みんなと一緒に暮らしたいと思っ**て**いるはずだ！！』

- - - - -ああ。彼女等は俺にとって大切な家族だ。命を捨てても良いと思えるほどに - - - - -

『君はどれだけ自己犠牲野郎なんだ！』

- - - - -それはお前も知ってるだろ？お前は俺なんだから - - - - -

『ボクの幸せはどうなる！？』

- - - - -でもさ、俺は一度死んだんだ。一回目くらい他人のために生きてみないか？ - - - - -

そうそのために得た新たな力だ

『くっつ！！まあ良い。今日のところは君の説得は諦めよう。だけど、ボクは君を救ってみせる！』

「ありがとう。そろそろかな？リイン、次元転送よろしく」

彼の足元に魔方陣が浮かび上がり、彼の姿がどんどん希薄になってゆく

そして、ちょうど彼の姿が完全に消えてしまったその時

「良かった。間に合った。助けに来たよ」

彼女は一瞬私の周りの石像の破片を見てから、また視線をこっちに戻し、地上まで降りてきて

「よく頑張ったね。偉いよ」

「う…うん！」

「もう大丈夫だからね。安全なところまで一直線だから！」

「上方の安全を確認」

彼女の足元に彼のとは色が違う魔方陣が浮かび上がる

「ファイアリングロック解除します」

「一撃で地上まで抜くよ！」

「了解。ロードカートリッジ」

そのまま持っている杖を上へと向ける

「バスターセット」

杖の先から魔方陣と同色の丸い塊が現れる

「デイベイ————ンバスター————」

その一撃で地上まで一気に貫通し、私は救助された
約束だから彼のことは言っていない
でも、その時思ったんだ

泣いてるばかり何も出来ないなんて嫌だって、彼や助けてくれた魔
導師のなのはさんみたいに強くなりたいて

- - - - -
- - - - -
- - - - -
side???

「うん。こつちだったかな？……ん？おお、居た居た」

お……僕の視線の先に合計で五人の女性の姿が見える
奥の三人のうちの真ん中の人物が僕に気づいたようだ

「すみません！ちょっと迷っちゃって……」

「ええんよ。先になの……高町教導官の用事済ませて、これから話
すとこやし」

ということとは、再試験の話をしたということかな？

「で、君は……」

「はい！アレン・ウォーカーです！」

44話 時を越えて（後書き）

後、誰々にこのイノセンス持たせて欲しいなどの意見があったら言
ってください！可能な限り使って行きます！

45話 マボロシ

氏名：アレン＝ウォーカー

階級：二等陸士

魔導師ランク：C

備考：……年管理局本局陸士部隊に……

はやての持っている書類につらつらとそんなことが書かれているその横には、かつて自分が恋をして、笑いあって、そして、最後に騙されて、恨んで、殺しあった一人の男の子とそっくりの顔の男の子の写真が張ってある

はやては一旦その書類顔を上げる
知らない間になのはが隣に居た

「あの子達はもう入隊確定かな？」

なのはの視線の先にはまだ14の二人の女の子……スバルとティアナが仲の良さそうにはしゃいでいる

「……………そうやな」

「もしかして、彼……アレン君が気になってるの？」

「まあな」

「本当にそっくりだもんね。真哉くん」

その名を聞いたとき、体がびくつと反応するのが自分でも分かった
割り切ったはずなのに、天宮真哉の死が自分に今でもつきまとって
いるのがわかっていた

それほどまでに好きだった

十年前のことのはずなのに、今でも彼のことを思い出すたびに、
胸が苦しくなる

「……………そうやね」

「新規のフォーアード候補は後二人だけ？そっちは？」

話題が真哉のことから遠ざかったためか、はやての顔がいつもの表
情に戻る

「二人とも別世界。今シグナムが迎えに行ってるよ。お！」

向こうの方からフェイトとリインが来るのが目に映る

「なのは！はやて！お待たせ」

「お待たせです」

「ほんなら、次に会うんは六課の隊舎でやね」

「お二人のお部屋しっぴかり作ってあるですよ！」

「うん！」

「楽しみにしてる」

というような会話があったその数十分前、ちょうど再試験についての話が終わった直後まで話は遡ることになる

「すみません！ちょっと迷っちゃって……………」

「ええんよ。先になのh…高町教導官の用事済ませて、これから話すところやし」

「で、君は……………」

「はい！アレン・ウォーカーです！」

嘘が大いに含まれた自己紹介をした後、席を勧められた僕はスバル…さんの隣に座り

「どうも」

「君何所かであったっけ？」

「へ？初対面だと思いますけど？」

「ふん。そっか」

内心。危なかったとか思いつつ前にいる幼馴染三人組に視線を戻す

「で、話なんやけど……」

面倒くさいので、六課設立の経緯については省略

「……………というわけや」

「部隊名は管理局本局遺失物管理部『機動六課』！！」

「登録は陸士部隊

フォアード陣も陸戦魔導師が主体で特定遺失物の捜査と保守管理が主な仕事や」

「遺失物…ロスト・ロギアですね？」

そこら辺からスバルが何のこと言ってるかわからないといった表情になってきていた

「そう」

「でも広域捜査は一課から五課までが担当するからうちは対策専門」

「そうですか」

『ティア、ティア！』

『何よ』

『ロスト・ロギアって何だっけ？』

『うつさい！今話中よー！』

というような会話が頭の中に流れてくる

俺には補助がついているとはいえ、こつ簡単に盗聴されるんだつたら、なのは達にも聞かれてるんじゃないのか？

まあ、スバルがあまりに不憫なので

『ロスト・ロギアっていうのは消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおるか全次元を崩壊させかねない程危険な物のことなんですよ。だから管理局がこつやつて搜索して、管理するんですよ』

「へ？あ、ありがとうございます！」

俺がいきなり念話したのにびっくりしたのか、普通に声に出してしまつた

「スバル。急にどうしたの？」

「い、いえなんでも無いです。本当に」

そついうと、またはやて達は説明を再開する

『教えてくれてありがとう』

『どついたしまして』

「で、スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士、

アレン＝ウォーカー二等陸士」

「はい」「は、はい」

「私は三人を機動六課のフォーアードとして迎えたいと思ってる
厳しい仕事になるとは思っけど、濃い経験は積めると思っし、昇
進機会も多くなる

どうやるっ?」

「(ま、僕にしてみればこの十年以上に濃い経験をつむことはこれ
から二度とないとは思っけど)」

僕はいたって平静を保っているが、他の二人はさすがに突然の申し
出に戸惑っている

「スバルは高町教導官直接教われるし」

「はい」

「執務官志望のティアナは私から色々アドバイスできると思っんだ」

「いえ、とんでもない

というか、恐縮です、といたしますか」

「それに指揮官志望のアレン君には私直々に現場の指揮について教
えてあげれるよ」

『まあここまでは良いわ

リン。盗聴されやんようにしてな』

はやての声だけが、頭の中に響く

『了解です』

『ここからは極秘だから、絶対に他言せんように』

『はい』

『実はな機動六課は確かにロスト・ロギアの搜索・回収のために作られたもんなんやけど

もう一つ役割があんねん』

『何ですか？』

『アクマ』

『……！』

『この単語に聞き覚えあるやろ？』

『まさか……』

『そうや。この機動六課は対アクマの前線基地や

もちろんフォアード陣は全員『適合者』やし、スタッフも全員イノセンスについては知っとる』

『では、機動六課に入ったら……』

『当然、アクマと戦わんとあかん場面が出てくる。辞めたいときはいつでも言ってくれてかまへん』

そのときは一応イノセンスだけは回収させてもらうけど
だから、通常の魔法戦闘訓練意外にもイノセンスを使つての戦闘
の訓練もすることになる

これだけは知ってもらおうと思つて』

そこで、念話が打ち切られる

「リインご苦労さん」

「はいです〜」

「判つたとは思つけど、これは命がけや

無理に入ってもらつつもりはないし、途中でやめてもらつてもか
まわへん

まあ、返事についてはスバル達の再試験終わつてからで、かまわ
へんよ〜」

僕の心はもう既に決まっている

というか、こんな面倒くさいことしてるのは全て機動六課に入るた
めだし

だから、僕は他の二人の様子をと横目で見る

まず、スバルは迷っているようだ

当然だ。アクマと戦つたら運が悪ければ死ぬ可能性だつてある

次にティアナの目から読み取れたのは“憎悪”

「（復讐か）」

ティアナのお兄さん…ティード・ランスタ―

原作では違法魔導師により、殉職したのだが、こちらでは違法魔導師追跡中アクマに遭遇し、殉職後は原作と一緒に

まあ、アクマのことを話せない今の管理局は原作どおり違法魔導師により殉職ということになっているが

つまり、ティアナにとってアクマは兄を奪った仇恨むのは当然のことだといえる

そして、その日は、そのまま解散ということになった

「ふ〜どきどきした〜」

『何がですか？』

頭の中に澄んだ声が響く
俺はその声に応える

「何がって、分かっているくせに」

『判りません。それは私の調合が失敗してるかもと言いたいんですか？真哉は』

「アレンですよア・レ・ン」

『そうでしたね。アレン』

「疑ってたわけじゃないよ

真祖の吸血鬼が使っていた年齢詐称の薬とはいえ、こっちで通じるか分からなかったから」

『もういけたんだから良いじゃないですか』

「ふっそうだよな

おっと、そうですね」

『薬は完璧なんですから、口調でばれたりしないでくださいよ』

「分かっていますよ。心配性だなアインは」

『心配しますよ』

「ふふっありがとう

じゃあ今日は帰りましょっ

「はい」

45話 マボロシ(後書き)

真祖の吸血鬼っていうのはご想像にお任せしますwww。まあ後々そのことについても話す予定です

46話 過去の扉（前書き）

今回は過去回想です

46話 過去の扉

はやて達が機動六課をつくり、四苦八苦している時から十年くらい（長っ！）時は遡ることになる

「ありがとうございました」

後ろから店員の声と、自動ドアが閉じる音を聞きながら、俺はふと思ったことを口にしてみた

「平和だな」

「そうですね」

隣にいる銀髪の女性：リインフォースからも間延びした声が聞こえてくる

何気に髪の色が（ほぼ）同じなので、よく兄弟として間違われる
まあ、都合が良いので、ご近所には兄弟で通しているわけだが
そんな彼女は、今ローソンで買ったばかりのハーゲンダッツを袋からせっせと取り出している

「帰ってからにしろよ」

「そんな悠長なこと言ってたら、溶けちゃいますよ」

そう言って、中に入っているスプーンも一緒に取り出し、食べ始める

「ん。おいしい」

頬を綻ばせながら、嬉しそうにハーゲンダッツを食べる。そんな姿に一瞬だが見ほれてしまった
そして、リインは思い出したかのように、もう一つのハーゲンダッツとスプーンを取り出し、俺に差し出してくる

「はい。真哉にも。ストロベリー好きですよね？」(ニコッ)「

「あ、ああ」／／／／

「ん？ちよつと頬が赤いですよ？もしかして風邪でも引いたんですか？」

今度は若干不安そうに聞いてくる

「いや、大丈夫だよ

夕陽のせいで、そう見えてるだけじゃないか？」

「そうですか。そうですよね！」

「そつだよ」

そう言うと、リインはまたおいしそうにハーゲンダッツを食べ始める
俺もリインに貰ったハーゲンダッツの蓋を開け、食べ始める

「(ん。確かにおいしいな。でも……………」

ちよつど頬の火照っていた俺にはちよつど良い冷たさと甘さが口の中に広がる
だが……………」

「(でもさ、元旦にハーゲンダッツは無いんじゃないかね?)」

やっぱり、外は寒かった！若干昨日降った雪とか残ってるし！

「やあ」

二人して、借りているアパートに戻ってきたのだが

「ね×「ライン。今すぐ警察に連絡だ。不審者が居る」え！ちょっと「了解!!!」ええ!!!」

「どづいづことだ？」

「今の力のままで、伯爵に勝てるなんて思ってないだろ？」

「……………だから？」

「力をあげに来た」

「はあ！？そづいづのは無理なんじゃなかったのか！？」

「ちょ…真哉！全く話が飲み込めないんですが」

「うゝん。そうだねじゃあ君の中に、彼についてのデータを送るよ」

「おい！勝手に……………」

「ごめゝん。もうしちゃった」

恐る恐るラインの顔を見る

「ライン……………知っちゃったのか？」

「はい 真哉が実は二十歳半ばのロリコン変態野郎だっていうのが

」

グサツ

「大丈夫ですよ。私はどんなに真哉が変態でロリコンだろうと、私はズット傍にいてあげますから」

グサササッ

二時間後

「そろそろ続き話しても良いかな」

「……………そうだ！」

「は？」

「そうだよ！精神年齢がもうすぐでアラサーだとか関係ねえ！！
肉体年齢は九歳なんだ！！そうだよ！！それに精神は肉体に引
張られるって言うしな！！」

「「開き直った!?!」」

「ま、まあ良いや。じゃあ立ち直ったところで、続きはなして良いか

な？」

「ああ、で、何だっけ？」

「今のままの『力』で伯爵を倒せるとは思ってないだろ？」

「まあ、そりゃあそうだけど、でも予想じゃあ伯爵の動き出すまでにはかなり時間が有るんじゃないのか？」

「確かに今までは君一人だったからまだしも、今回の一件で一気に適合者増えたからね、」

「今まで通りというわけには、行かないだろうよ。おそらく最低でも二年くらいは掛かるんじゃないの？」

「だろ？それまでにまたイノセンス探したり、魔法の練習したり、色々出来るじゃん」

「今はそこまで急がなくても……………」

「甘い甘い。言っとくけど今回の一件でもう君にはイノセンスの適合者としての資格は一切消えてしまったよ？」

「はあ！？」

「当たり前じゃないか。もうイノセンスは各々適合者を決めてるだろうし、ていうか、魔法の練習したところで、アクマには効かないじゃないか」

「へ？マスターこの『エンゲージメント』を使えば、魔法が効くんでは……………」

「ああ。すまん、リイン。言うの忘れてた
そのイノセンスデバイス吸収能力はあるけど、他に機能は一切無
いんだ」

「え、！じゃあ魔法でアクマは……………」

「倒せない」

「というか、『魔力』を『神の力』に還元するなんて、理論的に不
可能なんだよ」

「じゃあ、何故嘘を？」

「そう言わないと、普通に考えておかしいだろ？アクマ倒せないの
に、無駄にデバイス集めてるって」

「まあ、そうですね」

「てか、どうすんだよ！！今のままじゃ伯爵となんかぶつかったら
即『しゅんさつ』だぞ！！」

「だから、僕が直々にここに来たんじゃないか」

「じゃあ力をくれるのか！？」

「だから、そういうのは無理だって言ってるだろ？」

「じゃあ、どうすれば……………」

「一つ聞く」

「何だよ」

「この世界、Striker'sまでの十年間で、この世界に何が
ある？」

「なのはさんの事件とか、他には見たことも無いですが、スバルさんたちの事件とかですかね？」

「リイン、原作知識も持ってんの!？」

「はい」

てことは、今の状況を確認すると

リイン 原作知識、イノセンス×2、魔法の才能 etc……
俺 原作知識、イノセンス×2（ほぼ一つといって良い）、魔法の
才能（あるの？）

「……………俺の価値って一体？」

「まあ、そんなことは一旦置いて、はっきり言ってこの世界は
10年間これといった事件は無い
でも、事件が無いんじゃない。腕も上がりにくい
やっぱり、100回の修行より、1回の実戦でしょ!…
と、いうわけで……………」

果てしなく嫌な予感しかないんだが
そして、神はゆっくり口を開く

それに……………」

「「それに??」

「君は普通に『ジャツジメント』と適合できたんだとすれば……………」

「まさか!!あっちの『ジャツジメント』とも……………」

「その可能性は十分にありうる
だが、どんな危険が待ってるか、わからない
その点は十分注意するように」

「ああ、分かった

「じゃあ早速……………」

「じゃあ、頑張ってるね」

それと、僕の都合で、他の世界にも移すからね」

「は……………それってどういうk「転送開始」

そうして、どんどん自分の姿が希薄化していく

「おい!ちよつと待って」^神「めんね」……………!??」

最後に見たアイツ^神の表情は驚くほど悲しそうで、俺は何も言えぬまま、唯流されるままに転送されていった

さつきまでは三人の男女が色々話し合っていたアパートの一室。しかし、今では一人の男が小さな木製の机のにぐだつと頭を乗せて、俯いているだけだ
そして、突然男が口を開く

「なあアーテー、僕はこれでよかったのかな？」

誰も居ないアパートの一室で一人男が呟く

「はは、やっぱり君は優しいな。僕には君が破滅の女神なんて言われてるのが、不思議でしょうがないよ。あ！もちろん僕はそんなこと思っていないよ！！！」

また、男は誰も居ない虚空に向かって言葉を吐く

「でも、思うんだ。今からでも遅くないから真哉を…息子を連れ戻すべきじゃないかって

分かってる。彼はおそらく事実を言っても、やり通すだろうね

本当、誰に似たんだろうね

でもさ、そんなこと言っただって、やっぱり嫌なんだよ

息子を… たった一人の息子を……

ばけものにすゐるなんて……」

そして、やはり男は何も無い虚空に向かつて静かに涙を流した

46話 過去の扉（後書き）

多重クロスにするつもりは全く有りません！！過去の回想も長い間
続きません（よくて1、2話。もしかしたらそれ以下になるかも？）

47話 力を求めて

「……哉！」

ん？何だ？

「…ん哉！」

体を揺さぶられている感覚が伝わってきて、朧げだった意識が、徐々にはつきりしていく

「真哉！！」

「んゝ、うるせえなゝ。ってリイン？」

「はあゝやっと起きましたか」

「どういつ状況だっけ？」

「他の世界に飛ばされたんですよ。忘れたんですか？」

「えゝと……そうだ！ってことはここはディーグレの世界か
で、肝心の場所は何所だ？」

周りを見回しても、木しか見えない。おそらく森の中だろう
その時

『そこは君たちのアパートと全く同じ座標だよ』

「全く同じ？ってことは……日本か！つち！」

「どうしたんですか？」

「まずいことになった。今どのあたりだ？」

『もうLEVEL4による本部の襲撃も終わって、クロス元帥もも
う………』

「………分かった。リイン今すぐここから発つぞ」

「何でそんなに急ぐんですか？」

「リイン、原作の知識は？」

「ありませんよ」

「それなら言っておく。まずこの世界は年代的に十九世紀末だ」

「そうなんですか!？」

「それに、ここではまだ日本は鎖国中、そして、日本の人口の90
%はアクマだ」

「え………は………」

「ああ。ここは伯爵の国だ」

その時、タイミング良く右目が反応する
まだ遠いが早めに手を打っておいたほうが良いな

「早速だぞ。リイン、ここであいつ等に姿を見られるのは避けたい
『グレイブオブマリア』頼めるか？」

アクマに脳つてあるの？とは思ったが、対アクマ武器なんだから行けるだろと割り切ることにした

「マグダラカーテン聖母ノ加護対象を私の周囲10m以内に」

「よし！まずは海を目指そう
今の位置は大体分かるし、夜明けまでには着くだろ」

「はい」

こうして、俺達は海を目指し、歩を進めた

「で、海に着いたは良いが、どうやって海を渡るの?」

「考えてなかったんですか!?!」

「……………ああ。なんとかなると思って」

もう、地平線からは朝日が昇り始めている
海を渡るうにも、鎖国している日本に船なんかあるわけも無く、俺
は途方にくれていた

「ちなみにその『黒の教団』の本部と言うのは何所に?」

一応、歩いているついでに、ラインにある程度の原作の話はしてお
いた

「確か今はロンドンの付近にあるって感じだったと思うが」

「分かってるんですか!?!」

「大体の位置は……………で、それがどうした?」

ラインは呆れたような表情で深くため息をつき、それからこっちを
見て、静かに呟いた

「……………じゃあ転移しますね」

「あ……………」

結局なんとかなった

お前が新入りか？

目の前にはもうでかすぎて、上から下まで見渡せないくらい大きな女性、もといヘブラスカが居る

いきなり飛びすぎだろ！とか言う声は今は無視。正直エクソシストの服着て、そこらを歩き回ってただけだし、やっと黒の教団の本拠地を見つけて、乗り込んだと思ったら、神田とかオリジナルのアレにアクマに間違われて、殺されかけるし、やっとヘブラスカが俺とイノセンスが反応してるって言うてくれて、今の状況にいたっている。もちろんイノセンスは使っていないし、ちなみに、現在進行形でリインとはシンク口中。途中すごい尋問にあったが、まずはイノセンスとの適合が先！ということ、全てかわしてきた

「そうですけど？」

やはりアレンではないだな

「ああ。あの大吃いの人ですか
てか、一緒にせんでください」

分かった

「（ふう）これでやっと……………ん？」

『やあ』

頭の中に声が響く

じゃあ、早速…………… 「少しだけ待ってもらえますっ？」

どうしたんだ？

「ちよつと心の準備を……………」

分かった

「（で、何の用だ？）」

『君を止めに来た』

「（は？今何て言った？）」

『君を止めに来たって言ったんだよ』

「（下らない冗談言ってるなら……………）」 『冗談じゃない！』

急に怒ったような声色で怒鳴る。頭の中に響いているので、頭がすごいガンガンする

「(てめえ本当に何言ってるんだ？新しい力を、イノセンスをくれてやるって言ったのはお前だろうが！)」

『気が変わった。というか一つ伝え忘れていたことがあった』

「(はあ！？今更かよ！！それが一体何の関係がある？)」

『このイノセンスを手に入れたとき。君はおそらく、いや、間違いなく君は『人』というカテゴリーから完全に逸脱することになる。』

「(はあ〜……………」

570

でっ)」

『で、って』

「(お前も分かってるだろ？俺がそんなことで諦めるわけ無いってことぐらい)」

『分かってる。だから……………力づくでも止める！』

すると、俺の体がどんどん透けていく

「（！！この感じは！！）へブラスカ！！」

どうした？覚悟は出来たのか？

「ああ。んなこた良いから早くイノセンスを！！」

何故急ぐ？

「良いから！！」

分かった

渋々だが、へブラスカからイノセンスを持った触手が伸びてくる俺のほうは、もう脚が消えて、見えなくなってきていて、それが上半身にまで及ぼうとしている
おそらくへブラスカ達には見えてはいない

「（このままじゃ……………）リン！！」

『はい！スレイブニール、羽搏いて』

黒い翼が生える。前のように俺一人での操作ではないので、すぐに目標までたどり着く

へブラスカが突然の事態に驚いているが、そんなもん今は関係ない

「取っ……………た！！」

そうだった瞬間、俺の体はその世界から消えた

ドシヤッ

「痛っ!!」

こっちに着いた瞬間に地面に落下し、綺麗に頭を打ってしまった

「ここは……?」「ここは外れた世界、終わった世界…アウトワールド「アウターワールドまだ、何か用か?残念ながら俺はイノセンスを手に入れちまったぜ?」

俺は誇らしげに手のひらの『ジャッジメント』を神アイツに見せ付ける

「アハハハハハハハハハハ!!」

「……………何かおかしい?」

「君は勘違いしている。君はまだ『力』を手にしていない

「まだ、間に合う……！」

「全然良くないけど、まあ良い。俺が化物になるってどういうことだ？」

「ん？関係ないんじゃないの？」

「うるせえ」

「まあ良い。説明してあげよう」

神曰く、元々俺の体は『神の力』で作られた『人』とは似て非なるものだったらしい。簡単に言えば俺は『人っぽいナニカ』。基本的に『神』と『人』の違いと言う物はある一点を除いてほとんど違いは無い。その一点というのが体の性質『神の力』と『神の肉体』というのはほぼ同義と言っても良い。つまり神の肉片、神の細胞一つ一つがその『神の力』そのものである。もちろん、神によつて力の密度などの違いはあるが。そして、『人』。これにはもちろん何の力も無い、いやむしろ、真逆の力が入っているらしい。更に言えば『人』は神の力との反発作用すらある。だからこそ、人が『神の力』を使うなら、例えばイノセンスのように武器という形状に『力』を封じて使う必要があるのである。もちろん例外が無いわけではない。その人の反発力がほとんど無かったり、それは個人個人なのだがここで、問題になるのが、始めに言ったように俺が『人』ではなく、『人っぽいもの』であると言う点だ。最初に言ったように俺の体は『神の力』もとい『神の肉体』を元に作られている。もちろん神の力^{アイツ}で人間と同じ程度まで力や性質共々押さえ込まれているわけだが、これが押さえ込めることが出来ているのは、この肉体と力が

神アイツの力と同種の物だかららしい（何故かここは自分の物とは明言しなかった）

「……………そして、ここで問題となるのが新たに加わった『ジャツジメント』は僕の『力』とは全く関係ない。僕なんかよりも太古の『神の力』に由来していると言うこと。それが加わると、僕なんかの力じゃある程度押さえ込めるかもしれないけど、完全にはまず不可能。これで神とも違う色々な力を内包したばけもの完成というわけさ」

全ての話を聞き終わったとき、俺は気分が異様に高揚するのが分かった

「じゃあこれで、俺はもっと強くなれると…そういうわけだな」

強くなれる

『力』が手に入る

それだけのことで……………

「『神の力』を侮るんじゃない!!」

「お前が何と言おうが俺は『力』を手に入れる!!」

もう誰も傷つけさせないために!!」

「それなら、僕は力づくでも……………」

君を止める「

47話 力を求めて（後書き）

デイーグレの世界は早くも終わりです。原作キャラは予告どおり描写のみでへブラスカぐらいしか出てませんwww。要望があれば、まあ書こうかとは思っていますが

48話 目覚め(前書き)

上げるの遅くなってますんません・・・

48話 目覚め

「僕は力づくでも……………」

君を止める」

神の眼には確かな決意の色が伺える
何でだ？何故ここまでする？

「お前は何でここまでする？
俺はお前とはほとんど関係ないだろ」

「君に話す気は無い」

「そうか。まあ俺としては力さえ手に入れば、この際そんなことどうでも良いがな」

ゆっくりと腰のホルスターから『ジャツジメント』を引き抜く

「早速だが、イノセンスの力の使い方、嫌でも聞かせてもらってからな」

「それでも、出来るのかい？」

目の前に居た男の姿が歪んで、背もどんどん縮んでいく
そして……………」

「真哉くん」

男ははやての姿へと変貌する

「てめえ……………!!」

「それでも、まだ攻撃を……………」

バンバンバンツ

「なめんなよ」

は^{アイツ}やての右胸、右足、左足に次々と穴が開く

「さすがだね」

何も感じていないのか顔色一つ変えずにこちらに向き直る

「だけど……………」

ドスッ

「がっ……………!!」

アイツの右腕から放たれた拳は綺麗に俺の鳩尾に突き刺さって、数メートル吹き飛ぶ

「つく……………!!（おかしい。確かに普通に比べりゃ早いけど、俺なら見切れたはずだ。いつもの俺なら）」

俺は右手の『ジャツジメント』をホルスターに収め、左手にもつ、もう一つの『ジャツジメント』を向ける

「させないよ」

今度は一気に距離を詰めて、左手を『ジャツジメント』ごと押さえつける

「掛かったな」

「何？」

俺は再度右から『ジャツジメント』を引き抜き、神の胸元に押し付ける

「ゼロ距離なら関係ねーよな」

「君は……」

バンバンバンッ

言葉を聞く前に胸元に銃弾を放つ

相手が仰け反った隙に抜け出しこの体でもある程度は回避できる程度の距離まで離れる

そこまで、来ると倒れていたはやての体がゆっくりと起き上がる

「やってくれたね」

「なら、さっさと『力』を寄越せ」

「やだね。それに言っとくけど、この体はどれだけやられても何度でも立ち上がる

僕のお人形だよ。そして、君もね。人形が人形師である僕には勝てないよ」

「はっ！人形を御しきれない人形師がよく言っぜ」

「どっちでも良いよ。君は僕には勝てない。それは事実だ」

確かに今の状況はマズイ

距離を十分にとっているとはいえ、かわせるのは一回が限界つまり……

「（この一発で……）」

正直今は新しい『カ』の手に入れ方よりもその鍵となる『ジャツジメント』を守ることが大切だ

それよりも問題はこの外界からどうやって抜け出すかアフターファイナルド

「どうせ。ここで止められたら意味無いんだ

今はアイツをどうにかするしかないな。ここからの抜け出し方は後で考えよう」

そして、俺はアイツの肉体を壊すプランを頭の中で組み立てる

「（アイツの体はおそらく意思の無い体を無理矢理動かしてるだけだ。その証拠に俺の付けた傷は全部残ってる。ということは）奴の体を一気に消すしかない…か」

もうアイツの方も準備は万端のようだ

「（やっぱリインの補助無しじゃ……………ん？ちよつと待て。もしかしたら……………）これは行けるかもしれねーな」

「何を考えてるかは知らないけど、君が勝つことは無い」

「んなもん分かんねーだろ？」

それと同時に神は俺に向かって来る

俺は左手にある『ジャツジメント』を前に向け乱射する
しかし、その弾は全てぎりぎりのところで避ける

「その弾は敵にぶち込まれるまで止まらないぜ？」

「分かってるよ。それくらい」

神は後ろから追いかけてくる弾を気にする様子がない

そして、弾が神の背中にぶち込まれる
その影響で神の体が更に加速する

「って、そんなのありか!？」

「ありだよ」

回避に集中していたことも相俟って、神の拳をぎりぎり避ける
だが、そこで止まるような奴ではない。空いた方の手でそのままこ
ちらに殴ってくる

「盾」

「タンクシールド」

俺の前に現れた盾が拳を止める

「ストラグルバインド！」

現れたバインドが神の体を拘束し、自由を奪う

「つく！でも、こんなバインドくらい……………」

「滅罪レベル3倍！『ジャッジメント』装填！

さすがのお前でも滅罪レベル3倍の『原罪の矢』はお前でも無理
だろ？」

「君は……………」

現れた光の矢。狙う的との距離はほぼゼロ

「消し飛べ！『原罪の矢』！！」

あまりの衝撃に俺自身の体も遠くまで吹っ飛ぶ

「ったく。はやての顔になんてするから気分最悪じゃねーか

あ、そうだ。ライン聞こえるか？」

『うっ。マスターですか？』

「ああ

『一体何が？』

「話すとき長い。それは後で話す。ちょっと治癒魔法掛けてくれるか？ついでに身体強化魔法も」

『……………分かりました』

そうして、体の傷がすっかり元に戻り、力が湧き上がってくるのが分かる

「よし！リインー旦那このポイントから『行かせない』っちー！」

嫌な予感がして、後ろを振り向く
そこには

はやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやて
はやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやて
はやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやてはやて
はやてはやてはやてはやてはやてはやて

『最初からこうしておけば良かった』

「くそっ！（身体強化魔法はなんとか残ってるが俺の力じゃあいつ等全員は……………」

『諦めてそれをこっちに渡すんだ』

「……………渡したらはやて達は助かるのか？」

『それは僕らのほうでどうにかする』

「どうにかじゃない！具体的にどうやってするんだ！？どれくらい掛かる！？」

『今のところはまだ何とも』

「ならこれは渡せない。渡すもんか

お前らがちんたらやってる間にも人が：人が死んでいくんだよ！！だから俺はもっと力を手に入れなきゃならない。それをお前が止めるなら俺はお前を倒す！！」

『そっちこそ具体的にどうやって僕を倒すんだい？』

それが問題だ。この戦力差

『力』だ。『力』がいる。ここを切り抜けられるだけの『力』が！みんなを守るだけの『力』が！！

「イノセンス！応えてくれ……………！！
みんなを…はやてをラインをヴィータをなのはをフェイトをシグナムをシャマルをザフィーラを守りたいんだ！！」

ドクンッ

「イノセンス……………？」

ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクン
ドクンドクンドクンドクン

そして、世界に一つ小さな神イサハナが目覚める
悲しき運命をその身に背負って……………

48話 目覚め(後書き)

次回、過去編終了!!

49話 暴走と言つ名の帰結(前書き)

次回からはStS本編に入ります!

49話 暴走と言つ名の帰結

ドクン

俺の中で心臓の鼓動とはまた違う何かがドクンドクンツと轟く
それはどんどん大きく早くなっていき、俺の中で叫ぶラインの声す
ら聞こえなくなる
耳をふさいでも、目を閉じても一向に止むことなくどんどん大きく
なっていく

ドクンツ

そして、最後に今までで一番大きく鼓動した後、今度は全くと言っ
て良いほど音が無くなる
まるで、何もかも全てなくなってしまったかのように、もう恐ろし
いくらい無音で
だけど、そんな状況の中俺は俺の中の一つの変化に嫌でも気づかさ
れた

『オハヨウ』

俺の中にナニカが生まれた

- - -
- - -
- - -
side 神

「マズイッ……………!!」

とてもマズイ状況だった
二つの神が互いに反応し、混ざり合って、新たな神はげものが生まれようとしている
ある意味これは自分の引き起こした状況だった

彼を追い詰めすぎてしまった。彼にとって今、生きているのは彼女達を守るため

それ以上でもそれ以下でもなかった。その彼から僕は守るための力を奪おうとしたのだ

絶望的な状況に陥ってしまったからこそ、彼はより強い力を求め、イノセンスはそれに応えようとしている

一気に決めればよかったのだ。僕が甘かった

彼を目の前にして、どうしても非情になりきれなかった。子供の夢を奪うことは親として、正しいこうまとなのか？そんな押し問答の果ての下らない躊躇が最悪の結末を迎えることになってしまう

「止めるッ……………!!」

今の彼は宙に浮いていて、その彼の周囲十メートルほどに大きな金色の歯車が交差しながら漂っている

それにゆうに百体以上の人形を突っ込ませる

バンッ

大きな破裂音と共に百対以上もの人形の体が内部から次々に弾け飛ぶ
辺りに血肉が飛び散り、地面を真っ赤に染める

直接操っている人形も上半身しか残ってはおらず周りの人形から再度、身体からだの構成をはじめ

が、そうこうしている間に周りを回っている歯車が縮み始める

10……

9……

8……

7……

6……

5……

4……

やっと身体の構築が終わり、地面を蹴って宙に浮く真哉の身体まで
一気に近づこうとする

その間にも歯車との距離は縮まってい

3……

2……

1……

たどり着いたところで歯車を最大の力で歯車を掴もうとする
しかしその手は掴む前に同じように内側から弾け飛ぶ

「ああああああああああああああああああ！！！！！！

自分が情けなくて

「ははっ」

思わず笑ってしまった

「これはあんまり使いたくなかったんだけどなあ
ま、しょうがないよね」

「何ヲ言ツイルノ？」

何なのか分からない真哉の姿をしたナニカが降りてこちらに聞いてくる

それを余所に胸元から握り拳台の小さな光球が生まれる
それは唯の時間稼ぎ。運が悪ければもつと酷い事態になりかねない
それでも……………

「仕方ないよね……………」

光球がゆっくりそのナニカに向かって前進していく
それを見てそのナニカは本能的に何かを感じ取ったのかばつと飛び
退く

「ナニソレ」

「これかい？君のために用意した物だよ」

「違う。ソレ、嫌ナ感ジガスル」

それを聞いて僕は

「ははっ」

また笑った

「そりゃそうだ。それは君じゃなく、真哉の為のものだ」

「ボクガ『シンヤ』ダ」

「違っ」

「違ワナイ」

その間も光球はゆっくりナニカに前進していく

「コレ嫌イ」

どこからともなく一本の剣を取り出し、光球を切るように薙ぐ
すると、奇妙なことに光球は二つに分かれ、またナニカに向かつて
進み始める

「消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工
口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工
口」

またどこからともなくもう一本の刀を取り出し、日本の刀で光球を
切り始める

その度に光球の数は10、20と増えていき、辺りを覆いつくす

「消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工口消工」無駄

「ん…あ、ああ。ってお前それどうなってんだよ」

あんまり気にしていなかったので、気づかなかったが自分の状況を改めて確認すると、片腕は腕が無く、もう片方は手首から先が折れて変な方向を向いている
かなりショッキングな画像だ

「ってそついえば」

何があつたのか思い出したのだろう。完全に臨戦態勢に入った

「その必要は無いよ。もう僕に交戦の意思は無い」

「……………本当か？」

「ああ」

「ということとは俺は……………」

「君は望みどおり『力』を手に入れた」

「本当か!？」

「ああ。だけど暴走の危険が否めない
君だって思い当たる節があるんじゃないのかい？」

「……………確かにいしきを失う直前に何か俺の中に入ってきてそれで……………」

そこから先はどうやら意識を失ったようで憶えていないようだ

「おそらく今回の件で君の中にもう一つの意志のような物が形成された

それについては分かり次第連絡する

……そして、これは推測だけど君の中の『力』の封印が解かれるごとにそれは大きくなっていく

十分に気をつけるんだよ」

「ちょっと待て！お前今『封印』って言ったよな？」

「ああ、君の中の『力』は今僕の力である程度封印してある君が力を使うごとにその封印も解かれていくと思う

だから、無闇やたらにその『力』は使わない！君が周りを傷つけないならなおのことだ！」

何時に無く強い口調で言うそれぐらい重要だった

「分かった。でも俺、使い方分かんないんだけど」

「さっき見たところじゃ何かいっぱい刀とか出してたけど？」

「刀、刀、刀……ん〜じゃ試しに一回……イノセンス発動！」

真哉の手に一本の日本刀が出来上がる

「おお！出来た！もしかして日本刀のイノセンスなのk……って勝手に消えちまったぞ……！」

いつの間にか真哉の手にあった日本刀は消えてなくなってしまっ

いた

「それについては僕からは何とも言えないね

おそらくもつと他の条件か何かあるんだと思うよ

でも、さっきも言ったようにくれぐれも乱用は禁止！使わなくて
も大抵の雑魚は倒せるようにすること！」

「ん〜でも修行するにしても何所で何をすれば……………」

「それはもう決めてあります」

「まさか……………」

「多分、そのまさかDEATH」

「表記が違う気がするんだが!？」

「転送開始」

真哉の姿が希薄になっていく

「やっぱりかあ——————」

「——————!……………」

何も無い世界に少年の叫びだけが響き渡る

50話 遺志を継ぐ者(前書き)

最近更新が遅れ気味ですいません!!

50話 遺志を継ぐ者

「ぶはあ~~~~」

『何ですか？溜息なのか何なのか分からないような物について』

「いや、ねえ

この10年頑張ったなあ〜と思って」

『それはそうですね。この10年何度『あ、これ死んだわ』と思っ
たことか』

「ははっ、そうだな」

この10年修行のためといって、色んな世界を回ってきた

とある魔法先生風に言うならアニメで言うなら10クール分、単行
本なら50刊位はくだらないほどだ

まあそのゆうに九割以上で俺達は死地に立たされているわけだが
例えば、某ガ ダムでは生身でガン ム各種と戦ったりもした

それに加えて、あの神の野郎がその世界の住民が俺を見たときに『
コイツが全ての元凶だあ！！！！』と思うように設定したようで、

最初の方は、力の使い方の良く分からない俺は自分の体の二十倍以
上ある鉄の塊から走って逃げる以外の行動は取れないわけで、最終
的に俺はいつも悲惨な目に会う羽目になっていた

しかも、俺に幻術のような物をかけて、俺もMSに乗ってるように
見せかけているので、敵の容赦が全くといって良いくらい感じられ
ない

まあそのおかげでと言うか何と言うか、力については大体分かった
名前は『闇夜ノ王』(ネーミングby神)

能力は自身の想像した武具の投影

しかし、それにも色々制約が付く

まず、その武器自身を俺自身が武器として、認知していなければならぬ

つまり知らない武器は出せない。その代わり、他人が『これ武器じゃないだろ！』と言う物でも俺が武器と違っていけば、投影は可能だ
そして、一番の問題が出しているときはずっとその武器のことを考えていなければならない

つまり、途中で想像をやめると、その武器は消えてしまう

でも、戦闘しながら考えるなんてことは不器用な俺には到底無理なこと、最初の方はこのイノセンスの能力に軽く絶望した

でも、途中でやっと分かったことが一つ、これは俺と意識を共通する者、つまりリインが想像した物でも投影できる。ま、発動の方は俺がしなければならぬが

よって、これを使うときは俺とリインがユニゾンしているときに限られる

これは『二人で使うためイノセンス』なのだ

今のところ分かっているのはそれだけ、まだ完全には能力の全貌が分かっていないのが現状だ

ちなみに、神はあの後から『伯爵』について分かったことについての連絡をくれる

アイツも伯爵については謎なことが多いようで、必死で調べているようだが、今のところはこれといった情報は手に入っていないようだ

「まあそれにこの10年で魔法の方も大分腕が上がったしな」

『まああれだけの死地を乗り越えて上がってない方がおかしいと思いますけど』

この、リインの厳しい突込みにも最近では大分慣れてきた
まあ10年も一緒にいたら、そうなるか

「誰と話とるんや？」

後ろから突然声を掛けられ、カモフラージュに宙に出していたウィ
ンドウを閉じる

「いえ、少し知り合いと最近の事とかについて、話し合ってただけ
ですよ

僕に何か用でしたか？」

「ううん。何でもないんよ

ただちよつと何してんのかな〜って思っただけや」

「そうでしたか。では今日のところは僕はこれで
新部隊の件考えておきますね」

「うん 良い返事期待しとるで〜」

背後で笑顔で手を振るはやてにこちらも笑顔で挨拶して、僕たちは
一旦管理局を出た

管理局を出てすぐのところにあるベンチに座って、俺はリインとこれ
からについて話していた

傍から見れば一人でベンチに座ってぶつぶつ喋っている。変人だと思
われたかもしれないが、まあそんなこと今はどうでも良い

『で、この後六課への集合までの数日間はどうするんですか？』

「ん〜まあ少し地上部隊のところに用があるかな？」

『レジアス准…少将ですか？』

「そつだ。調べてもらった限りでは何も無かつたんだろ？」

『はい。特に真哉との約束を違えるような行動を行った形跡は何所にも』

一連の言動から分かるように10年前俺はレジアスとイノセンスを手に入れたときのことについて、幾つかの約束をしていた

一つは、適合者を使っての人体実験、及び非適合者への人体実験などは絶対に行わないこと

そしてもう一つ、適合者にこの聖戦への参加の拒否の意思がうかがわれた場合は、無理に戦いに参加させないようにすること（但し、その適合者はこのことを誰にも他言しないこと）

これにレジアスは一つ目は了解したものの二つ目には難色を示したまあ、好き好んでこの命を落としかねない現場に生きてがる奴は居ないだろうし

今のところこの世界で『エクソシスト』ととして活動しているのはなのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、と後は俺達は名前も知らない奴を含めた12名だった
一応保留となっているのはスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、それと俺の五名

俺たちの場合は年齢の問題。みんな適合者と分かったときは本当に子供だったため。今は保留になっている

「まあそのことをちよいと本人にもう一度釘刺しに行くくらいかな？」

「じゃあそれ以外には予定は？」

「え〜と、そういえば……………無いな」

「じゃ、じゃあ空いてる日に買い物行きませんか？元の姿で」

「それは、色々とまずいんじゃないか？もし、ばれたりしたら……………」

「大丈夫！私が何とかします！！それに、みんな六課のこととかで忙しくて、買い物なんて行きませんって！！」

何故ここまで買い物に必死なのかは分からんが、まあ久々に元の身体に戻りたかつたし、ちょうど良いか

「じゃあ今度行くか、一緒に」

「はい！」

「でも、ばれないようにしてくれよ？」

「そこら辺は任せておいてください！私を誰だと思ってるんですか？」

「頼もしいな。じゃ、何所に行くかとか予め決めとかないとな」

『はい!—!』

リインのわくわくが俺にも伝わってくるようで、何だか心地良い感じがした

アクマの事とか伯爵の事とか、色々考えたいことは山ほどあるが、今は

「(さあて今度リインと何しに行こうかな?)」

このわくわくが冷めないうちに行き先を決めてしまおう

翌日僕は管理局地上本部の前に来ていた

明日はリインとの買い物があるので来たくは無かったのだが、そうも言ってもらえない

「すみません。レジアス中將にお会いしたいのですが」

「お名前を覚えていただけますか？」

こちらを疑う様子で聞いてくる局員
その疑いが僕に向いているのかそれともレジアスに向いているのか
は知る由も無いが

「アレン」ウォーカーです。言っていただければすぐに分かると思
うんですが？」

僕の名前を聞き、連絡を取る局員
数十秒後局員はこちらに向き直り

「レジアス様が貴方にお会いになるそうです」

「そうですか。では」

局員の怪訝そうな顔を尻目に僕は悠々とレジアスの待つ部屋へと歩
を進めた

「また貴様か」

こちらにも怪訝そうな顔のレジアスが僕を迎えてくれた
さっきの人と違って表情をまるで隠そうとしていない

「今度は何だ？管理局の極秘情報でも貰いに来たのか？悪いがいくら貴様でもそれはやれんぞ」

「いえ、今日は別の一件です」

「じゃあ何だ？お前を陸士部隊に潜り込ませるだけでもかなり面倒だったんだぞ？」

「今日の僕は『天宮真哉の意思を継ぐ者』として忠告に参りました」

「……………！！」

今の言動から分かるようにレジアスにも僕が…天宮真哉が生きていることを告げていない

僕はあくまで『天宮真哉の意志を継ぐ者』。天宮真哉自身は十年前の一件で死んだことにそのままなっているはずだ。まあこの容姿ゆえに散々調べられたが、さすが真祖、管理局すら騙せるとは

「十年前の約束は憶えていますよね？」

「……………ああ」

「それは結構。ではくれぐれも約束を違えるような真似はしないで
とです」

そうになると、こちらも少々手荒な手段に頼るほか無くなりますので、イノセンスについてはこちらの方が良く知っていることをお忘

れなきように

では僕は明日家族と買い物に行く予定があるのでこれで」

自分から一方的に話を終わらせた形になったが、言いたいことは言ったので、もう帰ろうとすると

「……………待て」

「まだ何か？」

「お前たちは伯爵が何故人類を滅ぼそうとしているのかわっているのか？」

何だそんなことが

「そんなのこっちが知りてえよ」

今度こそ振り向かず、僕は地上本部を出た

51話 デート(前書き)

47話ちよこつとだけ編集しました

51話 デート

「で、買い物に来てはみたが、一体何を買ったんだ？」

見た目から考えておそらく二十歳前と思われる白髪の少年が、隣のこちらと同じく二十歳前と思われる綺麗な銀髪の少女に尋ねる

「こついう時は男性がリードしてくれるものですよ

真哉は相変わらず女心の何たるかを理解していませんね」

呆れ半分、でも隣で真剣に悩んでいる少年を半分は愛しそうに見つめながら、少女は笑みを浮かべて、少年の返答を待っていた

「でもよ、俺あんまり、というか全く女の子と遊びに出かけたこととか無えから勝手とか良く分からないんだよ」

「はあ全く

………だからこそ、私たちの気持ちにも疎いんですかね？」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、何も

じゃあ、映画行きましょうよ！

デートじゃ定番中の定番でしょ？」

「デ、デート!?!？」

「???それが何か?」

「いや、今日はただ買い物に来ただけじゃ……………」

「それがデートでしょ?まさか今日のこのイベントが家族とのお買い物くらいにしか考えていなかったんですか!??」

「いや、普通にそうだとばかり……………」

「……………駄目だコイツ、何とかしないと

ちなみに聞きますが、過去に女性と付き合った経験は?」

久々に前世のことについて思い返してみる

「無えよ」

「それでも、女性と全く接点が無かったと言うわけじゃないでしょ?」

「い、いや幼稚園の頃は特に何も無かったし、小学校って言うても廃校寸前で全校生徒30人も居なかったし」

「クラスメイトに女子は一人も居なかったんですか!??」

「俺の学年二人だけでさ確かもう一人が女子だったような……………」

その言葉に少女は少年にすごい勢いで詰め寄る

「でっ」

「で?？」

「だ・か・ら、その子とは何も無かったんですか!？」

「いや何もなにもその子確かあんまり登校してこなかったような………まあいわゆる、不登校？」

「その不登校を直して、フラグが立つというような展開は………」

「確かにたった一人のクラスメイトだし、登校してくれて一緒に授業とか受けれたら良かったんだけど、何でかは知らないけどその子の家行くといつもその子顔が真っ赤で、『貴方といると、恥ずかしくて授業に集中できません』って言われるんだよ」

「それ、立てる以前に完全にフラグ立ってんじゃないか!！」

「うお!何だよ!！」

「で、その子とはその後どうなったんですか？」

「いや、小4の冬に急に転校しちゃって………」

「それつきりだと?？」

「………まあその通り」

「中学は?？」

急に少女の方の声のトーンが下がる

- - -
- - -
- - -
side 真哉

「（ん）何故俺は怒られたんだろう？」

隣で、映画のチケットを買っている少女：リインフォースに目を向けながら、さつき言われたことを考えてみる

小学校のときのことは今から考えれば、何となく『もしかしたら……』と分かるのだが、それに切られたのが良く分からない
中学ではさすがに一人というわけではなく他の地区からも集まってきたが、その中に女子は居なかった

ようやく高校入学と時を同じくして、親が引越し、近くの男子校に入学して、ようやくたくさんさんの友達と遊べると思った矢先、夏休み目前の7月17日居眠り運転のトラックに突っ込まれて死んだ
今思い返してみると、色々感慨深い物がある

こうして考えてみると、俺が『みんなを守りたい』と思ったのは手に入れたこの繋がりを消したくなかったのかもかもしれない

「真哉、買って来ましたよ」

チケット売り場の方から二枚のチケットを持った手を振りながらこっちに走ってくる少女の方を見る

「じゃあ早速入るか！」

「はい！」

- - -
- - -
- - -
sideラインフォース（アインス）

十年間……

3650日いや、閏年も換算すると3652日……
時間にすると、87648時間……

彼と…真哉と過ごしてきた途方もない時間

確かにこの十年はぎりぎりの生活でそんな余裕がなかったのもまた
事実だが

でも…それでも……

「（ちょっとくらい意識してくれたって良いじゃないですか……）
」

そんな思いを込めながら、目を隣に座って、まだ映画が始まる前だ
というのに、さっき売店で買ったポップコーンを子供のように笑顔
で頬張っている少年に向ける

「どっしたんだ？」

「何でもありません」

それを聞き、少し首をひねって何かを考えた後またポップコーンを
食べ始める

何故今日の私はこんなことを聞くのだろうか？

その問に対する答えは意外とすんなり出てきた
詰まるところ、私は不安だったのだ

この10年、真哉の周りには私だけだった
まあその世界の人々と知り合いにならなかつたわけではないけれど、それでも私はこの10年彼の中での一番だった。でも今はどうだろう？この世界には、はやてがいる。なのはががいる。フェイトがいる。ヴィータがいる。シグナムが居る。シャマルが居る。
みんないる

その中で自分は彼の中では何番なのだろう？

真哉に聞いても、あやふやな答えか

全員大切とか、優柔不断な答えが返ってくるに決まっている

それが、それだけが不安だった

考えてみれば、10年間ずっと彼の傍にいたのだから、かなりのアドバンテージがあるといえるのは確かだけれど、私にはこの10年よりも、はやて達と過ごした半年余りの方が真哉にとって重要なもののように思えてならない。ならこの10年は一体何なのか？
さつきはすんなり出てきた答えが、この質問だけは霧にまぎれていくように、全く掴めない

「お！始まるみたいだぞ」

館内が暗くなつていき、真哉の顔の輪郭が徐々にぼやけていく
それが真哉が何所か遠くに行つてしまふような気がして

「どうしたんだ？いきなり手なんか握つて」

「い、いえすいません」

「ふゝ映画楽しかったな」

近くの公園のベンチに二人並んで座りながら、地平線に沈んでいく夕陽を見る

「今日は楽しかったですか？」

「ん？ああ。偶にはこういうのも悪くないな
また今度一緒に来ようか？」

「そうですね……………」

「……………」

「……………ねえ真哉」

「何だ？」

「いつまで、こうしていられるんでしょうか？」

「そりゃあ、日が暮れるまでじゃね？」

そんなことを聞いたわけじゃない

でも、もうそんなことはどうでも良くなってしまった
軽く肩を預けるように身体を倒して

「……………そうですね」

『アクマ』 『千年伯爵』 『イノセンス』 『天宮真哉』 そして『アマ
ミヤシンヤ』
『機動六課』 発足と共に事件は一人の人物を中心に大きく狂いだし
ていく

51話 デート(後書き)

次回から機動六課に入ります

52話 機動六課(前書き)

すいません……。ちょっとした諸事情により遅れてしまいました
今度からはほぼ予定通りに上げられるかと

52話 機動六課

「これが部隊の隊舎か」

『綺麗なところですね』

「それは、出来たばかりですからね」

『真哉、完全にアレンモードですね』

「何か言いました？」

『いいえ、何も』

そうして機動六課の部隊の出来立てはやはやの新しい隊舎に向かうとするが、上を見上げたまま、僕の足はそこで止まってしまっていた

『どうしました？』

「ちょっと足が竦んでしまって」

『今更でしょ』

「それもそうなんですけどね」

「よっ！どしたの？」

不意に、背中を勢いよく叩かれ、後ろを振り向く

「す、スバル？一体どうしたんですか？」

「そんなのこっちが聞きたいよ。ずっと隊舎見上げて」

「いえ、その……ちょっと聞いてもらっても良いですか？」

「ん？別に良いけど」

「僕はずっと僕とたった一人の家族と一緒に生活してきました
でも、ずっと二人だけだったという訳でもないんですよ。もうずいぶん昔、そう10年前の冬、それまでは僕にもたくさん家族がいました」

「え、えくと10年まえって事は4歳の時？」

「そう思っていただけで構いません。そして、10年前の冬、僕は家族を失いました」

「……………！！もしかして亡くなったの……………？」

「いえ、そういうわけじゃないんですよ」

「じゃあ、どうして？」

「僕が彼女達を傷つけてしまったんです。仕方の無いことでした
他に方法があったのか無かったのか、それは今ではもう分かりません」

「でも、その時は僕にはそれ以外の方法が思いつかなかったんです」

「それで、アレンは家族を………?」

「はい」

「別に良いんじゃない?」

「え………?」

「その時はそれ以外なかったんでしょ?ならそれで良いじゃん
その人達は今でも生きてるんでしょ?」

今思えば、少しまずかったな〜と思う。何せ彼女は既に母親を失っているのだから

それも僕とは違って、もう二度と会うことも出来ない
そう考えると、自分の言っていることが酷く情けなく思えてきた

「はい、おそらくは」

「アレンが今でもその人達と仲直りしたいと思ってるんなら、まだ
何とでもやりようはあるよ!むずかしいかもだけど」

「それもそうでしたね。すみません。下らないお話を聞かせてしま
つて」

「別に下らなくなんかないよ。じゃ、私は先行ってるね」

「はい」

スバルさんはこっちに向かって元気よく手を振りながら、隊舎の中
へと入っていった

「確かにそれだけのことなのかもしれない
でも、君は許してくれるのかな？俺が君達の日常を壊してしまっ
たかもしれないと知っても」

『アクマ』 『イノセンス』 『伯爵』 『天宮真哉』 10年前この四つ
を軸に狂い始めた物語は何所へと向かうのか？俺の知る原作と大し
て変わることも無く進むのか？渦の中心に立つ俺にも分からない。
けどはつきり言ってそんなことどうでも良い

「俺は皆を救う。幸せにする。唯それだけだ。その為だけに俺はこ
こまで生きて、今ここに立っている」

そう、もう迷う必要なんて無いんだ。もうこれ以上深く考える必要
も無い

だから、僕はゆっくりと隊舎への道を歩き始める

そして、機動六課のフォアード陣、バックヤード陣全員が集められ、課長であるはやて………さんの挨拶がはじまる。ちなみに能力とスキルは既に確認済みである。ちなみに僕のコールサインは『ダークネス03』。隊長はもちろんはやてさん、副隊長はリイン曹長ということになっている

スキルの方はまあもうすぐ見せることになるだろうし

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長八神はやてです」

ばちばちばち

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として………」

まあ、平和と法の守護者という部分は若干否定したい

あの脳髄どもがトップのこの組織が、法なんて考えているとも思えない

事実、あいつ等はアルハザードの技術を利用し、『ジェイル・スカリエッティ』いや、この場合は『アンリミテッド・デザイア無限の欲望』と言ったほうが正しいのか？まあ正直どっちでも良い

奴らにはこの後、表舞台から退場していただくことにするつもりです

「ま、長い挨拶は嫌われるんで以上ここまで。機動六課課長及び部隊長八神はやてでした」

ばちばちばち

この後はおそらく訓練に入るのかな？一旦アインと打ち合わせとか色々したいんですが

そして、これで一旦お開きになり、みんなが自分の部屋もしくは持ち場に帰るのと、する中なのは………さんがこちらを向いて手招きしている

どうやら、このまま直接訓練に入るようだ

「そういえば、自己紹介はもう済んだのかな？」

「え〜と………」

「経験とスキルの確認はしました」

「後、部隊分けとコールサインもです」

「そう、じゃあ早速訓練に入りたいんだけど良いかな？」

「「「はい！」「」「」

ん？あれ？ちょっと待て………

「あの〜」

「ん？どうしたの？」

「僕はどうすれば……………」

「ああ！すっかり忘れてたよ」

アレン君ははやくちゃんからの直々のご指導の予定だったんだけど
はやくちゃんはまあここの部隊長だから色々忙しくてね

はやくちゃんのいない今日みたいな日は、一般のフォアード陣と
一緒に訓練があるんだよ

はやくちゃん曰く『指揮官になるには実戦経験が何よりも大切や
』。らしいよ

あの、僕この10年ものすごおおおおおおおおおお
おおおお濃いつ験積んでるですが？

だから、目の前の女性に一つ聞きたい。貴女はガ ダムと素手で殴
りあったことがあるんですか？と

「分かりました。では出動のときも？」

まあそんな質問は完全にご法度なのでするつもりは当然無いわけで

「うん。多分他のみんなと一緒に出動になると思うよ

じゃあ質問は以上かな？」

「はい」

「じゃあ訓練に行こうか」

「……………はい！……………」

こうして、俺の秘めたる願いとは裏腹に早速、訓練が開始させられた

「（全く、こんな開けた場所じゃ。盗聴の危険性があるから、碌に
念話も出来ないですね）」

なのはさんに言われ、フォアード陣は現在、六課の隊舎の周りを軽
いランニング中。この後本格的な訓練に入っていくことになるのだ
ろう

すると、ちょうど一周、周ってきたときなのはさんが隊舎の前で親
しそくに一人の女性と話しているのが見える

「（あれが、シャーリーさんか）」

そのままなのはさんと合流した僕達は、一同、記録用のチップを入
れるために預けていたデバイスを返されることになった

ちなみに、僕のデバイスは簡単に言うと、双銃

しかし、ティアナとは違って、僕の銃は極端に銃身が長い。感じて
言えば、スコープ無しのスナイパーライフルを両手に持っているよ
うな状態だ。さらに、二つくっ付けることで、スコープが付いて、
超射程距離での狙撃が可能になる

この形で分かるように近接戦闘が苦手………という訳でもないのだ
が、まあどちらかというやはり遠距離のほうが得意だ

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるからちょ
っとだけ大切に扱ってね

メカニツクのシャーリーから一言」

「メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニー
ノ一等陸士です

みんなはシャーリーって呼ぶので良かったらそう読んでね
皆のデバイスを改良したり、調整したりもするので時々訓練を見
せてもらったりしています

デバイスについての相談とかあったら遠慮なく言ってね」

「……………はい……………」

「じゃあ早速訓練に入ろうか」

これからあの管理局なほの白い悪魔さんの訓練が始まるのか

はあ……………

これから行く先に一抹の不安を感じながらも、今これといって出来ることもない僕にとってのこれが精一杯の足掻きなのかもしれないけれど、悲しいことにそれが何の足掻きにすらならないことを僕は知っていた

知っていたけど、それから目を背けた

今この訓練が未来に繋がるもたと信じて

52話 機動六課（後書き）

ちよい修正

53話 答えの先に(前書き)

今回は最初の模擬戦です

53話 答えの先に

陸戦用空間シュミレーターの中で早速本格的な訓練を受けることになった僕達フォアード陣、僕の場所はフルバックよりのセンターガードいったところだ

一応現場での指揮は、僕も加わるものの、基本はティアナということになっている

『良しつと。皆聞こえる?』

「「「「はい「「「「

『じゃあ、早速ターゲットを出していこうか。まず軽く10体から』

あゝ僕が加わったことでターゲットの数も比例して増えてるのか

『私たちの任務は搜索指定ロスト・ロギアの保守管理。その目的の中で私たちが戦うことになる相手が、これ』

そして、目の前に魔方陣とともに、ガジェットドローン、通称ガジエットが現れる

『自立行動型の魔導機械、これは近づくと攻撃してくるタイプね
攻撃は結構鋭いよ』

『では、第一回模擬戦訓練ミッション目的逃走するターゲット10体の破壊、又は捕獲。15分以内』

「「「「はい「「「「

『それでは』

『ミッション』

『スタート！！』

一斉に目の前のガジェット達は辺りへ散開していく

まず、フロントアタッカーであるスバルが果敢にガジェット四機に攻撃を繰り出すがすばやい動きであっさりかわされる

「さて、僕は……………」

みんなが攻撃を加えている中、僕はまずガジェット達が移動している様子が見渡せるビルの屋上まで行く

その後もエリオ、ティアナと攻撃を加えていくが、かわされたりAアンチマギリングケファイルドMFで掻き消されたりと中々倒せずにいるようだ
今のところ撃墜数は0

そして、今最も注意すべきは攻撃魔力を掻き消す、AMF。それを如何にして突破すべきか
無闇に突っ込んでも仕方がない
僕がやるべきことは……………

- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideなのは

「へえ、皆よく走りますね。」

「危なっかしくてドキドキだけどね。デバイスの方は？」

「良いのが取れてます。五機とも良い子に……いや、ちょっと待ってください」

「ん、どうしたの？」

「一つのウィンドウが前に移されるそこには一人だけビルの上に立って微動だにしないアレンの姿が映し出されている」

「アレン君どうしたんでしょう？全く動いてませんけど……」

「彼、始まってからすぐあそこに行って以来一度も動いてないよ」

「そう、でもこの状況ではある意味正しいことでもある
彼らにはこのガジェット・ドローンに対する情報は皆無

「やっぱり指揮官志望ってだけはあるかな？」

「どづいつことですか？」

「指揮官の最も重要な役目って言うのはその現場の状況をよく確認して、冷静な判断を下すことだよ」

「特に敵の情報が全く無いときほどね」

「じゃあ今の彼は……」

「うん。おそろく敵、つまりガジェットについての情報の分析中つてどこかな？」

さて、アレ君。君はここからどう動くのかな？

.....

side テイアナ

多分、もうすぐで制限時間の半分くらいのはずだ

アンチマキリングファイル下
AMF。あれをどうやって突破するか

一応こっちにも手札が無いわけじゃないが、これからこいつらみたいなのを何体も相手にしていくとなると、自分だけでは物足りない

「ちびっ子、名前は？」

「キャラであります」

「じゃあキャラ、手持ちの技とそのチビ竜の技で何とか出来そうなのある？」

「試してみたいのが、幾つか」

「私もある」

そして、スバルに念話して準備が整うまでの足止めを頼もうと思っただが、その前に開始直後に様子をつかがうように上まで上って行ったアイツからの報告を聞くことにした

『アレン!』

『はい。何ですか?』

『聞きたいことは分かってるでしょ?』

『はい。概ね』

『じゃあ、アンタの見解は?』

『はい。あのAMFというものですが、見ている限り隙が無いわけではないようです』

『例えば?』

『はい。魔力を掻き消すのも思ったよりは時間が掛かる
なので、高威力の砲撃、もしくはAAランクの技術で僕は出来ませんが、重弾殻射撃が出来ればおそらくは、ティアナは出来ますか?』

『練習してて、大分出来るようにはなってきたけど』

『では、それをお願いします』

後は、本当に簡単な理論ですが、魔力ではなく通常の物質、無機物操作や辺りの物を壊して、それで押しつぶしても破壊は出来るでしょう』

『それぐらい?』

『後、最後に一つ』

『何?』

『AMFは常時展開は出来ないようですね。あれはあくまで感知してから開くものであるようなので』

『は?感知されたら終わりなんだったら意味ないじゃない』

『ははっ。そうですね』

コイツは偶に何を考えているのか分からない
私と同じ射撃型なんだけど、何か違和感を感じる

『で、アンタはどうするつもり?射撃型が無効化されて、はい、そうですね。うすかって引き下がれないでしょ』

『まあ、僕は僕なりのやり方でやらせてもらいますよ。僕もそろそろ行きます。では訓練終了時にまた会いましょう』

それで、あっちから念話を切られる

「やっぱり、何か変な感じがするのよね」

あ!スバルにさっさと言わなきゃ」

sideアレン

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「僕もそろそろ行きましょうか」

今までいたビルの屋上から空中に足場を作りつつ交戦している区域に近づく
ちよつと、ティアナが重弾核射撃で3体のガジェットを倒してしまつたところだ

「あれで、才能無いなんてよく言つよな〜十分すごいと思うが」
ちなみに僕は重弾核射撃を試そうとはしたが、全然駄目だった
アイン直々に『貴方には無理です！』つて言われたよ

「俺も一機くらいは破壊しないと皆に合わせる顔が無いな」
そんなことを思っていると、ちよつと俺のすぐ下をガジェット二機が通り過ぎていくのが見えた

「さあて今度は僕の番だ、行くぞ」

『『カートリッジロード』』

デバイスである二つ銃から無機質な声が響き、それぞれ一つずつ薬莢が吐き出される

僕のデバイスにAIは積んでいない
多分次、六課から貰えるものには積まれているだろう
アインがいるというのは確かだが、正直今の状況だとアインの補佐
があまり望めないため、AIの補佐が無いとかなりきつい

「まあこれくらいなら支障はないけど」

そして、僕はビルの屋上から一気に飛び出す
下では地面をローラーブーツで走っているスバルの姿が見える

そして、僕は二つの銃をそれぞれ、逃げているガジェットにロック
オンする

この10年で僕の狙撃能力は格段に上がっている。これくらいの距離
離ならもう余裕だ

「フロントムソニック」

『『ファイア』』

ソニックの名の通り、二つの音速並の速さの弾丸がガジェット二機
を貫く

僕の見つけた答え、それは“速さ”

僕に魔法の才能はない。誘導弾も祿に使えない

才能がないなら思考しろ。そして辿り着いた答え、それが相手を追
いかけてなくても良いくらい速ければ良いということだ

だから、出来る限りの速さを求めた結果がこれ

ガジェットのAMFが展開できないくらいの速さでの遠距離狙撃

「これが僕の答え。僕の“力”だ」

54話 心の傷

黒い。でも黒じゃない。と言うようなすごく黒に近い色をした魔力光をした高速の弾丸がガジェット二機を貫く

「これで、目標は殲滅ですね（てか、技名叫ぶとかどこの厨二病だよー）」

軽く自己嫌悪に陥りながらも、まあみんな叫んでるし良いんじゃない？的に心の中でけりをつける

「うわあー！今のすごいねえ」

すると、後ろからゆっくりとローラーシューズを履いたスバルが近づいてくる

「別にすごくなんかありませんよ。僕には魔法の才能ないですからあれも普通の誘導弾を唯、速くしたただけのもですし」

「へえ、あれって誘導弾なんだ、速すぎて、よく見えなかったよ」

僕のような人外の身体能力を持つ人ならきちんと弾丸に見えるのかもしれないが、やはり普通の人にはあれは誘導弾には見えないらしい。まああれ自体は普通の誘導弾なのでそこまでの威力はなかったりする。はつきり言ってこれはやろうと思えば魔導師なら多分誰でも出来る

だが、それをしないのは誘導弾という物があるから直線に進むだけの物よりもやはり自分で自在に制御できる物の方が良いのだ。その

点においてこの魔法は速過ぎて制御するのは僕でもほぼ不可能、というより元から曲げることを考えていない

「さあ一旦なのはさんたちの下へ帰りましょう」

「そうだね」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

sideなのは

「うわーあれが魔力弾ですか

とてつもなく速いですね。私には一本の線にしか見えませんでしたよ。なのはさんはどうでしたか？」

「にはははは。私にも線にしか見えなかったよ」

「本当ですか!?!」

「うん」

「は〜じゃあこれ用にデバイス組まないといきませんね」

「そうだね(でも、本当に似てるな〜アレ君と真哉君、『何所が?』って言われると、まあ『見た目!』としか今は答えようが無いけど、やっぱり何となく面影があるような……………)」

……………ま、私の気のせいかな」

「何がですか?」

「ううん、なんでもないよ」

「??？」

かつて共に戦った仲間であり、敵同士でもあった男の子だが、確かに目の前の画面に映る少年と何所か通じる部分があった

もう無理だとは分かっているけれど、だけど、それでも問いたい

「（真哉君、君は『私達と敵対したときの君』と『一緒に戦ったときの君』、どっちが本当の君なのかな？）」

その問には誰も答えない。それはまあ当然のことだ

だけど、昔から何度も繰り返された問答だけに、誰かが答えてくれる、そういった淡い期待がまだ残っていたのかもしれない

「（でも、私なんかよりずっとはやてちゃんの方が……………）」

多分、彼女の中では今もその問が繰り返されているのかもしれない
いや、もしかしたら、そんな淡い期待すら無くなってしまっている
のかもしれない

そんな中、一旦訓練をフォアード陣が帰ってくる

その中には、アレン君も当然のごとくいる

「なのはさん、終わりました」

「うん。じゃあ次の訓練に行こうか」

「「「「はい「「「」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
s i d e ア レ ン

僕達は今日の一通りの訓練を終え、隊舎に戻ってきている
よっぽど疲れていたのであろう、時間も時間でフォアード陣は早々に寝てしまった

僕は10年も逃亡生活みたいな生活を続けていたせいか、中々寝付けないことがある
なので、まだきちんと中の正確な部屋の場所の配置が分からない僕はついでに六課内を見て回ることにした

「まあ隊舎内はこれで全部見終わってたかな？」

多分一通り見終わった後、何となく、ふらつと隊舎内の食堂まで来てしまった

ちよつとそこでは、ヴォルケンリッターとはやてが食事をしている最中だった

視界の端に映るその光景に僕は一旦足を止めてしまった

『覚悟、決めたんじゃないやなかったんですか？』

急に脳裏に響くアインの声

「おい！もし盗聴でもされてたら……………」

突然のことに口調が元の真哉のものになってしまった

『大丈夫ですよ、そこら辺に抜かりはありません
それに第一、貴方に盗聴をする意味が良く分かりません』

「そりゃ、だってこっちは素性はレジアスに作らせた偽物、外見は髪の色と左目以外と身長以外はまんま元の俺だぜ？はやて達は警戒するんじゃない……」

『真哉、貴方という人は本当に鈍いんですね』

呆れた様な口調で俺にそう言う

「もし、真哉との関係を完全に吹っ切っているならおそらく貴方はこの部隊には呼ばれていませんよ？多分ですが、まだ昔のことが思い出されたりするのでは？」

そして、盗聴して正体が分かったとして、アレン＝真哉だと知るのが怖い

そういう思いがあるんでしょう」

まあきちんと考えればそうだろう。速さを上げるくらいなら、多分なのはやフェイトやはやてなら時間は少し掛かるかもしれないが、出来るようになるのは時間の問題だろう。他も然り

肝心なのは、そこからの応用をどうするかなのだ
俺はそこから何も進化していない。そこ止まり
というより、元々誘導弾が使えないなかったため、俺が考えた技術
なのだ

唯速いだけの射撃なのだから俺じゃなくても、もっと良い人がいる
だろう

ましてやここはレリック搜索と言う重要な役割を担っている
確かにイノセンス適合者と言うこともあるが、唯でさえ人数が多く

なると連携が難しくなるのだから入れるとしてもバックヤード陣もしくはもつと違うイノセンス関連の部署、まあこの場合、妥当に考えればもつと別の部署だろう

そんな中はやては俺を六課のフォアード陣に迎え入れた

まあ、個人的な理由があると考えるのが普通か

それで、俺はアレンの構図が分かると昔の敵対してたときの記憶が

……

ってどういうこと？あれ？訳分からなくなってきたぞ？

「……………そ、そうだな」

今はこう返事をしとこう

『まあ事はそう簡単にも行かないと思いますが』

「すまん。何で？」

『まだ、分からないんですか！！』

「ちよっ！なんだよいきなり、びっくりして気づかれたらどうすんだよ！」

最後の方は出来るだけ声を抑えて、小声で言う

『これだけは真哉自身で気づいてください。ヒントはもうあげましたから』

「何が？」

だが、その間にアインは答えることは無く

『鈍感は罪ですよ』

一言そう呟いて、念話を切られた

ていうか、本当になんだよ！吹っ切れる？ってじゃあ、あれか！恋愛絡みか！

確かに最終決戦のときに、その……告白紛いのことはされたけど、それが何だよ！まだ小学3年だぞ？それはあり得んだろ

「何だよ。ったく

鈍感って、はやてが俺のことで吹っ切れてないって何が？小3の恋愛が？

いや、あり得ねーだろ
ってそれはもうさっき話したじゃん。だったら何だよ！全く、訳分かんねえ」

完全に口調のことを忘れていた俺はそのまま深い思考の闇に沈んでいった

- - -
- - -
- - -
sideラインフォー스アインス

『鈍感は罪ですよ』

そういつて私は念話を切った

真哉、貴方の掲げる『皆を幸せにする』という理念を貫きたいなら、これは絶対通らなければならぬ道ですよ
その言葉の重さをもっと知らなければ貴方はこれ以上先には進めません

そして、貴方は気付いていない、はやて達、いや、はやてがまだ完全に吹っ切れていないという言葉の真の意味を

貴方は貴方が皆と過ごした半年間を軽く見すぎている
確かにこの10年を見ればそう思うのも無理は無いのかもしれないでも

「（貴方がはやてに与えた影響を甘く見ている。貴方は、はやてが一番自分以外の“人”を欲していたときに誰よりも近くにいた。それは、はやての中でとてつもなく大きいことです。だからこそ貴方の裏切りはより深くはやてにダメージを負わせた。おそらく私がいなくなっただけのこととは比べ物にならないくらい大きな）」

まあ、だからといって、はやてに真哉を譲るつもりもありませんが
でも、この世界でははやてを真に救えるのは貴方一人ですよ、真哉」

54話 心の傷（後書き）

久々にきちんと投稿できました・・・

55話 神ノ結晶(前書き)

酷い誤字があったので修正しました

55話 神ノ結晶

side シグナム

「全く訳わかんねえ」

食べ物を取りに行ったとき、そんな声が食堂の入り口の方から聞こえてきた

気になった私はそこにいるであろう人物に声を掛けた

「何がだ？」

奥にいたのは、昔の私の良く知る人物にとてもよく似た黒髪の少年だった。その顔は自分の無力さを思い知ったときのように、醜く歪んでいた

私の声を聞いて少年は驚いたような表情でこちらを見て、その後何時も皆に見せているような何所か紳士さを感じさせる笑顔に戻る

「あ、アハハハ、すみません。シグナム副隊長

変な姿をお見せしてしまって、僕はもう寝ますね」

「ちょっと待て」

そう言って、逃げてしまおうとするアレンを声で制する

「何か僕に用でも？」

「いや、特に用は無いが

お腹減ってないか？訓練終わってすぐだとあまり食べれなかった

まあ言ってもまだ19だしね

「はははは、アレンくんはお世辞が上手いな」

「いや、お世辞じゃないですって（ほれ見るライン。完全に吹っ切れてるじゃねーか）」

聞いているわけないのだが、心の中で自分の内にいる少女に軽く毒づく

「ところで、なあアレン？」

僕の右隣にいるヴィータ副隊長から突然声が掛けられる

「はい？どうしたんですか、ヴィータ副隊長？」

「いや、今日の訓練はどうだったのかと思ってな」

「はい！厳しい訓練でしたけど何とかやっていけそうです」

「んなこと言ってる割にお前元気だよな」

「はい、昔色んな物に追われてて体力だけは自信あるんです！」

「そ、そうか」

若干みんなの顔が引きつっている気もしなくはないが、俺は嘘はついていない

まあ、この場合、嘘をつくべきだったのかもしれないが

その後、普通に隊長及び副隊長陣と話したりしながらその日はそのまま終了した

「ふあ〜今日も早いから早く行かないと。あ、おはようございます」

ちょうど向かいのほうから歩いてきたバックヤード陣の女性の一人に挨拶をする
すると、憐憫の目と一緒に

「あ、うん。おはよう。頑張ってるね、私応援してるから！」

「は、はあ……………」

何故だろう？応援されているのに全く嬉しくない
それから、すれ違う人々に同じように憐憫の瞳と一緒に目茶苦茶励まされた

「一体、どういふこと」「あ、アレンじゃない！」「ティアナ、おはよ

「うしろです」

「それよりアンタあの噂本当なの？」

「え？噂って何のことですか？」

「はあ？アンタ知らないの？」

「はい、全く。そういえば今日やたらと励まされましたけど、それと何か関係が？」

それを言った途端、急にもじもじした様子になって僕の顔色を伺うようにじろじろ見てくる

「いや、その…ね？」

「ね？って言われても」

本当に一体何があったんです？」

「実は……………」

それから、ティアナの口からようやく真実が告げられた

話を一通り聞いた僕は開いた口が塞がらないと言っ言葉の意味を身をもって知ることになった

「で、どうして僕が借金取りに子供の頃から追われてる設定になってるんですか？」

「そんなの知らないわよ！」

この何所か三千院とかいう金持ちの屋敷に仕えていそうな執事みたいな設定は、後々に聞いた話では昨日の夜、話していた内容が隊員の耳に入って、そこから話がどんどん大きくなっていったらしい。今では僕が謎の機動兵器と戦っていたとかいう核心を突いた噂まであったりする。

この騒動が鎮静化するのはもうすこし後のこと

それはさておき

僕達はいつも訓練している屋外にある陸戦訓練シミュレーターではなく機動六課内のそれも地下に広がっている訓練スペースに来ている。珍しく今日は隊長陣、副隊長陣全員が集合している。何でも、この訓練スペースに入るには、はやて部隊長及び他の部隊長もしくは副隊長の許可がいる。

「じゃあ今日からイノセンスを使った訓練に入ります」

前にも言ったと思うけど、これは強制じゃないから辞めたいと思っただけはいつでも言ってください

私達はそれに対しては、何も言いません

じゃあ訓練始めよっか？」

「「「「はい！」「」「」「」

「じゃあまずはみんなに自分のイノセンスを渡さなきゃね」

そう言っつて副隊長陣を残し、隊長陣は訓練スペースの更に奥に進む

「……ロック解除」

三人の声と同時に奥のほうから抑揚の無い声が響いてくる

「声紋認証、ヤガミハヤテ二等陸佐、タカマチナノ八一等空尉、フエイト・テストロッサ・ハラOWN執務官の三名を確認しました。ロックを解除します」

そして、扉の奥から光が漏れる

「（あそこに……）」

イノセンスがあるのが分かる
長い間使っていたからなのか、それとも別の要因があるのかどうかは分からないが、あそこにイノセンスがあるということだけは肌で感じ取ることが出来た

「隊長、副隊長陣のイノセンスは今度見せるとして、まずは発動からやってみよつか」

振り向いたなのは手にある五つのイノセンス

そして、一人一人に歯車状のものが渡されていく

「ああ、君達が発動させれば勝手にイノセンスのほうに武器の形になってくれるから心配ないよ」

一応今でも神が創った自動的に武器化する機能は正常に作動しているようだ

「じゃあまず早速だけどやってみよつか」

「「「「はい！」「」「」」

さてさて、誰がどのイノセンスなのかな？

いや、まあ一応知ってるんだけどね。被ったりしたらもう最悪だし

『「「「「イノセンス発動！」「」「」』

ボソツ「あれ？今一人多くなかった？」

ボソツ「気のせいですよ。気のせい」

首を傾げながら、俺に向かって聞いてくるスバルに優しくそう言い返す

「ん〜そうかな？」

不思議そうにしながらも、説明に移ろうとしているのはさんを見て、再び顔を前へと戻す

「うん！みんなそれぞれきちんと発動できたみたいだね

じゃあ一つずつ能力と名前の説明していくね

まずはスバルの」

スバルのイノセンスは腕についた腕輪が二つくっついた

原作だとチャオジーが使っていたものだ

面倒なことに、この世界でも名前が付いてないと言うことだった（
というか付ける必要を感じないとレジアスがふざけたことぬかした）
ので、僕が勝手に付けといた。Yahoo知恵袋を使って

「スバルのは『洗礼ノ腕輪』、能力は今のところ分かっているだけでは腕力の増幅だね」

「へえ〜どれくらい上がるんですか？」

「それはまだ試してもいないから分からないけど、多分車くらいなら余裕だと思うよ」

「本当ですか!？」

いや、その程度が出来なきゃ話にならないでしょ

「うん。じゃあ次はティアナのだね」

「あ、あのすみません」

「ん?どうしたの?」

「この猿やたらと私を引っ掻いてくるんですが……」

分かる!分かるよ、ティアナ!!そいつの攻撃は地味に痛いし、何より鬱陶しい!!

それにしてもアイツは適合者を引っ掻く癖でもあるのか?

「ん〜それは今後のティアナの教育次第じゃない?」

おい!何だよ!その投げやりな態度はあ!!もうちょっと心配してやれよ!!

いや、確かに傍からみりゃ唯の微笑ましい光景だが、やられてるほ

うは辛いんだ……おっとつい口調が

「じゃ、説明からするね

その名前は『ラウ・シーミン』」

能力はきちんと発動させれば分かるけど、大きくなって自分で行動してアクマを破壊する

シンクロ率にもよるけど変形して遠距離攻撃も出来るイノセンスだよ。可愛がつてあげてね」

「は、はい。でも、スバルのときと違って、ずいぶん詳しい情報があるんですね」

暴れようとする小猿を片手で押さえつけながら、ティアナが言う

「あ、ああそれは、まあ、ちょっとね……………」

明らかに隣のはやてを意識しながら言う

「なのはちゃん、気にせんで良いって

ティアナ、そのイノセンスには昔、他の適合者がいたんや」

「他の？じゃあその人h「死んだ」え……………」

ティアナが言い終わる前にはやてが答える

「じゃ、じゃあ次のイノセンスの説明に移ろうか」

なのはがその会話を遮って、次のイノセンスの説明を始めようとするはやてはそれに特に何も言わずに唯、イノセンスを保管している部屋の方を唯見つめていた

55話 神ノ結晶（後書き）

原作のディーグレイマンにてスバルのイノセンス（原作のチャオジ
ー）のイノセンスの名前が出たので、それに変更します

56話 管理局の威信

「じゃあ次はエリオのイノセンスだね」

視線が痛い……………

この訓練スペースにはフォアード陣以外の立ち入りも一応は許可されている。それは当然訓練で怪我をした場合など、他の諸々の場合に対応したりするためであるが。ちなみに盗聴の危険性も考えここでは一切の念話、及び電子機器での連絡は使用不可、入り口で回収される仕組みになっている

まあここに入る前に管理局の厳重なセンサーやら何やらが張り巡らされセキュリティは万全なのだが

そうは言っても、訓練スペースそのものに足を踏み入れるようなことは普通しない

だから、バックヤード陣は訓練スペースの入り口付近で固まっている。まあイノセンスなんて滅多に見れるものでも無いし気になったのだろう

そうして、入り口付近で押し合いながら、こちらを見る視線は今紹介されているエリオ……………ではなく僕に向けられている

こうなってしまったのは仕方無いことではある

手持ちで使えそうだったのがあれだけだったのだから

「エリオのイノセンスは『チャリテイ・ベル隣人ノ鐘』」

アクマの内部に侵入して、“音”でそのアクマを破壊後、周囲にも影響を与えるイノセンスだね」

「へ〜このちっちゃいボールみたいなのにそんな力があるんですか」

手のひらでボールを弄りながら、応える

と言うか、『チャリテイ・ベル』って目茶苦茶渋いとこいくな、オ
イ。デイシャ・バリーには悪いが、ほとんど登場して無いだろあれ

「で、じゃあキャロのは『タイムレコード刻盤』」

時間と空間を操るイノセンスだね

主に補助系のイノセンスかな？味方の時間を吸い出して、傷を治
したり、その空間の時間を止めて攻撃を防いだり、色々な使用方法が
あるね」

他のと違って、これも明らかに情報量が多いが、ここは空気を読ん
で、みんなこれに関しての質問はしない。クロノだったら間違いな
く聞いているな、うん

そして、遂に僕の番が回ってきた。きてしまった

「じゃあ、最後はアレンくんのに説明を移りたいんだけど……」

今まで他のイノセンスに言っていた視線も全てが俺に向けられる
若干妙な視線も感じるのが怖い

「あーもう進めちゃってください」／／／／

「じゃあまず、そのイノセンスの名称は『グレイブオブマリア聖母ノ枢』」

見たとおりドレス型のイノセンス

それも音というか歌によって対象の脳を操って、動きを止めたり、
敵から見えなくしたりする能力だね

でも、まあそれは一旦置いたとしても……似合ってるね」

「アレン！本当に綺麗だよ！！」

「何で、男子のアンタに私が……………」

「アレンさん！本当に綺麗です！！」

「はい！とっても綺麗です！！」

「……………いや、まあ正直、僕全然嬉しくないんですけど」

くそっ！何でよりによって残っているのがこれなんだ！！

最初は普通に『闇夜ノ王』で行こう！と思ったのだが、機動六課に預けるためのあの二つの歯車が交差したものが全くでないのだ。そうなれば僕もしくはリインの保持するイノセンスの中では、後は『エンゲージメント』と『聖母ノ枢』の二択なのだが、『エンゲージメント』は使うと、昔、僕が言ったことが嘘だとばれるし、何よりこれ以上目を付けられると真剣にはれる可能性が出てくる。となると残るは『グレイブオブマリア』オンリーなのである。そのため発動時にはリインと息を合わせなければならぬと言う条件もつくが、だが、今の問題はそれでは無い。問題はアレンの顔というのは中性的な顔立ち、言い方を変えれば、女顔だということだ。そのため、無駄にドレス姿が似合ってしまう

「よし！じゃあ皆きちんと発動できたところで、早速訓練！…と行きたいところなんだけど」

「どうかしたんですか？」

「まだ、イノセンスにも慣れていないことだし、今日はそのまま発

動させたままにして、自分オイのセンスの力を確かめたりしていいか。まあ自主トレってことだね。訓練はまたその後って事で」

「……はい！」「……」

「あの……」

そんな中おずおずとティアナが手を挙げた

「どうしたの、ティアナ？」

「さっきから気になってたんですが、シンクロ率って何なんですか？」

「あ！それ私も気になってた」

ティアナの質問に同意の声を上げるスバル

「シンクロ率って言うのは対アクマ武器発動のときの生命線になる数値だよ

低ければ低いほど発動は難しくなって、適合者も危険になる」

「ふえ〜」

「でも、それってどうやって測るんですか？」

確かに、僕のように神に逐一報告させてもらっているわけにはいかない。しかも、僕が見た適合者のリストに『石箱^{キューブ}』の適合者はいなかった。一体なのはさん達はどやってシンクロ率を……？

「そういう人がいるんだよ。適合者の一人にね
実は『キューブ』っていうイノセンスが……………」

ドンッ

「どうしたの？アレン？」

「い、いえ、すみません。続けてください（レジアスめ。俺に偽の
リストを掴ませたのか！くそっ！）」

あまりの事態に思わず前に飛び出しかけてしまった
確かにイノセンスについての情報はS級レベルの秘匿義務が付いて
いるが……………」

くそっ、レジアス！！

「でね、その『キューブ』っていうイノセンスは適合者のシンクロ
率とその人の未来も予言してくれるんだよ」

「よ、予言ですか」

「うん。まあ結構曖昧なものなんだけどね」

「なのはさん達はどれくらいなんですか？」

「私達も結構前だったから、一週間後、みんなと本局に出向いて、
計測する予定なんだ」

「僕達も、ですか？」

「うん！」

そこからの自主練の記憶は僕には無かった。悪い冗談だと思いたかった。唯あまりの事態に動揺を隠せなかった

『キューブ』がある。それは僕に一つの決断を迫るものだっただからといって、進む以外の選択肢は今の僕には無い。それは遠い昔に決めたこと

今ここで生きている皆のためにと誓ったこと

唯、組織というものはあまりに大きく僕の前に立ちふさがる

「（レジアス・ゲイツ……………いや、管理局そのものか

だが例えどんな物が現れても、もう歩みは止められない。もし管理局という組織が立ちふさがるのなら、破壊してでも救う、救ってみせる！例えどんな手を使っても……………」

訓練を終え、自室に戻ってきた俺はどさつと盗聴や監視の目など気にもせず、ベッドの上に乱暴に寝転がった

『どうしたんです、アレン？訓練のときから様子がおかしいですよ』

「どつもどつもあるかよ……………」

『アレン、口調には気をつけないせ、今はそんなことどうだって良い……………」
「……………」
「本当にどうしたんですか？今日のアレンはおかしいですよ」

「『キューブ』だよ」

『ああ、ガセのリストを掴まされていた件ですか、でも、それくらい予想の範囲じゃ……………」

「そもそもあれが、違つてことはフォアード陣のは一緒だったが、他に俺が見たなのは、フェイト、はやてのイノセンスだって違う可能性が出てくる。」

それに『キューブ』は訳が違う。もしかしたら今の俺にとっては『ハート』よりも重要かもしれない」

『『ハート』よりも…………？でも一体、何故です？』

「『キューブ』の能力はシンクロ率の測定、これはまだ良い。今の問題は未来の予言だ」

俺のイノセンスは今のところ『グレイブオブマリア』ということだが、これはリインお前のだ

シンクロ状態にあるから、俺が発動している様に見えるだけだ。シンクロ率の測定は中にいても問題なく通るだろうが予言は別だ。予言に登場するのは俺ではなくアイン、お前だ。最悪『天宮真哉』自身の登場もありうる。これで俺とアインの繋がり及びアインと俺の生存、もしくは一番最悪なのがアレン。真哉がばれる可能性が大い。そうなりゃ一環の終わりだ

俺には徹底的なまでの捜査が入るだろうし、俺の身動きが取れな

いときに伯爵からの襲撃があつたら、それこそ終わりだ。徹底的に調べ上げられ、イノセンスを奪われた拳句、飼い殺しにされるのがオチだ」

『ですが、あの予言は曖昧だと』

「ああ、だが予言ってどうやって見てるんだ？もしかしたら映像が映し出されるという可能性も大いにありうる。そもそも予言の癖に適合者自身の姿も見えないなんてありうるのか？」

『なら、アレン自身のイノセンスを使えば……………』

「それも却下だ。それこそ俺が出てくる可能性が上がるし、第一そのまえのシンクロ率の測定で異常に高い数値がでる。レジアスだって馬鹿じゃない。すぐに感づくだろう。前に神だつて言つてたる？今のイノセンスとの俺のシンクロ率は測定不能だつて」

『でも、そうして管理局が私達に敵対するようなことを？』

「こつちの出方を疑つてんだ。今のところあそこに訪れているのは俺一人だけだしな」

あつちが自分達より格上だというなら、何らかの対処、もしくは管理局に対して何らかの報復があるはずだ。それが無いなら、俺が嘘を付いているもしくは管理局よりも実は格下という風に奴らは考える

奴らの目的は管理局の威信だ。だから、ずっとアクマや伯爵のことをひた隠しにする。自分以上の組織があつてはなら無いって考えだからな」

「じゃあ管理局に報復でもするの？」

勝手にユニゾンを解いて俺の目の前に現れるアイン

まあそれどころではないので、咎めるようなことはしない

「まさか、また俺にはやて達と敵対しろと？そんなの二度とごめんだ
それに個人では集団相手には勝てない。それに報復に一人で行った時点で、こちら側には組織なんて物が無いことがばれる」

「じゃあ一体どうするんですか！？対処も出来ない、報復もするだけ無駄だなんて……………」

焦った声色で聞いてくるリイン

確かに、対処も報復も無理というのはマズイ状況だがこれにだって穴はある

「声を抑える」「すみません……………」
「何もしないとっては言って無い
一つだけ思いついた方法はある」

「何です？」

「その前に、一つ質問だ」

「今はそんな場合では……………」

「まあ聞け。一人の男が嘘をついているとする。これは確実だ

だが、そのことを知らないAという人物がいる。疑り深いAはそれを調べるために、心を読むことが出来るという女性に調べるよう頼んだんだ。心が読めると言うのも決定事項な。Aという人物が嘘を見つげるための大前提分かるか？あ、Aが嘘をついていること、とか心を読む能力があることとかは無しな」

「ん〜と……………分かりません」

「答えはな、その女が自分の味方だということだ。それが崩れ、実は男の味方だったら、男の嘘はばれずに済むだろう」

『それは確かに……………って！まさか……………』

「当たり前だ。『キューブ』の適合者をこちら側に引き入れる」

56話 管理局の威信（後書き）

ヒロインを増やすことになるのかは今は検討中です

57話 神からの侵食(前書き)

今回は早めに投稿出来た

57話 神からの侵食

sideリインフォースアインス

「『キューブ』の適合者をこちら側に引き入れる」

「は、それは理解しましたが、具体的にどう説得するつもりなんですか？

その人の情報すら無い状況なんですよ？」

「それはもちろん……今から考える！！」

リインフォースは自分の主マスターのあまりの無計画さに絶句した

「……………（はあ、どうして私はこの人を好きになってしまったんだろ）」

そんなことを考えながら、憐れみを含んだ視線を真哉我が主に向ける

「まあ、そう睨むなって

全くの無計画ってことでもないからさ」

「でも、今考えるって……………」

「そ、これで得た情報を元にね」

期限は一週間、この間に『キューブ』の適合者を説得する必要がある

「まず、今の状況を整理しよう

俺達に残された時間は何らかの事情で延びたとしても一週間弱
対称の情報は皆無といって良い
今一番の問題は何か分かるだろ？」

「対象の情報が皆無のことでしょうね」

「そつだ。今俺たちには『キューブ』の適合者についての情報が何
一つ無い

唯一あるとすれば、管理局の本局にいるというくらいのものだ
だから、今すべきことと言うのは対称の情報を手に入れることだ」

「でも、一体どうするので？まさか、また私にハッキングさせるつ
もりですか？」

「一応はな。でも、もっと手っ取り早い方法がある
ハッキングはそれが失敗した場合のみだ」

「手っ取り早い方法？」

「そつそつ。一言で言うなら、俺たちに嘘のリストを渡したのは誰
だよ？」

「レジアス中将……………」

「その通り、アイツなら『キューブ』の適合者の情報も詳しいだろ
うよ

何せ、管理局のトップとも繋がってるんだからな」

「ですが、それにまた真哉が行ってはあちらもこっち側が組織では
なく個人だと疑うのでは？」

というより、真哉はしばらくは24時間勤務でしょう？地上本部
などには行く暇無いのでは？」

それに真哉は悪戯っぽい笑みを浮かべて、再度口を開いた

「いやさ〜思ったんだけど、それって俺以外のこつち側の人間が行
けば全一歩解決するんじゃないかね？って思ったんだけどさ、その点リイ
ンフォース君はどう思うよ？」

「真哉以外のこちら側の人間なんて他に誰が……………」

真哉は未だにその悪戯っぽい笑顔はそのままにずっと私のほうを見
ている

「いやいやいや、居るでしょ一人だけ」

「一体何所に？」

「俺の目の前に」

え

「まさか……………」

「その通り。頼んだよ〜」

死なないくらいにボコボコにする位なら許可するからさ」

- - -
- - -
- - -
side 真哉

アインに任せたものこっちはこっちで色々とやることがたくさんあるわけで、当然はやての教導を受けるのもその一つではあるが、
最重要な事ではない

「（まずは本局へ侵入するためにも『グレイブオブマリア』の確保は必須だな）」

本局への侵入に際し、間違いなく必要となるのが『グレイブオブマリア』の聖母マグダラカールテンノ加護のステルス能力
そのためには……………

「（まずは、あの強固なセキュリティをどうにかしなきゃ話になんねえな

次の本格的なイノセンスの訓練はおそらく適合率を測り終わってからになるな

それまでにどうやってあれを突破するか。アインにハッキングさせても良いが、もし気付かれればその時点でジエンドだし、そもそも成功するかどうかもう危ういところだ）」

『悩んでいるようだね』

「うおっ！

（いきなり話しかけてくんじゃねえよ。びっくりするだろうが）」

『ごめんごめん。リインフォースは……もう寝ちゃってるみたいだね』

「（まあ、時間も時間だしな。で今日は何か用か？新しい発見でもあったのか？それとリインフォースじゃこんがらがるから、アインスって呼んでくれ）」

『すまない。そういうわけじゃないんだ』

「（別に良いよ。じゃあ何なんだ？）」

『いや、ちょっと心配になってね
身体の方はなんと？』

「（心配しなくても大丈夫だよ。自分の身体だ
自分が一番良く分かってる。だから最近はいノセンスの発動も控えてんのに）」

『それは知ってるよ。それでももうそろそろ、僕の拘束からも抜け出す頃だろう』

もう君にも聞こえてるんじゃないのかい？あれの声が』

「……………」

『あれは特別なイノセンスだ。まだ分からない部分も大きいけどね
だから、奴の侵食にはくれぐれも気をつけて、君が君でなくなる
ごめんね。何にも出来なくて』

そういつて、プツンツと念話が切れるのが分かった

12時を余裕で回ってしまっている部屋には何の音も無い

「分かってるよ。んなことは
いつもいつも俺ん中でワーワーギャーギャー騒いでるんだから
分かってんだよ。そんなこと………」

そういつて、もうすぐ夏だと言つのに布団を思いつきり被り、意識
を沈めようとする
まるで、迫り来る何かから必死に隠れようとするかのように

「し…アレン、この服で行くんですか？」

「当然だろ。残念ながら、局の服は俺の分しかないんだ
それに結構似合つてると思うぞ」

まだ陽が昇つてままだらない時間帯。今日はラインが、地上本部に
行くので、早速服を見繕っているのだが、アインはそもそもこうい
う状況に陥ることを想定していないのもあつて、世間一般で言う普
通の服しか持ち合わせていないわけだが

「でも、こういう服はいまいち着慣れていないと言つるか、何と言つ

か……」

「我慢しろ。それしかなかったんだから
逆にこれがあっただけ奇跡だと思え」

ちなみに今更だがアインの服装は黒を基調としたタイトスカートス
ーツに眼鏡という何所にでもいるOLみたいな格好だ。中々様にな
っているが、顔を紅くして恥ずかしそうにもじもじしているのが何
か可愛い

何故あつたのかは謎だ。俺も知らん

何か探したら、出てきた。何故かアインにぴったりの神が送っ
てきたんだろう

それなら、神に頼めば良いのだろうがこういうアインも見ていた
と言つ気持ち勝っているのです、そういうことは言わない

「じゃあ頑張つてな。外までは連れて行くが、後は事前に決めたル
ートでな。間違つても、鉢合わせになつてこつちのことがばれるよ
うなことにはならないでくれよ」

「はい」

「じゃあ、行くか」

「「ユニゾン・イン！」」

58話 歩く者と止まらない者

sideラインフォースアインス

「と、いうわけで来た訳ですが

（今まで私は付いて来ないか、付いてきても真哉とユニゾンしていたので、きちんと来るのは今日がはじめてなんですよ。実は）」

そんなことを考えてしまったせいか、額にはうっすら汗をかき始めてしまった

「（そんなことより、もっとしっかりしなければ。今日、私がしくじって要らぬことがバレれば真哉共々私達は……………」

一旦緊張で、変な方向に行ってしまったいそうになる心を何とか落ち着けて、今回の仕事の責任の重大さを改めて認識する

その想いを胸に『祝福の風』の名を冠する少女は一步前へと踏み出した

- - - - -
- - - - -
- - - - -
sideアレン

「（アイン、上手くやれてっかな？）」

俺は昨日アインに話していた通り、はやてによる指揮官訓練を受けている

まだ、今日が初めてということもあって本格的なものではないが、

指揮官という者は現場でどう判断を下すべきなのかとか概ね心得というべきものについて学んでいるのだが

「アレくん！」

「はい。何ですか？」

「さつきから、どっかブーツとしてるような感じやけど、なんか気になることでもあるんか？」

この10年で、大分ポーカーフフェイスには磨きが掛かってきたと思っただが、どうやら顔に出てしまっていたらしい

「いえ、大丈夫です

すいません。続けてください」

「じゃあ、まず、指揮官において………」

「（今更、考えても遅ですよ。頼みましたよ、アイン）」

そこで、その考えを打ち切り、指揮官訓練を続けてくれているはやてさんの方に意識を傾けていった
信頼する相棒パートナーに未来を託して

- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideラインフォースアインス

一方知らず知らずのうちに未来を託してしまったラインフォース

は慣れない服装と人の多さに面食らいつつも、地上本部の中へと歩を進めている

「（え〜と、まずはアレンのいつもやってきた様に受付に行かないと）」

そう言って、女性局員の座っている受付に向かう

「すみません。レジアス・ゲイズ中將にお会いしたいのですが」

「お名前とご用件を」

「アスカ、アスカ・テンジョーインです」

リインフォースと名乗るわけにもいかないので、偽名を考えたんですが、アレンが頑なにこの名前を押しのでこれにしましたが、この名前に一体何の意味が？

「ご用件は？」

「『歩く者』の遣いが参ったと伝えていただけますか？」

そういうと、受付嬢は頭の上にはなマークを浮かべながらも連絡を取り始めた

『歩く者』つまり、『ウォーカー』。アレン・ウォーカーの遣いが来たと知らせるために

「レジアス様がお会いになるようです

左手のエレベーターからお上がりください」

軽い会釈の後、言われたとおりにエレベーターからレジアスの部屋
へと昇って行く

- - - - -
- - - - -
- - - - -
side???

「あれが……………」

エレベーターに昇って行く姿を鋭い瞳で見つめる受付の女性
先程の様子とは打って変わって、冷たいくらいに落ち着いた様子が
伺える

「今のこれでは接触は難しいですね
先程侵入しようかとも思いましたが、隙がありませんでしたし」

次にその冷たい瞳には入り口に付近に一人でいる局員が映る
そして、次の瞬間女性の瞳には先程の冷たさが消えうせる

「あれ、私は……………?」

辺りを伺う様に周りを見回す受付の局員
それを余所に入り口にいる女性局員は先程リインフォースが乗って
いったエレベーターに乗り込んだ
冷たい瞳を携えて

- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideラインフォースアインス

コンコン

「入って良いぞ」

奥から威厳に満ちた声が響いてくると同時に扉を開ける

「『歩く者』、いや、『ウォーカー』の遣いと言ったな。何の用だ」

「もう、お分かりかと思っていたのですが」

「知らんな」

あくまで白を切りとおすつもりのような

だが、だからといってここで引くようなわけにも行かない
今日しかチャンスは残っていないのだ

「ご存知のはずです。前に伺ったアレンの持って帰ってきたイノセ
ンスの一覧には誤りがあった

『石箱^{キューブ}』のイノセンスの適合者についての情報が無かった
あまり『天宮真哉^我の意思を継ぐ者』を嘗めないでいただきたい」

「ああ、そのことか

それについては把握しているこちらのミスだ。今すぐ情報は渡そ
う」

座っていたイスから立ち上がり、近くの金庫から数枚の紙を取り出し、封筒に入れる

「だが、そちらこそ『^{我ら}管理局』を嘗めるなよ」

強い意志の宿った瞳が私の瞳を見つめ返す
その瞳に一瞬気おされてしまう

「ふんっ、まあ良い。これがその者の情報だ」

封筒を受け取り、中身をチラッと確認する
名前や顔写真は見えなかったものの、どうやら本物のようだ

「では、これで（ですが、意外と簡単に手に入りましたね。でも、
これで任務完了です）」

廊下へと続くドアへと手をかける
そこで、気が緩んだ。今まで張り巡らしていた緊張感を解いてしま
った

「……………」

私が最後に見たのは、名前も知らない局員の冷たい瞳だった

- - - - -
- - - - -
- - - - -
sideレジラス

ガチャ

今、先程出て行ったばかりの綺麗な銀髪を持つ女性が数秒とせず入
ってくる

しかし、これも先程と同じく、冷たい瞳が宿っている

「成功しました。レジアス様」

「よくやった。今から、『歩く者』とやらの元へ向かえ、奴はおそらく機動六課だ」

「これは如何なされますか？やはり、ここに置いておいた方が……」

「いや、持つて行け。封筒が無くて怪しまれても困るからな
だが、お前のそれに気付かないとは、奴らのそこも知れているのかもな」

「お考えですが、それはまだ早計かと」

「分かっている。だからこそ、お前を向かわせるのだ
それを奴らに渡すからには、奴らからも同じくらいの情報を奪つて来い」

「了解しました、レジアス様」

「行つて来い。頼んだぞオーリス」

「はい」

ガチャ

一つの封筒を抱いた女性が出て行ったドアを見つめる、その後、今度は下に目を向ける

地上本部中将、レジアス・ゲイツその男の見つめる先には一枚のリストがあつた

『イノセンス適合者リスト』そう書かれた紙、あの男、アレン・ウオーカーに渡した物とは違う物だ

だが、見つめているのはそのうちの一つの欄

オーリス・ゲイズ………イノセンス『憑神』

「くっ………」

何度も見た。そして、何度、歯軋りしたことだろうか

神に選ばれた、いや、選ばれてしまった娘

これは我々にとっては良いことだ。そう、思い続けてここまで来た

「もう、止められない」

誰もいない部屋に苦々しく呟いた声が響いている

58話 歩く者と止まれない者（後書き）

新イノセンス適合者登場！！

59話 予兆

「遅いな」

時刻は午後六時過ぎといったところ

出たのが朝の訓練の始まる前だから六時前くらいだ

ここから地上本部までは交通の便が悪いこともあり、行くのは結構時間を要する。それでも、同じ中央区画内であるのには変わりはないので、そこまでの時間は掛からないはずだ

まあ、昼間に帰ってこられても俺の訓練が終わっていないと困るので、ラインには一応早めに終わったとしても、五時までは戻って来るなど言っているが

「アイツ、どっかで油売ってんのかな？」

ふと、周りを見回してみる

そこには、当然誰もいない。フォアードの四人はまだ訓練中

「（なんか、意外と静かだな）」

夕暮れにさらされた隊舎は一切の音も出しておらず何所か物寂しげで、何だか今身の回りで起きていることが、嘘のような気がしてくる

「嘘なら良かったんだけどな」

自分の手のひらをしてみる

何でもない唯の人の手だ。そう見た目だけは

10年前、自分自身力を欲して、人間としての生を諦めた

人が踏み込んでならない領域。それを侵して手に入れた神の力
今度はそれを発動させる

今まで見ていた手のひらに白銀の銃が現れる

10年間の訓練で自分一人でもこれくらいは出来るようにはなつた
しかし、この昔の俺の愛銃『断罪者』ジャッジメントに似た銃は形こそ似てはいて
も中身も質も全然違う。標的を追いかける能力なんて物は欠片も無い
そう空っぽなのだ

今の俺の有り様をそのまま体現するかのように

一旦『想像』を辞めてしまつと霧のように消えてなくなつてしまつ

「ま、今更考えても仕方ないか」

「今帰りました」

後ろから、澄んだ声が聞こえる

「おう！遅かつたな、何かあつたのか？」

「いえ、大丈夫です。問題ありません」

「ん？どうかしたのか、アイン？お前、なんかおかしいぞ
具合でも悪いのか？」

「アイン？」

「それが、どうかしたのか？」

妙な違和感、今の言葉だけじゃない

来たときから肌で感じる違和感。10年間一緒にいたというだけじ
ゃない

今のアインの周りから感じる空気がいつものものより冷たい…気がする
これも、おそらく神はげものになった影響だろうか。第六感とか直感みたいなのが、俺に何かを伝えようとしてくる
だから、鎌を掛けてみることにした

「そつだそつだ、一応合言葉を確認しておこうかな？」

「合言葉…ですか？」

「そつそつ」

「それh「はい、アウト」……………！」

アインの身体をそのまま押し倒し、動けないように腕を組み伏す

「残念ながら、俺とアインの間に合言葉なんて仰々しいものは無いんですよね

（というより、面倒くさいのと作ったとして僕のほうが忘れる可能性が高いからしないだけなんですけどね）

でも、今はそれより、貴方のことです。肉体の方はアインの物で間違いないようですね

ということとは、この能力…『憑神』ですか。それも貴方方からもらったりストには無かったものですね

まあ、今回の件は特に言及するようなことはしないつもりですが、君のとこの中將によく言っておくように

僕の家族になにかするようなら絶対に許しません」

「……………」

その言葉に反応することなく、地面にへたり込むアインの身体を支える
そして、アインの中にはもう何もいないことを俺の直感が伝えてくれる

「真…哉、私は……………」

「話は部屋についてからだ。ユニゾン出来るか？」

「はい。問題ありません」

俺はアインの持って帰ってきたおそろく『キューブ』の適合者についての情報が入っているであろう封筒を片手に夕暮れの中に静かに佇む六課隊舎の中へと戻っていった

部屋まで帰ってきた俺達はユニゾンを解いて、向かい合って話をしているのだが、アインが如何せん暗い。もうとてつもなく暗い

「早速、で悪いけどこうなった経緯を聞かせてくれ」

「私が憶えているのは、レジアス中將から情報を貰ってへやから出

たときまでです

おそらく『憑神』の適合者と思われる人物も見ましたけど」

「いや、多分それは適合者じゃない

あのイノセンスは乗り移った先からも、他の他人に憑依できるアインに憑依する前の奴が適合者本人の可能性はまず無いだろうな」

「そうですか……………」

「まあ、目的である『キューブ』の適合者の情報は手に入ったわけだし、万事OKだよ

それに、運はこっちに味方してくれたみたいだぜ」

「え……………」

「いや、部屋に歩いてくるまでにちょこっと中身見たんだよ」

「それで、どうかしたんですか？」

「これ見て」

俺は一枚の紙をアインに見せる

それを見たアインの眼が驚きで見開かれる

「これは……………この人物は……………！」

「この人だったら何となくだけ協力してくれそうだな？」

「ええ。それもそうですけど、この人物に近づくとすると、正体も

ばれる可能性が……」

「そのことだけど、俺、彼女に正体ばらそうと思うんだ
信用してもらったためにも、ね」

「そんなことすれば、さらにはれる危険性が……」

「まあ、そんな時はそんな時だ」

「今、出来ることと言えばそれくらいなんだ。なら、それをしなくて後悔するよりまだろ？」

「後悔は後では出来ないんだぜ？」

「まあ、当たり前のことですけどね」

「当たり前でも良いだろ。正しいんだし
んでもって、次は俺が直接出向く」

「訓練はどうするの？」

「それに、あそこに堂々とするわけにも行かないでしょ？」

「病欠とかでサボれば良いさ」

「入る方法については目処は付いている」

「決行は明日だ。アインにも頼みたいことがあるから準備しといて
くれ」

「は、はあ」

もう一度、紙面に眼を落とす

イノセンス『キューブ』の適合者

かなり、親しげで彼女のことを家族だとも言っていました」

「アイン……………」

特徴的な名前だが、それだけじゃない。妙にあたまに引っかかる何か重大なことを見落としているような、そんな気がした記憶の片隅に引っかかるそんな感じの

「どうされました？」

「いや、その『アイン』という名、妙に気になってな」

「確かに珍しいですが……………」

思い出せ！何かあるはずだ

記憶の奥底にあるものを引っ張り出そうとする

天宮真哉…イノセンス…伯爵…アクマ

全て違う。そうじゃない

もっと、別の……………」

「地球……………」

「はい？」

「そうだ。地球だ！」

「第97管理外世界ですか

それと、これとは関係が……………」

そして、もう一枚の紙を見る
それは機動六課構成員の一覧だ
そこには当然、彼女の名前も載っていた

「リインフォース・ツヴァイ

リインフォース!!」

10年前に死んだという報告を受けていたが、まさか生きていた
とは……………」

「アレン!! ウォーカー……………まさか、奴は……………。忌々しい亡霊が!
!」

まだ可能性の段階だ。完全な確証があるわけではない
だが……………」

59話 予兆（後書き）

『キューブ』の適合者はカリムさんに決定。ちなみに、4話前（デイックレ）間違えました、すいません）のあとがきにも書きましたが、原作にてこの作品ではスバルのイノセンスである腕輪の名前が登場したので、変更させていただきました。名前は洗礼アイムオブパフテスマノ腕輪です

60話 自分にしか出来ないこと(前書き)

少し更新遅れてしまいました。すみません・・・

60話 自分にしか出来ないこと

「すみません、なのはさん……………」

「ううん。大丈夫だよ

今日はしっかり寝て、元気になってね

……………ま、もしも嘘だったりしたら承知しないけど」

ビクッ

「そ、そんなわけないじゃないですか」

「そっだよね。でも、若干声が震えてる気がするのは気のせい？」

「風邪のせいですよ。きっと……………」

「そっか、じゃあお大事に」

「はい……………」

ピツと今まで魔王まおうに継いでいたウィンドウを閉じる

「大丈夫なんですか？部屋にでも入ってこられたら……………」

「大丈夫だ。午前中は医者のもとに行つてくると言つていた
早めに終わらせて、帰れば…なんとか」

「でも、もしもばれたら……………」

「O H A N A S I Iの餌食になる……………」

それだけは勘弁したい。ティアナより先にあれの餌食になることだけは！

「ま、何だかんだ言って、既にフラグが立ってるようにも思えますがね」

「そんな身も蓋も無いこと言つなよ……………」

「……………時として、覚悟は必要な物ですよ」

「本当に身も蓋も無い……………」

「アインってドSなのか？まあムチとか似合いそうだけだ」「失敬な！私はDMです！」「まさかの衝撃告白！？」

ものすごく衝撃的な新事実がアインの口から放たれる

「じよ、冗談です」／／／／

何所からが冗談で何所までが真実なのかは知る由も無いが、不覚にも体の中で紅くなって悶えているアインの姿を想像して、口が緩んでいるのが分かった

「何、気持ち悪い笑い方してるんですか？」

「お前、やっぱりドSだろ」

多少これからの連携に不安を感じつつも俺達は行動を開始した

今、状況の説明プランの確認などのため、アインとはユニゾン状態を解いている
前に、部屋でユニゾン状態を解いてからというものの、しばしば解いたままでいることもあるようになった
ま、それはさておき

「突入先は聖王教会だ。場所の特定は？」

「ミッドチルダ北部、ベルカ自治領です

おそらく『キューブ』のイノセンスは極秘情報に付き、管理などは本局が行っているものと」

イノセンスの管理については、地上本部と本局は見つけたほうが管理することになっている

つまり、地上本部が見けたものは地上本部のもの、本局が見つけたものは本局の

だが、俺の口添えもあって、発見されたイノセンスの内、8割が現在、地上本部の管理下にある

機動六課にあるのも、当然例外ではない。ここは前線基地という役割があるため。すぐにも動けるようにイノセンスの管理が出来るようになっていくが、地上本部により見つけられたものは地上本部の命があれば、すぐにでも、地上本部に返さなければならぬ
そして、この場合『キューブ』の発見をしたのは、本局側だったというわけだ

「よし。そっちの方が都合が良い
じゃあ潜入するために取って来るか」

「なにをです？」

「『グレイブオブマリア』」

「そんなことしたら、O H A N A S I I じゃすみませんよ!!」

「ばれなきゃ良いんだよ、ばれなきゃ

それに、ばれるなんて事は無いと思うしな」

「じゃあどうやって？」

「昔さ、お前に頼んで作ってもらった

『術式を感知されないようにする術式』あるじゃん」

「確かに、残ってはいませんが

一体、それが何と関係が……」

「他の術式にも使える？」

「少しだけ時間が掛かりますね

どういうタイプの呪文かによっても変わってきますが、そこまで
時間は掛からないと思います」

「ふむふむ」

「もったいぶらないで教えてくださいよ!!」

「なあ、アインさ」

「はい」

「昔、あの10年前の戦いの時、シャマルのリンカーコア蒐集したよな？」

「しましたよ！しましたとも！ああ、シャマル可愛そうに……………」

何かもつたいぶりすぎて壊れてきちゃったか？

「じゃあシャマルの魔法は全て使えるんだな？」

「もう！早く教えてくださいよ！！」

暴れようとするアインの肩をガシッと掴み、真剣な顔をする

「重要なことなんだ」

お前はシャマルのあの時点での魔法は全て使えるんだな？」

「はい……………」

確かに、あの時点までの魔法の術式はまだ私の中に残ってはいますよ」

軽く涙目になったアインの顔を見て『可愛い』／／／／、と
思ってしまったことは置いといてだ
これで、全てのパーツはそろった

「すまなかつたな、アイン」

今から話すよ」

「はい……………」

「『旅の鏡』だよ」

「『旅の鏡』……………転移魔法の一種でしたね
もしかして……………」

「まあ、簡単なことだ

アインの『術式を感知されないようにする術式』で『旅の鏡』を
感知されないようにして、『グレイブオブマリア』をあそこから取
り出す。戻すときも要領は一緒だ

ってことで、『旅の鏡』用意頼んだ」

「分かりました。少し待っていてください」

そういつて、もう完全にアインのデバイスと化してしまった『エン
ゲージメント』を取り出し、俺にはこれっぱっちも理解出来なさそ
うなことを淡々とこなしていく

そうして数分、今まで開いていたウィンドウを全て閉じ、こちらに
向き直る

「準備完了しました」

「……………アインって本当に何でも出来るよな……。ほんと羨ましいよ」

「何ですかいきなり？真哉には私に出来ない真哉にしか出来ないこ
とがあるでしょ？」

「例えば？」

「さあ？」

「曖昧だなあ」

「…………でも、人にはそれぞれその人にしか出来ないことが絶対あると思います

私には私の、真哉には真哉の。だから人は助け合うのでしょ？他人に出来ないことをそうやって補って」

「意外と深いこと言うな」

ま、今はそのアインにしか出来ないことをやってもらおうかな？」

「はい！」

元気よく答えたアインは早速、自分が先程組み立てた術式を展開し始める

「…………俺にしか出来ないこと」

自分で打ち立てた目的はある

だが、それは自分にしか出来ないことなのだろうか？今まで背けてきた問を目の前に突き出された気分だった

これは俺じゃなくても良いのではないだろうか？
そんな問が

「（いいや、俺にしか出来ないんだ。傲慢と言われようが、何と言われようがこれは絶対俺にしか……………）」

「発動させます」

隣から聞こえた声を合図にそれについての思考を止める

「……………ああ」

そう、低く呟く

アインの目の前に大き目の円が広がっている

「イノセンス保管室に繋いでいますが、どうするんです？」

「お前が呼べば来るだろ？多分」

「そういう物なんですかね？では『グレイブオブマリア』！」

シーン

「あれ？もう一度『グレイブオブマリア』！」

シーン

「どういふことですか？」

「さあ？（確か、イノセンスは適合者の意思で呼んだり出来たはずだったが、一体どういうことだ？設定の上書きでもしたのか、神^{アイツ}？）
じゃあ、一個ずつ取って調べるしかないわな」

「あの、それで咎落ちとか、無いですよ？」

「無い無い」

……多分だけど（ボソッ）」

「え、！今不穏なことを聞いたような……………」

「そんなことは気にしな—い

時間が無いんだから早く早く！」

「は、はあ……………」

何度か確認した後、ようやく『グレイブオブマリア』を引き当てた
当然、咎落ちになんてなっていない

「よし。準備万端！目指すは聖王教会！」

「ですね」

61話 新たな仲間

「……………」

「（真哉、聞こえていますか？）」

「（ん、ああ。どうした？）」

「（ここまで来て今更なんですが、説得するって、具体的にどういった方向で？）」

「（そんなの着いてから考えるさ）」

胸の内からはあゝと溜息をつく声が聞こえる
それから、改めて自分達の状況を確認する

人目につくところで無闇に転移を使うわけにも行かず、俺とアインは今、普通の交通手段を使って、聖王教会に向かっている。ちょうど、出勤ラッシュと重なったようでも最初の方は車内は混み合っているものの、向かっている方向がミッドの極北ということもあり、今はほとんどの席が空いている

レジアスたちの動向が未だに掴めない以上、今もこうしてユニゾン状態での念話での会話を余儀なくされている

「（それにそんなこと言ってる間に着いたようだしな）」

「（そのようですね）」

開く扉から外へ踏み出す

途端に外から冷気が身体を打ち付けてくる

「もう、春なのにここはまだ少し寒いんだな」

「そのようですね」

降りた客が自分達だけなのを確認したのかアインが声を出して喋りかけてくる

「あまり時間は掛けていられない

聖王教会の付近まで、転移できるか？」

「はい、一キロ圏内くらいに転移すれば良いですか？」

「そうしてくれ」

「ですが、その前に………」

「その前に、何だよ」

(なのはに殺されたくないので一秒でも早く行きたい俺は焦り気味にそう呟く

「無賃乗車は犯罪ですよ」

「あー」

一気にやる気がそがれた気がした

すぐ目の前に聖王教会が見える位置まで来ていた
運の良いことにここまででは、教会のシスターに会うことも無く順調
に進んできている

「アイン、頼んだ」

「はい、イノセンス発動『マグダラカーテン』」

アインの口から響く綺麗な音色が、俺たちの姿を隠す

「さて、乗り込むか

………ところで、俺カリムのいるところ知らないんだけど、知って
るっ？」

「そういつと思って、事前に調べておきました」

「さっすがアイン！頼りになるな！」

「ほんと、こんな時だけ調子良いんですから
では、行きますか」

そう言つて、堂々と正面から聖王教会へと入つていった

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideカリム

「ん……………」

ふと、書類を書くために握つていたペンを机の上に置く

「シャツハ」

この教会で働く自分の秘書的存在に尋ねる

空中にウィンドウが開かれ、そこから声が響く

「はい、何ですか？騎士カリム？」

「今日、誰かと面会の予定つてあつたかしら？」

「いいえ、私のほうでは何も」

「そう、ありがとう」

「はい」

そして、今まで出ていたウィンドウが閉じるとほぼ同時に扉が開く
そこには誰もいない。いや、見えていないだけで、誰かいることは
分かる

「誰？今日は面会の予定など入っていないようなんだけど、特にエクスシスト関連ではね」

「……やはり、気付かれておられましたか」

虚空から声が聞こえる

そして、その虚空にいる誰かがゆっくりと姿を見せる

そこには、年は14〜15歳くらいで真っ黒のドレス姿の……

「男の子？」

「……あまりそこにつっこまないでください」

彼の表情から伝わってくる悲壮感に免じてこれ以上は何も言わないことにした

「貴方は一体何所の何者かしら？」

「僕は機動六課ダークネス分隊アレン＝ウォーカーと言います」

「機動六課!？」

でも、今、あそこでは訓練が行われているはずでは？」

「サボってきちゃいました」

「……で、六課の訓練をサボってまで来てくれた貴方はここに何をしに来たのかしら？」

それを聞いた途端、彼の口元から笑みがこぼれた

「単刀直入に言います」

「何？」

「騎士カリム、僕達の仲間になっていただけませんか？」

- - -
- - -
- - -

side 真哉

「僕達の仲間になっていただけませんか？」

「仲間？」

その間に怪訝そうに目を細める

「貴方も私も管理局に所属している

仲間も何も「それが、少し違うんですよ」「？」

「僕は名目上は管理局に籍を置いています、実質的には敵対しているといっても過言ではないんですよ」

「どづいづいと？」

「そのままの意味です。それ以上でもそれ以下でもありません」

「じゃあ質問を変えるわ。どうして敵対するの？」

「それは私からお話します」

アレンも良いですね？」

「!?!」

「良いよ」

光と共に僕の隣にリインフォースが姿を現す

「お初にお目にかかります、騎士カリム」

「貴女は、まさか……………」

「リインフォース、リインフォース^{アインス}?です」

「リインフォース!?でも、そんな……………」

「はやての話では貴女は確か10年前に……………」

そこで言葉を止め、改めてこちらを向く

「……………貴方本当に何者?」

「貴女にも思い当たる節があるのでは?」

「まさか……………」

「(リイン服チェンジよろしく)」

「(はい)」

このまま、戻ると、もうほんと完全に台無しになるからな

というより、恥ずかしさで俺が死んでしまっ……

そうして、今までの服から大きさが一回り大きい服へと切り替わる
当然、ぶかぶかで、手は先の方が見えない

「何を……………」

「分かってるでしょ？ 僕が、いえ俺が誰なのか」

ポケットから飴玉サイズの物体を取り出し、口に含みそのまま飲み
込む

今までぶかぶかだった服がぴったりのサイズになる
そして、髪の毛が今までの黒から真っ白へと変化し、最後に呪われ
た証のペンタクルスが左目の上に現れる

「俺が天宮真哉です」

- - - - -
- - - - -
sideカリム

『始まりの被^{エクソシスト}魔師』 『最年少次元犯罪者』 『神^{イノセンス}の全てを知る者』

アクマの存在がひた隠しにされている今、これについて知っている
者は極小数だが逆にアクマ、いや、イノセンスについて把握してい
る者なら、誰もが知っている

「天宮真哉……………」

目の前の人物、10年前に次元世界の崩壊に巻き込まれ、死んだという報告が上がっていた人物だ
それが何故生きて、しかも今自分の目の前にいるのか不思議でならなかった

「何故、貴方が……………」

「言ったでしょ？貴女の勧誘です」

「貴女の正体があった以上、手を貸すわけには……………」

「そうですね。なら……………」

自分のデバイスとイノセンスをもち臨戦態勢に入る

「帰るか」

「は？」

「真哉の思うようにすれば良いですよ」

そう言って、そのままドアから出て帰ろうとする

「ちょっと！そのまま帰るつもり!？」

「え……………そうだけど？」

そう、簡単に言ったのけた

「いや、でも私は貴方の秘密を知ったのよ？」

「確かに、でもこれで貴女を無理矢理に仲間にしても、意味ないし」

「真哉の行動目的はみんなの幸せですから」

みんなの幸せ……………

悪逆非道で冷徹、聞いていたイメージとはまるで違う言葉が彼の口から飛び出してくる
嘘だ。きつとそつだ

「何で、お前が自慢げなんだよ」

「良いじゃないですか」

「みんなの幸せって貴方本気で言ってるの？」

「ああ」

またしてもその男は平然と顔色一つ変えずに言った

「そんな嘘をついても「嘘じゃない」？」

「嘘なんかじゃねえ。俺は本気でそれを望んでる

ここに来たのも10年前のあの事件も！！」

確かにその言葉に力がこもっていた

だが……………

「なら何で10年前はやて達を捨てたの？」

それを聞いたとき、彼の瞳は驚きで大きく見開かれる

「捨ててなんか……………!!」

やっと分かった。彼は悪逆非道でも冷徹でも何でも無かった

それどころか、『他とは違う特別な存在』でも何でも無い、ただの一人の男の子だ

迷って悩んで、理想論だと言われようが、やり通す。そんな子なんだと

「いいえ、彼女の気持ちが分かっていた貴方になら分かるでしょ？

あの時のはやてには貴方が必要だった！

私はその時一緒にいなかったし、これは後から聞いただけだからかもしれないけど、はやては今でも貴方を想ってる。それだけは分かる」

だけど、だからこそ彼はゴールばかりじゃなく他のもつと違う部分を見なくちゃならない

「!!でも、それでも……………!!」

俺はみんな救うって決めたんだ!!はやてだけじゃないこの世界のみんなを……………」

パチンッ

自分は思わず、彼の頬を叩いてしまっていた

ゴール地点ばかりを眺めていては、いずれ道を踏み違えるそれはそれに対する思いが強ければ強いほど影響は大きく

「逃げないで

貴方はみんなを救うって言うのを口実にして、一人の女の子の気持ちから逃げてるだけよ！

ちゃんと前を見て、逃げ道を自分で作らないで！

貴方の成すべきことのためなら、どんなことでもしてみなさいおれは

じゃないと、たった一人を救えない人が世界中の人間なんて救えないわよ」

「……………」

「で、真哉はどうするんですか？」

「俺はみんなを幸せにする

それは、それだけは変わらない

たとえそれが逃げ道だと言われようとそれだけは変えるつもりは無い」

「じゃあ貴女はまたはやてを……………？」

「そんなことだっしてするつもりは無い

俺だっしてはやて達と別れたくなんて無かった！

だけど、それしか思いつかなかったから」

「……………」

「だけど、何かを犠牲にするのもここまでだ

もう何も犠牲になんかしない。どれだけ強欲だといわれようが、

俺は何も手放されたりしない、手放したくない！」

「確かに、無謀ね」

「……………」

「でも、嫌いじゃないわ。その答え」

「それじゃあ……………」

「ええ。貴方の仲間になるわ」

彼の顔がパアッと明るくなる

「ただし！」

「ただし？」

「貴方の夢、絶対に諦めないで
それだけが条件よ」

「言われなくても諦めるつもりなんて無いよ
だから、そんな貴女にこそ、頼みたい」

「何を？」

「俺が俺で無くなったその時は、俺を止めて欲しい
何が何でも」

「真哉……………」

一瞬見せた寂しげな表情が妙に引つかかった

「それはd「じゃあ早速だが、仲間になったんだし、頼みたいことがもう一つある」「

だが、次には彼の顔は元の明るい顔へと切り替わっていた

たった三人しか居ない部屋の中でずっと真哉は笑っていた
自らの未来あしたに一抹の不安を抱えながら

『真哉……………君は僕が救ってみせる』

61話 新たな仲間（後書き）

遅れてすみませんでした

62話 やっぱり魔法少女は怒らせちゃいけない部類の人間だと思う(前書き)

今回はまだきちんと投稿出来ました・・・

62話 やっぱり魔法少女は怒らせちゃいけない部類の人間だと思う

「ちょっと頭冷やそうか……………」

「(わーやっぱフラグ立ってたか)」

無慈悲に構えられる杖

完全に魔王と化したなのは、届くはずも無い嘆きが心の中で木霊する

そして、一旦時刻は今から少し戻る

「いや〜それにしても真哉は情けないですね」

「何がよ?」

「説得するはずの相手に、逆に言いくるめられるなんて」

アインはそう言っかすかに微笑んだ

実のところそこには真哉に対する嘲笑なんてものは一切混じっていなかった

「言いくるめられてねーよ」

長年付き合ってきた真哉にもそれくらいのごことは理解できた
先程の言葉について、気を紛れさせようとしていることくらい

でも、迫り来る自分の『影』は嫌でも、現実へと視線を向けさせた

「ま、そういうことにはしておきましようか」

「で、早速だがカリムにして欲しいことがある」

「ん？何かしら？」

「近日、俺達機動六課の隊長陣を含むフォアード陣がイノセンスの適合率の検査に訪れることになっているはずだ」

「ええ、確かに六日後に予定されているわ

それが、どうかしたの？」

「そこで、カリムには嘘を言ってもらいたい」

「嘘？」

「まあその内容については『キューブ』俺の適合率やその他諸々見てもらえば分かると思うが」

「やってみるわ」

そう言って、自分の部屋の金庫から四角い箱を取り出す

「それが『キューブ』ですか？」

「そうよ」

「まんまですね」

「それを言っではお終いよ」

「（何かこの二人って似てるよな）」

真哉は密かにそう思った

「イノセンス発動」

これは完全な独りよがりな考えだったが、正直、『キューブ』のイノセンスの適合者がヘブラスカみたいにでっかくはならないで欲しいな〜とは思っていた

だから一言言いたかった

「（グツジヨブ神様！！）」

俺はその時あの神に初めて感謝した。称賛と言っても良い

『キューブ』のイノセンスは予想とは全然違い、一言で言えば天女。オプシヨンなのか羽衣まで付いている

そして、露出が多い

もう完全に神の趣味趣向出しまくりである

それを直視することが出来なかった俺は顔を背けると、ちょうど隣にいたアインと目が合う

「真哉……………」

「な、何だよ」

若干声が上がってしまった

「真哉のえっち……………」

「ぐはっ」

「ふふっ、真哉くんって意外と初心なのね」

「……………純情といってくれ」

「じゃあ始めるわね」

そういつて、静かに目を閉じる

すると、今までカリムの周りを漂っていた羽衣的な何かがかリムの元を離れ、こちらに向かって飛んでくる

「で、貴方のイノセンスはどこかしら？」

「（そういえば、言ってなかったか）」

俺はそつと自分の胸に手を添える

「俺のイノセンスは俺の中にある」

「……………？どういこと？」

「そのまんまだよ、俺のイノセンスは寄生型というタイプなんだ
カリムやアインは装備型と俺達は呼んでる」

「……………貴方がイノセンスの全てを知っているというのは、あなたが嘘ではないのかもね」

「そんなことないさ。俺達にだって分からないことは山ほどある」
今自分の内にて起きているこの不可解な声にさえ、何の答えも見出せてもないのだから

「でも、それじゃあ、アインスさんのは何所に？」

「アインで良いですよ。騎士カリム
私のはこれです」

「それは、ペン…かしら？」

「はい、これが私のインセンス『グレイブオブマリア』です」

「発動後と大分違うのね」

「そんなことより、さっさと済ませて欲しいんだが？」

「それもそうね」

「でも、寄生型ってどうやって測るのかしら？」

「分からないのか？」

「初めてのことだから」

「まあ、やってみるわ」

そういうと、今いる場所から一歩二歩と前へ歩み始め、俺の前まで来る

「少ししゃがんでももらえるかしら？」

俺の身長はカリムより少し高い

そのため、俺は顔がちょうどカリムと同じ位置に来るよう屈む

そして、カリムの額と俺の額が軽く触れ合う

「（そ、そういうば、原作でもこうやって測ってたな）」 / / / /

向こうは目を瞑っているので、見えてはいないだろうが顔がかなり熱くなっている

「これは……………」

「ど、どうしたんだ？」

ゆっくりと額を離す、それとともに周りを漂っていた羽衣も一緒に離れていく

ちよつと惜しいな〜と思ったのは内緒だ

「ごめんなさい

シンクロ率は最後まで測り切れなかったわ

でも、ここまで高いのは私も……………」

「理由は分かったら？」

「ええ、それと予言よ」

「俺に？」

コクッ

「貴方にこれを言って良いのかどうかは分からないけど」

「言ってくれ」

「貴方はこれから先の未来でこの世界か自分のどちらかを選択することになるわ」

「何の選択だ？」

「そこまでは私も……」

「そうか、ありがとうカリム」

「真哉、もう時間が……」

時刻はもうお昼を当に過ぎてしまっていた

「まずっ

じゃ、じゃあな何か報告があったら連絡くれ！」

そう言って、急ぎ足で出て行く

その後ろをリインフォースも付いていこうとするが、ドアの前で立ち止まった

「一つ聞いてよろしいですか？」

「ええ」

「騎士カリムはどうして真哉を信じようと思ったのですか？」

その眼はまだ自分のことが信じられないと語っていた

それは極々当然だと思う。逆に言えば真哉のほうがおかしいのだ

「貴女と似たような理由じゃないかしら？」

少し驚いた表情をした後、アインの表情はいつもの優しい表情に戻った

「……………それを聞いて安心しました」

ガタンッ

「そうだ、今すぐカリムも一つ頼みたいことがあるんだけど」

「何かしら？」

「それは……………」

そして、冒頭へと戻る

結果的に俺達は間に合わなかった

そして、ちょうど訓練終了後のなのはに見つかった

つまり……………

なのはに見つかる

風邪だと言ったのにピンピンしている俺

O H A N A S I

という考えうる限りもっともシンプルな流れだ

ゴトッ

俺の目の前に何かが落ちる

「これは、僕の……………」

「そうだよ。私だって、デバイスも何も持ってない相手に魔法使うほど鬼じゃないよ」

「（鬼じゃなくて魔王の間違いでしょ）」

そして、僕は地面に転がっている僕のデバイスを拾う

「一体どうしたんですか？なのはさ……………ってアレン!？」

僕となのはさんが対峙している場所にティアナが姿を現す

「ん？どうしたのティア？」

「どうしたんですか？ティアナさん？」

「待ってよ、エリオくん」

続いて、訓練終わりのスバル。そして、エリオ、キャロと続々ギヤラリーが揃う

「「セットアップ」」

ほぼ同時にデバイスを起動させる

『ちよっ！アレン、なのはさんと闘り合っつもりですか！？』

『ん？そうですね。上手く立ち振る舞えば、アレを試せる良い機会になるかもしれませんし』

『アレって、まさかアレですか？』

『そうそう、アインは準備だけしといてくれるかな？』

『っ……………！！分かりました』

念話を切って、もう一度、目の前の魔王なのはを見つめる

「（こんなところで試すことになるとは思わなかったけど、どれだけ使えるか見る良い機会だ

（そう、対集束砲奥義）

『ブレイカーブレイカー
集束殺し』
」

62話 やっぱり魔法少女は怒らせちゃいけない部類の人間だと思っ(後書き)

最後の方ちょっと編集しました

63話 アレンVSなのは(前書き)

すいません……。テスト期間中につき、投稿が遅れました(汗

63話 アレンVSなのは

「セットアップ」

その声と同時に、俺は後ろへ飛んで距離を取る

「（先手必勝！）ファントムソニック！」

「「ファイア」」

手の中の二機のデバイスから音速の魔力弾が放たれる

「プロテクション」

デバイスから響く声と共になのはさんの前に現れた障壁が僕の放った魔力弾を消し去る

「やっぱり防がれますよね」

「（リイン、準備は任せる

全ての魔力をこちらに渡してくれ）」

「（了解しました）」

魔力がリインの元を離れて、俺の制御下に置かれる

「アクセル」

「スナイプショット」

なのはさんの杖、レイジングハートから四つの魔力弾がこちらに向
かって放たれる

「（これを全部消してもまた次の弾丸が来て、ジリ貧になるだけ……
か。なら……）」
前へ！」

なのはさんの戦闘スタイルは砲撃。それを踏まえて
僕はその場に立ち止まらず、敢えて誘導弾の迫ってくる前へと踏み
出す

そして……

ダッ

誘導弾が着弾する直前で思いっきり地面を蹴る

そして、ちょうど方向転換をしようとしている誘導弾に照準を合わ
せる

「ファントム」

「ソニックシューター」

真っ黒な四本の光が魔力弾を全て貫く

そして、そのまま足元に魔力で作った足場を蹴って、なのはに飛び
掛る

「（さあ初お披露目です）トンファーモード」

「モドリリス」

いつも銃身だった部分が回転し、デバイスの形が今までの銃からト
ンファーへと形を変える

そして、その勢いのままなのはに向かって突っ込んでいく

ガキツ

「プロテクション」

だが、さすがにこれでやられるわけも無く、障壁で防ぎきられる
それを確認すると、僕は後ろへ飛んで先程と同じように距離をとる

「(まあここまでは大体予想通り、これでなのはさんも迂闊な攻撃
は出来ないと分かったはず

本番はここからだ)」

- - -
- - -
- - -
- - -
side ティアナ

「す、すごい……………」

「なのはさんと対等に渡り合ってる!？」

優しくてあまり目立たない奴だと思っていた
だが、今の方を見ただけで分かる

「(アイツは私よりも上だ)」

「はあくアレンくんほんと凄いなえ〜」

そんな中、横で自分の相棒がのんきな声を上げている

「ふ〜ん、アレが資料に書いてあったアレンくんの近接戦闘用の装備か〜」

「トンファアの形か。面白いね」

「あの野郎、風邪で寝込んでるとかって言ってたくせに」

「ってうわ！八神部隊長に、フェイト隊長、それにヴィータ副隊長！？」

それにシグナム副隊長、シャマルさん、ザフィーラもどうしてここに？」

「みんなで、食事をしてたら外がやけに騒がしかったから」

「そついうことだ」

「……………」

そう、シャマルさんが笑顔で答えると、シグナム副隊長もそれに続いて同意の声をあげる

そんな中ザフィーラは唯じっと二人の闘いの方を見ていた

.....
.....
.....

sideアレン

「フライヤーフィン」

なのはさんの足から、小さな翼が生えたかと思うと、なのはさんの身体は一気に空中へと躍り出る

「（って陸戦魔導師相手に、飛ぶって反則じゃ……………）
こうなったら、維持でも使わせますよ」

こうなってくると、地上にいても埒が明かないので、先程と同じように空中に魔力で足場を作って、そこを移動する。が……………

「デイバイン」

「バスタア……………!!」

「うお！」

接近しようとしているところに、容赦なく砲撃が打ち込まれる。さすがに驚いたが、狙いが多少甘かったこともあり、間一髪で避け、元居た地面に着地する

「（さすが管理局の白い悪魔の異名をもつだけはありませんね。新人相手に容赦無しとは……………）

まあ、痛い目に合わせて反省させようという考えなんでしょうが、
そう簡単には行きませんよ」

僕はデバイスを元の銃に戻すと、出来るだけ狙われないように、辺りを走り回る

「バスターーーーーー!!!!」

ドゥンッ

「(そう、何度も同じ手では……………)」

僕は左手に発生させたシールドで、次々放たれるディバインバスターを逸らしていく

「フロントムソニック」

ドガガガガガガガガガガガガガガッ！

両手の銃の引き金を何度も何度も引く
それに応じて、幾十もの弾丸が放たれるが、なのはもそれをみすみす受けるような真似はしない
避けるのが不可能と判断した物はきちんとバリアーで防ぎ、他はきちんと避けている

「(そう、それで良い。もっと避けてくださいね?)」

- - - - -
- - - - -
sideはやて

「なのはが押されてる!?!」

自分の横に立つ小さな守護騎士が簡単な声を上げる

それは自分も一緒だった。出力リミッターを付けているとはいえ、新人と教官とでは経験の差が圧倒的に教官の方が勝っているはずだ

「それに、シールドの使い方も上手い

高町の砲撃を正面から受けるのではなく、斜めに受けることで、衝撃を上手く軽減させている」

「確かに……………」

でも、何で今更魔力弾をあんなに……………」

「下手な銃も数撃てば当たるとは言うが、高町はそんな物に当たるほど生易しい相手ではない

それくらいはアイツも承知しているだろう」

「だったら……………」

「私にも分かん。唯、何かある」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

sideアレン

「そろそろですかね？」

「……………」

今まで乱射していた銃の引き金から指を離して、呟く

「皆さん上に注ぐ目」

その場にいる全員がなのはも含め、上を見る

「今日は晴れ時々魔力の雨が降ることでしょう」

そこにあるのは、今まで放った全ての魔力弾、数は十や二十ではすまない

「シューティングファントム」

「まさか……………!!」

「もちろん」

「フォーリンダウン」

上空に待機していた魔力弾が一斉に、なのは目標に向けて墮ちてくる

「墮ちろ」

- - -
- - -
- - -
sideなのは

「プロテクション」

墮ちてくる魔力弾をシールドでぎりぎり防ぐが、まだ半分以上も残ってる

「くっ………！（アレンくんがああやって言っていなかったら、もしかしたら今頃私は………）」

「負けられない……！」

「マスター下です！」

「こっちがお留守ですよ、なのはさん」

二つの銃を両手で構え、こちらに照準を合わせ、撃ってくる

シールドの展開が間に合わず、何発か身体に当たるのが分かったそんな中、ようやく上のほうの魔力弾が止んだのを確認して、地面に立っているアレンの方を見る

「（これで状況はさっきと同じ！

………ん？さっきと？）」

「僕が下方から魔力弾を撃ったってことは、また上に注意しなくても良いんですか？」

「（まさか、また！？）」

私は、再度上を向いて、シールドの用意を始める、今回は事前に気付いたこともあって、展開するのが速く間に合っはずだったが、

「ってすると思ってるんですか？」

「マスター罠です！」

急いで振り向くとトンファーモードに変形させたデバイスで殴りか

かるアレンくんが視界の端に見えた
ほとんど反射的にその場を飛び退くが、かわしきれぬはずも無く脇
腹にトンファの一撃を貰ってしまう

「ぐっ……………！（もう、集束砲に頼るしか……………）」

自分でも酷く無様な姿だと思った

新人相手に能力リミッターを付けられているとはいえ、こつも相手
の思い通りにことを進めてしまっていると言つことが

だが、その反面それを嬉しいと思う気持ちもあった
だから……………

「私も全力で……………！！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideアレン

「私も全力で……………！！」

その時、自分の手足にバインドが掛けられるのが分かる

「（来るか……………）」

『アイン準備は整っていますね？』

『魔力散布も十分、いけます』

「碎け」

「ブレイクアウト」

手足につけていたバインドを壊して、視線を上空にいるのは向ける

今回避しても間に合わない、いや、回避する気なんてさらさら無い

「なら、僕もお相手をさせていただきますよ」

「スナイプモード」

その声と共に、カートリッジが一つ二つと消費され、デバイスが重なり合って、一つの大きな狙撃銃へと変わる

「（さあ、理論上は可能のはずだが、一体どうなる？）」

.....

sideはやて

「ん？あれ？」

「主、一体どうなされたのですか？」

「いや、私、目々疲れてんのかな？」

なのはちゃんが集束砲撃とうとしてるよっに見えるんやけど.....

.....

「.....そういえば、そうですね」

「……………」

「……………」

「「全員退避い……………！！！！！！」」

ギャラリーの数はいつの間にか、数十人になっており、このままここに立っていれば、非殺傷設定とはいえ全員巻き込まれそうな勢いである

しかも、ギャラリーの半分以上は戦闘に魅入られており、大事な事に全く気付く様子も無い

やっと、自分の声を聞いたギャラリーが散り散りに逃げ始めた

そんな中、まだずっと同じ場所に静かに佇んでいるアレンがとても気に掛かった

「（笑ってる？）」

それは本当に微かな変化でしかなかったが、自分にはそれが笑ってるように見えた

「主はやて、早く！」

「ん、ああ」

……………

- - -
- - -
sideなのは
- - -

さっきまでつけていたバンドが壊されるのが分かった
だが、そんなこと関係ない。今、回避しようとしても無駄なだけだ

「全力全快！！スターライト」

「インフェルノ」

勝った。さんざん押され気味だったが、これで……。そう思った

だが、その思いは打ち碎かれる
無残にもそして……

とてもあっけなく

「ブレイカー――――！！！！」

「ブレイザー――――！！！！」

63話 アレンVSなのは(後書き)

思った以上に戦闘シーンが長引いた・・・。ブレイカーブレイカーの詳細は次回になるかと

64話 集束殺し

「ぐっ……………!!」

『敵、集束砲の威力減衰率、4.0……………5.0……………6.0……………7.0
集束砲、瓦解します』

「ブレイクアウト」

目の前の半分以上を覆っていた集束砲が徐々に小さくなっていき、それに伴ってこちらの砲撃が急速に威力を増していき、集束砲が内部から瓦解する

「貫けえ!!」

瓦解した桃色の魔力の中を黒ずんだ魔力が駆け抜け、集束砲を撃つて無防備になったなのは元へと突き進む
だが……

ヒュンッ

「外れた!？」

『おそらく元々の威力では、『スターライトブレイカー』に激しく劣っているため、ぶつかり合った時に標準がずれたものと』

「改良が必要……………ということですか
では、この戦い」

『我々の負け…のようですね』

「そう……だな」

朝から続いた交渉と魔力を完全に使い果たした疲労感で僕とリインの身体はそのままゆっくりと倒れた

- - -
- - -
- - -
sideなのは

「そんな……破られた？」

周りからエースオブエースなどと言われ、慢心していたわけではないが、自分の砲撃それも集束砲にはそれなりの自信があったし、そういう切るだけの力もあるとは思っていた

それが破られた

最初は間違いなく勝っていた

しかし、そこでアレンくんがなにをしたのかは分からないけれど、

突然集束砲が瓦解した

いや、そんなことはどうだって良い

結果的に自分は敗れた。運良く軌道は逸れたものの、完敗だった

自分の最高の技が完膚なきまでに破られたんだ。そう認めるほか無い

そして、砲撃が収まった地上を見る

「結果的に勝負は勝ちかもしれないけど、これじゃあ負けたも同然かあ〜」

静かに寝息を立てているアレンくんに歩み寄り、聞こえるはずもな

い声を上げる

「だからと言って、お説教は無くならないけどね」

それを言ったとき、アレンさんの身体がビクツと動いた気がした
それに、微かな笑みを浮かべ、沈み行こうとする夕陽に目を向ける

「（私も頑張らなきゃ）」

- - -
- - -
- - -
side ティアナ

「なのはさんの集束砲が……………」

「負けた……………」

「どづいつことだ？今は……………」

全員が撃った張本人…アレン…ウォーカーの方を見る

「って、あれ？」

「アイツ、今度はどうしたの？」

当のアレン本人はデバイスを両手で持ったまま、地面に突っ伏して
いた

そして、ちょうどその場に上空にいたはずなのはさんが降りてくる

「うん、何かよう分からんけど、まあ行ってみよか」

はやて部隊長の言葉通り一同はなのはさんの立つ場所まで向かった

「なのはちゃん」

「ん？ああ、はやてちゃん」

「これは一体どないしたん？」

「それは「アレンの野郎、風邪引いてるって嘘付きやがったんだ」

なのはさんを制止して、ヴィータ副隊長が怒気を含んだ声で言う

「つまり、あれやな」

アレンくんが訓練サボったから、懲らしめようとしたってことやな？」

「うん、そう」

若干、元気のなさそうな声でなのはさんは呟く

「よっしゃ、分かった！

ザフィーラ、アレンくん医務室へ運んでくれるか？シャマルも診てあげて」

「心得た」

「ザフィーラって喋れたの!？」

「驚き」

その言葉を華麗にスルーして、ザフィーラは、シャマルさんと共にアレンを啜えて、隊舎へと戻っていった

「じゃあ、解散！」

集まっていたギャラリーもそれと同時にバラけて隊舎に戻っていく
その中……一人違う方へ行くなのはさんを見つけた

「なのはさん！」

「ん？どうしたの、ティアナ？」

「いえ、特に深い用事とは無いんですけど

えと、その……」

喉元まで出掛かった言葉をそのまま飲み込んでしまう
そして、そのまま押し黙ってしまう

「……あの魔法ね。私でもよくわかんなかったよ」

「え……」

「ん？ティアナの聞きたかったことって、これじゃなかった？」

「え、いや、それは……」

「良いよ。別に私は気にしないから」

「あの魔法は一体何なんでしょう？」

恐る恐るきい聞いてみた。なのはさんはさっき分からないと言ったけど、少しでも意見を聞きたかったから

「最初見た限りでは、普通の砲撃魔法だったけど、おかしいと思ったのは、集束砲とぶつかってからかな？」

急に、集束砲がばらばらに霧散しちゃったし」

「それは、こちらでも見えました

でも、どうしてでしょう？」

「あ、それと！

急に、威力が上がったんだよ」

「威力が………？」

「うん」

「やっぱり詳細はアレンくんが起きてから本人に確認するしかないみたいだね」

「そうですね。で、なのはさんは隊舎には戻らないんですか？」

「うん。私はもうちょっとここにいますよ」

「分かりました」

.....

.....
sideはやて

「アレンくんの容態は？」

私は（なのはちゃん達を除いた）全員が戻ってきたのを確認した後、
医務室に運び込まれたアレンくんの確認に来ていた

「唯疲れてただけみたいですね。後、小一時間も経てば、目を醒ます
すと思いますよ」

「そうか……じゃあ起きたら私のとこまで来るよう言ってくれる
か？」

「分かりました」

それを聞いてから私は自分の部隊長室へと戻った

「（あの魔法は……）リインはどう思っ？」

「うーん、私も全く見たことの無いタイプの魔法でしたから、なん

sideアレン

目蓋の裏に光を感じ、目蓋を開けるとそこは

「うつ……知らない天井……ではないですね」

普通に医務室だった

そして、上から覗き込むようにシャルマルがこちらを見てくる

「あ、アレンくん起きた？」

「シャルマルさん……」

「起きて早々でなんだけど、もう少ししたら、はやてちゃんのとこ
ろに行つて貰えるかしら？」

「分かり……ました

(そうか、俺、アレ使つて……)」

『集束殺し』

俺とアイン(99%アインが作った)この技法は、分類で言えば実
は集束砲に属する物だ

集束砲というのは、辺りに巻き散らかされた魔力をかき集めて放つ
魔法

なのは場合は自分の魔力と一緒に巻くことで、その集束を容易に
しているわけだが、特色として集束砲は自身の魔力消費が少ない技
である

つまり言うなれば、自分の魔力以外を排除してやれば、後に残るの
はほとんど無いということだ

だから、俺達がした事は簡単、一旦集束させた魔力の中からアインの魔力を全て吸い出しただけだ。そして、吸い出したものを改めて自分の撃った砲撃に加える
そうすることで相手の威力ダウン＋自分の威力アップさせるという考えてみれば至ってシンプルな術だ

「（まあ、それをするためにはあの二つの砲撃がぶつかり合っている僅かな時間で、いろんなことしなくちゃならんから。その間それ以外の行動が全く取れないうえ、今のところ取れるのが自分の魔力だけだから、一対一じゃないとそこまで能力が発揮出来ないのが難点なんだけども）」

まだ、重い身体を引き摺って、僕ははやて部隊長の待つ、部隊長室へと向かった

64話 集束殺し（後書き）

『ブレイカーブレイカー
集束殺し』

魔法ランク：SS

分類においては本編のように集束砲に分類される。準備の時間とユニゾンデバイスとしてのアインの能力を最大限に使用するため、使用する際は他には何も使えなくなる。通常の集束砲より使う魔力は大幅に大きい。『集束殺し』はあくまで技法の名前で使う際の魔法の名は『インフェルノブレイザー』となっている。今のところ吸収は自分の魔力のみで、完成形としては相手の集束砲を丸ごと飲み込むことを考えているが、今のところ実現はしていない

今回は『集束殺し』の色々な設定を書いてみました。

65話 イツワリ存在(前書き)

遅れた上、短くてすいません！次回はいつもどおり出来るかと・・・

65話 イツワリが存在

sideシグナム

「ん？ザファイラか」

「シグナム……………」

ちょうど、主の居ると思われる部隊長室へと足を運ぼうとしていたとき、廊下で自分と同じヴォルケンリッターの、守護獣ザファイラと出会った

「主に何か用か？」

「おそらくはお前と同じ用事だ」

人間の姿ではないため、表情までは読み取れないが、その言動から、やはりこちらと同じ用だと感じさせた

「天宮真哉か……………」

「そつだ」

「また、この名を聞く羽目になるとはな」

「だが、私達は主の守護騎士たるヴォルケンリッターだ。万一にも主に危険が及ぶなら、守るのが我らの役目」

「奴は公式的には死亡と判断されている」

「しかし、問題はそれは管理外世界の崩壊によるもので、その『死』を実際に見たものは本当にいるのかということだ」

「うむ。ならば、我らの中で最後まで生き残った者に聞くしかあるまい

そして、もし見ていないと言うのであれば、警戒しなければ」

「身内を疑うと言うのは、あまり気分の良いものではないがな」

「それは、私も一緒だ

（それにアレン・ウォーカーと言うあの名前………）
単なるめぐり合わせか、或いは………

どちらにしる、主はやての元へ向かおう」

「心得ている」

誰もいない廊下に二人の足音のみが響く

そうして、歩いていくうちに彼等の主のいる部隊長室が見えてくる
物音はなく、まるで誰もいないかのようだった

コンコン

だが、そんなのはお構い無しに部隊長室の扉をノックする

「入ってええよ」

「主はやて、私とザフィーラです」

「ん？シグナムとザフィーラ？どないしたんや？」

「少しお話が………」

10年前、あの時あの瞬間何が起こったのか。それを聞かなければならない

奴が…天宮真哉が未だに生きているかもしれないと言う可能性を消すために

しかし、そのシグナム達が入っていた扉の前にとある事情で部隊長室に呼ばれた一人の少年が立っていた

「シグナム、まさか…な

（まあ、良い。少しここで立ち聞きさせていただけこうかな？）

『リン、この辺りに盗聴の気配が無いか、念入りに調べてくれ』

┌

『了解しました』

暗い部屋

そこには、月以外の明かりは無かった。そして自分達の主たるこの機動六課の部隊長、八神はやてはその月に背を向け、口を開いた

「二人とも、こんな遅くにどうしたんや？」

「少し、お聞きしたいことが」

「別にええよ」

「では……………主はやては先程の戦闘、どう思われますか？」

その問にはやての眉がぴくっと反応する

「戦闘って、アレンくんのか？」

「はい」

「うん。中々優秀な人材やと思うよ？」

まさか、あそこまでののはちゃんを追い込むとは思わなかったよでも、まあ、だからってサボりはあかんけどね」

だが、軽く微笑んだその瞳には、それ以外の何かがあることを物語っていた

「私達が聞きたかったのは……………」

コンコン

「八神部隊長、アレンです」

「（つく、このタイミングで……）」

「シグナム」

「……私達はこれで失礼します」

「聞いたかったことはもうええんか？」

「はい」

「そうか、アレンくん、入ってええよ」

「失礼します」

はやての声を合図にドアが開いて、そこから黒髪の少年…アレン…
ウォーカーが入ってくる

「シグナム副隊長どうしたんですか？ザフィーラも」

「ん？いや、少し八神部隊長に聞きたいことがあったただけだ
だが、もう用は済んだ」

「そうですか。では、また明日ですね」

「ああ、そうだな」

二人は胸のうちに大きな疑念を抱えたまま、暗い暗いその部屋を後

にした

- - -
- - -
- - -
sideアレン

「何を、聞こうとしたかは知らないが、シグナムにザフィーラ、中々侮れないな」

はやて部隊長、お呼びだと聞いたんですが？」

「うん、そうやで」

実は、今日のこと何やけど、一体どこ行ってたん？」

「（やっぱり、そう来たか。でも、手は打ってある）
すいません。今日は母の命日なんです」

出来るだけ暗そうなフリをしよう
もちろんはったりだ。だが、記録上は僕の母は今日死んだことにな
っているはずだ

帰り際にカリムに俺のデータの改竄を頼んであるのだから

だが、はやての対応は俺の予想の斜め上に行く物だった

「ふん、まあそういうことにしとくわ」

「（何だこの違和感………？）」

『真哉、何か様子が変わります』

「まあ、それは良いわ
今日呼んだんは、忠告や」

「忠告…ですか？」

「次、真哉君の真似なんかするようやったら……」

「は？一体何のことを言ってる……」

（おかしい。俺のことを天宮真哉だと思つのはあるかもしれないが天宮真哉の真似？死んだことに何の疑いも持っていないからか？）

とても嫌な予感がした。今までのそれなんかとは比べ物にならないくらい大きな

「しらばっくれても」はやて、それくらいにしておけよ「真哉くん……」

「今、何て……？」

俺の背後から飛んできた声にはやてが応える

俺は恐る恐る自分の背後を振り返る

その時の気持ちかどんなだったかなんて言葉では形容できない嫌な予感が当たったというだけじゃない。はやてとたった半年だけだと確かに築いた絆の全てが何もかも消えてなくなってしまうような

「よう、お前がアレン「ウォーカー」だったって？」

俺が……」

そこには……

「天宮真哉だ」

天宮真哉
俺が居た

66話 Fの闇

『真哉、今更双子でした〜とか言いませんよね?』

『言わねーよ』

『幻覚とかそういう類の可能性は?』

『そういったものではないと思います。まあ勘ですけど』

『勘って……………』

『幻覚見分けるのなんて、最終的には勘なんですよ勘
というより、冷静ですな真哉』

自分も滅入っているはずなのに、俺のことを考えながら、この状況
下でも自分の本当の名を呼んでくれる彼女には本当に感謝したかった

775

『逆だよ。冷静なフリぐらいしてないと、どうにかなりそうだ』

そうしてからもう一度目の前に立つ白髪の男を見る

『どうしたんだよ、そんなに睨んで?』

「（左眼が反応しないところを見ると、アクマじゃないか
だが、幻覚でもないとする、一体……………）」

その時、一人の女性の姿が頭に浮かんでくる

「まさか……………（となると、コイツの狙いはもしかすると、俺の正

体の確認という可能性も……………)

10年前、死んだといわれていた貴方がこんなところにいらっしやるとは驚きましたよ」

「まあ、そりゃそうだ

で、お前の目的は？」

「目的？そんな物ありませんよ

(これは腹の探り合いボロを出すわけには行かない。それにあつちにははやてもいる

最悪、人質に取られることも。いや、それが狙いか。俺にとっての牽制も含んでいるって感じか……………)」

「はっ！そんな嘘がっ「それはほんまか？」はやて！」

隣にいた男の瞳が驚きで見開かれ、そして、若干怒気を含んだ声を上げる

「ゴメン、真哉くん！でも私も信じてあげたいんよ

そのかわり、このことはまだみんなには内緒にしといてくれるか？」

「……………分かりました」

「はやてがそう言うなら……………」

自らを天宮真哉と名乗る男もすくすくこと引き下がる

「では、僕はこれで」

「おやすみ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

side 偽・真哉

ドアから出て行く、アレン＝ウォーカーを見送った後、隣の少女はやてに向き直る

「何で、アイツを返したんだ

もし、何かしてきたりしたら……」

「ゴメン！でも、アレンくんはそんなことする子や無いと思うんよ……」

「……何かあっても知らないぞ」

吐き捨てるようにそう言った後、はやてのいる部隊長室の隣にある隠された自分の部屋へと戻る

「くそっ……（あっちも姿を出さないし、これじゃあこっちの見せ損じゃないか）」

やっぱり、本当に奴は天宮真哉では……

まあ、良い。それより今はドクターに報告か」

扉に背を預けながら、この天宮真哉という人間を作り出した男に今起こった件についての報告も兼ねて、宙に画面が開く
その画面の先には、紫の髪を持つ一人の女性が立っていた

「ウーノ、ドクターは？」

「今、繋ぐわ」

もう聞きなれたその愛想もクソも無い声に、先程から感じる苛立ちが若干かきたてられる

そんな中、ウーノと言われる女性の顔が映った画面の隣にもう一つの画面が現れる

「やあ、真哉、調子はどうだい？」

「……………元気だよ」

「そうかそうか。それは良いことだ
で、早速だが、報告を聞こうか」

「アイツは正体を現さなかった」

「そうか……………。さすがに、簡単には尻尾を見せないか、それとも本当に彼はもういないのかね」

まるで、自分の失敗など予期していたかのように、いや、それどころかその結果にまるで満足しているのかのように応える
自分の内の苛立ちもそれにつれて、湧き上がってくる

「そんなの俺が知るかよ」

「真哉！」

「良いよ、ウーノ」

まあこちらとしてはそっちのほうが都合が良いのだけれど、些かつまらないな

遺伝子を調べつくしても、見つけ出せなかった左目の呪い、それにあの、人の枠を逸脱した身体能力も興味深いものだったのだがね」

分かっていた。この男の頭にはそれしかない

自らの研究と未知なる物に対する欲望、それしか無い

「……………俺には関係ない」

「フフフ。そうだったね、ではこれからよろしく頼むよ

私はこの情報をレジアス中將に報告しなければならぬのでね」

そういつて、二つの画面がほとんど同時に閉じられる

「アンリミットド・デザイア無限の欲望か。誰が付けたかは知らないが、アイツにはお似合いの名前だな」

自分に与えられた『天宮真哉』と言う役目。それを全つする

そう、それだけが俺の……………

- - - - -
- - - - -
- - - - -
sideアレン

部隊長室から重い足を引き摺りながら、自分に宛がわれた部屋へと戻る

「……………」

そのまま、無言でトサツとベッドに倒れこむ

「真哉……………」

いつの間にかユニゾンを解いて隣に現れたアインが心配そうに呟く

「……………アイン、どう思った？」

「へ？」

「アイツのことだ。言わなくても分かるだろ？」

「どつと言われても……………」

アクマ…ではなかったんですね？」

「ああ、アクマなら俺の左目が反応してる

……………なあ、アイン可能性として聞いてくれないか？」

「はい、何でしょう？」

「プロジェクトFを使って、作ったクローンって言うのは、成長を早めたりは出来ないのか？」

「プロジェクトF？まさか……………」

「ちょっと待ってください」

急いで空中に幾つかの画面が出てきたかと思つと、もう一度こちら
に向き直る

「おそらくDNAを元に培養した段階で、特殊な薬品を使えば、細胞分裂を加速度的に早めるのは理論上は可能だと思います」

ですが、それをすると、元々短いクローンの寿命がさらに……」

簡単な話、人間の細胞分裂回数には限りがある。理論通りで言うなら、クローンと言うのはその人の寿命からクローンを作った年齢を引いた分しか生きれない。それに加え、細胞分裂を加速度的に早めると言うことは、それからさらに寿命を縮めることになる

「だけど、他に可能性が無い。髪の色とかは遺伝子を軽く弄れば問題ないだろうしな」

「ということは……」

「ああ、俺の予想に間違いが無ければ、アイツは…あの天宮真哉は……」

俺のクローンだ」

「そして、後ろでそれらのことに後ろから糸を引いている人物はおそらく……」

「「ジェル・スカリエッティ！」」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

sideジェル

「やあ、レジアス中将」

『どうだった？』

宙に現れた画面の奥から如何にも厳つそうな顔をした男が顔を出す
その声には、些かの苛立ちが込められているように感じられた

「言わずとも分かっているのではないのかな？」

「ふんつ。お前の作品とやらは使えんのだな」

「ふふふつ。アレは厳密には、私の作品ではないのだよ
言うなれば、プロジェクトFの遺産に私なりに少し改良を加えた
だけに過ぎない

まあ、素体となる身体が私の改良に付いていなくて、寿命を大
幅に使ってしまったがね

性格などに少々の問題はあるが、きちんと教育もしたし、能力の
ほうに問題は無いはずだよ

そもそも、貴方だってこんなことで、分かるなんて思っていないか
つたはずだろう？」

「それと、お前の人形が失敗したことには何の関係も無い」

先程、私の作品ではないと言ったのはこの男の耳には届いてはいな
かったようだ

「それもそうだ

では、私はこれから他の作品達の調整があるのでねこれで失礼さ
せてもらおうよ」

そういつて、返事を待たずに、画面を閉じる
そして、自分の作品のほうに眼を向ける

「ウーノ、彼からの贈り物の調子はどうだい？」

「良好です。ドクター」

二人の会話に割り込むように、一人の男がその場に現れる

「ヨホホホホホ。私のお渡しした暗黒物質ダークマターはお気に召していただけたようですネ」

「ああ、これは実に素晴らしい
生身の人間にしか使用できなかったのが、残念でならないよ」

「ヨホホホホホ。それはそれはすいませんネ
しかし、ダークマターは人間の魂を使っていますから
貴方には箱舟作りの協力もありますしネ
私であればこれからいくらかでも協力して差し上げますヨ」

「ふふつ。これからもよろしく頼むよ千年伯爵」

「「こちらこそ、ジェイル・スカリエッティ」」

66話 Fの闇(後書き)

千年伯爵及びジェル初登場！時間かかったなあ

67話 本局へ(前書き)

遅れてすいません！最近、何かスランプ気味で……。来週のこと
はまだなんとも言えませんが、あげれるよう、がんばります！！

67話 本局へ

「ん……………」

ぼやけた視界。いつも寝起きが良い訳ではないが、今日は特に酷い例の一件、つまり俺の偽者が現れた後、何故この時期に、そして、はやてだけに名前を偽って現れたのか、他にもいろいろな疑問が未だに頭の中で渦巻いている

そのことが起因しているのか、どうかと考えた矢先、俺のデバイスに連絡が来ているのに気付く

「ふあ~~~~…何だ？」

大きく欠伸をした後、いつものように画面を開く。その先にはつい昨日俺達の側に付いてくれた。聖王教会、騎士カリムがまだ、朝早い時間だというのにピシッとした格好で顔を覗かせている

『あら？起きたばかりだったかしら？』

「そつだよ。今、何時だと思ってるんだ？」

『ごめんなさい。でも、少し急ぎの報告があったから』

「急ぎの報告？」

その質問に答えるように、カリムは頷く

『実は、急に予定が早まって今日、本局への呼び出しが掛かったわ』

「今日？」

『ええ。もしかして昨日何かあった？』

「ああ、その報告もしたいんだが「アレンくん起きてるー？」話はまた後でのようですね」

そのまま、無言で頷くとカリムも無言で頷き、画面を閉じる

「どうしたんですか？なのはさん」

自室の扉の前に立ついつものような笑みを浮かべたなのはさんに問う

「いや、前もって言うの忘れてたから起きてるか心配だったよ」

「どういうことですか？」

すごく嫌な予感がした

「はやてちゃんから事情は聞いたけど、前もってみんなに言っとかなきゃ駄目だよ？」

「すみません……………」

「で、だけど、昨日一日、訓練抜けちゃったじゃない？」

「は、はい」

嫌な感じがさらに強まる

というより、確信に似た何かといった方が良いのかもしれない

「今から、一日抜けた分……とまではさすがに行かないけど、少し訓練しようか」

「ファントム！」

『ソニックシューター』

『プロテクション』

まだ、みんな寝静まっている時間、僕となのはは軽い運動を済ませて、軽い模擬戦をしていた

「アクセル！」

『スナイプショット』

桃色と黒に近い色をした魔力弾が飛び交う

「(さすがに、昨日ので対策は取られてるか)」

互角のような戦いを繰り広げているが、状況で言えば圧倒的になのはが優勢だった

昨日はああなつてしまったが、なのはには使っていない呪文も多々あるわけで、その点こっちは最大の手の内を昨日見せてしまったという

それに、対策もきっちり取られてる。さらには魔力量が段違いと来ている

「（さすがにこれは……）僕の負け……ですね。さすがに前のようには行かないですね」

地面にへたり込む僕に、目の前で杖を俺に向けるなのは

「何度もやられるわけには行かないよ

じゃあ朝の訓練が始まるまで、ちょっと休憩」

口ではなんとも無いようなことを言っているが昨日のこと相当悔しかったことが想像でき……

ジャキッ

「ちょ！なんでまたこっちに向けるんですか！」

「ん？あれ？ゴメンゴメン、何か聞こえた気がしたから」

原作キャラの読心スキルは未だに健在のようだ

『アイン、聞こえてるか？』

隊舎の入り口で朝、寝付きが悪かったせいで今になって急に眠気が襲ってきた。こんな場所で寝るわけにも行かず、コーヒーを啜りながら訓練開始までの時間を潰すなか、ふと思いついたことを聞くため、内側に意識を向ける

『へ？あ、はい。セーブするので、ちょっと待ってください』

『お前、俺の中で何やってんだよ！』

『エルシ ダイ』

『俺の中にはPS3まで持ち込み可能なのか……………』

『いいえ。Xboxです』

中々快適ですよ。ネット環境も充実してますし
ゲームとか色々あるネットカフェみたいなものですね』

『俺の中って……………』

ちよつと行つてみたい気がしたのは内緒だ

『まあ、これの作者はエル ヤダイについては、そんな装備で（ry
くらいしか知りませんが』

『ええ！？』

『で、なんですか？』

『あ、あくまで俺の驚きについてはスルーなんだ……ま、良いけど
話を戻すけど、分かってんだろ？昨日のことだよ

そのことで、一つ思うんだが、何ではやて以外の奴は知らないん
だ？その方が俺への牽制になるだろうに』

『さあ？でも、もしかすると、逆かもしれないよ？』

念話の向こう側から意味有りげに呟く

『どづいうことだ？』

『はやてにだけ偽物を見せたのではなく、はやてにしか見せられな
かったとしたら？』

それに、本局への訪問が早まったのも気になります。何か仕掛け
るつもりなのか？あるいは………』

『確かにな。もう一度カリムに連絡を取りたいとこだが………』

『もうすぐ、訓練です。このことはまた後で』

『分かってるよ』

そういつて、一方的に念話を切られる。もう一度繋げようとしたが、隊舎から出てくるスバル達フォアード陣の姿を見て、その考えを止め、自分を手招きするなのは元へとゆっくり歩いて向かっていった

「さあて、今日の訓練を始めて行くっか！」

「「「「はい！」「」「」」

「と、その前に今日はみんなに言っとなきゃならないことがあるんだ」

「何ですか？」

スバルの質問に少し考える素振りを見せた後、ゆっくり口を開く

「やっぱり内緒にしとこっかな？」

「え、教えてくださいよ」「そうそう、もったいぶらないで教えてくださいよ」

フォアード陣が口々に不満の声を上げる。本局からの呼び出しを知っている俺は特にこれといった質問は無く隣で静まらない眠気に答

えるように大きな欠伸をする

「実は、急に予定が早まってね

今日は午後の訓練はお休みで、本局へ行きまゝす」

「「「「「おおー!!」「」「」

「(さっき、アインも言っていたが、何故今日に?あっちの狙いは何だ?)」

考ても考えても答えは出ない。まるで雲を掴むように相手の狙いが見えない

「じゃあ、午後出来ない分、午前中はしっかり訓練するよ」

「「「「「はい!!」「」「」

頭の中のもやもやは消えず、まだ眠気も消えない体に鞭打ちながら、本日二回目の訓練に向かっていた

「じゃあ、今日の練習はこの辺で切り上げて、本局へ行く準備をしようか！」

集合は二時間後、各自準備を済ませて、ここに集合ね」

「」「」「はい！」「」「」

各々、自室へと帰って支度を始める

『訓練のほうはいつも通りでしたね』

『もっと動揺すると思ったか？』

『少し』

『俺だって子供じゃない。それぐらいの切り替えくらいは覚えたよ』

クスッ『そうですね』

『何だよ』

『いや、それにしては右頬がやけに腫れてるな』と思ひまして』

『うるせえ』

真っ赤に腫れた頬をさすりながら、足早に自分の部屋へと帰ってい

った

「って準備って言っても特にすることなんて全然無いわけだが」

『じゃあ、カリムに連絡取ってみますか？』

「ん、ああ。そうだな。頼む」

『今、繋がります……………ってあれ？』

「どうしたんだ？」

『いえ、何度も呼びかけているんですが、まったく応答が……………
ってこれは……………！！』

向こう側からの切羽詰った声につれて、自らの鼓動も早くなる

そして、しばらく時間がたってから向こう側から音が聞こえなくなる

「な、何かあったのか？」

『フ……………』

「ん？」

『フフフフフフフフフフフフフフフフ』

私をコケにしたことを後悔するがいい!!』

「ちよっ！何かあったんだよ!？」

『真哉、久々にアレを使わせていただきます』

「だから、何かあったんだよ！」

『いえ、カリムに連絡を繋いだ際にあっち側から攻撃を受けまして』

「攻撃？」

『まあ、簡単に言えばハッキングとかそういう類のものです』

「で、やられたからやり返すと」

『ええ。私を甘く見た罰です』

使用許可いただけますよね？』

「ああ。というより、アレはもうお前のだ。好きに使えよ」

『ありがとうございます。では……………イノセンス発動!』

することも無く、聞こえてくるのは、何か黒化したアインの狂喜に満ちた声

発動したのはイノセンスは『エンゲージメント誓約ノ書』、聞くとところによると、アレのデバイスとしての性能は現行のデバイスの中でもトップクラスらしい。まあ、そこまで必要とされる状況が無い以上、使うのは控えている。何せ、アレの中には未だに十年前の事件の元凶、『闇の書』いや、『夜天の魔導書』というべきもののデータが保存されているのだ

数分後、先ほどまで聞こえていた声がようやく収まってきた

「……………終わったのか？」

『ええ。ボツコボコにしてやりましたよ

まあ、アレは自動的に作動するようセットされたもののようにですが』

「自動的に？」

『はい。対処自体はいたって簡単でした

『エンゲージメント』使う必要も無かったかと。こちらのデータを盗るにすれば、随分とまあお粗末でしたし』

「別の目的がある？」

『推論ですが』

「はあ……………また次から次へと」

不思議と自分のうちには不安も恐怖も無い

始めから気づいておけば良かった。それがどれだけ異常なのかということを……………

- - - - -
- - - - -
- - - - -
sideレジラス

「失礼します」

「……………結果は？」

「はい。本局のイノセンス管理区域にて管理されている端末にここ数時間で連絡が来たものは、計58、内正確に発信源が特定出来た物は14です」

「特定出来た物はいい
出来なかったものを教えてくれ」

「はい」

それから、イノセンスの研究に携わっている者の名前が次々に述べられていく
どれもこれも本局の優秀な人材ばかりで、少しむつと来る

「……………そして、聖王教会の騎士、カリム少将です」

「聖王教会だと？」

「はい。レジラス様が日にちを移された。あの……………」

「ああ。そういえば、『キューブ』の適合者だったな」

「で、どうなされますか？」

「決まっている。そいつらの周りを徹底的に調べさせる」

「了解しました」

「ふん。奴が姿を見せないなら、まずはその周りから潰していくまでだ」

68話 イノセンス管理部（前編）

「じゃあ、本局へ出発しようか！」

「……はい！」「……」

「あれ？そういえば、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は一緒には来ないんですか？」

ティアナが六課の入り口で手を振って見送っている、二人の姿を見て問いかける

「六課には、重要な情報とか色々な大切なものが保管されていたりするからね

まるつきり空にするわけにはいかないんだ。本当は六課も週末に二日に分けて、計測する予定だったんだけど、急な予定変更で、六課だけ全員今日に移ることになったから

さすがに、全員空けるってわけにも行かないから、本局の人に頼んで、四人にはまた別の日を当ててもらうことにしたんだよ」

なのはの隣を歩いていたフェイトがその問いに丁寧に答える
それに、またティアナの隣を歩いているスバルが声を上げる

「あの〜」

「どうしたの、スバル？」

「いや、四人つて、シグナム副隊長とヴィータ副隊長と後二人は誰なのかな〜って、えへへ」

照れ隠しのように頭をかきながら前を歩く三人の部隊長に投げかける

「あーそれね。一人は、六課の医務官のシャマル先生だよ」

「ええ！？シャマル先生って適合者だったんですか！？」

「あれ？教えてなかったっけ？」

「全然、知りませんでしたよ」

口々にフォアードの面々から驚きの声上がる

「じゃあ、もう一人って………？」

今度はティアナが質問をぶつける。だが、スバルと違ってその顔には、どこか確信に似た何かがあるのは見て取れた

「まあ、もう気づいたかもしれないけど、もう一人はザフィーラね」

ティアナの顔が、やっぱりといったような顔になる

「ええ！？犬も適合者になるんですか！？」

「え、え〜と、厳密には犬ではないかな〜」

ザフィーラはねベルカの守護獣、ミッドで言う使い魔みたいなものなんだ

あ、これザフィーラには内緒ね」

確かに、アイツやけに、守護獣、守護獣うるさいからなw

なんてことを心の中で思ってみる。だが、そんな話はまったく聞いていないような素振りで手を顎に当てたままのティアナがさらに言葉を重ねる

「じゃあマスターは……………」

「私や〜」

昨日のことがまるで無かったかのようにはつらつとした笑顔で笑っているはやてが言葉を返す。昔と本当に変わらない笑顔でその顔に一瞬、目を背けてしまう。それが彼女を一度捨てたという罪悪感なのか、昨日のこと一件を引きずった結果のどちらか、いや、もしかするとそれら両方なのかは、どちらにしる分かるはずも無かった

「やっぱり、はやて部隊長の……………」

そんな自己嫌悪に似た感情を抱いている俺をよそにティアナが小さな声で呟く

「ん？どうしたんや？」

「い、いえ、何でもないです」

首を激しく横に振って、アピールするティアナにちよつとした不安を覚えつつも、未だに拭えぬ自分の中の不安要素と向き合うことに精一杯でそんなことすぐ頭の中から追い出されてしまった

それからは、特にこれといった会話も無く、いつものようにティアナとスバルがじゃれ合ったり、キャラとエリオが話したり、隊長三人が仲良く喋ったり……

「（あれ？僕、もしかしてハブられてる？）」

そんなことあるはずが無いと自分に言い聞かせ、僕は手持ちのデバイスで一人ゲームを始めた

「着いた〜！」

「ちょっとスバル、あんまり、はしゃいで迷子になったりしないでよ」

物珍しそうに辺りを見渡しながら、はしゃぐスバルをティアナが制する

「そういや、アレン
道中何してたの？」

「ん？ゲームですよ」

「何の？」

「ポ モンです。いや、ハブネークのに妙に親近感が沸いちゃって
……………」

ガシッ

急にものすごい力と剣幕でティアナに肩を掴まれる

「へ？」

「今度、スバルとかみんなと一緒に遊びに行きましょう？ね？」

「……一緒にします！」

「アレンさん、飲み物買ってきましようか？」

「何や、涙を誘うお話やな」

「もう、号泣物だね」

「二人とも、そんな言い方……………
あ！アレン、大丈夫だよ。別に誰も嫌いになったりしてないから
！」

「……………フェイトちゃんが一番酷いと思うよ」

「フェイトちゃん…恐ろしい子」

「僕って……………」

みんなの言葉の節々が俺の心をズタズタに引き裂いていく。もう完全にorz状態に陥ってしまっ、本局の中だというのに膝を抱えて頂垂れているところに、どこか見覚えのある眼鏡を掛けた一人の局員が近づいてくる

「機動六課の方々ですね？」

「あ、はい、そうです」

未だに気が晴れない中、俺のことは完全に放置状態で、すでに歩き出している六課メンバーを追いかけるように、俺も歩き出した

そうして、行き着いたのは……………

「生活安全課？こんなところに、イノ……………」

明らかに、イノセンスとは何の関連もなさそうな平和そうな空気の漂う場所。俺達のことを本局に来た客人か何かだと思っているのか、俺達が来ていることに特にこれといった違和感も感じていないようで、あるとすれば、向かいからくる職員が軽く挨拶するくらいだ。そのことについて、スバルが聞こうとしたとき、先導していた女性

が手だけで制す

『詳細は着いてから話します。くれぐれも重要事項の発言は慎んでください』

どこで誰が聞いているか分かりませんから』

「あ……………」『す、すいません』」

そして、そのまま奥のほうへと歩いていき、奥にある応接室と思しき部屋の中まで入り、そのさらに奥の壁際まで進む

「あゝ」「少し黙っていてくださいますか?」「はい……………」

そして、そのまま壁の一点を見つめる

すると、カモフラージュされていた扉が開かれる

「これって転送ポート?何でこんなところに?」

「……………」「こちらへ」

行けば分かるかといいたいのか、その間に答えることは無い

そして、まず隊長達が、その転送ポートに足を進め、続いてフォアード陣も渋々ではあるがそれに続く

その先には

「ようこそ、イノセンス管理部へ」

辺り一面が機械で覆われ、画面には俺の頭では理解不能な数列やら何やらが所狭しと並んでいる。全体的に蛍光灯などはものの、うっすら暗い。そんな中に、局の研究者と思われる人々がこれまた意味の分からない単語を話し合っ、こちらには見向きもしない。先ほどの生活安全課とはまるで違う様子に、多少面食らっていると、先導していた女性が目の前まで来る

「申し訳ありませんが、デバイスなど通信可能なものを出していただけですか？」

「何故ですか？」

「規則ですので」

「その理由を聞いているんです」

「内部の情報の漏洩を避けるため、といえは良いですか？」

「（だから、カリムに連絡がつかなかった）
分かりました。これが僕のデバイスです」

「お預かりします」

そして、同じように六課全員のデバイスを回収し、近くにいた局員に渡す

「でも、ここなんか凄いな」

あの〜、ここって本局のどこら辺何ですか？」

「ここは、本局ではありません」

「え……………」

「正確な位置情報は機密なので申し上げられませんが、ここは一応地上本部に属しています」

「ええ！？じゃあ、何で本局から……………」

「カモフラージュです」

あそこの転送ポートも、特定の人物の指紋、網膜の認証を通さず使用しようとすれば、二度と使えなくなりますので、勝手なまねはしないようにしてください」

「は、はあ」

「では、この先です。すでに騎士カリムはお着きになっていますので」

一際大きな扉の奥、そこは先ほどまでの薄暗い空間とは打って変わって、光に溢れてた

その中心、光の真ん中に一人の女性が佇んでいる

「ようこそ、機動六課のみなさん。お待ちしておりました」

「カリム、久しぶりや

みんなにも紹介しとくわ、聖王教会騎士団騎士カリムや

カリムには六課設立の後ろ盾にもなってもらってるんやで」

「聖王教会って、あの……………」

「まあ、細かい話は後、さっさと用事の方を済ませちゃいませよ」

「せやな。隊長陣は後からにして、まずはフォアード陣からいきたいんやけど、誰から行く？」

「（俺はみんなのを聞いてからにしたほうが良さそうだな。あんまり高いと余計目を付けられるし）」

そんなことを思っていると、それを聞いていたかのように一人が手を上げた

「あの、私が行っても良いですか？」

そういって、手を上げたティアナの瞳に揺らぐ復讐という名の思いを俺は、いや、この場にいる全員が見逃した。兄を殺したアクマへの恨み、アクマの本質を知らない彼女には、その中にある深い悲し

みに気づくはずも無く、唯、時を重ねることに募る、『憎しみ』と
いう強い感情に押し流されていく
みんなを幸せにするとほざいておきながら、そのときの俺は自分の
ことだけで精一杯で、闇の中で嘆き続ける彼女の叫びに気づいてあ
げれなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541p/>

魔法少女リリカルなのは～転生された被魔師～

2011年12月12日00時12分発行